

---

# ランドファーマー旅行記

きーち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ランドファーマー旅行記

### 【Nコード】

N1807W

### 【作者名】

きーち

### 【あらすじ】

架空の世界の架空の大陸で、とある若者が旅をするお話です。

20代から中高年のための小説投稿 & amp; レビューコミュニティ

に投稿しているものですが、とりあえずこちらでもまとめて置こうと思います。

## 最初の話

とある大陸がある。海岸線には砂浜や絶壁、内陸に進めば草原や砂漠、深く未開な森林を見ることができた。大小様々な姿を見せる山脈も大陸を彩る特徴の一つだ。

特徴と言えば、そこには生命が溢れているという物がある。小さな物から大きな物まで、海や湖を泳ぐ物、野山を駆ける物、大空を飛び大地を見渡す物、地中に潜む物までいた。

そんな中、一風変わった物がいる。知恵を持つ物達だ。知恵を持つ物達は、何かを作るのが上手かった。道具を作り、家を作り、家族を作り続け、自ら国と名付けた物を大陸に幾つも作り上げた。

物語の舞台はその一つ、シライと呼ばれる国から始まる。

シライは知恵を持つ物達の内、人間という種族が作った国である。偉大な125人の英雄が開国したとか、天地開闢の後、神によって生み出されたといった幾つかの神話や歴史があるが、それはあまり関係の無い話である。どれも人間が作った話であり、この物語の主人公は人間では無いからだ。

シライは人間が作った国であるが、人間だけが住む国では無い。国外から来る商人や冒険者の中には人間以外の種族が多かったし、国が出来る前からその土地に住む種族や国が出来た後に土地に住んだ種族もその国の構成員だったからだ。

その中で、国が出来る前から住んでいたランドファーマーと言う種族の一人こそが主人公、アイムである。

ランドファーマーは土地を開拓し、肥やし、耕し、様々な作物を収穫する事に長けた種族であり、皆、農業や牧畜を営む事を生業としていた。ランドファーマーの若者であるアイムもその例に漏れず、鋤を持ち、土地に打ち付ける事で日々の糧を得ていた。

「外の世界に憧れる事くらいはあるんだけどね。」

そうやって若者にありがちな夢を独りごちているアイムは、鋤を

振るいながら、再び言葉を続ける。

「それでも生活つてのは大切さ、どんなに退屈でも、命の危険があるって事に比べたらさ、アレだよ、うん、良いものなんだよ。」

今度は若者にありがちな諦めを語りながら、やはり鍬を振るい続ける。農作業中は一度も手を休める事が無いというのがランドファーマーの特徴だ。

「だけど、この手に握る鍬が剣で、当てる相手が土じゃなく魔物やドラゴンだったら、なんて思う事は悪い事じゃないよね。」

良いことでもないけどさ

鍬の一振り事に夢と現実を交互に思い浮かべるが、次の瞬間にはそろそろ作物の種をまく時期だな。という考えが頭に過ぎる自分を見れば、結局、この国の人々が自分たちを指して言う、ランドファーマーらしい生き方とやらが一番似合っているのだらうとアームは結論付けた。

家へと帰る道のでアームの足は重かった。精神的には無く、肉体的に疲労しているのだ。

ランドファーマーは自らの仕事を休みなく行う事ができる。それができるからこそ、彼らはランドファーマーと呼ばれるのであるが、だからと言って疲労を感じないという訳では無い。

「だけど、我慢ができるって事は疲れないって事じゃないんだよね。それでも僕らを見て人間なんかは感心するんだから可笑しな物だよ。」

人間の国であるシライにおいて、人間以外の種族は人間より位置付は下である場合が多い。差別や特権といった物としての意味でもあるが、概ね人間と人間以外の種族としてこの国では見られるという意味である。

そんな中で他種族よりランドファーマーのシライでの地位は他の種族より地位は高い。農作業や牧畜を主な生業とするランドファーマーは一部の人間の産業を奪う物ではあるが、それ以上に人間の社

会に益をもたらす存在として見られるからだ。

「まあだから、不満が有るわけじゃないよ。ただちよつと、平凡な生活の中で夢を見たいだけさ。疲れて家へ帰る道のりに、ちよつとした非日常があれば満足はできるんだ。」

だが、これまでそんな事は数える程しか起こったことがない。それも近所の羊が集団で逃げ出した事件や、子供が小さな猪を森に潜む巨大なドラゴンと勘違いして逃げ回るのを見た程度の事を含めての数である。

「期待したって仕方無い事だしね。家に帰って夕食を食べて寝る。そのことに幸せを感じるように努力したほうが現実的だよ。」

再びあきらめの言葉を嘆くアイムであるが、そんな彼の考えはほんの少しだけ裏切られる事になる。

「うん？」

彼が疲れた足で向かう目的地である自宅の前に、見知らぬ人影が佇んでいたからだ。

「ランドファーマーは休まずに土地を耕す事ができるというのは本当の事なんだな。仕事の能率の良さから来た逸話だと思込んでいたが、少なくとも君は俺のしている限り、一度もその手を止める事は無かった。」

そうやってアイムに話かける男はリユンという名前らしく、アイムの仕事を一日中観察した後、アイムより先にアイムの自宅へと急ぎ、アイムを待っていたようだ。

それはさぞ疲れた事だろうと考えたアイムは、彼を自らの家へと招き、来客に白湯を入れていているわけだが、徐々に自分が不安を感じ始めている事に気が付いた。

（だって話を聞いた限りじゃあ、怪しさしか感じ無いじゃないか。なんだよ、一日中観察してたって。強盗とかじゃないよね。強盗はそんな回りくどい事はしないよね。）

にじみ出る不安感を少しでも払おうとアイムは、遠慮なく椅子に

座る 本当に遠慮なく リュンと名乗る男をもう一度見た。

(長い耳をしてる。エルフ? いや、形が丸いからツリストかな? 変わった服を着てるし。)

ツリストとは大陸に住む知恵を持った種族の一つであり、丸く長い耳に動物の刺繍が入った服を好んで着ている事が特徴の種族だ。

一所に定住しない種族でもあり、よく行商人や冒険家を生業にしている事が多い。もっとも、さらに荒事向きな仕事を職業にしている者もよく見るが・・・。

「どつぞ」

とりあえず、コップに入れている白湯が溢れてしまう前にアイムはリュンに白湯を差し出した。

「ああ、助かる。もう春も近いとは言え、外は肌寒い季節だ。こういった暖かい飲み物はたとえ水だとしてもありがたいものだからな。」

もしかして少し嫌味を含んでいるのだろうか? しかし家に茶などという上等な物が無い以上、アイムにはどうしようもない。

「それで、一日中僕を観察していたそうですが、いったい何のために? 家にまで来て何の意味も無くて訳じゃないでしょうね? というか僕は仕事中、あなたに気付く事は無かったです。」

目の前の男が不安で仕様が無いアイムは矢継ぎ早に質問を繰り返すが、リュンは慌てた様子も無く、口元を白湯の入ったコップから話して答えた。

「当然、用があつたから君に会いに来た。もっと正確に言えばこの国に住む若いランドファーマーにな。ちなみに仕事中、君が俺に気付かなくなったのは、俺がかなり遠くから君を観察していたからだ。目は良いほうなんでね。」

そういえばツリストは視力がかなり良いと聞いたことがある。しかし、それでも気付かない距離とはどれ程のものだろうか。自分の畑の周りには目立った起伏も無く、多少離れていても人影があれば気付くはずだが。

「若いランドファーマー？もしかして人さらい！？」

ランドファーマーをさらう野盗がいるというのは噂で聞いた事があった。農奴として優秀なランドファーマーは目をつけられやすいとも。

もしかして、目の前の男はそういった人種なのだろうか。

「人さらいとは心外だな。まあ似たようなことを考えてはいるが。」  
やはり物騒な人間のようだ。どうしよう、扉には自分の方が近いから、逃げる事はできるだろうけど。

そうやって、身構えるアィムを尻目にリユンは続ける。

「正確には人買いかな？賃金を払って、本人に労働して貰おうと思ってる。個人の労働力を対価に金銭を受け渡しするって点は人さらいと同じだろ？」

大分違う気がするが。それに、そういう事ならそれは人雇いと言うべきだろう。人買いという言葉に好印象を持つ人間なんて少数派なのだから。

「労働？ランドファーマーに目をつけてるって事はそれに関係する仕事って事ですか？」

「ああ、主にやって貰う事は農作業に近い内容でな、そういった事が得意な奴を雇った方が上手く行くんじゃないかと考えたわけだ。」  
なるほど、それならランドファーマーを探しているという理由も納得がいく。

「でも若いって部分の理由にはなってますんよ。こういった仕事は経験が物を言うんだから、多少なりとも年配の方が効率的にできるはずです。」

「仕事内容だけの話ならな。だが仕事をする場所が若い奴の方が向いてるんだ。」

ふむ、年齢を選ぶ仕事場とは、かなり特殊な場所で仕事をするらしい。どうにもリユンという男は自分を雇いたい様子なので、その点に注意して聞きたいが。

（うん？そもそも、相手に雇って貰いたいのかどうかも決めて無い

のに、なんで仕事内容が気になってるんだ？もしかして僕、少し乗り気になってる？」

自分自身の感情に困惑しているアイムであるが、リユンにはそれが伝わっていないらしく、構わず話を続けてくる。

「なんせ、否応無く国外に出てもらう事になるだろうからな。年を重ねてるとその点になかなか承諾して貰えないだろう？」

なるほど、確かにそれなら若い年齢に限定して探しているのも理解が……。

「って、国外!？」

思わず相手の目の前にある机に乗り出しながら、アイムはリユンを見た。

「ああそうだ、なんでそんな驚く？」

確かに、少し驚き過ぎたかもしれない。

(けど、外の世界を見てみたいなんて夢を見ていたら、いきなりそんな話がくるなんて思ってもみないじゃないか。)

アイム自身にとっては驚くに値する出来事なのだ。

「というか国外じゃないと意味が無いんだ。俺がやるうとしていいる仕事はな。」

「農作業の仕事なんて、どこの国でもあると思いますけど。」

一次産業というのはどんな国でも人手不足があたりまえである。

「農作業に近いって言ったろ？つまりそのままの意味じゃないってことさ。」

「つまり変わった仕事をさせるつもりなんですか？」

この男が怪しい男である以上、話の内容がまともな可能性の方が少ない。

「おいおい、随分な言い草だな。まあ普通では無い事は確かだ。お前は俺みたいナ種族がどんな仕事をしているか知ってるか？」

ツリストがどんな仕事を普段しているかを聞いているのだろう。それならば。

「一つの場所に定住しないのがツリストなんですから、それに合っ



た仕事でしょう?」

「そうだ、旅商人に冒険家、傭兵なんかも仕事にしている奴がいるな。」

「あと、強盗や盗賊、追剥なんかもしてるらしいですね、聞いた話じゃあ。」

既にアイムは相手が何かを話すと、それを疑ってかかる事に決めていた。話の内容にこちらが惹かれる物があつた以上、おいそれと聞き流す事もできなくなったのだ。

「辛口な表現ありがとう。まあ否定はしない。実際、旅をしていると、そういう事をしている奴等にも会うからな。」

こちらは噂話程度のつもりだったのだが、本当らしい。この仕事内容もやっかいな物である事を考慮しなければならぬ。

「だがはつきり言つて、まともな方も物騒な方も他人が先に手を付けてるつて事には変わりないんだ。利益と損害を考えたら、前者の方はいきなり始めようなんて考えられんし、後者なんて言わずもなだろ?」

「それって誰もした事が無いような事を始めようつて話に聞こえてくるんですが。」

となると、やっかいな仕事で間違いないようだ。

「そうだな、まさしくその通りだ。仕事を始めようとする時にデメリットが必ずあるのなら、その分メリットはでかい方がいいじゃないか。」

まるでデメリットの大小は関係ないような言い方だ。自分には到底できそうにない。

「始めるとしたら、まず俺達ツリストの強みである、旅を繰り返すつて点を考慮にいれた。だが、すぐ思いつくような仕事は先駆者がいる。なら俺達が普通やろうとは思わない仕事にまず目を当ててみようと考えた。」

「それが農業?」

「ああ、俺みたいなツリストがやろうなんて考えもしない仕事だろ

？」

当たり前だ。一カ所に定住しないってだけでも駄目なのに、こんな考え方をするような奴に農業は勤まらない。ひたすら地味な作業と、精神を擦り減らすかのような細目な努力があつてこそ、農業というものを生活の糧にできるようになるのだ。

「旅を繰り返す。農業という仕事。この二つをキーワードにあちこちの国を回ったよ。そしてある事に気が付いた。」

話の確信に迫ってきたようでリユンはアィムを見てニヤリと笑った。「ある事？」

だがこちらから見れば、聞き返して欲しくて仕方がないような顔に見えたので、仕方無く聞き返してやった。

「随分と非効率的な事をやってるなつて思ったのさ。」

「なんですかそれ？農業従事者を馬鹿にしてるんですか？」

かなり頭に来る物言いだつた。若いといつてもアィムは生まれてこの方ずっとそういつた仕事をしてきたのである。それを非効率なと言われては、あつて無いようなプライドも傷つくというものだ。

「ああ、悪い。そういう意味じゃなくてさ、仕事をする上での技術さ。」

「技術？鋤の持ち方とか水の蒔き方とかですか？そりゃあコツはありますけど、そこまでの事かな。」

そんな物で商売ができれば、自分はそこそこの金持ちになつていくところだ。

「それもあるが、範囲はもっと広い。どんな作物を育てるのか。土地はどのような状態が優れているのか。それぞれの国での気候の差は？それらの相性を本当に理解しているのか？そういった技術がそれぞれの国でブレがあるように思えた。素人の俺がそう感じるんだ。お前みたいに農業を仕事にしている奴が国外に出て、別の国を見ればそのギャップは相当な物に感じるだろう。」

確かにそうかもしれない。農業者は世界が狭いのだ。職人氣質なところも多々あり、仕事を覚える上で教えられず、目で見て覚える

という事がまかり通る部分もある。なにせ子供の時からこういった仕事をしている者が殆どなのだから。教えずとも知らず知らずの内に覚えていく事の方が多い。

「だけど、それが商売になるってのは疑問ですね。実際、隣のトム爺さんが育てる野菜は凄く長いって評判ですけど、真似しようなんて考えたことがありませんもん。」

「それはちよつと興味深い話だが、物事はその程度の事じゃあない。例えば昼間使ってた鋤、いったい何で出来ている？」

「鋤？そりゃあ木ですよ。先端だけは鉄で補強してますけどね。」

そんな自分の言葉を聞いて、リユンはまたニヤリと笑った。どうにもこの男は言いたい事があると顔に出るようだ。癖なのだろうか？

「それをしてない国があるって言ったら信じるか？それとは逆に持ち手から先端まで全部金属で出来ている鋤を使う国もある。」

「それ本当ですか？どつちも凄く不便そうなんですけど。」

「そうだ、前者の国じゃあ金属は貴重でね、農具に鉄を使うって発想が無い。」

「じゃあ後者の国は金属資源が豊富なんですな、だから農具に木を使う発想が無い。」

なんとは無しに言っただけだが、その発言にリユンは多めに頷いている。どうやら正解だったらしい。

「まあでも、どちらの国もそこまで金属不足だったり過多だったりするわけじゃない。ただ、この国よりも金属の生産量が少し違っているだけだ。ただそれだけの違いでこんな風に発想の違いが生まれただんだ。それが重要でね。」

つまりとところその発想の違いは埋める形で、その分出るであろう利益の一部を頂戴するという訳か。

「発想や技術の交換というのは昔から行われていた事だがな、農業や牧畜といった一次産業の間ではまだ大々的に行われていないのが現状だ。それでいて、作業内容自体は国事に複雑だ。複雑って事は外からの考えが入り込む余地が幾つもあるってことだ。」

「そこには商売になる可能性が複数埋まってるって事ですか。」

「どこか詐欺師に騙されているような感覚がある。だが、リュンの言葉を信じる限り現実味があるのは確かだ。」

「そう、あなたの言葉をすべて信じるって条件ならですけど。」

「その点を間違えないようにしておきたい、この男とは今日あったばかりなのだから。」

「おいおい、ここまで仕事内容を話してそれで全部嘘でしたってわけにもいかないだろ?」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ただ・・・。」

「何か、何か信じる事ができる言葉が欲しいんです。正直に言います、僕はあなたの言葉に惹かれてる。若さって奴もあるんだと思いますけど、外の世界をずっと見てみたいと思つて来ました。そんな仕事我突然舞い込むなんて、もっと浮かれても良いはずなんです。」

「しかし、だからこそ、そんな話を信じるな、騙されるぞ。という考えが頭の中を過ぎってます。」

「ふむ、大胆なのか臆病なのか良くわからん奴だな、君は。」

「下手を打てば一生に関わる内容です。そうもなるでしょう?」

「ここからは自分の本音を話す事に決めたのだ。なら少しくらい自分の言葉に整合性が無くてもいいじゃないか。」

「ああそうだな、なら俺は俺がこの仕事を始めようと決心した時の事を教えてやろう。」

「昔語りでもするのだろうか。それで心が揺さぶられるような状況でも無いと思うのだが。」

「そんなに昔の話じゃない、今日の朝の出来事だ。」

「どうも考えた事が顔に出ていたようだ。それともただ単に自分の思考と相手の考えが偶然合っただけなのだろうか。」

「俺は一人の少年を観察していた。ある噂が気になっていてね。」

「その少年とは自分の事だろう。いったい何を話すつもりなのか。」

「その少年は農作業を始めたんだが、どうにも変でね。」

「変?少なくともいつもと変わらな作業をしていたはずですけど。」

それは本当だ、この男が家の前に立っていた事以外は、今日一日、少しも変わった事は起きていない。

「ああ、君にとっては日常だっただろうが、俺にとってはとても可笑しく見えただよ。」

リユンは一拍置いてから再び口を開いた。

「随分と独り言が多いんだな、君は。」

！？何を言っているんだ、この男は。まさか……。

「どうにもランドファーマーは種族的にそうらしいな。一人きりの時に限って、ぼそぼそと独り言を言う。まあそうでなければ独り言なんて言わんがな。」

ずっと隠してきたはずの事だ、他の種族にその事をできうる限り話さない。

「ある噂とは、ランドファーマーという種族の特性の事だ。なんでも大地と話せるそうじゃないか。最初は半信半疑だったが、今日、君を観察して良くわかった。君は一人で喋っていたんじゃない。ずっと大地に向かって語りかけていた。」

リユンはじつとアイムを見る。今日一日の観察とはまさにそのためにあつたのだろう。

「僕らは地霊って呼んでいます。大地なんて大げさですよ。彼らはそこら中に沢山いるんですから。」

「ふん？」

リユンはアイムに次の言葉を続けさせるように相槌を打つ。

「地霊は僕らに、どうすれば自分たちが増えるかっていうのを教えてくれるんです。僕らはその地霊の言葉に従って、地霊を増やします。すると。」

「土地が越え、作物や動物が良く育つようになるんだな？」

この男は良く知っている。僕を観察する前から、随分と情報を集めていたのだろう。

「ええそうです。僕らは地霊と共存して他種族よりも、多く土地の事を知る事ができるし、それに地霊を増やそうと専念していると、不

思議と疲れないんですよ。どうにも彼らが力を貸してくれているそうです。」

「なるほど、ランドファーマーの種族としての長所は農作業が上手いのは無く、地霊を見る事ができるという事か。」

だからこそ隠していたのだ。この能力の事は種族の者以外に知られたら、自分たちの長所を利用されたり、他種族からの優位性を奪われかねない。

「それが、僕に決心を促すための内容ですか？そこまで僕たちの情報を集めたからこそ、自分は本気だと信用させるために。」

こんどは自分がリユンと言う男をじっくりと観察する番だった。

もうこの男の言葉を信用しないわけには行かなくなつたのだから。

「そうだ、そつちの決心は出来たか？俺はもうここまで話したんだから、お前が相棒になつてくれないと困るんだが。」

「・・・一日だけ。一日だけ待つてくれませんか？それまでには絶対返事をします。」

こうは言つたが、どう答えるかはもう九分九厘決まっていた。

「いいだろう。返事を聞かせて貰う場所はこの国の西側にある関所なんてどうだ？ここからなら半日もかからないだろう。必要な荷物で用意に時間が掛かる物は俺が用意しておく。」

お前は旅に必要なだと思う物を適当にこの家から持つてくるといい、身辺整理も兼ねてな。」

そして、リユンという男にも自分がどう答えるかなど、わかりきつた事だつたようだ。

旅立つと決めたら、行動は早かつたと思う。今までが住んでいた家や国だというのに未練もそんな感じなかつたからだ。どちらかと言つと自分の中にある高揚感を抑えるのに苦労した。実際、昨日はほとんど眠る事ができなかった。

「でも、そうだね。これからは平凡な生活からは脱出できるかもしれないけど、平和な生活ともさよならすることになると思う。」

だが後悔は無い。後悔するほどの時間を生きてはいない。

「いったいどんな国に行くんだろっね。シライみたいな国か、もっと騒がしい国か。」

実を言つともう既に自分は国の関所にいる。平和なこの国らしく、番兵が一人もいない。ただ国と国との境目を示すための場所であり、一步踏み出せばそこはもう違う国の土地だ。

「その一步を踏み出せないんだよね。だって雇い主がまだ来ていないんだもの。」

一日待つてと言つたが、正確な時間を決めていなかったのに気付いたのは、リユンが自分の家から去つた後だった。おかげで早朝には関所に向かい、それからずっとここに立っているという状況だ。あまり寝る事ができなかった原因の一つでもある。

「まあでも、あれだけ人を誘つてきたんだからさ。先に行つてるなんて事はないだろう。ないよね？」

そろそろ不安になってくる程の時間が立つ頃だ。もしや自分の夢はここでいきなり終わるのだろうか。そんな事を考え始めたアイムの視線が、関所からシライに向かう道へと移る。

「ああ、やっぱりまだ来てなかっただけじゃないか。来るのが遅いんだよ。」

そこには道の向こうからリユンが歩いてくる姿があつた。

こちらに来るのが遅れた理由も良くわかつた、彼は二人分はある旅道具を抱えていたからだ。

おそらく彼が自分で用意すると言つた、時間が掛かる荷物だろう。素人の自分が時間を掛けず旅道具を用意できる筈が無い。つまり彼はアイム用の荷物をすべて用意してこちらに向かつていたのだ。

旅に慣れているであろう彼も、さすがに重そうに荷物を背負っている。ここで、彼の居る場所まで走り、荷物の半分を持ってやるのもいいかもしれない。

何故ならこれから共に旅をする相棒になるのだから。

## 一つ目の国で(1)

シライから大陸を西に向かえばヒゼルという国に着く。それ以上向こうは海になっており、この国は大陸の西端という位置にあると言える。シライからヒゼルに架けては大陸の北方側にあるので、正確に記すなら北西端の国だ。

大陸の北西側は半島のように大陸全体から迫り出すような形になっており、東側以外が海に囲まれた状態にあるヒゼル国は、外側から見ても用意に海洋国家である事を知ることができた。

「ここからは船で旅を続けるんですか？」

ヒゼル国の中央都市であり、第一の商業港と知られる町の正門に立つ二人の青年の片方が、もう一方の青年に話しかけている。

話しかけた側の青年はランドフアーマーと呼ばれる農耕を得意とする種族で、アイムという名前の青年である。

「まあそうだが、その前にこの国で何か仕事を見つけない。新しい商売を始めるんだ。その試金石としては必要だろうさ。」

アイムの言葉に答えた青年はツリストという旅を続ける種族のリュンという青年だ。

「商売ですか……。なんとというか不安なんですけど。この国ってシライとはそれほど離れていませんよね。そこで知識を売るっていうのも、売れるような知識があるかどうか。」

彼らは農耕や牧畜の技術と知識を売り歩き、商売とする事を目的として旅をしている。旅といってもアイムは3日前シライという国から始めたばかりであり、その彼を旅に誘ったリュンも、商売を始めたのはアイムと出会ってからである。

「仕事を探すのは俺がなんとかするさ、それを達成できるかどうかはお前次第だな。ただ、そこで商売にならなければ、どこに行っても上手くはできんと俺は思うね。」

という事はいきなりここで旅は終了という可能性もあるわけだ。



アイムはそんな事を考えながら。正門の横にある衛兵の駐在所を見た。

彼らは今ここで手荷物検査を受けている。周りを海で囲まれており、唯一東側の陸路にある関所はほぼ素通りで行く事ができるという状況のこの国では、このように町単位で門を設け、旅人の監視をすることで自衛としているのだ。

「それにしても時間が掛かってるみたいですね、荷物検査。そんなに不信な物なんて入ってないんだけどな。」

アイムは駐在所から目を離し、周りをキョロキョロと見ながら喋る。

（実際はそんなに時間なんて掛かって無くて、ただ僕が緊張しているだけなのかもしれないけどな。）

不安ではあるのだ。まだ短い期間だが、今まで暮らしていた場所を旅立って、知らぬ土地を歩くという行為に慣れてなどいないのだから。

「ああ、荷物もそんなに多くは入ってないはずなんだが。怪しまれる様な物と言ったら、護身用のナイフくらいだが、それくらいならだいたい旅人が持っているしな。」

リユンも時間が掛かっていると考えているようであり、どうやら自分の感覚が変な訳では無いようだ。

そんな事を話している内に駐在所から衛兵の一人が首を傾げながら出てきた。いったいどうしたのかと聞く自分たちに衛兵は、荷物検査が遅れた理由について話し出した。

「いえね、ツリストの方は荷物に問題が無かったのですが、ランドファーマーの方の荷物に鋏が入っているんですよ。いったい何に使うんです?」

「おいどういう事だ。鋏なんぞ持って来いなんて、俺は言ったか? というかシライを出て三日間、お前はずっと俺にも内緒で鋏をその荷物の中に隠しもっていたのか?」

リユンが捲し立てるように話かけてくる。どうやら相当怒っているようだが、どうにも理由がわからない。

「いや、だって農業関係の仕事をこれからしていくんですから、鋤は必須道具でしょう。それになんて言うか寂しいんですよコレが無いと。なにせ長年付き添った相棒って奴ですからね。俺はこいつが押し折れたとしても、共に旅をするつもりですよ。」

そう鋤はランドファーマーの友。いや命と一緒になのだ。こいつがあつたおかげで、これまで自分は生きて来られたのだ。

「そんなもん、どこでも手に入るだろうが。それで門番にいちいち怪しまれてたら面倒この上ないだろ！」

「そんなもん？そんなもんって言いました？こいつを。なら話すしかないようですね、こいつと僕がどんな風にこれまで過ごしてきたかを。」

今この場でも鋤の握り手がしっくりと自分の手に収まってくる。

リユンには教えてやらなければならないようだ、こいつがどれほどのものかを。

「いらん、そもそも農業関係の仕事つっても、長期間一カ所に留まるわけじゃないんだ。鋤どころか、土いじりする機会だってそんなにないだろうさ。」

なんとという事だろう。ならここに自分が存在する意味が無いじゃないか。

「必要なのは発想だ。自分たちにあつて、この国に無い。そんな発想を俺達は売り歩くんだ。」

「けど、そんな発想。この国に来てから一度も生まれませんが。」

「まあ、いきなりそんなもんが生まれりゃあ苦労は無いな。とりあえず観察してみる事から始めてみる。ただ、見るだけじゃあ駄目だぞ？しっかり、お前の得意分野の目線で見てみるんだ。」

得意分野。当然、農家としての視線という事だろう。もしかしたら、ランドファーマーとしての能力である、地霊が見えるという力

の事ももしれないが。

「けど、そんな目線で見てもやっぱり思いつきそうにないですよ。こんな石畳と海が続く町中じゃあ。」

アイムは町を見渡す。そこには、レンガ造りの家並みと、しっかりと整備された石畳が港まで続く、農業とは無縁に思える商業の町としての風景が広がっていた。

「うーん、そうだな、とりあえずは仕事を探そう。何の発想が無くとも、自分にできそうな仕事なら判断できるだろうし、ハツタリならかませる。」

まったく安心できそうにない言葉をリユンはアイムに喋りながら、すぐ近くにある屋敷へと歩いていく。

リユンの歩く先にある屋敷は、非常に大きな扉があり、扉は開いたままになっていた。そこへは多くの人が出入りしているようだ。扉の横には水色の生地と金色の縁で彩られたタペストリーが掛かっており。その中央には鱗が無く、妙に胴体の長い魚の絵が描かれていた。

「仕事を探すって、その屋敷に何か仕事の当てでもあるんですか？」

「有るとも言えるし、無いとも言えるな。ああ、仕事を探すには格好の場所ってのが一番正しい表現だ。」

そうやってリユンは屋敷の中に入っていく。それを追うようにしてアイムも歩き出す。疑問が晴れたわけが無かった。

「結局なんなんですか？こことて。」

「扉の横の絵を見なかったのか？あれは海に棲むドラゴンの絵だ。」

つまり自分たちは海と関係深く、強力な組織だって主張している絵なんだ。そんな絵を飾って文句が出ない屋敷と言えば、この国を牛耳る商船組合の屋敷しか存在しないのさ。」

商船組合とは、大型船を保有しており、海運業を営んでいる者達を作りあげた組織である。ヒゼル国内においてこの組織に所属していない商人と言えば、モグリか外来人、もしくは余程、商業利益と

規模の小さいものしか存在しない。つまり、ヒゼル国内における利益というもののほとんどがこの組織に帰属するという、強大な組織構造を有している。

「それがどれほどの強大さかと言えば、ヒゼル国自体が商船組合が作り上げたものだと言うことだ。国の主権は商船組合にあり、国内でのヒエラルキーは商船組合にどれほど貢献してきたかによって決まる。」

屋敷に入るなり案内された待合室で、設置された椅子に座りながら、リユンは現在いる場所の説明をアームにしていた。

「つまり商船組合がこの国の王様ってことですか？」

アーム自身、その説明は有りがたい物であったので真剣に聞いていた。

「まあな、だが個人として想像するなよ、組織そのものが王なんだ。例えば組合で一番偉い奴が居たとして、そいつが王様みたいな権力を持つてるわけじゃあないんだ。」

「へえ、でも僕らはそんな凄い組織の屋敷に居ますけど。それほど凄いつて感じないようなんですけど。」

周りを見渡すと、そこには自分達以外にも多くの人物が椅子に座っており、それぞれ種族や立場もバラバラに見える。だが、どれもそれほど地位を持った様には見え、とてもいま説明されたような組織が所持する屋敷に居るとは思えなかった。

「強大な組織という事は、やる事も手広いのさ。実際、ここも商船組合の本館じゃなく、いくつか権限を移した別館でね。移された権限がなんなのかと言えば、商船組合関係の仕事や依頼を、各人の立場や経歴に合わせて斡旋する職業紹介場としての権限ってところだな。」

「なるほど、通りで周りに座ってる方々も、僕らと似たような雰囲気をしてると思いました。」

要は皆、職無しって事か

自分でも失礼な事を考えているのはわかるが、自分自身そのよう

な立場なので別に罪悪感は覚えなかった。

（旅人なんて、職無しより酷い立場の場合もあるしね。）

事実、自分達を他人から見れば、そんな風に見られるかもしれない。

「しかし仕事を探すつて、雑用とかそんな感じの仕事つて事ですか？ここで農業関係の仕事なんて紹介してくれそうに見えないんですが。」

何故ならここは、商船組合の仕事案内をしている場所なのだから第一、あつたとしてもただの旅人の自分達が、望むような物を紹介してくれる可能性は低い。

「まあ、そこらは俺がなんとかするさ。口は達者な方だからな。」

「要は出任せとハツタリでなんとかするということですか。」  
実際それ以外に方法は無さそうではある。

「ここは係員と直接話をして斡旋する仕事を紹介する場所だ。そんなものでもなんとかなるさ。」

そうこうしている内に自分達の順番が回ってきたらしく、係員が待つ部屋までの案内人がやって来た。

案内人は仕事案内の係員も兼ねているらしく、部屋に入ると目の前にある机の向こう側へと座り、その対面に自分達が座るように促してきた。

「えー、それではリユンさんとアイムさんでしたか。お二人は旅を続けている外来人ということですので、当方としては、港での運搬作業などの短期でできる力仕事を依頼したいと考えています。お勧めは商業船内での雑用などですね、お二人はこれからも旅を続けるのでしょうか？運賃が浮く上に旅費も稼げて一石二鳥ですよ。目的地へ向かう船に乗れるかどうかについては、こちらが調整しますのでご心配なく。」

自分達が座ると同時に、一斉に言葉の雨を浴びせかけてきた係員。どうも案内される仕事が決まっている様子で、ここでの話も事

務作業の一部といったところだろう。

（こんな調子じゃあ、仕事探しなんて無理なんじゃあないかな。）

まあ仕事の紹介はしてくれているから、食うに困るといった状況にはならないだろうが。

「いやあ、たかが旅人にそんな仕事を紹介してくれるなんて、大変喜ばしい事なのですが、こちらとしては一つ提案があるのです。あなた方組合にとっての利益になるかもしれない、そういう話なのですが。」

係員に変わり、今度はリユンが口を開きだした。しかし、組合にとつての利益なんて、随分大きく出たものだ。彼の言う、出任せとハツタリとはこういう物が。

「我々にとつての利益ですか。大変失礼ですがそのような話を聞き入れる余裕というものは、当方としては持ち合わせていないのですよ。正直なところ、我々は現在特定の仕事に就いてらっしゃらない国民や、当面の費用を必要とする旅人に仕事を紹介する以外の権限というものを、組合本部から与えられていないのです。組合の利益や取り引きといったものに対する話であれば、それ専用の窓口が別の場所にありますのでそちらをご利用に。それでは。」

おっと、いきなり話が終わりそうな勢いだ。おそらく応対相手が仕事案内以外の話を切り出して来た時のためのマニュアルというものがあろう。リユンはどうするのだろうか、付入る隙はあまり無さそうなのだが。

「いや、話を聞いてくれるだけでいいんです。それというのも、こちらの技能についての話ですので、仕事紹介にも無関係という訳ではないのですから。」

なるほど、係員本来の仕事にも関わるといふのなら、リユンの話を聞かないという事もできないだろう。

「ふむ、そちらの技能ですか。確かにそれが特殊なものであるのですしたら、こちらが紹介する仕事にも色を付けさせて頂きますが、それだけの事ですよ？その技能がどのようなものであれ、やはりこち

らとしては仕事案内以外の事はできませんので。それでもよろしければどうぞ。」

係員の態度は変わらないままであるが、話自体はすぐに終わるといふ段階からはある程度離れたようだ。

「いやあ、ありがたい話です。本題の我々の技能についての事です。それは農作業に関する知識と能力の事でしてね、私の隣にいる彼は生粋のランドフーマーなのでそういった能力が非常に高いのですよ。」

とうとう、こちらの能力に関しての話が出てきた。実際そこまで自分の能力に自信は無いのであるが、ここでその事を言う訳にも行かず、アームは冷や汗を隠すのに苦労していた。

「農作業ですか？それは確かに仕事を案内する上で重要な技能と思えますが。ところで、我々がどのような組合であるかはご存じで？」

確かに商船組合が案内する仕事で、農業技能を発揮できる仕事とというのは少なそうである。

「ああ、いや、当然商船組合についての知識はある程度こちらにもあります。だからこそ我々の力が必要なのでは無いかと考えたのです。」

どうも話が噛み合っていないように思える。リユンには何か考えがあるようだ。

「私たち商船組合側としましては、必要性を感じているという事は特に無いのですがね。組合の外部である、あなた方にはそれがあるかと？是非聞いてみたいものですね。」

係員の意見に同意したくなり、頷きかける頭を止めながらアームもリユンを見る。

「技能に対する需要の無いところにそれを生むというのは、当然我々にも不可能です。ですが、そちらは必要性を感じていないという点で嘘をついてらっしゃる。我々はあなた方組合に対して、ある程度は知っていると云いましたよね？それは、農業に対する知識を持った人物を組合は現在必要としているという状況についても同様で

してね。」

場の雰囲気が変わったような気がする、リユンの言葉で係員の表情が強張ったからだ。一方でリユンはニヤニヤとして、以前、ランドファーマーの能力について自分に話した時のような表情へと変わっていく。そういう表情は余計な争いを生みそうなので、やめたほうがいいと思うのだが、本人はやめる気がなさそうだ。

「とうとう?。」

饒舌というか事務的であった係員の言葉に感情が籠っていくのを感じる。どうにもリユンという男は話し相手の感情を揺さぶるのが上手いようで、彼が係員と直接話ができるという事だけで自信を持っていた理由がなんとなくわかる。

「おっと、これ以上は組合の利益に関わる話になりますね。仕事案内のみを権限とするこの場では関係の無い話でした。すみません、忘れて下さい。」

なんて嫌な奴だろう。先ほど係員に言われた嫌味をそのまま相手に返すなんて。突然、慌てた表情になる係員が可哀そうになってくる。まあ、ちよつとだけ、ざまあみると自分も感じたのは内緒だが、「え、いや、確かに私にはそのような権限しかございませんが。ですが、少々お待ち頂けますでしょうか。先ほどの話について権限を持った人物をこちらへ連れてきますので。」

係員がどどん慌てだすのを感じる。それと正反対にリユンの顔が生き生きとしますのも。

「ええ、いくらでも待ちますよ。あなた方は私の話を聞いてくれている側で、我々は聞いて貰っている側なんですからね。」

リユンの言葉を聞いて、係員はすぐこの部屋を小走りで行った。どうやらリユンの取引は成功した様子だ。

それにしてもこの男はなんと奴なのだろうか。

「うん?どうかしたか?。」

ついリユンを見てしまったアムであるが、リユンはどうだ、やってやっただろう。という表情をアムに見せつけながら。余裕を



持った様子でそう喋るだけであった。

その後の展開と言えば、係員の上司であろう人物が部屋にやって来て、リユンが勿体ぶっていた情報を話し、そのまま仕事の契約とிட்டたものだった。随分と早い展開だったと思う。

ちなみに現在は組合が用意してくれた宿に泊まっている。こちらも随分と良い待遇である。

「それで、俺達がする仕事がどんなものかはわかったか？」

「いいえ、まったく。」

係員の上司とリユンが会話を始めたあたりで、会話を聞く事を辞めたせいである。ちなみに、場の胡散臭さに嫌気が差し始めたのが会話を聞かないようにしていた理由である。

「掻い摘んで話すのだ。組合は現在、この国で農家を専業としている奴等と対立している。組合側としてはこの対立関係を穏便にかつ、組合有利なように解消したい。そこで仲立ちする人材を必要としているが、農家側が全員、組合を敵視しているのが現状なので、組合側に話し合う上で必要な農業知識を持っている人材がいない。ならば外部から農業知識を持つような人材を雇って、農家達との交渉役にしようと考えたって訳だ。」

そしてその交渉役に選ばれたのが自分達という事だろうか。確かに農家との交渉に必要な知識程度なら自分にはあるだろう。

「疑問点が二つあるんですけど言ってもいいですか？」

「なんだ？」

「一つ目は、組合が農業知識を持った人材を探していたのにそれを隠していた事です。」

確か係員はリユンが農業知識を持っていると言った時、それを必要としていないと言ったはずだ。そもそも、そのような人材を探しているのに、仕事案内では紹介しない事も疑問である。

「その点に関しては、対立していると言っても国内での話だからな。身内の恥を外部に晒したく無かったって事だろう。どうせ、秘密裡

に他国から知識を持った人材を探して交渉役にするつもりだったんだろうさ。」

「だったら僕達に仕事を頼む事も無いと思っんですが。」

身内の恥を晒したくないのなら、なおさら自分達にそういった仕事を紹介しないはずだ。

「俺達が国内の対立を知らなかったのならそうだったろうな。だが、たかが旅人の俺達がそれを知っている以上、隠したところで、自分の対立は俺達経由で外部にバレてしまう可能性が高い。なら、秘密を知ってる俺達を雇って身内にしてしまえば、秘密がバレる可能性も低くなる。丁度いい事に俺達は組合が望む能力を持っているのだからなおさらそう考えたんだな。」

となると組合側にとって自分達はあまり有り難くない存在になるのだろうか。まあ、仕事を案内されたというよりもぎ取ったと言った方が正しいのだから、仕方の無い事だろう。

それより、今後の行動には多少注意が必要になってくる事を考えた方が良さそうかもしれない。組合側が支援してくれる状況ではまず無いだろうから。

「じゃあ、二つ目の疑問についてです。そもそもなんで組合が農家と対立してるんですか？」

いくら商船組合が海洋系の仕事ばかりしているからと言って、農家を敵に回す必要も無いだろうに。

「そうだな、とりあえずこの国の商船組合が国自体の創設に関わってるって話はしたな？」

確か待合室で話した内容だ。それくらいなら覚えている。

「商船組合が王様なんでしたっけ？」

「概ねそんな感じだな。だから、当然この国では皆組合に貢献したがる。それが自分達の利益になるんだからな。」

まあそうだろう、わざわざ国の創業者に喧嘩を売るより、媚びを売ってお零れに預かった方が良くに決まっている。そもそも、自分達からしてそうなのだから。

「そんな状況ならまず選ばれる仕事は組合と関係深い仕事だ。そちらの方が組合自体に受けが良い。農業なんかの商船業とは関係が薄い仕事ってのは、そういうった組合が好む仕事を選べなかつた奴がする余り物。そんな考えが国中に出来上がってるのさ。」

なんとという事だ。なら自分みたいな元専業農家はこの国では仕事を選べなかつた搾りカスとして見られるという事か。

「急にこの国が嫌いになりましたねー。」

「お前にとってはそうでも、商船組合にとっては都合のいい構造さ。それが嫌なら国を出ていけばいい。ここは国外に出ていく為の方法がいくらでもある。というのが商船組合側の言い分なわけだ。」

当然それで納得できるわけが無い。特に農家なんて普通は土地に執着する物じゃないか。

「それでも当初は上手く行っていた、商船組合側が多数派だったからだ。だが、組合が大きくなればなるほど、組合と直接関係無い雑多な仕事が増えてくる。それは不満を持つ側が増える事と同義だ。さらにそれにある問題が拍車をかけた。」

「ある問題？」

「お前はこの国に来てから組合員を何人か見ただろ。」

確か、この町の門番に仕事案内の係員、話は殆ど聞かなかったがその上司、あと組合の屋敷でも何人か見たような気がする。

「全員、結構特徴的な外見してたろ？」

「みんな耳が長く尖ってましたね。」

耳が長いだけなら、リユンもそうだがツリストの耳は尖ってはいない。尖っているのはエルフという種族だ。

「おおよそ、この国で商船組合に直接関係する仕事や、貢献度が高い仕事はエルフ族が指揮している。これは当初、商船組合を立ち上げたのがエルフ族だったというのが理由だが、もう一つに彼らがエルフの中でもシーエルフと呼ばれる種族であるという事に関係している。」

シーエルフとは確かエルフ族の一種であつたはずだ。エルフは周

りの環境に対して常に影響を受けやすい種族であり、一所に住み続けられれば、たった数世代で子孫の肉体に環境に対する適応できるような特徴が現れだすと聞いた事がある。

そしてその変化が海に適応する方向に向かったのがシーエルフであるとも。

「彼らの外見的特徴の一つに指と指の間の水かきなんかもあるな。当然泳ぎが得意になる。短時間なら水中で呼吸ができたり、船上でのバランス感覚も優秀らしい。こういったものが個人の才能だったら良いが、種族としての能力になってくると話が別だ。どうやって他の種族じゃあ太刀打ちできない。組合はそんな能力を重要視する。そして組合にとって利益の大きい仕事はシーエルフに任せられる事になる。」

通りで組合員がエルフばかりのはずだ。これじゃあ他の種族は碌な仕事に就いてないのではないだろうか。

「種族が優遇されているんじゃないかと能力で格差が付けられたんじゃないか、どうしようも無いですよね。」

文句を言いたくても言えない状況になってしまふ。不満を発散する機会が無いのだからそれらはどんどん心に溜まっていく。

「一応能力中心に人材を選んでいるのであれば、そういった不満も抑え込む事が普通はできるんだが、その能力で選ばれるのが単一種族のみとなると、不満を抱く側は組合に選民思想が蔓延ってるんじゃないかと勘繰りたくなっていく。結局、両者の対立は外部からの助けが必要なくらいまでは深くなっていったってことだ。今回は国内農家との対立だが、他にもいろいろと問題があるんじゃないかね、この国は。」

それでもある程度は組合が隠し通せている以上、それが表面化するのはいまだまだ先の事かもしれないが。

「そういえば、組合側は隠していた農家との対立ですけど、良く知ってましたね。何か情報源とかあったんですか？」

この町に来てからは別行動をしておらず、自分が知る限りは情報

を集めていた風でも無かった。もしかしたら前もって知っていたのかもしれない。

「情報源？そんなもんは無い。」

「え？じゃあどこで組合の内情を知ったんですか？」

やはり前から国の情報を知っていたという事だろうか。

「前もって言っていたら？ 出任せとハツタリでなんとかするって。組合員に農作業についての話を振った時、何故かそういった仕事を紹介する姿勢を見せてくれなかったんでね、いくら商船組合だって農業についての仕事なんて単純作業が多いんだから何かしらあるはずだろ？ 不自然に思ったから、組合員にカマをかけてみたら、上手い具合に乗ってきてくれたってところだ。」

「という事は、その後、組合員の上司と話をしていたのも全部、出任せだったって事ですか！？」

いくらなんでも無茶苦茶だ。どんな神経をしていたらそんな事ができるのだろうか。

「相手の言葉が聞こえなかった時、適当に相づちを打って会話を続ける時があるだろ？ その要領だ。へたに知識を持って話すより、上手く会話できるぞ。」

どうやら非常に図太い神経の持ち主である事がわかった。

「でも、それでもし失敗したらどうするんですか？」

「その時はさっさと町を出ればいい、信用なんて俺達みたいな旅人には最初から無いようなもんだからな。痛手にはならないだろうさ。」

あまりにもふてぶてしい事を言うリユンにアイムは頼りにすれば良いのか、不安に思えば良いのかよくわからない心情のまま、今日一日を過ごす事となった。

## 一つ目の国で(2)

鼻に潮風の匂い漂ってくるのに気が付き目が覚めた。この匂いのせいか海を泳ぐ夢を見ていた気がする。体がまだその気分に浸りたいのか、このままベッドで微睡んでいた心持ちなのだが、今日は組合の仕事がある日だったのでそのまま寝ているというわけにはいかない気分でもあった。

この宿は組合が用意してくれた宿だ。部屋ごとに鍵があり、大きさもなかなかのものだった。自分が寝ていたベッドも上質とまでは行かないが、清潔感があり、旅で野宿する時の寝袋などとは月とスツポン程の違いだ。

たかが旅人にこんな宿を用意してくれる組合とは、それほど裕福なのだろうか。例えその裏に何か隠された意図があるとしても、自分達にとっては破格の持て成しだった。これでは否応無しにプレッシャーが掛かってくる。

頼りになるかならないか、良くわからない相棒は昨夜、話をしてから部屋に備え付けられた安楽椅子に座りながら寝ている。ベッドは部屋に二つ用意されているが、彼はそのベッドでは寝苦しいと、そちらで体を休めている。反対に野宿をしていた時は、結構ぐっすり寝ている雰囲気があったので、要は貧乏性という事だろうか。

「もう起きたのか？」

「どうやら自分が起きる物音でリユンが起きたようだ。安楽椅子から少し背を起こし、自分に話しかけた。

「なんと言っても初仕事ですからね。柄にもなく緊張してるんですよ。」

「本当の事だ。体がまだ睡眠を求めているのに、眠る気になれないのはそのせいだ。」

「まあ今回は組合と、それに不満を持つ農家との仲裁だ。口先の技術が物を言うから、ほとんどは俺の仕事だよ。お前は俺が知識を必

要とした時に何か言ってくれればいい。初仕事だつて言うのなら、それこそ、そこまで高望みしていない。」

情けない話だが、その言葉に少し安心してしまった。所詮自分なんて、旅を初めて数日しか立っていない、新米とすら言えない旅人なんだと自覚してしまう。

「でも仕事は仕事でしょう？失敗したら、被害が出るのは自分達だけじゃない。」

組合側や交渉相手側にも被害がでる。別に相手の心配をしているわけではなく、被害がでた結果、自分達に対して相手がどのような態度を取ってくるのか、それが心配なのだ。

「俺達がするのは交渉事だぞ？それには100点満点みたいな結果は無いが、0点なんて結果もない、成功や失敗なんて両極端な結果にはならんだろうさ。心配するならその後の報酬についてだな。これに関しては幾つか要求案があるが、まあそこらへんが今回の仕事の結果次第つてだけさ。」

そうか、所詮自分達は旅人なのだ。仕事の報酬は気にしても、仕事自体にそこまで責任を感じる必要はないのか。

「それじゃあ丁度二人とも起きてしまったんだ。朝飯を食ったら、組合が指定した交渉場に向かうとするか。少々早い印象が悪くなるという事もないだろう。」

そう言つて、リユンは椅子から完全に立ち、荷物をまとめ始めた。大した量では無いが自分の分もやっておこう。仕事がどんな結果に終わろうと、この部屋に戻つてくるといふ事は無いのだから。

組合が指定した交渉場は町の中心近くに位置する大きな広場だった。広場には多くの椅子が扇状に置かれ、組合と農家達との交渉が始まるまで時間はまだあるが、その椅子には既に何人がが座っていた。

「交渉つて閉ざされた密室とかでするものだと思つてたんですが、こんな所でするんですね。周りから丸見えだ。」

実際、広場の周りには交渉を見に来たであろう住人が、疎らではあるが集まっていた。

「組合の伝統でな、自分達の組織運営は出来る限り公開していく事になっているらしい。」

「随分と公平なんですね、昨日下がった評価を少しプラスしてもいい気分になりました。」

まあそれでも農家を冷遇する組合に対して良い印象は抱く訳が無いが。

「組合側の余裕なのさ。交渉といっても始まる前から組合側が優勢だからな。組合は農家が居なくても存続できる上、農家達は組合に自分達の優遇を求めて交渉しているって事はそういう事だ。」

ふむ、なら自分達の仕事も組合側が用意した農家として、ある程度の助言をするだけで上手く行くかもしれない。

「でも、こんなところで交渉をするって事は組合側としても交渉が不利になる訳にはいかないんじゃないですか？」

負けたらそれだけ組合の権威が落ちる事になる。自分達で交渉を公開している以上、言い訳もできない。

「どうかな？農家側の交渉が上手くいけば、組合側が譲歩する形になるが、それは優位な立場にある側がすると寛大さを示す事と同じになるのさ。実際、組合側だって一方的に農家達を負かそうなんて考えていないのさ。多少、農家側の意見を飲もうと考えたからこそ、この場が開かれたんだからな。」

「でも組合側だって僕達を雇ったんですから、そうそう相手に譲歩するつもりも無いんじゃないですか？」

相手側の知識を知ろうとするのは、相手と対等に渡り合いたいからだろうに。

「逆に俺達旅人を雇ったくらいで開かれる場だったんだ。ある程度の交渉をする努力をしたという格好を見せる必要がある。だが、それ以上の事はするつもりも無いってところじゃないか？」

大した自信だと思う。そこまで組合と農家達との立場は差が広が



っているのだろう。

「まあ、それほど組合側も余裕がある訳じゃないだろうがな。」

「なんでです？聞いた限りじゃ、圧倒的に組合側が有利じゃないですか。」

むしる農家側が不憫になってくるくらいなのに。

「忘れたか？組合はそもそも農家達との争いを外部に隠すつもりだったんだぞ？こんな場所で交渉するのは組合側だって本意じゃないんだろうさ。」

「ああ、そういえば、もともと内々で処理するつもりだったんでしたっけ。ところが、とある旅人の出任せに騙されてこんな事をするハメになってしまったと。」

たかが旅人に知られてるくらいなら、もういっそ見世物にしてしまおう。といったところだろうか。

「組合側も不憫にな。ここまでやったら、どんな結果でも決着付けるしかないだろうに。」

「そうですねー。ハッター野郎は恨まれてるかもしれないねー。」

こんな状況になってしまった原因の一つが同情する権利なんて無いのである。

「言つとくが、どう見てもお前も共犯だからな。こうなったら、とことんまでやってやろうじゃないか。農家達を泣くまで追い詰めてやろうぜ。」

「農家と敵対なんて元農家としては不本意なんだけどなあ。」

まあ、ハッター野郎の相棒にもそんな事を言う権利は無いのだろうが。

「我々は自らの仕事の対価を正当に要求しているだけだ！」

農家側の代表者らしき人物が広場で声高に叫んでいる。交渉が始まってしばらく経つが、農家側の要求は特に変わった様子を見せず、組合側に自分達の立場向上を求めるといふものみを訴えている。

「こちらとしては正しく評価しているつもりなのですがね。もしあ

なた方が現状より、報酬をさらに多く要求するのであれば、生産量さらに上げるか、農作業の能率化を図ればよろしい。」

一方、組合側の返答は要約すると、お前たちの要求なんて聞けるかというものである。これも、交渉開始当初からまったく変わっていない方針で、ようするに話し合いは平行線を辿っていると云っている。

さて、そんな交渉場に組合側の仲介役として雇われた自分達はどうと。

「始まってから一切、発言の機会が無いんですよね。」

交渉は両団体の代表者が互いの意見をぶつけ合うだけの状態が続いており、他の人間は静観するか野次を飛ばすかのどちらかであった。

ちなみに前者は組合側が多く、後者は農家側に多い。

「まあ交渉の大半はお互いまったく進歩が無い事を確認する作業みたいなもんだからな。俺達の仕事は両者がそろそろ何がしかの決着を付けたいと考え始めてからだ。」

要するに話し合いに飽きが来たら、まとめ役として出てこいってところか。

「じゃあ、結構重要な役かもしれませんね。今後の方針を左右しかねない立場でしょうし。」

「農家側にとつてはそうだな。だが組合側が農家側の要求を拒んでいるのはポーズだからな。別に要求を飲んでしまってもいいって立場だから、まあ俺達がどんな結果を出そうともなんとかなる。」

そう言えばそうだったか。組合側にとって自分達はお飾りみたいなもの。そう考えると癪に障るが。

「それで、どっちに付く？」

「え？どっちに付くって当然、組合側でしょう。僕達の雇用者ですよ？」

「さっき言った通り、その雇用者はどっちも有利に転んでも自分達の権威を守ればいいという考えだ。だったら、与えられた裁量の範

困で好きにやっつけてしまおう。そのほうが楽しい。」

楽しいときた。せめて自分だけはこの仕事で組合側から貰える報酬のためのものである事を記憶しておきたい。

「で、どっちだ。」

「そうですね。雇用主は組合側ですけど、個人的に好きになれない感じがするし……。」

さてどうしたものか。迷いながらアームはまだ言い合いを続けている両代表者を見る。

「あんたたちはいつもそうだ！自分達の判断が正しい。不満があるのは怠慢の証拠だとばかりに言う。だが実際はどうだ！」

農家側の代表者は当初からのエネルギーを維持し続けているかのごとく叫び続けている。

「まるで我々の采配に不正があるかのようにおっしゃりますが。それこそ言いがかりですね。我々は組合員に対して公平に対応しています。」

そう反論する組合の代表者は少々疲れた様子である。まあその嫌味たらしい喋り方は幾分も衰えていないが。

「ならば、お前たち組合側に座る者達はなんなのだ！そのほとんどの種族がシーエルフでは無いか、これは組合に意図的な選択がある証拠だ！」

「それは純粹に能力で選んだ結果だと何度も申しております。あなた方が言う意図的な選択とはその程度の事ですよ。」

「その能力が種族に由来するものであるのなら、それはより差別的ではないか！」

話しは平行線どころかお互い反発し合いながらもまだ続いている。こんな話がいつまで続くのか。交渉開始の頃から観客として集まり始めた住人達もちらほらと離れ始めている。

「そちらがそう思っているだけでしよう。我々は種族によって対応を変えた事など、一度として無い。その証拠に今、この交渉の場に置いて、あなた方と対等に話し合うためにシーエルフでは無く農

業知識を持った者達を呼んだのですから。」

自分達の事だろう。話に出てきたと言う事は、そろそろ発言の機会がやって来たのかもしれない。

「ならば、ここで話すべきはその者達であってお前たちシーエルフでは無いはずだ！」

「ええ、ええ。最初からそうするつもりでしたよ。ですが、あなた達の我々組合に対する考えが非常に偏った物だったので、その改めのために少々、回り道をした程度の事ですが。」

おたがい、嫌味を言わないと話を進められないのだろうか。そんな事をアームは考え始めていたが、自分達に関する話なので聞き流す事もできなかった。

「それでは交渉役の方、出てきて下さい。これからは、あなた方が組合の代表として話してもらいます。」

ついに自分達の出番が来た。席を立ち、広場の中心へと向かう。当然、隣に座るリユンも共にだ。

「えー、今組合に紹介された、ツリストのリユンと、隣はランドファーマーのアームです。各国を回り、旅を続けているような者ですが、この場で紹介されたように農業に関する知識や技術についての商売もしています。」

広場の中心に着いたリユンは農家側を向き話し出す。この話し方だと、自分達は長いこと商売を続けているように聞こえるが、実際には今回が初めての仕事なのでペテンである。しかし、嘘は吐いてはいないのだから、バレても問題無い。

「私はツリストとして旅の先導や、各国でのガイド、交渉を役割としており、隣のアームがランドファーマーらしく、農業に関する説明などを行っています。ですので、主に話すのは私ですが、専門的な内容ではアームが交渉していきますのでご了承を。」

ここまでは農家側からの野次は無い。まあ立場の説明なのだから有っても困るが。

むしろ自分がランドファーマーと紹介された時、少し興味深そう

な声が上がったくらいである。そういえば、農家側には自分と同じ種族は居ない。この国にはランドファーマーの農家は居ないのだろうか。

「それでは、これから組合側の人間として、あなた方に対する交渉を始めたいと思います。あなた方が求める、農家その他の仕事に従事する者への立場向上に關してですが、客觀的に見て、それを全面的に組合が飲むというのは不可能に近いものです。」

交渉場の中心でリユンが続けて喋る。かなり流暢なものであり、少なくともこれから交渉を無難に進める事ができそうな雰囲気がある。

「ふん、新しい交渉人が来たと思えば、言っている事は同じではないか。そもそも組合側の者でありながら、客觀的とは随分と矛盾した表現を言う。」

相手側の代表は変わらず話を続けており、主張している事もまったく同じ。このままでは、組合側の交渉人が変わっただけという事になりそうである。

「いえいえ、こちらとしてはあなた方の言い分も、もっともな物であるとは思っています。自分達の立場の向上を望むのは、むしろ仕事に対して貪欲な証拠。そしてあなた方の立場も客觀的に見て、他の仕事より不遇に扱われているのは明白です。」

という訳で方針変更が行われる。当初予定した通りではあるが、農家側に対してある程度妥協する方針を取るようだ。

「ほう、我々の要求に対して異存は無いという事か？ならば組合側がそれを飲め無いのはどういう訳だ。」

「組合を組合たらしめている物はその名の通り、商船業であるという事です。あなた方は自分達の立場を不遇と言うが、それは商船業を優遇した結果起こるものであり、その優遇を無くしてしまえば、組合は組合で無くなる恐れすらでてる。」

言っている事は組合が行っている不均衡の正当化なのであるが、ここまでざっくり言われると、農家側もつい納得してしまうという

ものだ。

「ならば我々に現状を認めると？今ある立場を続けて行けと言うのか？」

「それをしてしまいたい。というのが組合側の正直な考えです。しかし、それではあまりにも差別的だ。ですので、あくまで現状、職業差の不均衡を維持しつつも、あなた方の立場の向上を組合としては図りたい。」

職業差別があると認めてしまっているわけだが、もうこの場では問題点にされる事は無いだろう。

「ほう、現状を現状のまま、我々を満足させる案があるか？」

なぜなら、農家側はもう自分達がどのような提案を組合側がしてくるかを争点にし始めているのだから。

「ええ、それは商船関係の仕事において、シーエルフ以外の種族に対して、種族的な能力的な不足を考慮に入れつつ、仕事紹介の際、種族差の分だけ他種族を優遇する。というものです。シーエルフ以外の種族に対して、優先枠をある程度設けると言えば、理解しやすいでしょう。」

結局、これが組合側の予定していた考えである。交渉人としての仕事を紹介される際、この案を組合側の最大限の譲歩として、農家側を納得させて欲しいと依頼をされていたのだ。

実際、組合内では商船業を扱う団体へ、この提案は既に通しており、了承するという旨の返答を幾つかの団体から貰っているのが現在の状況である。

つまり組合にとってこの交渉は、どれだけ効果的に農家側にこの提案を聞かせるか、というものである。

「ほう、確かに我々にとってそれはチャンスと成り得るものだ。だがその優先枠というものは、どれほどの範囲で与えられる事になっている？もしそれが、最低限のものであるのならば、我々はその提案に納得しかねるが。」

そう言う農家側であるが、内心は組合側の提案を既に飲むつもり

であろう。内容が自分達がどれほど優遇されるかという物に変わっているのだから。

「それに関しても、組合側に提案があります。」

「ふむ、それはどのような？」

さて、そろそろ自分の出番だ。

「あなた方は今まで農作業に従事して来た訳です。ならば、それによつて組合が得たであろう利益をこの場で我々組合にアピールして欲しいのです。我々がそれに共感すれば、するほど、組合員の方々があなた方を優遇する気になる事でしょう。専門知識に関してはご心配無く、そのために私の相棒がいるのですから。」

ここまででは予定通り、リユンが危なげなく進めてくれた。組合側も自分達がある程度依頼を遂行している事を理解してくれている事だろう。そしてここからは自分の仕事、農家側の意見を自分がどのように返すかで、今後の組合と農家達の方針は大きく変わっていく事になるだろう。

「我々がこれまで、どれほど組合に貢献してきたかというなら、この国がどのような位置条件にあるかという事を見れば理解してもらえるとと思う。」

組合の代表やリユンに向けて声高に叫んでいた農家側の代表が今度はアームに向けて話しを続けている。

既に交渉場の中心に立っているのはリユンでは無く、自分であるのだから当たり前だが。

「それは、この国が海に囲まれた半島であるという事でしょうか。アームはこのような場で発言するというのは初めての経験である。しかし、思ったよりも緊張していない自分に驚いていた。」

「その通りだ。海に面している以上、潮風が内陸に向けて吹き続けている。それが農作業にどれほどの影響を与えるかは分かるか？」

「そうですね、農家にとって塩害は深刻です。作物自体を駄目にするのも勿論ですが、それ以上に土が農作業に適さなくなる。」

塩害は野菜に塩味が付く程度ならむしろ美味しい話だが、塩だけにそのような甘いものではない。そもそもほとんどの作物にとって、多量の塩は毒のようなものである。多くの作物が塩によって成長を阻害されてしまい、当然それらは売り物になることは無いだろう。

塩がやっかいなのはそれだけで無く、水に溶けやすいという点もある。その性質の結果、土中に染み込み、土自体が作物にとって害になってしまうのだ。

「だが、そのような環境で常に我々は組合が要求してきたノルマを達成してきた。それだけでも、評価に値するものだと思うがね。」

「確かに組合の資料でも作物の収穫量は要求通りの成果を出し続けていますね。それでは、収穫作物の内容についてはどうですか？」  
いくら収穫量が良くても、それらの内容が悪ければ目も当てられない。

「麦や稲など、国の根幹を支える物ばかりだ。それらが不要だとはもちろん言えんだろう?」

「もちろん不要です。」  
「何?」

やはり収穫作物の内容に問題があった。これでは納得なんて出来る筈が無い。

「麦や稲を育てているから、国の根幹を支えているなんて思い上がりも甚だしい。もしかして、そんな内容で組合の支援を得られるなんて考えていたんですか?」

「貴様!我々のこれまでの成果を馬鹿にするのか!やはり貴様等も組合の一員と言っわけか!」

これまで、ある程度落ち着いていた農家側代表が再び怒鳴りだした。だがまあこれくらいは我慢するしかないだろう。これからはもっとヒートアップして行くのだから。

「あたりまえです。だって組合に雇われている訳ですからね。でもそれはあなた達も同じでしょう?そして組合の一員である以上、組合の利益というものを考えるべきだ。でもあなた方はそれをしてい



ない。」

「先ほど言った事を忘れたのか？これまで農家達は組合の要求通りの事をしてきた！」

農家代表者がこちらを指さしながら、顔を真っ赤にしていく。もう少し近ければ唾が飛んできていることだろう。

「その要求通りというのが問題なんですよ。実際、農家達が皆要求通りの成果を出していても、それほど組合の利益にならないんですから。組合にとって農業は範疇外の仕事なんですよ。だから、その仕事依頼も甘目に出している。それを遂行できたからと言って、優遇策を取っていたら、他の組合員から不満が出てきますって。」

「ならば、どれほどの成果を出せば、貴様等は納得すると言っののだ。結局は難癖を付けて、我々の不満を抑えただけではないか！」

その通りである。自分は難癖を付けて不満を押さえつけるつもりなのだから。だが、それに反論の余地を与えなければ、自分達の勝ちである。

「納得するには、そうですね、あなた達の作物でこの国の国民が飢える必要が無いくらい生産できれば、こちらとしては納得できませんね。ちなみに今の生産量からどれほど増やせばできるか、そこらは分かれます？」

「そんなもの、今の5倍の量を出荷できたとしても不可能だ！やはり無理難題では無いか！」

「逆に言えば、国内で賄える食料は、せいぜいそれくらいという事です。ぶつちやけ、この国の食料は殆ど、他国からの輸入に頼っている状況ですから。これで組合側に農業で利益を出そうとするなら、輸入する必要の無いくらい生産してくれないと無理なんですよ。」

この状況が不健全と言う訳では無い。ヒゼル国は商船業での交易で国内の利益を得ている以上、他国から何かを買い付けるといふ形でバランスを取らないと他国ばかりが損をする事になってしまう。その買い付ける物が食料であるのなら、他国でも十分生産可能であるし、国の生命線でもある食料を他国に依存させておくことで、相

手の国に信頼関係を築く事ができるのだ。

こういった形が既に出来上がっている以上、農業で利益を産もうとするのなら、それがすべてを台無ししても欲しくなるような利益でなければ意味が無い。それには少なくとも、国内での食糧事情をすべて解決できるくらいの生産量は欲しいところである。

「国内の状況がどうであろうと不可能である事には変わりあるまい！結局は農家不利の状況を作りだして置きながら、我々を不当に扱う組合に責任があるだろう！」

「それは農家側に何一つ選択肢が無い状況でこそ言える言葉でしょう。でも今、この現状は自らが不利になるようにあなた方自身が選んできた結果ですから、文句を言われる筋合いは無い。」

「我々に選択肢があったと？どこにそんなものあるというのだ。我々は常に組合に管理され抑圧されてきた！」

「組合の命令は必要最低限のものでしか無かったです。それは常にあなた方側に余力も時間もあつたという事。その時間を使い、国内用では無く、国外に輸出するような作物を生産できるような体制を作るべきだったんですよ。具体的には贅沢品なんかを生産できるようにになっていけば一番良かった。国内の食料を輸入で賄っている現状がある以上、それは可能であつたはず。」

農業での贅沢品とは、生活にかならず必要にはならない、砂糖や香辛料などの調味料類、果実などの甘味などがそうである。牧畜での肉類などもそうだが、こちらは保存が難しいのであまり輸送には向かない。

ちなみにそれらはすべて生産が難しいから贅沢品なのであるが、この国の農家達には十分に生産してみる価値があるものである。

「だけど、あなた方は挑戦をしてこなかった。それは間違いなくあなた方の怠慢だ。」

組合にあまり利益をもたしていない農家達が、今この場にいるように一端に生活できている以上、組合は事実上、農家達に支援しているのと同義なのである。ならば、農家として新たな挑戦ができる

力があつたはずなのだ。

何故、それを農家達がそれを選択しなかったのか。それはこの国の農家達特有のある思考に関係があると考える。

「結局はあなた方自身も農業が劣った仕事であるって考えているのが問題なんですよ。農業という仕事を押し付けられた時点で、不満を持っているその姿勢があなた方の立場をより一層、悪くしている。」

この国で組合と農家の対立とは最終的にそこに行き着く。農家と自ら名乗っている彼らも本質的には組合の一員なのだ。組合の価値観で縛られている彼らは、自らの立場を向上する。という考えから、農業の改善という方向に意識を向かせる事ができない。

今、この場所で行われている対立はまさしく、組合内部の対立でしか無いのである。

「我々自身が誇りを持っていないと言うのか。今まで組合に蔑まされてきた我々が！」

「なら、なんで組合に仕事斡旋の優遇を提案された時、あなた方はそれを認めようとしたんですか。あれは本当に農家としての誇りを持っていたのなら怒るべき提案だったのに。あなた方はあの時、鍬を捨てると言われたんですよ？農業よりもっとふさわしい仕事を紹介してやるからと。それをあっさりと受け入れようとしてしまった時点で誇りなんてものは無くなってしまっている。」

アイムから出てくる言葉に農家代表の表情は怒りから悔しさの表情へと変化していく。アイムの言葉が自分達の本質を突いていると肯定するように。

「別に農業が特段素晴らしい仕事であるなんて言いませんよ。他の仕事だって誇りを持ってできるものは沢山ある。そして別の仕事を優遇するというのは、その誇りを奪ったり与えたりする行為なんです。この行為に正当性を持たせるには、仕事に対する自尊心が必要不可欠なのにそれが無い。元農家として、あなた方の優遇というものに高評価を付けるなんて無理ですね。」

交渉役として、農家側を評価するという自分の仕事はこれで終わった。結局は農家達の要求を組合が完全に跳ね除けた形になってしまったが、アイムは初仕事としてはなかなか良かったかもな。と言った考えが頭の中に過ぎていった。言いたいことが言えたアイムにとっては程々に満足感を味わえる物ではあったのである。

## 一つ目の国で(3)

アイムは船に荷物を運びながら、ヒゼル国を振り返る。結局2日程度しか居なかつたので愛着も湧かないが、初仕事を終えた場所として、自分の思い出に残るかもしれない。

今、荷物を運んでいるのは仕事失敗して荷物運びの仕事で日銭を稼いでいるから。という訳では無く、これから次の国へと向かう船に乗る最中なのである。ちなみに仕事の成否はというと。

「組合からの評価は一応及第点。報酬は目的地へと向かう船への乗船権に携帯保存食料が1週間分ほど、金銭なんかは一切貰わずと。これって成功と言えるんですかね。」

「報酬に関しては、最初からこれくらいで済ますつもりだったさ。組合側にとっては用意し易く、俺達にとっては旅費が浮く。初仕事の報酬としては上々だろ?」

確かにそう言えるかもしれない。しかし、実際に気になるのは組合がどう思っ、この報酬を自分達に渡したかなのである。

雇い主として仕方なく渡すことになった。という状況はこちらとしても気分の良いものではないからだ。

「組合としては、最初から農家達に対する優遇策を提案するつもりだったから、その点に関しては失敗と言えるな。つまり組合の半分以上は良い顔をしていないという事だ。」

やはりそうなるか。交渉は組合側が農家達の要求をすべて跳ね除ける形で終わったのだ。当然、原因は評価役の自分が農家達の考えを批判したせいである。

「だが、組合だって一枚岩じゃない。農家優遇に反対だった奴等は、お前の行動を評価している事だろうさ。そのおかげで今、船に乗ることができるとは、いいからな。」

「そう言われると、少しほっとします。でも、やっぱりもうちょっと上手くできたんじゃないか。なんて思っ、てしまいますね。」

金銭面に関する報酬なんか貰う事が出来たんじゃないかも。

「未知の仕事な上に初仕事でもある。満点なんてのは絶対に不可能な状況だったんだ。一定の評価を貰えた。この事は誇っていい事だと俺は思うね。俺が気になるのは、お前が農家達に敵対する方針を選んだ事だ。前職からしてむしろ擁護すると思っっていたんだが。」

「うーん。とりあえず、最初から農家達に肩入れしようとは考えていませんでしたね、まあ評価しないと決めたのは、農家達が職業優遇策を持ち出されて、嬉しそうな表情をした時ですけど。」

あれは前職が農家だからこそ怒りが湧いた。それでも農業では苦労も収入も得ていたのである。その仕事を舐められたような気がして、とてもじゃないが肯定的に見る事ができなかった。

「なるほど、しかし最初から肩入れするつもりが無いというのはどういう事だ？中立に物事を考えていたにしては、組合を悪く言っていたじゃないか。」

それはそうである。農作業というものを重視しない組合には好印象持つ訳が無い。しかし、組合の歴史を聞くと商船業を重視する姿勢には理解も納得もできるのである。

姿勢の偏りについては、自分は元農家なので農業の事を良く知っているが、商船の事は良くしらないという事で、こちらも同様に偏っている。嫌な気分にはなるが、批判する気にはならない。

「この国の農家に最初から肩入れしないと決めたのは、この国を地霊の視点で見てからです。」

地霊とは自分の様なランドファーマーが見る事ができる大地の精霊のようなものだ。彼らの量によって土地が肥えているのか、作物に向いているのか、などの事が分かる。だいたいは大量に居れば、そこは良い土地という事になる。

「どうにもこの国には地霊が少ないんですよ。最初は海に近いせいで土地が悪いんじゃないかなと思っていたんですが、農業が発展していれば、土地改良も進むはずで、もう少し居てもおかしくない。それでも少ないという事は、そもそも農家が自分達の仕事を重要視

していないからではないかと。」

そういった考えで交渉に挑んでみると、案の定、彼らは農業の発展よりも、組合での評価を気にするような者達であったと言いつ訳である。

「気になるのは農家達の今後ですね。今回の事で彼らの立場って悪くなりますよね。なんだか僕自身が責任を感じてしまいそうです。ちょっと……。」

「まあ当然悪くなるな。これまで職業差別として扱われてきた事が、実はその原因が自分達の怠慢によるものである。なんて言われたらそうなる。農家達は今後、自らの姿勢を変えざる得なくなるだろう。そしてそれは当然、お前の責任でもある。」

そうだ。例えば自分達が雇われ者だとしても、あそこで農家達を評価したのは他ならぬ自分なのだ。自分の責任というものは感じるべきなのだろう。

「でも、今後組合と農家がどうなろうと、僕はその責任について何もできません。だって、僕らはこれからこの国を去る側なんですから。」

だからこそ、気になってしまふ。自分の出した結論がどのような結果をもたらすか、自分は見届ける事ができない。

「国を変えたり、支えたり、見守ったりするのは国に住む者達の責任だ。旅人の俺達が背負い込む事ができる物じゃあない。俺達が何かに責任を感じるのだとすれば、それは今後仕事を今回より上手く運ぶ事によつてのみ果たす事ができる。」

だが、それは無責任とも言えるものでは無いだろうか。問題を深刻化させるだけで、自分達はそこを去っている事になるのだから。

「もし、それでも心に何かが残ってしまうのなら、それを払えるくらいこれからの仕事に自信を持つ事だな。自分は状況を悪くするのは無く、良くする存在なんだと。」

「そんな考えを持つ事ってできるでしょうか、今回の仕事が終わったとき、僕は満足感を覚えました。けどそれでもこんな風に不安も

感じている。」

これからの仕事もそうであるのなら、自分自身に胸を張っていくことはできるだろうか。

「なあアイム、今回は俺達の初仕事だ。確かにそれは重要な事ではある。だが、これから俺達は何回も何十回もこつこつした仕事をして行くんだ。今回の仕事はその中の一つでしか無いんだよ。これから今回の責任を果たす機会が幾つもやって来るはずだ。だからこそ、俺達はその機会に対して胸を張って挑んで行こうじゃないか。」

そう言ってリユンは胸を張り、荷物を抱えながら船へと向かっていく。当然、そんな恰好をしていれば姿勢が悪くなるので、地面の小石につまずき、バランスを崩していた。

リユンのそんな姿を見て、アイムはつい笑い出してしまう。今まで心に引っ掛かりがあった事など嘘のように。

そつだ、今回の事もその程度の事かもしれない。いくら自分達がどうにかしようと、この国を動かしていくのはこの国に生きる者達の仕事だ。自分達が与える事ができる影響なんて、たかが知れた物なのだろう。

アイムはもう一度振り返り、町の風景を見る。自分自身も、この町の風景を忘れて行ってしまうかもしれない。だがここで、どのような仕事をしたのかは忘れないで置こうと思う。この町でした仕事と、これからの仕事に対して胸を張って挑んで行けるように。



## 二つ目は海の上（1）

船が海の上を進んでいく。海は潮風に煽られながらもなお穏やかで、空は透き通るような快晴で、まるでそれぞれの境界を無くそうとしているような風景である。

アイム達はヒゼルから船に乗り、大陸の西側を南へと向かっていった。大陸の北西端に位置するヒゼルからは、大陸の北側を東へ向かうルートと、今現在進んでいるようなルートの二つがある。何故、南へと向かうルートを選んだかと言えば、別に大した理由では無く、ヒゼルから東へ向かえば、前に居たシライ国へと逆戻りしてしまうから、といった程度の物であった。

ヒゼルを出て船に乗ってからはもう二日は過ぎており、後さらに二日ほどで目的地である次の国へと着く予定であった。

航海は非常に順調なようで、船員達の顔もどこか余裕を持った様子である。その一方で顔色を悪くして船の欄干にぐったりと体を預けている者もいる。

その顔色の悪い者こそがランドファーマーという種族のアイムである。彼は慣れない船旅にすっかり酔ってしまったのであった。

「なんというか、どうして船って揺れるんでしょうね。それが無かったらこの景色も好きになれそうなのに。」

アイムが隣に居る人物に話しかける。それはアイムと共に旅を続けるツリストという種族の青年、リユンであった。

「揺れなきや進めないのだから仕様が無いだろう。それにしても、そこまで船に弱いとは思っても見なかったな。いくら順調な航海でも、目的地に着くのはまだ先だぞ。」

リユンの方は船旅も慣れたものの様で、船員達から次の目的地の情報を聞き出すなど、船の上でも抜かりの無い様子であった。

「当たり前の話なんです、海の上って地霊が居ないんですよね。今まで見慣れていた物が無くなるってなんか不自然で、この船の揺

れと合わさってより一層気持ち悪く……。」

ランドファーマーには地霊と言う、大地の精霊を見る能力が備わっている。そして当然、海の上では大地の精霊が見える筈が無い。

「まあ、部屋で横になっていれば揺れもあまり気にしないで済むんで大丈夫なんですけどね。でも、一日中部屋に籠るのもちよつと嫌だったので出てきたんですが。」

組合が用意してくれた船の個室は、それほど悪く無い物であったが、陸地の宿などに比べるとやはり狭く、つい外に出たくなる物でもあったのだ。

「それで再び気持ち悪くなってしまったと。気持ちはわかるが、部屋でじつとしていた方が良いんじゃないか？このままじゃあ海の魚に二度目の餌をやる事になるぞ。」

それは朝食を自分の口から魚達に提供する行為であり、気分的に絶対したくない行為でもある。ちなみに、一度目は初めての航海に気分が高揚し、自分が船に弱い事にも気が付かず、船の上をはしゃぎ回っていた時にする事になった。

「いえ、まあ、これからも旅を続けていく訳ですから、少しは船旅にも慣れておかないと、いや、でも、そうですね、それは部屋でもう少し休んでからの話ですね、うん」

意地を張ろうとしたが失敗する。どうにも自分は船での酔いと相性が悪い。我慢が出来ない様な気持ち悪さが襲ってくるのだ。このままでは確かに魚の餌やりをしてしまう可能性がある。

「部屋に戻ったら、横になって目を瞑ってるよ。それで大分マシになるはずだ。船での酔いつてのは、視覚が揺れているせいでもあるんだからな。」

そんなリユンの助言を背後に聞きながら、アイムはよろよろと自分達の部屋に戻り始める。

せっかくの船旅なのだから少しでも海の風景を楽しみたいと思って部屋から出た訳だが、今のところ、アイムにとっての関心はその助言を実行するまでに魚の餌をやる事になるかもしれないという点の

みに集中していた。

なんとか部屋のある場所まで着いたアームはふと目線を上げる。

部屋への入口は二つある。当然、二つ部屋があるという事なのだが、自分とリユンとで一っずつなんて贅沢な状況では無く、二人で一部屋を使っている。ならば、もう一つの部屋には誰がいるのだろうか。この船は大きさで言えば中型サイズの船であり、旅客船と輸送船を兼ねている船だと乗る前に説明された。甲板の下には輸送物を詰めた箱が隙間なく積まれていたし、他の場所は船員達の仕事場であったり、居住区であったりする。つまり、この船の大きさを旅客と輸送を併用しようとすれば空いた場所というのは極力少なくしようとするものなのだ。

という事は、このもう一つの部屋には自分達とは違う誰かが居るはずという事になる。船員だろうか。いや、そういえば船旅の初日、船員らしくない、二人の女性が船の上に居たような気がする。すぐに周りを気にする程、余裕が無くなったのでよく覚えていないが、そうだったような。

なら、この部屋にはその女性達の部屋という事になる。他に客室が無いから自分達と一緒に二人で一部屋とは、もしかしたら、同じ様な境遇かもしれない。

「あの、大丈夫ですか？お顔がよろしく無い様ですが。」

突然、目の前から話しかけられる。おかしい、目は前を向いていて当然なんだから、気付かれずに話しかけてくるなんて不可能なはずなのに。

「下です。もっと目線を下に。」

言われた通りに下を向くと、そこには一人の少女が居た。少女は少女らしく非常に小さい身長であったので、目線に入らなかった様だ。どれくらい小さいかと言うと、一般の平均身長よりも顔半分ほど小さい自分の視線にすら入らなかったくらいなのでから、もうこれは小さいどころか、大したものである。

「ああよかった、気が付いてくれましたか。あなたが大変気分を悪くしているように見えたので、つい話を掛けさせて頂いたのですが、なかなか見つけて下さらないので困ってしまうところでした。」

「途中からこっちの心配から自分の心配になっっているようだが、とりあえずこちらを心配してくれたのは、親切心からだろう。」

「いや、少し船に酔ったみたいで。船に乗ってからずっとだから、まあこの状態にも慣れた頃なんで大丈夫。」

悪意ではなさそうなので、とりあえず自分の状況を話す事にする。しかし、船酔いに成る事に慣れたとは我ながらどういふ事だろう。船酔いに慣れたと言ったらまるで気持ち悪く無くたつたと言っているようで嘘になってしまふから、仕方ない事なのだが。

「まあ、それはいけません。乗り物酔いと言っても、悪くすると体を壊してしまふ事があるんですよ？そうだ、何かをお食べになりませんか？空腹になると、より酔い易くなると聞いた事があります。」

「いや、それなら朝食食べてから、あまり時間も経ってないからいらぬ。というか、今何か食べたなら、それを無駄にしかねないし。」

「ならなら、外に出て風に当たるとよろしいですわ。きつと気分も良くなるはずですよ。」

しまった。どうやら彼女は善意を押し売りするタイプのようだ。普段ならそれも善意の内なのだから、話を聞く気にもなるが、いかせん今自分はいろいろと危機的状況である。

「あー、その、多分部屋で横になっていれば治まると思うので部屋に帰してくれればそれでいいかと。」

「部屋に籠っているのは、体の良い事ではありませんわ。是非、外に出る事をお勧めします。それに船が港に着くまでまだまだ時間が掛かってしまいます。ずっと部屋という訳にも行きませんかでしょう？」

いや、外に出ていたから気分が悪くなってしまったのであるが。どうも小さな彼女は自分の行動の結果で相手が感謝してくれる事を

望んでいるようで、なかなか前を退いてくれない。

「とりあえず、外に行くより部屋に帰る方が距離が近いから、そっちを選ぶ事にするよ。外に出るのは、気分が良くなってからかな？」  
会話だけではいつまでたってもこの場を動けそうにないし、酔いも治まりそうにないので、今度は話ながら、少女の横を足早に通り過ぎ、自分の部屋に向かう事にする。

「あ、お待ちになって下さい。まだ、酔い治す方法を幾つか知っているのですが・・・。」

後ろで少女がこちらの背中に話掛けてくるが、無視するような形でアイムは部屋に戻っていった。

別に不親切な訳では無い。これ以上話続けていると、彼女の目の前で胃の中にあるものを披露してしまいそうだったのだ。

部屋に備え付けられた寝具から背を起こす。部屋の前で少女と話してから結構な時間が経っていた。

どうやら少し眠っていたようだ。気分も大分良くなっている。日が落ちてくる時間帯らしく、部屋が暗い。照明が無い事も無いのだが、部屋に戻った時はまだ明るかったので点けずに置いている。この様子だと、昼食を食べ損ねたようだ。それが原因か、少し小腹が空いている。しかし

夕飯まではまだ時間がありそうだった。

どうにも、船に乗ってからずっとこの様な感じで嫌になってくる。旅に出た理由は自分の中の冒険心が大きいのに、いざ旅に出れば部屋に籠りきりとは、意味が無いような気がする。もう少し、この航海を楽しみたいと思うのだが、部屋に籠るか食事をするかのどちらかしか行動していない。このままでは駄目だと思い、外に出ればまた気分が悪くなり、部屋に戻るといふ事を繰り返していた。

「でもやっぱり外には出たくなるんだよね。今は日も落ちて視界が狭まってくる頃だから、そんなに気持ち悪くならないかもしれないし。」

近くに地霊が居ないのに、独り言を出してしまつ。どうにもこれは自分の癖になつていようだ。

「少しだけ、外に出て見よう。酔つたらまた部屋に戻つて横になつていれば良いんだしね。」

寝具から完全に背を起こし、部屋を出る。目指すは甲板での風景と言つたところだ。できれば、酔いも来ないで欲しいものである。旅の風景を目的に自分は旅を続けているのだから。この自分の欲だけは抑えるつもりは無いのだ。

甲板に出た瞬間、自分の行為は正解であつたと思つようになつた。今は丁度、太陽が海へと沈んでいく瞬間だつたらしく、その赤く、そして暗く寂しげな光景は自分の心にならず刻み込まれる物であつたのだ。地上で見るそれとは違う、海に照り返した太陽の光も同時、消えていく光景は、まるで海が太陽を飲み込んでいくような感覚で震えが起きそうになつた。

船酔いの事など忘れてしまひそうになる。むしろとても気分が良い。そうなのだ、こういつた景色を見たかつたのだ。これから旅を続けていけば、これに匹敵する景色を何度も見れるかもしれない。それだけで、旅を続けて行こうという気持ちも高まると言つ物だ。

日が完全に沈み、夜がやってくる。明かりが完全に消えたわけでは無い。今は晴天である。天上には星と月が太陽ほどでは無いにしてる船に明かりを与えてくれている。

ふと、甲板を見渡すと小さな少女が自分と同じ様に景色を見ていた。部屋の前で会つた少女である。

少女はこちらの存在に気が付くと、突然、嬉しそうな顔をしながら、小走りで駆け寄つて来た。

そういえば、少女とはこちらが無理矢理話を終わらせてからそれきりである。少女との会話は正直、疲れてしまひそうになる物であつたが、それでも、もう一度話を続けてみたくなつた。船酔いで切羽詰つた状態ならともかく、ある程度余裕がある今は、善意の押し

売りのような会話であろうと、悪意でなければ、少女と話すのは悪く無いと思ったのだ。

「やっと船から良い景色を見れたよ。船酔いも、こういう景色を見るきつかけになるなら、悪いものじゃないかもね。」

アイムは駆け寄る少女の手を振りながら、話しかける。少女は笑みを浮かべ、こちらの前まで来た。

「それはよろしい事ですね。でも船酔い自体は良く無いものですよ。お体は大丈夫なのですか？」

少女はアイムの前で止まると、笑みを浮かべたまま返事をする。

「部屋で横になっていたら大分良くなったよ。でも、船酔いが無ければ、もっと船からの景色を楽しめる訳だから、確かに良く無いものかな？君の言う通り、船の外で風に当たっていた方が良かったかもしれない。」

「まあ、あの時は大変失礼しました。あなたは船酔いで苦しんでいる状況でしたのに、その気持ちも察せず自分の意見ばかりを話してしまつて。」

反省ができる分、まだ大丈夫だろう。それに苦しむという程、大変だった訳でも、いや、確かにあの時は大変だった。

「でも、それは終わった事だし別にいいよ。それより、君はずっと元氣そうだけど、船酔いとかはしないの？」

揺れる船上で小走りであろうと、駆け寄るといふのは、どうにも船との相性が悪いらしい、自分には考えられない事なのである。

「これでも船に乗るのは始めてではありませんの。それに、これくらい揺れで酔っていても、天候が悪くなった時、もっと酷い事になりますわ。」

あまり想像したくない仮定である。まあ、夜になつても天気は良いままだし、港に着くまではなんとかなると思いたい。

「うーん、天候が悪くなつたらなつたで、なんとかなると思つし

ね。そんな状態だと部屋に籠りつきりなるだろうから、酔いも感じ難いだろうし。」

「あら、それは間違いですわ。悪天候の時は船のどの場所でも、船酔いの可能性があるのです。注意はどのような時にも必要ですよ。」

なるほど、そういう物なのだろうか。今回が初の船旅である自分にとっては、興味深い話である。

「その様子だとそっちは……。えーと、名前はなんだっけ？」

会話の内容が自分好みの話になってきたので、少しでも話を弾ませたいと思い、アイムは少女の名前を聞く事にした。

「セイリスと申します。良ければそちらの名前もお教え頂けませんか？」

「うん、僕の名前はアイム。それで、話の続きだけど、セイリスは話を聞いた限りじゃあ随分と船旅に慣れている様子だけど、どうなの？」

少なくとも、今までの会話を聞く限りは、自分よりは旅というものを知っている風であった。

「それほど慣れていているという訳ではありませんが、このように船に乗る事は多々機会がありましたわ。それが、何かお気になりましたのですか？」

「まあ気になるというか、これでも旅を始めたのはつい最近でさ、自分より経験が豊富そうだから、色々話を聞きたくなってね。」

特に船旅に関しては、これから知識を集めておきたい所である。

「経験が豊富だなんて言われると、少し恥ずかしくなってしまう。私、旅に関しては連れにほとんど頼りきりでしたから。」

そういえば、この少女も二人連れだった気がする。ということは、自分の似たような境遇なのだろうか。

「旅の目的ってというのはあるのかな？こっちは旅商人みたいな仕事を生業にしているんだけど。」

本当は農業知識を使つての商売と言つた所であるが嘘は言ってい



ない。ただ、売り歩く物が少々特殊なだけである。

「あら、それは旅人の中では一般的な仕事ですよ。それ以外になると冒険家だったり、傭兵だったり、そんなにも多くない職業ですから。ちなみに私は様々な国で私達の教えを広める事を目的にしています。」

教えを広めると言われても、あまり想像ができない仕事である。

「要は先生みたいな仕事をしているって事？」

「まあ近いと言えば近いですわ。その目的のおかげか、様々な土地の伝説や昔話などには詳しくなりましたの。そのような話でよろしければ。」

少々、聞きたかった話とは違うが、それらも十分面白そうな話である。

「あー、それじゃあ海に関係する伝説なんかは無いかな、せっかく船で旅をしているんだし、雰囲気がでそうだ。」

船酔いでじっくり、船旅を楽しめない以上、話の中だけでも楽しみたいのだ。

「海についてですか。なら、アイムさんは海に棲むドラゴンについてはご存知ですか？」

ドラゴンという言葉は知っている。大陸中、あちこちに棲むと言われる強壮な種族であると。

海に棲んでいるドラゴンという言葉にも聞き覚えがあった。確かに船が旅立つ前のヒゼル国で、商船組合が自分達の紋章として使っていた絵のモチーフであったはずだ。

「確か鱗が無くて細長い魚だったっけ？それ以外は良く知らないんだけど。」

それを教えてくれたリユンなら、もつと何かを知っているかもしれないが、どうにも姿が見当たらない。

「そうですね。それが海のドラゴンの姿です。ただ、絵ではわかりませんが、もう一つ大きな特徴があります。」

「特徴？それが重要な物なんだったら、絵でも描かれてると思うん

「だけど。」

しかし、商船組合で見たドラゴンの絵にはそのような物はなかった気がする。

「どうしたって描けないのですわ。何故なら海のドラゴンの特徴とは、その大きさにあるのですから。」

「すごく大きかったり、小さかったりするとか？」

大きさが特徴になるというなら、そういうことだろう。

「ええ、とてもとても大きな体をしているのです。はっきり言ってその他の姿なんて、その大きさを見てしまえば些細な問題に思えてしまう程の大きさなのです。」

そう言ってセイリスは自分の小さな体でドラゴンの大きさを表現しようとする。その姿はどこか微笑ましい物であったが、アイルムの関心はドラゴンについての事が大半を占めるようになっていた。

「そんなに大きいんだ。例えば、この船と比べるとどれくらいの差があるの？」

彼女の表現を見る限りでは、今乗っている船よりは大きいようだが、まだいまいち想像できない。

「個体差があるらしいので、どれ程という事を一概に決めてしまう事はできませんが、少なくとも、この船が3つ縦に並んだ大きさよりは、ドラゴンは大きいと思いますわ。」

それは確かに凄い、この船だけでも何十人と船員が乗れる程なのに、その三倍はあると言われたら、確かに想像以上の生物のようだ。「うーん。やっぱり世界には驚きの生物が居るものなんだなあ。ドラゴンと言えば鱗と翼があって、体がトカゲで火を吐くようなのを想像してたから、本当に驚きだよ。」

しかし、どうやら海のドラゴンはそんな姿とは大きく違っているらしい。

「アイルムの言っているそれは、森に棲むドラゴンですわね。ドラゴンは森、火山、空、海に棲むものでそれぞれ違う姿をしている

「んですよ。」

そんなに沢山のドラゴンが居る事自体を知らぬアムにとって見れば、どれもこれも新発見の事実である。

「でもそんな風に姿が違うんだったら、ドラゴンなんて一括りにするのは、なんだか可笑しい感じがするよね。」

「そうですね。でも昔から、ドラゴンはドラゴンとして見られて来た訳ですから、何か理由があるのかもしれないわ。海に棲むドラゴンも魚と似た姿をしています。魚とは明らかに違う生物であると聞いたことがありますもの。」

その点に関しては、セイリスも知らない様子である。まあ確かに、細かい違いは専門家でなければわからないものである。ましてや、鳶と鷹の区別もできないアムにとっては未知の領域でしかない。

「じゃあさ、もしかしたらこの船旅で海のドラゴンを見る事ってできるのかな。そんなに大きければ、見つけやすいとも思うんだけど。」

「どうせ、この船旅で海の風景をじっくり見る事ができないのであれば、せめて、ドラゴンの姿だけでも見てみたいというアムの考えである。」

「海のドラゴンを、ですか。少々難しい事かもしれないわ。いくらドラゴンが巨大だと言っても、海はさらに大きく、そこで出会う可能性はかなり少ないかと。それに明後日には船は港に着くのですから、出合いの機会そのものがそれほど多くないのです。」

「言われてみればそうかもしれない。これから旅を続ける以上、船旅の機会もあるのだから、旅の中でドラゴンに出会える可能性は零では無いのであるが、それでも今回、出会えないというのは残念な事である。」

「ですが、海のドラゴン自体、人や船を恐れない場合が多いらしいので、会える時は会える。というのが海で仕事をする方々の考えなのです。ですから、アムさんも運さえ良ければ、出会えるかもしれないわね。」

なるほど、そういう考えもあるか。巨大なドラゴンなので、大陸に近くなれば近くなるほど海の領域が狭くなり、出える可能性が少なくなる。ならば明日一日が勝負という事だ。

何が勝負かと言われたら、アトム自身困ってしまうものだが、明日の運が良くなる事を祈りたくなってしまったのである。

「そういえば、ちょっと気になったんだけど、そんな大きなドラゴンが近くに現れたら、この船が危なくならないのかな？まあ、会った事がある人多そうだし大丈夫だと思うけど。」

そう言った事は海に生きる者達にとっては慣れた事なのかもしれない。

「確かに、海のドラゴンの性格は温厚です。そもそも海には棲まい我々のような生物に敵意を抱くという事はありません。」

うん、なかなか好感が持てそうな生き物である。

「しかし、その巨体は私たちが生きる世界とは違う世界を生きているという事でもあります。」

違う世界とは変わった表現である。現実に出会える以上、同じ世界に棲む生物である事には変わらないのだから。

「例えば、地面の歩く蟻に対して私たちは敵意を持ちませんし、子供でもなければいちいち、踏み潰してやろうなんて思わないでしょう？でも、いつのまにか、気づかぬ内に蟻に害を与えている事もあります。それは蟻と私たちがまったく違う世界で生きていて、私たちが強い力を持っている結果、起こってしまう悲劇なのです。」

セイリスは少し遠い目をしながら話し続ける。その姿はこちらが不安に思ってしまう様な雰囲気を持っていた。

「なんだか、ドラゴンも敵意なくこっちに害を与えてしまう。なんて言ってるように思えるんだけど。」

アトムの言葉を聞くと、セイリスはニコリと笑顔を浮かべながら答える。

「船乗りの方々が言うには、海のドラゴンに出会った時のための言葉があるそうです。」

「へえ、それは少し聞いてみたい言葉だね。」

セイリスの表情は、さらにこちらへ不安を感じさせるものである。「ただ祈れ。だそうです。ちなみに祈る対象は神様でも両親でも、まだ見ぬ恋人でも良いそうですわ。」

その言葉はアイムに明日の幸運を、さらに願いたくなるものであった。ただ当然、ドラゴンに会うためだけの運では無かったが。

## 二つ目は海の上(2)

船旅も3日目を迎える朝、アイムは部屋に備え付けられた寝具の上で目を覚ます。船の外より、ここで横になっている時間が多いアイムにとっては、早くも飽きてきた光景が回りに広がる。

狭い船室に申し訳程度につけられた調度品と寝具。寝具は布のハンモックが上下2段で壁に掛けられており、部屋をこれ以上狭くする訳にはいかないという心遣いが感じられるものであった。

こういつた部屋が気に入らないのか、相棒のリユンは部屋で寝ようとせず、甲板でごろ寝している事がほとんどであった。船員達の何人かも同じように寝ていたので、そんなに違和感を覚えなかったが、それでも部屋があるのに外で寝るといのは、なんとも贅沢な話である。

それらの事柄も男同士の旅なのだから、耐えられないというものでも無い。むしろいちいち気を使う物が無くて気楽な部分もあり、アイムはこの状況を楽しむことにしていた。

そういえば、自分達の部屋以外のもう一つの客室も似たような状態なのだろうか。向こうは女性である以上、自分達より、このような部屋や船旅には嫌悪感を覚えるような気がする。

「ま、旅経験がほとんど無い自分が豊富な方の心配をするなんて偉そうな事なだけだね。」

昨日、甲板でセイリスと話した結果、彼女が自分よりも旅慣れている事を知ることができた。そんな彼女と話を終えてから、すぐに夕飯の時間になり、それぞれ部屋に帰る事になった。夕飯と言っても、干し肉や乾パンなど、手軽かつ口の中がパサパサになりそうな食事だったので、机に皆で並んで食べるなんて大層な物では無く、部屋に直接食料が届くという形式だったからだ。

彼女の事が気になったのは、教えてくれた話が面白かったからだろう。ドラゴンについての話は確かに、自分の心を揺さぶる物があっ

ただ。

「でも、会いたって気持ちは少し萎えちゃったんだよなあ。」  
ドラゴンは危険な存在である。という旨の注意もあの時、聞く事になったのでアイムの心情は少し微妙な気持ちであった。

しかし、そのドラゴンに会う機会というのは今日1日が精一杯の事だろう。そうそう会える物では無いのだから、別に気にする事では無いかもしれない。

どちらかというところ、今日も部屋の中でずっと過ごし兼ねない自分の状況にこそ不安を感じる。寝起きなので、船酔いで気分が悪いという事も無い。再び甲板に出てみよう。気分が悪くなれば、また部屋で横になればいいのである。

そんな事を考えているアイム自身、少し船旅という物に慣れてきているのかもしれない。

どうにも船というのは、船室と甲板を行き交うのみで一日が終わってしまうものらしい。これで船旅も三日目になるが、同様の行動のみで一日が終わってしまったている。明日には港に着く自分達はそれでもいいが、これからまだまだ、この船に乗る事になる船員達は飽きや退屈に襲われたりはしないのだろうか。

一度聞いてみたくはあるが、それなりに慌ただしく動く船員に上手く話しかける自信が無いアイムは、他に話し相手がいらないものと甲板を探す。

と言つても、現在この船でアイムが気軽に話しかけられる人物と言えば、相棒のリユンと先日知り合ったセイリスだけである。

それでも行き場が限られる船の上では、探せばすぐに見つかる物でもあるので、アイムは少々真剣に探す。話し相手がいらない船旅なんて、一日と経たずに飽きが来る物だからだ。

「まあ仕事があれば、そんな事も考えずに済むかもしれないけど。」  
「そういう事を言っていると、本当に厄介な仕事をする嵌めになるんだぞ。」

突然、背後から話しかけられるが、それほど驚きはしなかった。何故ならそれは、よく聞きなれた声だったからだ。

「あれ、リユンさん。もう起きてたんですか？」

船旅が始まってからは船上で眠る事に行っているらしい彼は、朝早くにはあまり起きず、そのまま船でゴロゴロしている事が多かった。船員達にとつては大変邪魔な存在だろうに。

「どうにも船員達がいつもより忙しそうだな、寝ていたら邪魔だと言われた。」

つまり、船員達の我慢も限界に来ていた様である。

「それでもいつもは何も言わずに避けてくれるんだぞ？あいつらだつて何人かは船上で寝てるんだからお相子じゃないか。」

その船上で寝ている船員だつて、朝早くに起きて他の邪魔にならない様になっているのであつて、昼頃まで寝ている邪魔者とは大きく違うはずだ。

「まあ、それはともかく、忙しいってなんででしょうね。天気もそんなに悪く無いというか、今日も変わらず晴天ですけど。」

空を見上げると、そこには雲一つ無い青空で太陽が暑苦しく海を照らしていた。

「どうにも波がおかしらしい。風も吹いてない方向から波が揺れてくるそうだ。」

どうにも忙しい理由も聞いているらしい。忙しくする船員達に空気を読まず話しかける様子が目に浮かぶようだ。

「風も無いのに波が？海流って言う奴じゃないですか？」

確か大陸が東には、北から南に掛けて海流が流れていると船旅に出た直後、船員が説明してくれたのを覚えている。そのおかげで、南へ向かう船旅は早く目的地に着く事ができるとも。

「その海流だつて大半は風が起こしているものだろう。だが、今回はどうにも違うみたいだな。船員の一人が嫌な予感がするとか言っていたが……。」

随分と不安を感じさせる台詞を吐く船員である。客に向かって、



そのような事を良く言えるものだ。

「なんだか不安になつて来ましたね。昨日もちよつと嫌な話を聞いたばかりなのに。」

「昨日も？」

リユンが聞き返してくる。そう言えば、昨日セイリスという少女に会つた事を話していなかった。

「いや、もう一組居る乗客の一人と会う機会がありまして、セイリスつて言う名前らしいんですけど、こつ、とてもとても小さな女の子で。」

アイムはジェスチャーでセイリスの姿を表現しようとする。ちなみにそれで表現される姿は猫と同じくらいの大きさである。

「ああ、あのデカいのと小さいののデコボコペアか。小さい方はまだわかるが、デカい方も女つて言うんだから驚きだな。」

随分とこちらも酷い表現だと思う。もう一人が女性だったのは覚えてはいるが、背に関しては覚えていない。

「船に乗つてからは船酔いで他人にあんまり関心が行かなかったせいで、あんまり覚えてなかつたんですよ。だから、会つた時も新鮮でちよつと話をしてみようかな。という気持ちになりました。」

ちなみに一度目に会つた時は他人に関心を向けていなかった時の事なので、これは二度目に会つた時の事である。

「へえ、まあ小さい方は気の良さそうな感じだったから、話にも乗つて来ただろ。」

リユンはそう相づちを打ちながら、海の方を見る。とりあえず、話を聞いていない風では無かつたので話を続ける事にする。

「ええ、そうなんですよ。それで向こうの方が旅慣れている様だから海について、聞いてみたんです。」

「それで？どんな事を話した。」

リユンは視線をそのままに話を続けてくる。少し愛想が悪い様な気もするが、彼の態度が悪いのはいつもの事なので、気にしない事にする。

「海の話をお聞かせして欲しいと言ったら、海のドラゴンについての話を聞かせてくれました。」

「あー、そりゃあ嫌な話だな。」

詳しい内容を説明する前なのに、そのような感想を言われるのは驚きだ。

「そんなにドラゴンの話って悪い物なんですか？」

「海のドラゴンに関しちゃうあ、性格は凶暴じゃあ無いから、他のドラゴンよりはまだマシな方だな。」

そう言えば海のドラゴンが居るのであれば、他にもドラゴンが居るはずで、その事についてセイリスも話していた。詳しくは聞かなかったが。

「他のドラゴンはお出会った時点で命の危険を考えなきゃいけないが、海のドラゴンはちゃんと気を付けてさえいけば、なんとかなる事が殆どなんだよ。」

「じゃあ、どうして海のドラゴンの話が嫌な話になるんですか？」

聞いた限りでは、それほど悪い様には聞こえない。

「気を付けている限りという話だからな。迂闊に近づかなかつたり、巣が有りそう場所を前もって知っておくとか、こつちに関心を持たせない、なんていう努力が必要なんだよ。ただでさえ船旅は気を使ふ事が多いのに、さらにドラゴンの心配までしなきゃいけないとなれば、船乗りにとっては嫌な話にもなるだろう？」

まあ、確かにそうかもしれないが。

「それに、気を付けていてもどうしようも無い状況というのも、稀にだがある訳だしな。天災みたいなもんだ。平穩な航海の途中で嵐の話をする奴はいない。」

リユンは海に視線を向けたまま、遠くを見るような表情を見せる。もしかしたらリユン自身、そういつた災難にあつた事があり、それを思い出しているのかもしれない。

「なるほど、でもそうになると、ドラゴンに会いたいなんて願つたのは不謹慎だったかもしれないね。運が良ければ、ドラゴンに会え

るかもなんて思ってたんですが、今度は自分が不運な事を祈る事になりそうです。」

ドラゴンに会いたいという気持ちはこの時点で完全に萎んでいた。ここまで、危険である事を教えられればそうなるというものだ。

「いや、多分お前は運が良いほうだと思っぞ。それもとびっきりの悪運だ。」

突然、リユンがそんな事を言い出す。

「はい？何を言ってるんです？」

自分のそんな言葉にリユンは答えるかのように、片腕上げ、指を伸ばしながら、それを海に向けて指す。

「あれを見る。」

リユンが指を向けている方向を見ると、海の上に小島が浮かんでいた。

おかしい、あんな所に島なんて無かったはずだ。よく見ると、その島には木も土も無く、滑らかで黒々とした物で覆われている。

「なんですか、あれ。突然、海に現れたような。」

それに不気味さを覚えたアイムは、それを払うためにリユンに答えを聞く。しかし、リユンから帰ってきた言葉はアイムの不安をより一層増大させるものであった。

「あれが海に棲むドラゴンだ。」

船員達が慌ただしく船内を走り回っている。何故あそこまでドラゴンの接近を許したのか。ドラゴンは今どのような様子なのか。そういった言葉も飛び交っているが、皆、その手足を止める事は無い。それほど、ドラゴンは船乗りにとって恐ろしい存在なのかもしれない。

「でもいったい、何が危険なのか今も実感が沸かないんですけど。」

ドラゴンであろう物体は現れた時と同じようにただ、そこに浮かんでいるだけであり、船員達の必至の形相とは裏腹に、何の変化も見受けられなかった。

「とりあえず、今はすぐ何かが起こるといふ訳でも無さそうだな。今、この船がやっているのは、アレから少しでも船を遠ざけようと、風と波に合わせて、帆や舵を動かしてる状況だからな、船員達はそりゃあ忙しいだろうが。」

ドラゴンの恐ろしさを理解しているであろうリユンがどこか暇そうな様子で、船とドラゴンを観察しているのもいまいち、危機感を覚えない理由の一つである。

「これって、もしかしてですけど、そんなに危機的状況じゃあ無かつたりしません？」

「うーん、じゃあアイム、お前、ドラゴンを見て何かに気付く事は無いか？」

そう言われてドラゴンを見る。海の上のそれは、どう見ても、海に浮かぶ不思議な小島であり、それが生物であるとはとても思えない大きさである。様子と言っても、それは現れた時とほとんど変わり無い。あえて、違いを指摘しようとするれば、最初に見た時より、どこかドラゴンが大きくなった様に見える気がすると言ったところである。

「あれ、大きく見える？なんでだ？」

まさかアレが徐々に膨らんでいるという事でも無いだろうに。

「そりゃあ、ちよつとずつ近づいて来ているんだから、大きくなっている様にも見えるだろう。」

なるほど、それなら納得がいく。どうにも、ドラゴンが大き過ぎるせいで、遠近感がおかしくなり、気づく事ができなかった。

「あれ、ちよつとまって下さいよ！近づいて来ているって事は船にぶつかるかも知れないって事じゃ無いですか！」

「ぶつかるかもしれない。というより、ドラゴンがぶつかるうとしているって言った方が正確だろうな。」

リユンの言葉は相変わらず暇そうな雰囲気だが、その内容はかなり過激である。

「なんでドラゴンがぶつかってくるんですか。こっちは何もしてま

せし、恨みを買った覚えも無いですよ。」

「むこうだって、恨みも無いし、危害を加えるつもりなんて無いだろうさ。アレはただ単に、この船にじゃれ付こうとしているだけだ。」

「じゃれ付く。そのあまりにも場違いな台詞に一瞬、それがどういう意味だったかを思い出せなくなる。」

「じゃれ付くって、なんでドラゴンが船にじゃれ付いてくるんですか。犬や猫じゃあるまいし。」

「犬や猫じゃなくても、そういう事をする動物はいるだろう。ドラゴンだって同じだ。それにアレはまだ子供だろうから、船を自分の仲間か何かだと思ってるんじゃないのか？」

子供？あの巨大な生物を子供と呼ぶのか。

「あれが、子供ってどういう事ですか。」

「子供は子供だ。あの程度の大きさなら、海のドラゴンの中じゃあ小さな方だからな。船と仲間を区別する知恵もまだ無いんだろうさ。」

「なら、アレが大人になったらどれほどの大きさになると言うのだろうか。しかし、それより心配なのは、ドラゴンが船にぶつかろうとしているという事だ。」

「もしですよ、アレが船にじゃれ付いてぶつかってきたら、船はどうなると思います？」

「ドラゴンの体は頑丈だからなあ。この船よりは柔いという事も無いだろう。でも、向こうは仲間にぶつかるともりでいるから、手加減もそれなりだろうし、下手をすれば船が全壊するな。」

「どうしてその様な事を淡々と話せるのか疑問に思うが、今はそんな事している状況では無さそうだな。」

「そんな事になったら、ここで僕らの命も終わっちゃうじゃないですか。ドラゴン対策に何かできる事って無いんですか？」

「無いな。」

リユンは本当に何でも無さそうな様子で、そう答える。

「無いって、何も？」

「そうだ、無い物は無いんだ。海の上じゃあアレの方が俺たちなんかより、よっぽど強力な存在なんだ。それに対して有効な策といったら逃げる事だろうが、それは船員達がやっているだろうし、俺たちが手伝っても邪魔になるだろうからなあ。」

「追い払うとかは？」

「下手に攻撃して、敵意でも持たれてみる。今の勢いの比じゃないくらいの強烈な速度でぶつかってくるぞ。今は仲間だと思われてるからゆっくり、優しくぶつかろうとしているんだからな。」

その優しい触れ合いで船が分解してしまつたら、泣くに泣けない状況だろうに。

「そんな事言つても、自分の命が係ってるんだから、こんなところでジツとしてなんていれませんよ。ちよつと船がどんな様子になつてるか見てきます。」

そう言つて、アイムは船の先頭あたりへと走りだした。おそらくは、まず船がどのような航路を取ろうとしているのか、見てくるつもりなのだろうが。

「それが理想的な航路を取つてたととしても、ドラゴンがその気なら逃げようも無いんだけどなあ。」

結局、海でドラゴンと出会えば祈る事しかできない。これは船員だけで無く、旅人の間でも共通の認識なのだから。

走るアイムはとりあえず、船の先へ。先へ着いて、船がドラゴンがいる方向と正反対を向こうとしているのを確認すると、こんどは船の後ろへ。ここでは帆を動かす船員達が動きまわっており、自分がいれば邪魔になるであろう事は理解できた。なので、邪魔にならない様に再び船の先頭へと走る。

このような無駄な行動を繰り返している内に、アイム自身が何をしても無駄である事に気が付き始めた頃である。

突然、目の前に巨大な壁が現れ、それにアイムはぶつかってしまった

う。

「おっと。」

壁にぶつかり倒れそうになるところで、突然、壁から声がしたと思つと、その壁から二本の腕が伸びてきた。

その腕にアイムは支えられて倒れずに済んだようだ。よく見ると、壁だと思つたそれは、巨大な女性である。アイムはこれまで生きてきて、女性と関わりを持つてきた事は少ないが、それでも、この女性が他のどの女性よりも大きい体を持つている事がわかるほどのものであった。

「おや、ごめんなさいね。ちょっと、人を探していて前をよく見てなかったから。」

実際はこちらも前方不注意だったのだが、先に謝られてしまう。

この巨漢の女性は、服の上からわかるほどの筋肉質な体をしており、その腰にはその体に見合った剣を差していた。それでも、こちらは恐怖を感じなかった。なぜなら、その女性を見る限り、壮年も過ぎた頃であるう年齢である事がわかったからだ。

その今にも力が溢れてきそうな見た目を、年齢による大らかさが上手く隠していると言つたところだろうか。

「ええつと、すみませんこちらこそ。こういう状況だから、ちょっと焦つてて。」

そして、自分が焦つたところで、どうしようも無い状況である事がわかり始めて、茫然としていたところでもあった。

「まあ、ね。お互い仕方が無い事さ。ところで、あんた、もしかしてランドファーマーのアイムって子かい？セイリスが言っていた外見とも合っている。」

突然、セイリスの名前が出てきて驚く。そういえば、セイリスは二人旅であると言つていた。その相方が大きな女性である事はリユンが言つていた気がする。もしかしたら、目の前のこの女性がそんなのかもしれない。

「はい、そうですけど。もしかして、セイリスと一緒に旅をしてい

る女性つてあなたの事ですか？」

「ああ、セイリスから聞いていたのかい？その通りだよ。こんな状況じゃなきゃあ、自己紹介くらいはしてあげただけど、今は急いでいるんで、ちょっとごめんなさいね。」

女性はそう言うと、突然、アームを片手で担ぎ上げて走り出す。

「えっ、えっ？」

いきなりの展開に混乱するアームは抗議の言葉も言えぬまま、女性に攫われていく。女性が向かう先は船の前方の様であるが、それよりもアームは状況を理解するのに必死であった。

「フラウ。いったいこんな時にどこへ行っていたの？昨夜話したランドファーマーの方の容姿を聞いて来たと思ったら、すぐに飛び出して。」

船の前部へと着くと、そこには船で出会った少女であるセイリスが居た。彼女はアームを抱えている女性に対して話しており、その内容から、この女性の名がフラウという物である事がわかった。

「こんな時だからさ。この危険極まりない状況を解決できるかもしれない、救世主がいるって言うんなら、そりゃあ走っても探し出そうとするものさね。」

アームはフラウの小脇に抱えられたまま、その救世主とやらはもしかして自分の事なのだろうかと、考えていた。

「救世主なんて、アームさんはそれ程、凄い人物には・・・あら？アームさん。その様なところで如何したのですか？」

セイリスはようやくアームの存在に気が付いたらしいが、自分の相方がその少年を抱えているという状況が良くわかっていない様だった。

「いやあ、僕にもさっぱりというか、なんなんだろうね。こんな体験初めてなんだけど。」

実際、今まで女性に抱えられた事なんて、母親以外には無いし、母親も子供を脇に抱えるような人では無かったはずだ。



「説明なら後でいくらでもするさ。でも今はちょっと急ぐからね。悪いけどセイリス、あなたは部屋に戻っておいてくれるかしら。ちょっとこの子に用があるんだけど、あなたがいると話にくい事なのよ。」

となると、このフラウという女性と二人になるという事だろうか。それは少し不安になってしまふ。確かに第一印象は恐怖を感じなかったが、それでもこの巨体は威圧感があるのである。できれば二人きりというのは勘弁してもらいたい。

「なんだか良くわからないけど。フラウが言うなら大事な話なんでしょうね。わかりましたわ。部屋に戻って置く事にします。私が居ても、何かできる状況でも無いでしょうし。」

アイムの願いも空しく、セイリスはこの場を去っていった。フラウは何か自分に用があるらしいが、自分自身に心当たりが無い以上より一層不安になるだけである。

「あの、とりあえず、ここから降りしてくれませんか？この状態は少し不安定で。」

ただでさえ船に弱いのに、地に足が着かない状態で抱えられていたせいで、実を言うと船酔いになり始めているのである。

「おっと、そうだね。私も慌てていて抱えたままなのを、すっかり忘れていたよ。」

普通、自分が物を、それも人を抱えている状況を忘れるという事は無いはずだ。

「それで、いったいなんなんですか。なにか僕に用があるとか言っていましたけど。」

アイムは現状を理解しようと精一杯であった。ドラゴンが現れてから自身は混乱しかしていなかったため、何とか自分の状況だけでも知って置きたかったのだ。

「その件なんだけど、あなた達種族の特殊能力に関する話なんだけど、話を続けてもいいかしら？」

突然の話に体が強張る。ちなみにこの感覚は、旅の相棒が自分を

旅に誘った時とそっくりであった。

「あの、それってもしかして、その。」

おそらく、地霊を見る能力を言っているのだろうが、具体的に言ってしまうと、自分から能力をバラす事になるのでもどかしい。

「地霊とかなんだとか言ったものが見えるんだろ。知っているよ。その能力に関する話さ。」

なんとまあ、やはり知っている様である。彼女が自分と同種族という事も無いだろうから、他種族に能力が知られるのはこれで二度目である。

「あのー。もしかして、自分達種族の能力って実はバレバレだったりしませんか。」

話したつもりも無いのに、能力を知っている人物にこの短期間で出会ってしまうと、この様な不安も抱いてしまう。

「安心しな。それを知っている奴なんてそんなに居ないし、こつちから他人に話すつもりも無いよ。余計な恨みは買いたく無いしね。」

「あ、いや、それならいいんですけどね。でも想像してたけど、やっぱりリユン以外にも知っている人がいるんだなあ。」

種族的に隠している事なのだが、どこから漏れたのだろうか。

「それに関しちゃ、そっちも色々あるだろうけどね。今は非常時だ。その能力を隠さず、利用させてもらいたいのだ。できる限りの配慮として、あの娘を部屋に帰したんだ。嫌だと言っても、選択肢は与えないよ。」

どうにも、船がドラゴンにぶつから無いようにするために能力を使うらしいので、反対するつもりは無いのだが、この様に無理矢理な展開だと少し躊躇したくなる。

「あの、地霊が見れると言っても、海の上じゃあ役に立たないと思うんですけど。」

実際、船旅が始まってから地霊をこの目で見たことが無いのだ。自分の能力が役に立つとは思えない。

「それはあんたがまだ、自分の力について良く知ってないからさ。」

安心しな、その力をどう使うかは、私がちゃんと指示してあげるから。」

そう言われても、ランドファーマーで無い種族に自分達的能力について教えられる事なんてあるのだろうか。

「とりあえず、あの船の先端まで行ってちょうだい。」

フラウは船の前部を指差す。

「え？ちよつとどう言う事が良くわからないんですけど。」

「だから、その船の先から出っ張った場所に行つて欲しいのよ。その方が回りを見やすいからね。落ちないように気を付けるんだよ。あなたが落ちたら、どうしようも無くなるんだからね。」

そう言うフラウが指差す先には、船から出た一本の棒がある。あまりにも不安的で、危険なその場所は所謂、舳先と言うものであった。

## 二つ目は海の上(3)

船の舳先に掴まりながら、アイムは自分の命がもう長くは無いのではないかなどと、考える様になった。

フラウの言動は、アイムに拒否権と逃亡権を与える事をしなかったので、今にも落ちそうなこの場所で、必死に落ちぬ様に頑張るしか無い状況なのであるが、どうにも船酔いがぶり返して来たらしく、体に力を入れる事ができない。

こういった状況を助けてくれそうな船員達は、それぞれ忙しいのか、あえて無視しているのか、自分の行動を止めようとはしてくれない。

ちなみに、手を離し、海原へと落ちて行けば、ドラゴンに船を分解される前に遭難する事は確実に思えた。

「あの、いつたいそれで何をすれば。もし殺す気なんだつたらそう言っして下さい。覚悟を決めますから。」

はつきりと言って、この様な状態の自分では出来る事なんて無いのである。それを、わざわざ、舳先に追いやるのは、もう自分の命を奪って生贄にでも捧げるくらいつもりとしか思えないアイムであった。

「ハツハツハ。冗談が言えるくらいの余裕は有るみたいだね。」

「冗談のつもりは無かったのだが。」

「じゃあ、要件を伝えるよ。あなた、船旅に出るから地霊を一度も見ることが無いって言ってたけど。それは本当かい？」

「ええまあ、そのそれらしい物は一度も。」

地上では、どの様な場所にでも少なからず存在する地霊であるが、海に出るからは一度も見えていない。そのせいで調子がおかしくなり、船酔いの一因となったのだから、間違いは無い。

「船旅中は部屋に籠る事が多かったんですけど、一応、船からの景色を何度か見ましたよ。でも地霊はいませんでした。」

「その見た景色つてのは海の上の景色だろ。海の中は見たいか？」  
「海の中ですか？船から乗り出さなきゃ、そんな所見れませんか。」  
危険な行動であるし、船酔いもあったので、わざわざ見る事は無かったと思う。まあ、現状はより危険な場所に居る訳なのだが。

「じゃあ、今は見れる訳だね。ちよつと覗いてみな。」  
確かに今は船から乗り出している状況でもある。下を見れば、船の部分より海の部分の方が多いのだ。

「ちよつと怖くて、見たく無いんだけどな。」  
そうは言っても、現在の状況が良くなる事も無いので、覗いてみる。

この船はそう大きく無い物であるが、それでも一個人からすれば十分恐怖を覚える高さであり、目を背けたくなつたが、それ以上に目に付く物があった。

「あれ、何か光つてる。もしかして、地霊？なんで海の中に地霊が。」  
驚きの発見である。今まで居ないと思っていた地霊があんな場所に隠れていたのだから。地上にいる数より、随分と少ないが確かに地霊である。

「地霊つてのは地面の精霊なんだろ？海だつてどこまでも水がある訳じゃあない。その底はしっかり地面が続いているんだから、海を覗けば、地霊が見れる可能性の方が高いさ。」

そう思うと、海にいるという不安もどこか和らいで行く様な気がする。あくまで気の問題であるが。

「まあ、見えた事は新発見なんですけど、それで状況が変わる様には思えないんですが。」

この発見は平時であれば、喜んではしゃいでも居ただろうが、今は状況が状況である。

「ところが大きく変わるのさ。あなたは どうして、あのドラゴンが船にぶつかろうとしているかはわかるかい？」

「じゃれてるんでしょ？船を自分の仲間だと思ひ込んで。」

それは、先ほどリオンに聞いたことだ。

「そう、つまりドラゴンがぶつかってくるのは悪意の行動じゃあ無いってことさ。」

「それって重要な事なんですか？」

「悪意や善意に関わらず、ぶつかってくるから問題なのでは無いだろうか。」

「重要も重要だよ。つまり、ドラゴンはこちらに敵意は無いってこと。なら、こちらがお前とは遊びたくないって意思を見せれば、自然とドラゴンは引いてくれるのよ。」

なるほど、ドラゴンがああも巨大で人智を超えて居そうな存在だったから忘れていたが、向こうも一生物に過ぎないのだから、そういった話も通じるはずだ。

「じゃあ、石でもぶつけて嫌がらせでもしてみませんか。」

「小石なら痛くも痒くも感じてくれないだろうし、大岩ならむしろ反撃してくるだろうね。」

つまり自分の案は不採用という事か。

「この場合、こちらに遊ぶ気が無い事を示す行動は二つ。一つ目は相手が考えている以上の速さで、相手から逃げる事。もしそうなれば、相手はさつさと遠のくこちらを見て、諦めてくれるはずさ。話しかけてくる相手に対してこちらが無視する様な感じさ。」

「でも、そんな事ができれば、そもそもドラゴンに慌てる必要も無いじゃないですか。」

そもそも、ドラゴンより早く動けないからぶつかりそうになっているのだから。

「そう、だからこの案も没だ。となると最後の一つが、これからする行動になるね。」

そうなるだろうか。まあ、そうならなかったら、諦めて海の藻屑になる事を心に決める事になるだろう。

「最後の一つ。相手が泳ぐ事が困難な場所へ行く事。相手がこちらを同類だと思っている以上、こちらがそう行動すれば、仲間が自分

に追い詰められていると見るだろうね。そうになると、こちらが遊びを嫌がって逃げているという意思を理解してくれるはずさ。」

確かにそれはいい案だが。

「ドラゴンが泳ぐ事ができない場所って、どうやって探すんですか。そもそも、辺り一面海なのに、泳ぎにくい場所も何も無いじゃないですか。」

「完全に泳げない様な場所じゃなくても良いのよ。あえて、泳ぎ難い場所へ向かおうとしている。それを向こうが理解してくれればいいんだからね。」

「だからその場所がわからないんじゃないんですか。」

結局、海の底でも覗けない限り、不可能な事なのだ。

「普通はね。でもあなたならそれが出来る。見えるんだろう？海底からの地霊が海の中に。」「あ、そうか。地霊が多い場所は海底が海面に近くなる場所だから・・・。」

「そう、海中を泳ぐドラゴンにとっては、泳ぎ辛い場所という事になる。」

ドラゴンはただでさえ、大きな体をしているのだから、それが僅かな差だろうと大きく影響を受ける事になるだろう。

「でも、ドラゴンがしっかりと理解してくれませんか。なんか体の大きさからして鈍い様な気がしますけど。」

「大丈夫、あれでドラゴンってのは聡い種族よ。上手い事、理解してくれると思うわ。」

聡い？なら、そもそも船と自分の仲間を勘違いしないで欲しい。

説明が済んだ後は、ずっと舳先に掴まりながら海を見ている。少しでも地霊が多い場所をフラウに伝えるためだ。自分がその方向を示すと、フラウはさらにそれを船員に伝える。どの様に伝えたかは分からないが、どうにも船員達は素直にそれを聞いてくれるらしく、船は自分の言った方向に進みだすのである。

「どついう風に話したら、この非常時に船員が言う事を聞いてくれ

るんですか？」

触先に掴まるのも慣れてきたのか、世間話をする余裕も出てきた。他人が見たら、随分と可笑しな恰好をしている様に見えるだろうが、これでも命がけの状態なので、結構な進歩では無いかと思う。

「少しこの船の船長にはコネがあつてね。だいたいは言う事を信用してくれるのさ。あんたの能力に関してはちゃんと隠しているから安心しな。」

つまり理由も話さず、自分の言う事を聞かせていると言う事だ。いったいどの様なコネなのだろうか。

「そう言えば、ドラゴンはどうなってます？こつちからじゃあ、良く見えなくて。ここまでしといて、何も効果が出てなかったら、泣きますよ。それも酷く見つとも無く。」

「やめて置きなさい、そこじゃあ危ないわよ。それと、効果についてはちゃんと出ているみたいね。ドラゴンは少しずつ離れているわでも、まだドラゴンもこちらの意思を量りかねている状況みたいだから、もう少し続けてもらう必要はあるけど。」

それなら安心だが。本当に通じているのだろうか、ドラゴンが勢いをつけるために距離を付けているだけでは無いのか。そんな不安が頭の中で渦巻いている。

「意思を量りかねているって、ドラゴンもそこらをなんとか敏感に感じ取ってくれないもんですかね。」

ドラゴンとはもつと知恵を持った種族だと思っていたが、今回の件で船を仲間だと勘違いするような鈍感生物に格下げする必要があるかもしれない。

「さて、船がもつと迅速に動いてくれれば、理解も早いんでしょうけど、ドラゴンに比べれば鈍足だからね、向こうは逃げるにしては随分と鈍いとも思ってるんじゃないかしら。」

という事は、向こうは向こうでこちらを鈍感な生き物だな。とも思っているのだろうか。

「考える事はお互いそう違わないようなのに、こつちばかりが命を



賭けるなんて不公平な気がしますけど……。あ、フラウさんあっちの方がなんだか地霊が多い様な気がします。」

地霊がどことなく多そうになっている、海の方角を指差す。自分では方角自体が良くわからない状況なのでこうするしか無いのだ。

「あっちだね、わかったわ、船員に知らせてくる。」

フラウは返答すると、船員達に次に向かう方向を伝えに行く。あの程度、結果を出している現状があるので、よりスムーズにこちらの指示は伝達されていく事だろう。

「そういえば、フラウが居ない状態じゃあ、こうやって舳先に掴まる必要も無いよね。なんか腕が疲れてきたし、ちよつと降りよう。」

慣れてきたといっても、一歩間違えば海の底である。ドラゴンの脅威が少しばかりであるが、治まってきた現状では、ここに居る方が危険だろう。

「ふう、こうやって甲板と言えども、地に足付けてる状態というのは素晴らしいものだね。」

舳先から甲板に移り、体を伸ばす。ずっと同じ体勢で緊張を維持し続けたから、体が固まっていたからだ。

「船にも慣れてきたかもしれないぞ。船酔いもそんなに感じなくなってるし。」

舳先に掴まるという豪快な行動を取っておきながら、気分はそんなに悪くない。地霊が海からでも見れるという安心感と、突然襲ってきた危機とがなんらかの反応をして、体が船酔いをしなくなったのかもしれない。

「これでドラゴンが去ってくれば万々歳なんだけど……。あれ？」

アイムの視線の先には先ほど、船員に進行方向を伝えに行ったフラウが、何故かこちらに走りながら向かってきていた。

「ちよ、ちよ、ちよつと待って下さい。別にサボっていた訳じゃ無いですよ。ただ、なんだかあの姿勢を維持するのにも体力がいるというか、これからのために一時休息してただけというか。」

しどろもどろになり、言い訳に成ってない様な言い訳をフラウに話しながら、アームは喋る。

「何言つてんだい！大変だよ、ドラゴンが急に船から離れたした！」  
どうにも、自分を叱りに来た訳では無さそうである。

「離れたんならいいじゃないですか。接近してきたなら問題ですけど。」

要は自分達の努力が実を結んだと言う事では無いか。

「だからって急過ぎる。こりゃあ、あいつ何かするつもりだよ。念のため船のどこかに掴まりなさい。」

そう危機感を感じていないのだが、フラウの様子がどうにも鬼気迫る物であったので、つい船に掴まる。

そして、それと同時に船が突然揺れだしたのである。

「な、な、な、なんですか、これ！揺れてますよ。海の上なのに！」

「ドラゴンが激しく海中で泳いでいるのさ。本気で動けば、これくらい海が揺れるのがドラゴンなのよ。」

そう話す間も、船の振動は続く。むしろ激しくなっている様に見える。これでは、ドラゴンにぶつかる前に船が分解してしまいそうだ。

「どんどん激しくなってる。いったいドラゴンは何を・・・。」

そう言った瞬間、海が爆発した。いや、爆発したのでは無く、海から何か巨大な物が跳び出したのだ。

「あれが、ドラゴン？」

まさしくそれはドラゴンだった。魚の様な姿をした、それでいて鱗が無く、まるで海を支配するために生まれたような、余りにも巨大なそれは、確かにドラゴンだったのだ。

ドラゴンは船の上を移動する。海から跳ね出たドラゴンは、船の上を通る様に弧を描きながら、海から海へと飛んだのだ。

それはかなりの速さで、一瞬の事だったのだろうが、ドラゴンの巨大さとその衝撃からどこかゆっくりと飛行している様にも見えた。「急いで伏せて、何かに掴まれ！」

その言葉はフラウが言ったのか、それとも他の船員が言ったのか、良くわからない程の絶叫で、確かにアイルムの耳に届く。

考える間も無く、船が今まで以上に激しく、まるで縦も横も無い様に揺れる。ドラゴンが海に着水したのだ。

アイルムは振動で船に叩き付けられるが、これ以上、翻弄されてはたまらないと、叩き付けられた甲板に爪まで立て、必死に掴まる。

ドラゴンの着水と同時に上がった水柱が雨の様にアイルムの体に降り注ぐ。その勢いに目も開ける事ができなくなる。

そのせいか、振動が止み、水柱が無くなった後も、自分が本当に無事なのかがわからない状態になってしまった。

恐る恐る目を開けると、そこには水に濡れた甲板と、自分と同じような姿勢のフラウが映った。

なんとか、自分も船も無事の様だった。

「そうだ、ドラゴンは！」

急いでドラゴンが着水した場所を見るも、そこにはドラゴンの姿は存在しなかった。

「どうもドラゴンはこっちが自分の仲間じゃないって分かってくれたみたいだね。」

甲板から起き上がったフラウが、びしょ濡れの服を気にする様に見ながら、こちらに話しかけてきた。

「分かってくれたって、それにしても随分と荒っぽい行動ですけど。」

「なにより、船が壊れかねない程の行動を起こされては元も子も無い。」

「それでも、海からドラゴンは見えなくなっただろう？もう、船にぶつかる気も無くなったってことよ。最後のアレは、多分ドラゴンなりの謝罪なんじゃないかしら。」

それは、なんと豪快な謝罪も有ったものだ。あまりにも激しく強大なそれに自分も船も翻弄されるだけだったのだから。

アイルムは今なら、ドラゴンと自分とは棲む世界が違うという事を

理解できそうな気がした。

ドラゴンはそれっきり姿を現す事は無く。遭遇の日から一日が過ぎて、海に大陸が見え出すと、ようやく安心する事ができた。

ドラゴンがあの様な行動を取った原因となるかもしれないアイムであるが、むしろ船員達から感謝される結果となった。そもそも、ぶつかるうとする、ドラゴンを回避させるための行動であり、結果としては船を無事、港に到着させる事ができる様になったからだ。と言っても、ランドファーマーの能力をバラす事は出来なかったのだ。感謝の言葉は指示を出したフラウに集中していた。アイムに対してはそれの補助をしていた程度に認識されているはずだ。

アイム自身に不満は無かった。というより、それを感じる様な心情では無いという方が正しい。

アイムは遭遇からずっと海を見ている。船酔いが治ったという事もあるが、それ以上に、あの衝撃からまるで夢が醒めないかの様に海に惹かれ続けている。

「あのドラゴンを何とかしてしまっなんて、大したものだな。」  
海を見るアイムの背後から、誰から話しかけてくる。この声はリユンだ。

「大したものって、ドラゴンをなんとかした訳じゃないのに、それは言い過ぎですよ。」

あの強大な力の前では、自分の行動はとてもちっほけな物だったのだと考えてしまっ。

「それでも、船をドラゴンから守る事が出来たんだ。十分な結果だろ。」

「そうですね、そうかもしれない。」

フラウからも似た様な事を言われたが、嬉しいと感じる事が出来ない。

「どうにも悩んでいるらしいな。いや、悩んでいるというのも違っか。」

「はい、なんだかあのドラゴンの姿が頭の中から離れないんですよ。」  
確かにドラゴンの力は強大で、あまりにも自分達とは棲む世界が違うものである。それを理解した今、ドラゴンを恐れる様になると思っていたのだが。

「なんか、凄いつて思っちゃって。あの姿をもう一度見たいなんて考えている自分が居て。」

もちろん、その度に命を賭けるなんて真っ平なのだが。

「あー。そうだな、自分より何もかもが強い存在と出会つと、そんな風を感じる奴もいるんだよ。多分、お前もそれだ。」

船はどんどん大陸に近づいていく。そろそろ、港が見えてくる頃かもしれない。

「そうなんですか？じゃあ、何か解決法とかもあつたりしますか？」

もうここまで陸に近づくと、あのドラゴンに遭う可能性は暫く無いだろう。

「無いよ。それは憧れに近いからな。でも、暫くすれば薄れていく感情でもある。」

もしかしたら、二度とあのドラゴンとは遭わないかもしれない。むしろ、そちらの可能性が高い。

「そんなものですか。なんか、もっと心の中がモヤモヤする様になつたんですけど。」

「仕方の無い奴だな。じゃあ、あのドラゴンに関する事でも教えてやるつか。相手の事を良く知れば、憧れが消える事もあるしな。」

少し興味が沸く。

「でも、消えますかね。どれだけ聞かされても、あの巨体は忘れられないというか。」

あれでもまだ、子供だと言うのだから、その驚きは一層強くなるというものだ。

「ああ、消える、消える。その事って言うのはな、あのドラゴンの名前の事だよ。海のドラゴンじゃなくて、ちゃんと船乗りが呼ぶ名

前があるんだ。」

「名前って、例えば間抜けな名前だからドラゴンに対する憧れも消えるとか？」

「その通り、結構、本当に間の抜けた名前だぞ？なんて言ってもな、船乗りはあの海のドラゴンを“クジラ”なんて呼ぶんだからな。」

「クジラ？クジラですか？それはなんとも。」

個人的にだが、確かに間の抜けた名前である。船乗りもどうしてそんな名前を付けたのやら。

「どうだ？少しは憧れも無くなったか？言つとくが、この程度で気が抜けられたら困るんだからな。これから旅を続けるんだ、衝撃的な出来事なんてのは何度も遭遇するんだぞ。」

「そうですね、でも、気が抜けた訳じゃあ無いんですよ。ただ、なんだか心の奥の方でワクワクするんです。もし、これからこんな体験を何度もするのであれば、それは、凄く面白い事なんじゃあないかななんて、そう思ってるんです。」

確かにそれは危険で命がけの事かもしれないが、自分はそれを望んで旅に出た筈だ。気を抜くなどと言う勿体の無い事なんて、している暇も無いのである。

アイムは海を見る。クジラに遭った事以外は順調な航海であったはずだが、なかなかに楽しい物であった。これから、もっと旅が波乱万丈になって行くのであれば、それはさらに楽しくなっていくという事だろう。

### 三つ目は仲間の数(1)

馬車に揺られながら見る風景とは、代わり映えの無いものであっても、どこか心を躍らせてくれる。

ランドファーマーの少年、アイルムにとってもそれは同様であり、揺れる風景を見るだけで、自分は旅をしているのだと実感していた。また、少し前までが慣れない船旅だったせいで、彼が風景の一部として見る地霊を普通に見る事が叶わぬ状況であった事も、この馬車から見る景色を好ましく思う要因の一つであった。

地霊とはランドファーマーだけが見れる精霊の一種であり、大地に多く棲む。大地には地霊が存在して当たり前であり、一方で海ではあまり見る事ができない存在でもあるので、船旅が終わり、地霊が豊富に見れる大地が、再びアイルムの目に飛び込んできた事は本人にとって嬉しい事であった。

さて、そんな船旅を終えたばかりのアイルムが何故、今度は馬車に乗っているのかというと、同乗者に原因がある。

本来であれば、アイルムとその旅仲間であるツリストのリユンは、船が着いた港町で一泊し、早朝に町を出発する予定であった。

それはもちろん徒歩での旅であり、旅の商売を始めたばかりの二人にとっては、金の掛かる馬車に乗るつもりなど無かったのである。

ところが船から降りてすぐ、同じ船に乗っていたもう一組の客、セイリスとフラウという女性の旅人が話しかけてきた事で状況が変わった。

「船の時はありがとだね。何かお礼が出来ればいいんだけど。こちらで何かできる事は無いかしら。」

確かフラウの方がそう言って、アイルムに話しかけてきたはずである。

お礼とは船であった事件の際、アイルムがその解決に少しばかり力を貸した件の事を言っているのであるが、アイルム自身、自分はそれ

ほどの事をしたつもりが無いので、当初はお礼など結構であるという旨の言葉を返していた。

ただ、話の途中で彼女達の目的地についての話が出た時、アイムの相棒であるリュンの目が変わる。

どうにもリュンも同じ目的地を目指すつもりだったらしく、彼女達はその目的地へ向かうのに馬車を使うという話を聞いた時点で、フラウが申し出たお礼が、その馬車に同乗させて貰うという事になったのである。

何故、自分へのお礼を相棒が決めてしまうのか、少し疑問に思ったアイムであったが、自分にとつても利益がある話だし、これでお互い貸し借り無しで気分良く、話を進められるならそれでも良いかという気持ちになったのだ。

それに、その目的地にも興味があった。何故ならこれから向かう目的地は、この大陸でもっとも大きな力を持つと呼ばれる、大陸中央の国家、フィルゴ国であったからである。

「港からフィルゴ国までは、どれくらい時間が掛かるんですか？」

馬車からの景色も、そろそろ見慣れてきたので、アイムは隣に座る相棒のリュンに話しかける。

「そうだな、歩いてだとシライからヒゼルまでの距離と同じくらい時間が掛かった気がするが。」

「馬車なら明日の朝には着くと思いますわ。」

リュンが言葉を返したすぐ後に、目の前に座る少女、セイリスが話しかけてくる。小さな彼女は、その見た目に反して旅慣れた人物であり、リュンの発言も合わせると、信憑性のある話であった。

ちなみに、彼女の相棒であるフラウは馬車の御者をしている。どうも、乗り合い馬車を馬車ごと借りたらしい。貸した側は彼女を信頼して任せてくれたらしく、彼女がいつたい何者なのか少し気になるところであった。

「へえ、案外近いんだ。大陸の中央ってくらいだから、もっと内陸



にある物だと思つてたな。」

「ヒゼルは大陸西側から出つ張る半島の様な形になつていますから、そこから大陸に沿つて南下していけば、自然と東の大陸中央側に入り込んで行く形になりますの。ちょうど、その半島の根本あたりにあの港がありますから、フィルゴに船で向かう上で、もっと近い場所だつたという事になりますわね。」

なるほど、ならば、あの港はフィルゴの海側の玄関口と言つたところなのだろう。

「お嬢さんは、随分と地理について詳しいが、旅にはそんなに慣れているのか？」

リユンが口を開きセイリスに話しかける。そう言えば、彼がセイリスに話しかける所はあまり見ない。いつたい、何を聞くつもりなのだろう。

「ええ、物心付いた頃にはもうあちこちの足を運んでいましたわ。」  
旅に慣れていると言っても、自分より少し経験がある程度だと思つていたので、思つた以上に経験がある事に驚く。

「もしかして、フィルゴが故郷だったり？」

何故その様な結論になるのか分からないが、どうにもリユンは確信しているらしく。あくまで確認のために聞いているといった顔をしながら、セイリスに問いかける。

「あら、どこかで喋つたのかしら。その通りですわ、実を言うとフィルゴへは仕事を終えて帰る途中で。この馬車を貸して頂いたのも、相手が顔見知りだつたからですの。」

これで謎が一つ解けた訳だが、一方でリユンが何故、セイリスの故郷を言い当てたのかという謎が追加される。

「そうだったのか。」

それに反して会話はここで終了してしまい。アイムの疑問は深まるばかりであつた。疑問の答えが聞けたのは、日が落ち、夜が来てからの話だ。

日が暮れてくると、馬車の御者をしていたフラウが、御者を交代して欲しいと言ってきた。

「せっかくタダで載せてあげたんだ、それくらいはやって貰ってもいいんじゃないかしら。」

その様に話すフラウの提案を、既にリユンは想定済みだったらしく、素直に御者席へと向かう。そう言えば、昼間なのにリユンが馬車内で仮眠をとっていたのを思い出し、こういった事への備えだったのだとわかり感心する。

ただ、それと同時にアイムにも御者席へと来る様に施したのは、アイム自身にとっては想定外の出来事であった。

「こいつに馬車の動かし方を教えたいんだが、連れて行ってもいいか？」

どうにもそういう意図があるらしいが、それだけでは無いとアイムは直感する。それほど長い訳では無いが、これまでの付き合いの中で、リユンが自分にとって意外と思う行動をする時は、きつと一癖も二癖もある事を考えているに決まっていたからだ。

フラウはリユンの意見に特に反対する様子も無く同意して、自分とリユンは御者席へ向かう事となった。

御者席は客席から布で区切られており、布自体も結構な厚手なので音もある程度遮られている。元々、乗り合い馬車用なので、客と御者をしっかり区分けする様に出来ているのだろう。

この様な場所へと二人で移動したのは、客席へ残る女性二人に隠す必要がある話をするつもりなのでは無いだろうかと考えたが、移動してすぐは、フラウに言った様に馬車の動かし方についての説明を上演も交えて教えてくれるだけであった。

説明が一通り終わる頃には、かなり夜も更けており、客席を覗くと目を閉じ寝ているフラウとセイリスが居た。

そうしてアイムが再び御者席に戻った時である。リユンは口を開いたのは。

「どうして、中の二人の故郷がフィルゴ出身だと俺がわかったのか

聞きたいか？」

突然そんな事を言われ、少し混乱するが、内容を理解すると昏間に疑問に思った事だったので、是非聞きたいと返した。

「あの二人の関係について、船で見てから考えていてな。片方はいかにもな体系で護身用の剣まで持っているのに対して、もう一方はあんな華奢な見た目をしている。だと言うのに華奢な方もそれなりに旅慣れているとなれば、そりゃあどんな関係が気になるだろ？」

「まあ確かに。もしかしてどこかの国のお姫様と護衛だったりとか。」

これはちよつとした冗談であり、リユンも笑いで返してくる。

「それならちよつと浪漫を感じるが、まあそんな風でも無いだろ？ 実はちよつと心当たりがあつて、船から降りてから観察して見たんだが、馬車を借りた時点でピンと来た。」

観察とはまた奇特な趣味だが、リユンならそういう事も周りを気にせず出来るんだろうなと思えてしまう自分がいる。

「乗合い馬車を借りられるって事は、信用されている人物で、信用されているのはファルゴ出身者だからって推理ですか？ まあ確かにピンと来ますね。」

だが、それだけではただ馬車の貸主と顔見知りで親しくなっただけという可能性もあるだろう。

「いや、それだけじゃ無い。むしろピンと来たのは彼女らの職業だ。その職業はフィルゴ国特有の物だから故郷もフィルゴ国なんじや無いかと推測したんだ。」

「フィルゴ国特有の職業ですか？ そう言えば教師みたいな事をしてるって言ってたような。」

確かセイリスが船で言っていた気がする。まあ、みたいなものと  
いう事であり、正確には違ふのだろうが。

「教師か、そりゃあまた上手く言った物だな。」

「やっぱり教師に近い職業なんですか？」

「そうだな、教師に近い、物を教えるという事を仕事としているか

らな、もしかしたら、教える内容が違っただけで、やっている事は俺達と似たような事をしているかもしれない。」

自分達と近い事をしていとはどういう事だろうか、自分達は町や国を巡り、農業知識を売り歩くという仕事をしている。まあ、仕事と言っても、その商売をした例は一件しか無いし、その報酬も船に乗せてもらおうという程度の物であるが。

「つまり、彼女達も自分達の知識を売り歩いていると。でも、なんで彼女達の仕事がわかるんですか？」

「そういう事は本人達に向かつて言うなよ。多分、怒るからな。彼女らの仕事があった理由だけどな、さっき言った二人の体格の差からおおよそ予想ができるんだよ。片方の体格が大きく、戦闘向きな恰好をしている。それは護衛のためだ。そして、護衛対象は小さな彼女だな。彼女は旅慣れているのに、その様な雰囲気が無い。どこか弱い様子ですらある。そしてそれは教える側に恐れや敵意を抱かせないため。」

「体格だけで、よくそれだけわかりますね。むしろ、妄想と言われなくても仕方無いですよ。」

「妄想とは酷い言い方だな。一応、似たようなコンビの旅人つてのは何度か旅先で会った事があるんだよ。そして皆、同じ職業だった。今回のコンビはむしろ分かり易いくらい、役割が分担されてるように見えるな。」

なるほど、前例があるのなら単なる妄想とも言えまい。

「そして、フィルゴ国周辺に一定の信用があるのなら、間違い無くその職業であると。いったいなんなんですか、その職業って？」

「フィルゴ国にはな、国に直接認められた宗教がある。名前は純血教と言う。彼女達はその教義を他国へ広める宣教師だ。」

宣教師？つまりまさしく教師の一種と言う事か。だけど受ける印象がだいぶ違う感じもする。

「そもそも、純血教って言うのが良くわからないんで、どんな物かもまったく理解できないんですが。」

「純血教についてはちょっと複雑でな、長くなると思うからファイルゴに書いてから説明してやるよ。それより、彼女らに出会えたのはチャンスだ。」

リユンは彼の悪い癖の一つである、嫌らしいニヤリという笑みを浮かべる。この笑みを浮かべるリユンは見ての通り、碌でも無い事を考えているので注意が必要だ。

「チャンスですか？また、何か悪巧みでも？」

「悪巧みって……。俺は今まで、癖の悪い事はしてきたが、誰かに危害を加えてきた事は無いぞ。」

どっちにしたって悪巧みに違いはあるまい。

「まあ、それよりこのチャンスだ。彼女らは俺達に似たような仕事をしている。しかも、その仕事は俺達よりずっと経験があるはずだ。これをきっかけにコネでも作っておけば、俺達の仕事にも利益になる可能性が高い。」

つまり、彼女達の仕事経験を盗もうと言うのだろう。

「なにか、気が進みませんか。相手の了承が無ければ、まるっきりの悪い事ですし。」

「誰が相手の同意を得ないと言った？むしろ相手に公認して欲しいくらいだ。」

怪しい話である。顔のニヤつきを抑えていない時点で、何か裏があるはずだ。

「そもそも、同意を得るつもりならここで隠す様に話す必要も無いじゃないでしょうか。」

「同意を得るのは彼女らからじゃない。目的は純血教そのものに俺達の仕事を認めてもらう事だ。彼女らには、純血教と話し合えるきっかけを作りてもらいたいのだ。」

ほら見る、碌な考えじゃない。アイムはリユンの考えにうんざりしながらも、まあ、それくらいなら良いかな、などと考える自分にも少し嫌気が差しそうだった。

朝になり、フィルゴ国を肉眼で確認できる距離まで近づいた時、心が大きく揺さぶられるような衝撃を受けた。フィルゴ国の回りには壁がどこまでも続いており、どこまでも大きく長いその壁は、まさしくフィルゴ国の力を示す様な物だったからだ。

「この壁って、もしかして都市全体を囲ってたりする？」

アイムは、この国を良く知っているであろうセイリスに詳しい話を聞きたくなった。

「そうですね、この壁はフィルゴ国の象徴のようなものですから、都市の主要部分を覆っている事は間違いありませんわ。けれど、国が発展すれば、その領土は広がる物ですから、すべてを壁で囲っている訳でもございませんの。」

すべてを囲っている訳では無いと言っても、この光景を見ると、国の大半が壁に覆われている様に思える。

これなら、一目でこの国が大陸で最も力を持っていると納得できようものだ。

「外壁が立派な分、入国の際の審査も厳しいぞ。前に来た時は、1日丸ごと審査に潰されたって言うのに、国内滞在期間は1週間しか許されなかった。」

セイリスの話に追加する様にリユンが続けて話をする。どうにも批判が混ざっているようであるが。

「滞在期間なんてのも決められるんですか？」

アイムにとっては聞きなれない言葉だ。

「外来人に長期間滞在されて、スラムでも作られたら堪ったもんじやないからね。こうやって壁を作って外からの危険に備えているのに、内側から国が駄目になったんじゃ元も子もないしね。国内で仕事を見つけて住もうとする前提なら、もっと長い滞在期間が認められるし、一定の信用さえあれば永住権だって貰えるわよ。」

リユンの批判をフォローするのはフラウド。厳つい体を少し不機嫌そうに揺らしているのは、自分の国をリユンに批判されたと思っただからだろう。

「それでも、滞在期間についてはそうかもしれないが、入国審査については時間が掛かりすぎだろう。前に来た時だつて対して荷物を持たない一人旅だったのに、審査のための個室に一日中詰め込まれたんだぞ？今回は倍の二人だから、審査時間も倍か？」

「どうせ怪しい物でも持つてたんじゃないのかい？審査官も無能じゃないんだ、意味も無く審査を長引かせたりしないわよ。」

「まずい、口喧嘩に発展したようだ。セイリスなどは、二人の様子を見てあからさまにオロオロした。」

「その怪しまれた物が商売道具だったんだよ、旅商人が商売道具を疑われたらどうしろつて言うんだ。」

「どうせ、その商売道具とやらも碌な物じゃあ無かつたんじゃない？入国を足止めされるくらいにはね。」

「そろそろ、止めた方が良さそうなので、アイムは少し気を入れて会話に入る事にする。」

「まあまあ、二人とも抑えて。実は僕、フィルゴ国には興味を持っているんですが、そうやって入国前から喧嘩をされたら、ちよつと興ざめしちゃいますよ。お願いしますから、ちよつと止めてくれませんか？」

「そうですね、二人とも。それに今回は私たちが一緒に入国しますから、それほど審査が長引く事もないでしょうし。」

「アイムの仲裁に続く様にセイリスも喧嘩を止めようとする。リュンとフラウはお互いの相棒から止めが入ったおかげか、言葉を止める。」

「そうそう、いくらいがみ合つていても、外見上は仲良くしておくのが大人ですからね。そのままお互い我慢し合えば・・・って、セイリス、さつき審査が長引かないつて言ったけど、どういう事？」

「アイムは喧嘩する二人を止めた事で、一定の満足感を覚えたが、それ以上に気になる事をセイリスが話していたので、そちらに気が移る。」

「所詮、喧嘩の仲裁なんて自分に火の粉が飛ばない様にするのが目的」

であり、自分の興味を満たしてくれる話の方が、アトムにとっては重要なのである。

「え？あ、はい、私とフラウはこの国の出身者なので審査官からの信頼がありますし、私達と居れば、アトムさん達の入国も早まるのでは無いかと。」

戸惑うセイリスであるが、なんとかアトムの言葉を理解し、答えてくれる。

「ちょっと待ちなさい、セイリス。この二人と一緒に入国する気なのかい？確かにこの二人は入国が早まるかもしれないけど、私たちにとっては遅くなるということなのよ？」

確かに国内出身者だからといって、同行者に外来人を連れていけば、審査官の方も慎重になるだろう。

「でもフラウ。あなたはアトムさんに借りがあるって言っていたじゃない。それって馬車に乗せるだけで返せるものなのかしら？それにどうせ返すなら、逆に向こうが恩を感じるくらいの方が良い関係を築けるというものですわ。」

確かにこちらにとっては嬉しい話である。フラウに貸した借りというのも、正直、それ程の物では無いと考えているので、こちらが恩を感じるという点も正しい。

「だけどね、セイリス……。ああ、もう、わかったわ、あなたは決めるとなかなか考えを変えないものね。」

どうにも、入国の際には彼女達の助けがありそうである。

ところで、この問題の原因となったりユンであるが、さすがに気まずいのか、先程から黙ったままだ。

「決まりよ、あんたたち。入国審査の時は、私たちが同行してあげる。これでも、国内じゃあ、ある程度信用がある立場なんだ。審査だって半日もかからず終わるはずだわ。」

話し合いが終わり、今後の方針が決まる。考えてみれば、フィルク国に着いた時点で解散するはずだった相手が、この方針のおかげで、もう少し長く居られる事になったのだろう。



ただ、それが吉と出るか凶と出るかは、それこそ相手しだいと言ったところであつた。

そして入国審査が終わつた現段階では、彼女たちと居られた事は幸運な事であつたと言える。

何故なら入国審査の際、こちらを見て警戒感を隠そうともしない審査官が、セイリスたちの視線を移すと、とたんに優しいオジサンと言つ様な表情になつたからだ。

これほど、外来人と国内人で対応を変える人物を見たのは初めての事である。

もし、セイリスたちと同行して居なかつたら、リユンの言つた通り、荷物確認だけでも一日掛けて調べ上げられていた事だろう。

まあ、それも仮定の話であり、無事に入国できた現状では、深く考える必要も無いと思われる。

「ということ、これで借りも返したんだから、ここらでお別れという事になるのかしら。」

フラウの言葉で、もう二人と同行する必要も無い事に気付く。

「そういえば、そうですね。今回の事は何から何までありがとうでございます。」

「そこまで言われる程の事でもありませんわ。こちらにとっては、それほどデメリットのある事でもありませんでしたから。」

なるほど、確かに言われてみれば、彼女たちがこの国に来るのは彼女たち自身の意思であり、アイムたちはそれについて行つただけに過ぎない。彼女たちがそれで被つた損害と言えば、時間のロス程度のも事でしかない。

「それでも、すぐく助かつたよ。何より、旅が順調に進んだ事が一番の良い事だつたからさ。」

未だに船に乗つた時の事件が頭に残っているので、フィルゴ国までの道のりが平穩無事に終わったのは、本当に嬉しい事であつた。

「あなたにそこまで言われると、こっちが少し申し訳無く感じるわ。」

あなたが居なければ、命が無かった可能性だつてあつたんだからね。まあ、そっちのツリストには礼の一つでも言つて欲しいもんだがね。」

若干、別れの言葉に挑発が混じつていた事で、空気が悪くなつた様な気がする。フラウの言葉で、このまま再びリユンとの喧嘩に発展してしまうのでは無いかと思つたのだ。

「……まあ、この国を悪く言つたのは、こちらが悪かつた。だがそれも、前回この国に来た時に結構な扱いをされたからなんだぞ？」

しかし、リユンの口から出たのは謝罪の言葉であり、その事にアイムは驚く。リユンという男は、挑発に嫌味で返すような男であると、アイムはずつと考えていたからだ。

「正直、ちよつとこの国は排他的なところは認めるわ。それでも、良いところはたくさんあるのよ。そこらの所を、滞在中に知つてほしい限りね。」

リユンの言葉に棘が無いのを感じて、フラウも穏便に返してくる。どうやら、これで口喧嘩に発展する心配は無さそうで、アイムは胸を撫で下ろした。

「あー、だつたらなんだ、君らの上司にでも礼を言わせてくれないか？純血教徒なんだろ、君たちは。」

ここで、彼女たちの職業にこちらが気づいている事をバラすというのか。リユンの真意を掴めないアイムは混乱するばかりだ。

「やつぱりわかるかい？」

リユンの言葉にフラウはそれ程驚く様子も無い。どうやら、旅慣れている物には彼女たちが純血教徒であるという事はわかり易いのかも知れない。

「入国審査の際に、審査官の信頼が厚い様子を見てな。国内人と言えども、よく旅をする様な奴じゃないと、審査官に信用されるなんて事無いだろ？」

本当はもつと前から気づいていたくせに。そんな言葉を言いたく

なるが、リユンは意味の無い嘘を吐く奴では無いので、何らかの理由があるのだらうと、言葉を飲み込む。

「まあね、それで？どうして私たちの上司に礼をするのかしら、私たちに直接言えばいいじゃない。」

「当然、君たちにも感謝してる。だからさつき謝ったんだ。けど、入国審査が上手く行ったのは、君たちが純血教徒である事が大きいからな、とりあえず筋は通して置きたいんだよ。」

「ふむ。旅人つてのはそんなに義理堅いもんかね。まあいいさ。上の司祭に話を通してあげるよ。旅の途中で同行する事になった奴らがこちらに礼をしたいみたいだつてね。」

「そうしてくれると助かる。」

あれよ、あれよと話が進む。どうにも彼女たちの上司に会う事になった様だが、これは当初、リユンが予定していた事では無かつただらうか。

そんな事も知らずに、フラウの横に立つセイリスなどは、それは素晴らしい事ですね。と手を合わせて喜んでいる様子である。

「それじゃあ着いてきな、私たち純血教の本部に案内してあげるよ、

「フラウは話が決まると、その大きな体でフィルゴ国をまさしく我が物顔で進んでいく。その横ではセイリスが小さな体で必死に付いて行こうとしているのが微笑ましい。」

そしてこちらは、その二人からそれとなく離れて、小声で話すことにする。

「あの、純血教本部に向かうのって、昨日の夜、話した件についても都合の良い事じゃありません？」

純血教に自分達の仕事を認めて貰いたいのだから、本部に向かえるというのは都合の良いすぎる展開である。

「あたりまえだ、そのために態々、意味の無い口喧嘩までしたんだからな。そういう風に話が向かってくれなければ困る。」

「はあ？どういう事ですか。え？あれって演技だったんですか。」

どうにも、リユンらしくない行動をしているなと思っただらそういう事か。

「前来た時に入国審査で邪見に扱われたっていうのは本当だぞ。ただ、それで気分を悪くしたというのは言い過ぎだったな。旅をしている以上、それより酷い扱いをされた事なんて何度もあるんだ。気にもしなかった。」

「じゃあ、その後、柄にも無く謝ったのも、旅人としての義理を果たしたいというの。」

「まあ、普通に合わせてくれって言っても、怪しまれかねないからな。なんとか自然な方向で純血教本部に向かえないものかな。」

「なんとという奴だ。これだからこの男は信用できないのだ。これからは、こいつの行動、一つ一つ注意して見ていかないといけない。」

「そんな事を考えるアイムは、フィルゴ国に入国したばかりだと言うのに、ドツと疲れた気分になられるのだった。」

### 三つ目は仲間の数(2)

純血教の歴史は大陸がかつて一つの帝国によって統一されていたという、フィルゴ国の伝説に描かれている。ちなみにその伝説とは、帝国の創始者はフィルゴ国の王の先祖であり、この伝説はフィルゴ国の権威が大陸全土にまで及ぶという事を語るものなのだそうだ。

純血教が生まれたのは、帝国末期、領土と国民が国を分裂させる程、力を増大させ、帝国がその飽和状態により、瓦解する事をだれもが予想できる様になった時代であるという。

その時代、帝国崩壊が、戦争や内乱によつてのものでは無い以上、帝国の文化や技術、知識と言った物は、崩壊後もそれらを維持していく必要があると考える集団が居た。その集団は帝国文化を記した文書をまとめ、さらにそれが時代遅れにならぬよう、常に研究、発展、広報を行える組織を作る事になる。

「それが純血教の始まり？」

「ええ、ですので純血教には他の宗教のように、特定の神を信奉しているという訳では無く、便宜上、帝国創始者である、初代皇帝大フィルゴを帝国文化の象徴として奉っているのです。」

純血教本部に向かう道のりで、アイムの純血教を知らないという言葉から始まったセイリスの純血教講座は、本部に着いてからも続いている。さすがにアイムも疲れてきたが、相棒のリユンが、これから純血教に関する知識が必要になるかもしれないから、しっかりと聞いておく様にといい、言葉を残して、フラウトどこかへ行つてしまったので、聞き流す事も出来ずにいる。

「でもさ、じゃあなんで純血教なんて名前なのさ。フィルゴ教とか帝国教とかでも良いんじゃないかな。」

講座は純血教本部内の、まさしく講義室と言った様な場所で続いている。なんでも、一般国民のために純血教の教えを、ここでいつも公開しているらしく、今日は特に講義室を使う予定が無いそうなの

ので、個人講座という名目で貸してもらっている。

ただ、聞いている側にとって、この講義室という部屋の構造というものが、何故か眠気を増大させる物でしか無いというのは皮肉な話である。結果、アームは眠気と飽きに襲われながら、セイリスの話を聞くのに必死になっている。

「帝国を象徴する法律の一つに純血法という物がありますの。そこから名前を貰っているという訳ですわ。」

一方、セイリスはと言うと、こちらの気持ちを知らずに嬉々として純血教についての知識をこちらに教えてくる。薄々、思っていた事だが、もしかしたら彼女はこういった事が好きなのかもしれない。さて、セイリスが説明する純血法についてだが、異種族間でその婚姻と子供の混血を禁止するという法律であるらしい。基本的に現在も異種族で恋人になったり夫婦になったりというのは、異端とされる雰囲気があるのだが、帝国では2、3年程、牢屋に入れられる様な違反行為でもあったそうだ。

「純血法は種族間での不平等や差別を極力無くすために、初代皇帝が帝国を支える柱として作った法律ですの。そのような皇帝の考えを継ぐという形で名前を頂いているのです。」

「混血を許さないってのは、むしろ差別的な視線があるようにも思えるんだけど、そのの所はどうなの？」

アーム自身、何故か分からないが、さっきから質問ばかりしている。なんとというか、この部屋の雰囲気がそうさせるのか、セイリスが教師で自分が生徒という図式にどンドン嵌っていつているのである。

「一見するとそうですが、実際、国の行政と擦りあわせてみると、むしろ混血を進める方が種族間の対立を深める傾向にありますの。例えば、国内で混血が進んだ場合、結果的に人口が多い方の種族が有利に働きます。今も昔もそういった事で得をする種族と言えばわかりますかしら。」

「混血が進めばエルフが得をする様になるって事か。」

この大陸でもっとも繁栄している種族と言えば、それはエルフである。それもそのはずで、エルフは特定の土地に何代も棲む事で、その土地に適応した体になるといって、特殊体質を持っているからだ。前に居たヒゼル国にしても、海に適応したシーエルフの国であるし、山へ行けばマウンタエルフに森へ行けばウッドエルフにと、その体を適応させて行く。大陸でもっとも繁栄するのも頷ける能力なのである。

ちなみに、2番目に繁栄しているのは、大陸全土に商売権を持つツリストで、3番目に人間、ランドファーマーはその次くらいで、ドワーフも同じ程度だろうから、実質最下位といった位置づけだ。

「その通りですわ。帝国創始者の種族もエルフでしたから、混血を進めたら、他種族からの批判が大きくなるのは確かでしょうし。」

「へえ、その大フィルゴさんって言うのもエルフだったんだ。だからかな、セイリスもフラウもエルフなのは。」

そう、セイリスとフラウはエルフ種族である。尖った長い耳がその証拠だ。ちなみに、彼女等はこちらに種族名を一度も名乗っていない。エルフはいちいち名乗らなくてもその長く尖った耳を見れば、すぐに見分けが付くからだ。

「一応、純血教にはエルフ以外の種族も居ますのよ？ただ、フィルゴ国は創始者の関係から、エルフ人口が多くなってしまっただけで勘違いなさらないで頂きたいのは、フィルゴ国自体は多民族混合の国家ですの。」

確かに、この国に来てからはエルフを見るのが多いが、他の種族も居ない訳では無かった。

「話が逸れてしまいましたわね。混血の弊害の話ですが、それだけでは無いのですわ。混血が進めば、当然の事ですが、種族間を別ける特徴や能力がどんどん無くなっていきますの。混血一代目まではその後、両親どちらかの種族との子を作れば、再びその種族としての特徴を取り戻しますが、代が進む事でそれも難しくなり、遂には完全な混血種である人間へとなってしまいます。」

人間とは先ほど、大陸で3番目に繁栄していると言った種族であり、自分の出身国であるシライを作った種族だ。人間とはその名の通り、人と人、種族と種族の間と呼ばれ、種族としての特徴を無くした種族とされている。つまり、他種族は皆、混血を進ませれば人間になる可能性があるのである。

「人間化が進めば進むほど人間が有利な国家になるものね。」

「ええ、その通りですわ。人間種族を貶めるつもりは御座いませんが、やはりそれも国家としては不健全。だからこそ、多種族入り混じる国家は、純血法が必要になるのです。」

つまりは、そういった思慮を持った初代皇帝を自分たちの信仰対象とする事で、自分達も同様に思慮深い組織である事を内外に示しているのだろうか。

「なんとなく理解できたよ。随分と変わった組織なんだとも思ってたけど。」

「確かに変わっている所もございますけど、それも理由があって・・・」

まだ話が続くのか。アイルは心が挫けそうになっているのを感じる。

「それだけ理解できれば十分よ。どうせ詳しく知ったって、個人個人で受ける印象は違うんだから。」

突然、講義室の扉が開き、フラウが入ってくる。恰好は旅行中の姿とは違い、修道服を着ている。その恰幅の良さは、まさしくグランドマザーといった風格で、実に様になっていた。

「あれ？リユンさんは？」

入ってきたのはフラウ一人であり、同行していたリユンが居ない。「あの子なら、今は私たちの上司と話をしているわよ。それにしても、あの子はかなり強かな奴だわね。」

「なんの事ですか？」

恐らく、また相棒が何かやらかしたのだろうが、一体何をするのか分からないので不安になってくる。



「当初は、言っていた通り、こちらへの感謝の言葉を話していたけど、合間にあなたたちの仕事内容を織り交せて伝えていたわ。そして、上司が興味を持ったらしくて、内で一度雇ってみたいって話に発展したのよ。」

ああ、じゃあ、リユンの予想通りの展開になったのか。彼が嫌らしく笑っている顔が頭に浮かぶ。

「それならアイムさん達とはもうしばらく、一緒に居る事になるのかしら。」

セイリスは手を合わせて喜んで見えた。彼女の場合、純血教について教える機会が増えたという事からの喜びだろうが。

「詳しい事はあの子が帰ってきてからってことね。暫く滞在するにしても、私たちと常に一緒にいるなんて事はないだろうし。」

「ところがだ、俺達がどんな風に仕事を進めるのか知りたいらしいので、君らには暫く、俺達の仕事を手伝って貰う事になった。」

リユンは話し合いから戻ってくるなり、そう言い放った。

「ちょ、ちょっと待ちなさいな。なんで、あたし達があなたの手伝いをしなくちゃならないのよ。」

フラウはリユンの言葉に大層驚いたらしく、ドモリながら声を上げる。

「だから、俺達の仕事について知りたいらしいんだよ。結構、面白おかしく仕事内容を話したのが効いたのかもな。」

面白おかしくという言葉の裏について聞いてみたい気がする。

「いったい、どの様な事を話したのかしら。」

セイリスもこの展開には疑問を覚えているようだ。こちらとしても、どの様に話を展開して行ったのかはわからないが、この様な結果になるのはなんとなくわかっていた。

「肝心の仕事内容については、どうなってるんです？農作業に関する事なんだから、多分、僕の仕事になるんでしょうけど。」

「まあな、なんでも純血教内部の土地で作物を育てようって事にな

つているんだが、どうにも土が悪いらしく発育が良くないらしい。その改善を頼みたいんだとき。成功すれば、ある程度の報酬を払ってくれるらしいぞ。」

それなら、なんとかなるかもしれない。これでも農民歴は長いのだ。土や気候なんかの状況を見れば、打開策を見つけられる可能性がある。失敗したら、失敗したで、こちらにも向こうにも被害が出るという事も無さそうだ。

「そりゃあ、難しいんじゃないのかい？確かに教団内部で食料の自給を行えないかって話は随分と前に出てたはずだけど、中々進展せずに終わったはずよ。」

「そりゃまたどうして？」

これからの仕事に関する事なら、詳しい話を聞いておきたい。

「土が悪くて発育が良く無いって話だけど、教団だけの話じゃ無く、このあたりの土地全体に関する話だからよ。昔からここは、ちよつと理由があつて作物が育ちにくい土地柄なのよ。」

とは言われても、状況を見てみない限り、判断の付けようが無い。「そういえばそうでしたわね。リュンさんが話した司祭様はなんとおっしゃったんですの？」

司祭とは彼女等の上司の事だろう。だいたい教団内で上の立場なら司祭の呼ぶと相場は決まっている。

「明日の朝、詳しい状況とこれまでその土地の農作業に関してどんな事をしてきたのか、資料にまとめ、こちらに伝えてくれるらしい。仕事をどう進めていくかはそれからだな。」

「夜になってあたりも暗くなって来ましたし、これから土地を見てつて言うのも難しいですから、その方が丁度いいですね。」

そもそも農作業とは朝と昼に終わらせる物であり、夜にするのは作業ベタな証拠だ。

「そういう事ならこっちは止めないけどね。でも後悔するんじゃないよ。何人か農業従事者も呼んで相談した事もあるけど、その結果が今の状態なんだから。」

仕事の前に不吉な事を言わないで欲しいが、フラウにとっては親切心からなのだろう。

「でもフラウ、リユンさんやアイムさんだってそれが仕事なんだから、仕方無いじゃありませんの。それに、案外、どうにかなってしまつかもしれませんし。」

「あはは、そう考えてくれた方が、こつちも気が楽だね。まあ、それもこれも、明日の朝、仕事場を見てからだけだ。」

どんなに話をした所で現場を見てみなければ始まらない。

「なら、教団の部屋が幾つか空いていますから、そちらで休んで頂ければ宜しいですわ。朝からここで仕事をされるんですもの。」

「そりゃあ、嬉しい話だな。これから宿を探さなくちゃいけないと気が重かったんだ。」

リユンの顔には純粹な喜びの顔が浮かんでおり、怪しげな笑みは浮かべていない。良かった、宿を用意してくれる所まで計算に入れていたんじゃないかと、一瞬、ヒヤリとしたのだ。

「そういえば、ちゃんとした部屋で休むのは久しぶりだな、最近は何船や馬車の上で寝てばかりだったから。」

「あら？あんまり期待されても困りますわよ。それほど上等な部屋と言う訳でもございませんから。」

セイリスはそう言ったが、部屋はそれ程悪い物では無かった。少々手狭だが、清潔でしつかりとしたベットが二つあり、何より地面が動かないのだから。

教団本部周辺の土地が農業に向かない理由は、フィルゴ国から北東部に位置する火山が原因である。イタ山と呼ばれるその山は、定期的にその火口から噴煙を出す。噴煙から出る灰は、想像以上の広範囲に降り注ぐらしく、教団周辺の土地も気流の関係からちよつど、灰が降りる場所なのだそうだ。

「つまり、その灰のせいで土地環境が悪化して作物が良く育たないと。」

「はい、灰の影響は教団本部設営の際から問題視されていたのですが、当時は資金面が厳しい状況だったらしく、むしろ灰が降るから土地も安く購入できるといふ事で、無視される形になったそうなのです。」

セイリスの説明を前回の教団についての講義とは打って違って、アィムは真剣に聞く。仕事であるという理由もあるが、根が農家なのである。

「灰については良くも悪くも無いんだけどなあ。水捌けが良すぎて、麦や稲なんかはあんまり育たないけど、地中に埋める様な作物ならむしろ良く育つし。」

地面に触れ、薄っすらと地面に積もっている灰に触れる。現在、アィム達は教団が指定した農作地に居るのだ。

教団内で一泊し、朝になって教団から土地に関する資料が届き次第、ここへ向かったのである。

「でも稲と麦が育たないってのは致命的じゃないのかい？ 私たちは教団内の食料自給を目指しているんだからさ。」

同行しているフラウも話します。確かにフラウの言う通り、主食関係の作物を育てるには、水もちの良い土地の方が優れており、この土地がそれに向かないというのは、かなりやっかいだ。

「芋関係ならどうです？ あれならこの土地に向いてるし、主食にもなる。」

なにより腹持ちが良く、大量に生産できる。

「それも考えたんだけどねえ、何故かそっちも上手く育たないんだよ。」

「芋が育たないんですか？ なんてだろ。」

芋は特に耕してもいない土地に埋めたとしても、成長する植物であり。他の植物が育たない様な状況でもスクスクと育つ作物なのだ。本来の農作地以外の場所にとりあえず埋めておいて、いざと言う時には非常食として取り出すといった使い方もされるくらいである。

つまり、その芋が育たない場所と言うのは、普通とは違う、なん

らかの理由があるはずなのだ。

「うーん、土が悪いのも、灰じゃなくて別の理由があるのかも。」  
アイムはランドファーマーの目線で土を見る。その目にはランドファーマーだけが見れる地霊が映るが、どこか普通の土地より数が少ない。

「別の理由ですか？前に土地を見てもらった農家の方は灰のせいだろうと申しましたが。」

「別に灰自体はそんなに問題じゃあ無いんだよ。育てる作物を選ぶっただけで、むしろ肥料になる物だし。農家ならそれくらいわかってるはずだから、多分、舐められたんじゃあ無いかな？」

初めて農業を始めようとする人に農家達は少し冷たいのだ。地道な作業を繰り返す農家は、つい内に籠りがちになり、新しい変化を嫌う様になる。

「でも、土地の悪さについては多分、本当にわからなかったんだと思うよ。調べようと思えば、結構、労力があるし、相談を受けた程度の話じゃあ、そこまでやる義理も無いって考えたんだろうさ。」

「私、農家の方々はもっと優しい人たちだと思っていましたわ。」  
セイリスは少し頬を膨らませる。彼女なりに怒っているのだろうが、そんなに怖くない。

「教団内で自給用の作物を育てようって言うんだから、商売敵にもなるだろうからね、あんまり、手伝うのは向こうも良い気はしないさ。」

農家だつて商売なのだ。親切心だけで、自分達の商売圏を狭めようとは思わない。

「まあ、それも農家側の問題だからね、僕らは教団から報酬を貰う予定なんだから、出来る事はするつもりだよ。」

それでも、現状をどうにかできるかは実際問題わからない。

「こういつた状態で一番、疑わしいのは日照関係なんだけど、ここ  
の天気つて他よりおかしいとか違っていたりしないのかな？」

「天気かい？時々、灰が降る以外は特に変わらないと思うけどねえ。」

「 フラウの答えは、ある程度予想していたとは言え、ありがたい物だった。さすがに天気に関しては、こちらでどうしようも無いからだ。」

「 となると土の問題かな。でも情報が足りないかも。」

「 教団からの資料では駄目なのですか？」

「 土に関しては、できるだけ広範囲で一定の距離ずつの情報が役に立つからね。教団内部だけじゃ無く。周辺の土地に関して、どうなってるのかも知っておかないと。」

「 周辺の土地を調べる事で、土壌の問題がどこまで広がっているかわかる。そして、その範囲から何が原因で土が悪くなっているのかを調べ易くなるのである。」

「 そういった事なら俺がやるのか。農業関係については口を出せないが、調査や聞き込みくらいなら出来るだろう。」

「 今まで黙っていたリユンが喋り出す。確かに、農業関係には口を出さないつもりだったのだろう。」

「 なら頼みます。農作業用の土地についてもですが、一般家庭の菜園なんかについても調べてくれると嬉しいです。情報が広範囲かつ細かなほど、問題点がわかり易くなりますから。」

「 リユンなら足も強いし、口も上手い。効率よく情報を集めてくれるだろう。」

「 了解した。一日あれば、なんとか集められると思う。それまで、お前は どうする？」

「 そうですね、もう少しこの場所で調べてみる事にします。セイリスとフラウさんは、とりあえず、休んでくれて良いですよ。暫くの間は、見ていると特に進展とかありませんし。」

「 二人にはやつてもらおう事もあまり無く、居ると気まずくなるだけなので、むしろ率先して休んでもらいたい気分である。」

「 そうかい？ だったら、そうさせて貰おうかしら。」

「 アイムさんもリユンさんも、一区切りしたら休んで頂いても良い

のですよ？何も2、3日で、すべてを解決しろなどと言った依頼でも無いのですから。あと、相談する事があれば、私たちの作業場を教えておきますので、そちらに来て下されば、いつでも相手をさせて頂きますわ。」

そうは言っても、仕事は早めに終わらせる方が良く、彼女達に負担を掛けるのも気が引ける。

「それじゃあ、何かあったら相談させてもらおうよ。」

その言葉とは裏腹に、できる限り独力で解決しようと思心に決める。どうにもセイリスの言葉には、こちらに対する信頼があるからだ。

これまで同行した期間が短いはずなのに、その様に信用されている以上、なんとか答えたいという気持ちが沸いたのである。

意気込みに対して、いつも結果が付いてくるかと言うと、そんな訳が無く。アイムは夜になるまで、農作地を調べるも、原因をなかなか掴めずにいた。

教団が農作地として選んだだけあって、日差しも悪くなく、降る灰も土に害を与えるほどの物では無い。では、他に土地環境を悪化させる原因があるのかと、調べてもこれと言って、問題がある様には見えないのである。

頼みの綱は、もうリユンが集めてくるはずの情報だったのであるが、

「作物が成長し難い土地は、灰が降る場所に限定されている様だ。他の場所はむしろ発育が良い土地だから、原因はやはり灰なんじゃ無いか？」

出た結果は、前進するどころか、振り出しに戻る様な物であった。

アイムとリユンが話す場所は、先日セイリスが教団についての説明を行った講義室であり、講義室内の机にはフィルゴ国の地図とリユンが集めた情報のメモ書きが、地図に合わせて置かれている。

状況を整理して、何か有益な発想が出ない物かと考えての事だが、どう見ても、灰が降る地域にのみ、土地環境の悪化が広がっている。

「でも灰が原因だとすると、灰が降るのを止める訳にも行かないし、屋根を付ければ日が当たらなくなる。どうしようも無くなりますよ。」

「素人だから良くわからんが、灰で土が駄目になるのは灰の中の毒みたいなのが、植物に悪影響を与えてるって事なんだよな？だったら、解毒みたいなのはできないのか？」

かなりニュアンスが違うが、リユンの言っている事は的を射ている部分がある。

「土中に植物が嫌うような物がある場合、農作地を水田化させる方法というのがありますけど。」

「水で土を洗うって事が。しかし、この土地は水捌けが良すぎるとか言っていないかったか？」

確かに、降る灰のせいか、それとも土地特有の物か、土にあまり水が溜まらないのである。

「あとは、まあその毒に対して解毒作用とある物を撒くって事です。灰つてむしろその解毒用に使われる物なんですよな。」

植物を同じ土地で育て続けると、何故か植物が育ちにくくなる。

土中の栄養が悪いのかと、肥料を撒いても環境は変わらない。そこで、様々な物を撒いた所、何故か灰を撒いたら環境が良くなるという事があり、灰とは土地にとって良い物と見られる部分がある。

「それでも、集めた情報の結果は、灰が降る場所に被害が出ているんだぞ。灰が毒になるって事は無いのか？」

「なんでも大量に撒けば、それが何であろうと毒になり得ますけど、あの程度の降灰量じゃあ、毒には・・・。」

ちょっと待て、なら目で見る以上に灰が土中に含まれていたらどうだろう。

「どうかしたのか？」

「リユンさん、明日、またちょっと情報を集めてくれませんか？今度は土地に関してじゃなくて、この国の文化について。」

もし、想像した事が的中しているのであれば、それで原因が判明



するはずだ。

「文化つて、いくらなんでも範囲が広すぎ無いか？」

「だったら、とりあえず国の建築物に関する物とか、本当はいろんな方面から調べたいんですけど、多分、原因はそこにあると思います。」

「建築物について？まあ、良いけど、それって農業に関する物なのか？」

この国に限つての事なら、大いに関係する物だと考えられる。

「まあ、それも、実際に調べてみればわかると思います。こっちはこっちで調べてみないといけない事があるので、そうですねもう一日あれば、こっちの準備が出来ると思いますよ。」

本当は、もう2、3日欲しい所であるが、まあ労力を掛ければなんとかなるだろう。

「なら俺も一日でなんとか調べてみるか、しかし文化となると、聞き込みだけで調べるのはちよつとなあ。」

「セイリスやフラウはこの国出身者だから、何か知っているかもしれませんよ。もう一度、会ってみましょう。僕もちよつと貸して貰りたい物がありますから。」

「貸して貰いたい物？」

「ええ、コップが二つ。あとは、備蓄している植物の種なんかあれば良いんだけど。」

### 三つ目は仲間の数(3)

フィルゴ国に来て3日目の朝になる。そろそろ観光でもしてみたい気分になるが、残念ながら、まだまだ仕事をしなければならぬ。部屋のベッドから起き、枕元を見る。そこには昨日、セイリスに借りたコップが二つ置いてある。当然、空では無い。そこに入っている物は、今回の仕事が上手く行くかどうかを決める大切な物である。

昨日の夜、リユンが集めてきた情報を合わせると、おそらくこれで、この土地の問題は解決するはずである。

コップの中にある物が丁度良い状態になるのが、昼頃であると考えられるので、その時間に合わせて、セイリスやフラウと例の講義室で待ち合わせしている。

つまり昼頃までは、少し暇なのである。だからといって、町に出かけるという気分でも無い。やる事を残したままだと、心の底から觀光を楽しめないからだ。

暇つぶしにと、同室に居るはずのリユンを探すが部屋に居ない。どうにもリユンは部屋の中に居る事が少ない気がする。彼に頼んだ仕事は、もう終わっているの、どこかを走り回っているという事も無いだろうが、彼は彼なりに時間潰しをしているのかもしれない。ならば、自分もさっさと起きて、昼までの時間を潰そうと思う。とりあえず、町に出る気は無いが、教団内部を歩き回るくらいはしよう。

部屋を出て、人の流れにそって歩いていると、教団の食堂に着いた。そう言えば、朝食の時間である。朝から教団の内部に居る者となると、教徒以外には居ないだろうから、ここに行き着くのは当たり前前の事かもしれない。

臆せず食堂に入る事にする。教団に仕事を頼まれてから、食事は

教団側が出してくれているので、値段を気にする事なく、食事に取りつけるからだ。

食堂内を見渡すと、そこにはリユンが居た。ちょうど彼も食事に来ていたようだ。というより、もうすでに、半分くらいは皿の上から消えていた。

「朝食に行くんなら、誘ってくれば良いじゃないですか。人を寝かしたまま、一人で行くなんて、付き合いが悪いですよ。」

そう言いながら、食事を続けるリユンに近づく。

「悪いが、部屋にはそもそも戻っていないんだ。睡眠は講義室で摂ったからな。そこから、食堂に向かったんだから、お前を起こすのは手間になるだろう。」

失礼な事にこちらに向く事も無く、そのまま食事に専念している。

「そういう所で寝てばかり居ると風邪をひきますよ。なんか寝る時に変な癖でもあるんですか？」

「別にそういった事は無いと思うんだが……。」

自信が無いのか口籠る。話が続かないので、アイムは食事を取りに行く事にした。配膳場には食器棚の横に、食事の配給係があり、自分で食器を取り、配給係に食事を食器に入れて貰うという形になっている。

そこに並び、食事を貰い、リユンの座る席の前へと、自分も座る。食器の中には白パンとコーンスープにカラフルな野菜のサラダと卵までついていた。朝食としてはかなり豪華な部類である。

「なんか申し訳無いですね。毎回、こんな食事を頂いちゃって。」

「あそこで並んで貰ってきたんだろ？なら教団が教徒用に出してる食事なんだから、そんなに遠慮する事も無いだろう。本来出す食事が2食程増えただけなんだからな。」

まあ確かにその通りだが、感謝くらいはするべきでは無いだろうか。

「でも、考えてみれば教団の人たちって毎日、こういう物を食べてるって事なんですよ。教団って言うくらいだから、寄付で成り立

「つてるんだろっし、そんなにお金があるともしえないんだけどなあ。」

「自給用の作物を育てている状況であれば、自分達に仕事を頼むはずも無いので、その選択肢も消える。では、この目の前にある食事は、どうやって用意したのか。」

「金ならあるだろう。国からの助成金やらなんやらがな。」

「リユンは何を当たり前のことを言っているのかといった顔をしながら答えてくる。」

「え？こことて、宗教団体ですよ、なんで国からお金を貰えるんですか。」

「そりゃあ、純潔教は事実上、フィルゴ国の国教みたいなもんだからな。セイリスから純潔教の歴史を教えて貰っただろ。」

「確か、純潔教は帝国文化を守るために生まれたという話だったと思う。」

「純潔教の歴史はそのまま、この国の歴史でもある。フィルゴ国はこの国で言う所の古代帝国の末裔であり、純潔教はその帝国の文化を支える存在だからな。お互いに依存し合っているのさ。」

「依存という言い方は反発を呼びそうに思うが、要するに互いの益になる存在と言う事だろうか。」

「それじゃあ、純潔教ってこの国の援助で成り立ってるんですかね。」

「だとすると、随分、俗っぽい宗教である。」

「持ちつ持たれつの関係だと言っても、そこまで依存してる訳でも無いな。教団独自の財源がある。」

「財源ですか。なんだか、面白そうな話じゃないですか。」

「金銭面の話であれば、それが詰まらない話であるはずが無いのだ。」

「そんな良い話じゃないさ。教団はな、帝国の資料とやらを大量に保管しているんだよ。」

「資料？それが何かの儲け話に繋がるんですかね。」

「古代帝国とやらが本当にあったのかは分らないが、その資料の価

値は本物らしい。内容は帝国の文化から統治方法、商業圏の拡大と言った多岐に渡る物で、教団はその知識を元に国家的知識の探求を行ってきた。」

「時代遅れにならない様について事ですね。」

「そうだな、そして、それはフィリゴ国だけで無く、他の国にとっても知りたい知識である訳だ。」

おおよそ、内容が理解出来た。

「つまり、その知識を他の国に教える事で、自分達も見返りを求めると・・・。あれ？それって僕らのやってる事と同じじゃないですか。」

「その通りだ。教える知識に違いがあれど、やる事は一緒だ。だから、教団は俺達に仕事を頼んできたのさ。俺達がどの程度、仕事が出来るかを知るためにな。」

つまり、教団は自分達と同業者という事だ。向こうから見れば、こちらは規模も経験も弱小な新人と言った認識だろうが。

「もしそれで、何等かの結果を出したら、向こうはどういった対応をしてくると思いますか？」

「そうだな、ここで失敗する様だったら、捨て置かれる事になるだろうな。自分達の活動を邪魔される事は無いと考えて。」

ならば、ある程度の成果を残したならどうなるか。

「こちらが仕事を成功した場合の対応は二つ。一つ目は俺達を取り込もうとする。同業者である程度の成果を残せる人材が居るんだ。自分達の仲間にしらない手は無い。」

「それで二つ目は？」

「俺達を潰そうとする。これは俺達が教団に敵対する様な意思を見せた場合に起こり得るな。新参者が自分達の邪魔になるのなら、潰してしまえと、俺だつて考える。」

当然、こちらとしては前者の側に立ちたい。

「なら、教団側とある程度の信頼関係がある方が良いでしょうね。セイリス達と仲良くなったのは幸運だったのかな。」

「そうだな、自分達の部下が紹介してきた形になるから、それなりの信頼は当初から得られていると考えられるだろうな。それにしても……。」

喋りながら食事を続けていたリユンが、その手を止め、あの不気味な笑みを顔に浮かべる。

「なんですか？」

「随分とビジネスライクな考え方が出来る様になったじゃないか。彼女らと出会えた事がなんの幸運になるって？てつきり、教団に頭を下げる形になるから嫌だ。なんて事を言っと思っただが。」

確かに、そういう気持ちは多少ある。

「一応、この仕事で生きていく事を決めたとつもりですからね。考えだつて厳しくも成りますよ。彼女達に出会った事自体は偶然なんだから負い目なんてありません。」

教団の頭を下に付くという点も、これから自分達が経験と成果を積んでいけば、なんとか出来る事なのだ。今は、多少状況が悪くなるうとも、自分達の利になる事を考えなければならぬ。

「よしよし、良い傾向だ。それでこそ相棒にした甲斐もあるつてもんだ。あと、これは蛇足だが、彼女らと出会った偶然については一概にそう言えないぞ。」

「え？もしかして、それも計算して出会った事とか言いませんよね？」

だとしたら、もう予知能力者の域である。

「言わん。ただ、彼女らと出会ったのはヒゼル国からの船の上だろ。つまり、彼女らはヒゼル国に用があつたって事だ。その用つてのはなんだつたんだろうなと思つてな。」

彼女達が、教団の宣教師として旅をしていた以上、その関係の仕事だと思つが。

「もしかして、僕らがヒゼル国でした仕事と関係があります？」

ヒゼル国での仕事はヒゼル国を牛耳る商船組合とそこからあぶれた農家達の交渉と言う物だったが、リユンがわざわざ話を持ち出し

てきたと言ふ事はそれに関係する物なのかもしれない。

「そうだ。あの国は商船組合という組織構造によつて、問題が発生し始めた状態だった。その直接解決のために俺達を雇つた様だが、それは言つて見れば場当たりの解決でしかない。商船組合としては、それに平行して抜本的な解決を図りたいと考えるのが普通だろう。そして純潔教は自分達が研究する国の統治方法を諸外国に売り歩いている。」

売り歩いていると言へば、印象が悪いが、まあ実際やっているのだから文句は無い。

「つまり、僕達とセイリス達は同じ依頼人に似たような仕事を頼まれた間柄だつたつて事ですね。そう言われれば、出会つたのも偶然とは言い難いなあ。」

「まあ、でも、必然とも言えんから、これは話の種程度と言つた物だな。おかげで食事中も飽きずに続ける事が出来ただろ。」

言われて、自分の手が無意識に食事を続けていた事に気付く。

「人が話を続けているのに、バクバクと食事を続けやがつて、失礼な奴だな、お前は。」

「それつて人の事言えませんよね。」  
お互い、どこか似たところがある様だ。とりあえず、息のあつたコンビであると思いたい物だ。

これから教団に見せる事になる仕事の成果は、二人でそれなりに苦労して出した結果なのだから。

食事を終え、一息いれれば、今回の仕事の結末まで、あともう少しの時間だ。リユンと二人で講義室に向かい、そこで準備をしていると、セイリスとフラウが入ってくる。

「てつきり、農作地で説明するのかと思つていたけど、講義室でなんで、どういふことかしら。」

入ってくるなり、フラウにそのような言葉をかけられるが、それにも理由があるので説明する。

「ちょっと地理に関する話や、資料を広げる必要があるんでここで説明させてもらう事にしました。十分に説明できると思えますよ。」  
言うなり、机にフィルゴ国の地図を広げる。そこには幾つかの印があり、その印は教団本部がある場所にも付けてある。

「地図にある印は、作物が育ち難い場所を示した物です。見ての通り、灰が降る地域と一致している。」

「という事はやっぱり、原因は灰という事ですか？では、農作地の改善は難しいのでは。」

セイリスが不安気にこちらを見てくる。

「当初はそう思うしか無かったんだけどね。でも、降る灰の量は、地面に悪影響を与える程の物では無いという事が、どうにも引っかけたんだ。だから、他にも土地が悪くなっている理由があるはずだと考えた。」

「それでは、何かを見つけたのですか？」

「いや、やっぱり原因は灰だったよ。でも火山から来る灰だけが原因じゃ無かったんだ。」

そう言いながら、机の上にある資料を手に取り、説明を続ける。

「火山以外の灰かい？それがどう土を悪くしているのよ。」

「例えば、作物に水を与えるのは成長させる上で必ずしなくちゃいけませんけど、与えすぎると、逆に悪影響が出ますよね。灰も一緒なんですよ。適量なら作物の助けにもなりますが、必要以上あると成長を阻害してしまふ。」

説明しながら、手に取った資料で見たいページを探す。

「なら、その必要以上の灰というのはどこから来たのでしょうか。アイムさんの説明では火山の灰では無いのですよね。」

「うん、あの降灰量じゃあ悪影響が出る事はほとんどないね。このフィルゴ国内を除いての事だけ。」

「フィルゴ国自体に何かあると？」

丁度良く、見るべきページを見つけたアイムはそれを地図の上に広げる。



「これはリユンが集めてくれた、フィルゴ国内で伝統的に作られる建物の材料をまとめた物なんだけどね。」

その説明をリユンにして貰おうと視線を向ける。なんとか通じた様でリユンが口を開いた。

「あー、そうだな、俺も良くわかって無かったんだが、とにかくこの国の建築文化についてあれこれ調べてくれと言われてな、それでわかったんだが、この国はあの馬鹿でかい壁があるせいか、あの壁と同じ素材で民家を立てる風土があるらしいな。この教団だって確か、そのはずだ。」

そう、その素材こそ、土地を悪くしている原因だったのだ。

「教団本部を建てる上で必要とした素材と言えば、大理石かい？」

「ええ、その通り、大理石。別名、石灰岩ですね。」

「石灰岩！では教団の農作地を悪くしていたのは……。」

セイリスは合点が言った様な表情を見せる。石灰岩とはその名の通り、石灰が岩となったものである。そして石灰は火山灰と似た性質を持っている。

「つまり、この二つがあわさって土壌の悪化を招いている可能性がある」と考えられるんだ。もちろん、思いついた時はまだ予想の段階だったけど、これを見て欲しい。」

資料の次は一昨日の夜に貸して貰ったコップを二つ取り出す。

「あら、それは。」

セイリスはその事をもちろん覚えていたらしく、どのような用途でそれが使われるのか、興味のある様子だ。

コップの中は空では無く、土が詰まっている。そして片方には一本、植物の新芽が出ていた。

「ちゃんと育つかどうか不安だったんだけど、うまい具合に育ってくれて良かったよ。これはあの農作地の土を使って、植物を育ててみた物なんだけど、片方はそのままの土を、もう片方は火山灰はそのままに土の一部を水で洗った物を使ってる。水洗いは水田化の模倣みたいな物だけだね。」

新芽が出ているのは当然、土を水で洗った方である。正直、土中の栄養も一緒に流れ出ていたのでは無いかと不安だったのだが、過剰な灰という成長を阻害する物が無い分、良く育ってくれたらしい。「これで原因は石灰と火山灰の二つである事がわかった。もともとあの壁や町中の建物から、長い時間をかけて地面に染み出した石灰が、火山灰と合わさった部分にだけ、害を与える状態になってしまったって事だろう。」

「でも、それじゃあ、どうしようも無い状況には変わり無いと思うけど。結局は二つともこの町を移動させない限り、どうすることもできない。」

フラウの諦めの混じった台詞に、希望を与えるため、その対策方法を示さなければならぬ。

「火山灰の方は自然の物ですから、どうしようも無いですけど、石灰の方は建物が原因です。自然が作った物で無い以上、対策はいくらでも可能ですよ。一番てっとり早いのは、農作場の回りを木の板で区切るっていう方法かな？」

収穫用の植物が土中に根を張る深さは案外浅い。つまり、その深さだけ木の板などで、土を区切ってしまうえば、石灰が建物の大理石から染み混む事がある程度防げるのだ。

「そんなに嚴重にする必要も無いですけどね、現在、土中にある灰が多すぎるってだけで、全部無くさなくてもいいんですから。」

「それをすれば、一定の効果が出るって言うのね？」

「劇的な程ってものじゃないですけど、とりあえず、あの農作地の石灰分が抜けるまで時間はかかるだろうし。でも、上手くいけば、農作地として、十分に利用できる土地になると思いますよ。ここにある二つのコップが証拠です。」

まあ、それも教団側がやる気になってくれればの話であるが。

「今回の仕事で、自分が調べられる事は全部やったつもりですけど、実際に作業するのは教団側ですからね、結果まで全部、保障するつもりはありません。」

自分自身が行った仕事について、余計な責任を背負い込むのは、こちらにも相手にも良く無い事である。ヒゼルでの件から、そう考える事になっている。

「でも、確かにこれは説得力のある話だと思えますわ。前に頼んだ農家の方々も、ここまで資料や情報をまとめて貰えませんでしたもの。司祭様もかならず評価してくれます。」

セイリスの言葉に少し安心する。本当は日数が足りなく、証拠集めも十分に出来なかったのが本音なのだ。

別に彼女達が急かした訳でも無いので、期限を伸ばそうと思えば出来たのだが、それはこちらの意地もあるので、黙って置くことにした。

さて、今後、農作地がどうなるのかについては責任を持ってないと言ったが、自分達がした仕事の評価については別である。

セイリスは安心して欲しいと言ったが、評価するのは教団の上層部だろう。もし報酬が貰えないなどという状況になったら、これまでの苦労は水の泡だ。

「だから、早く返答を貰いたいですけど、ぜんぜん無いですね。」  
セイリス達に自分達の作業の結果を説明してから、既に1日が過ぎていた。これでフィルゴ国の滞在日数は5日目となる。

「彼女等はしつかりと上司に伝えてくれたんだ。気長に待たせ。だが、旅人が行った仕事の評価が遅いつてのは、こちらにとっては良い事かもしれないからな。」

リユンは机に肘を立て、片手に持った本を読んでいる。ここは教団内にある図書室である。リユンはこの国の資料を探す際、セイリス達にこの場所について教えてもらったらしい。

「ならいいんですけど。ここの資料を調べる時間が増える分には、まあ良い事なのかな。」

今、自分達が何をしているのかと言うと、今後の仕事に役立ちそうな資料が無いか、この図書館で探しているのである。

「客人が気軽に入れる様な場所だから、重要な物は少ないだろうがな。ただ、この国の独自文化については調べる価値があると見た。」  
昔は帝国、今は国。そんな長い歴史を持つこの国の資料だ。農業についても面白い物があるかもしれない。

「教団と仲良くなったら、もっと詳しい資料とかも見れるのかな。」  
そう思いながら、農業について書かれている本を流し読みしていく。どれもこれも、農業の基本について書かれているのみだが、たまに自分も知らない情報があるのだ。

「ああ、あんた達、ここにいたのかい？司祭様がお呼びだよ、昨日の件に関して礼がしたいんだとさ。」

突然、フラウが図書室の扉を開けて現れる。その顔を見ると、どうやら今回の仕事は成功したらしい。

「礼か、それ以外については何か言っていなかったか？」

リユンが聞くと、フラウは首を振って答えた。

「いや？私は聞いてないわ。」

その返答に、リユンはどうにも考えが外れたと言った様な顔をすする。恐らく、教団側から、自分達と一緒に仕事をしていかないかと言った、返答があると思っただろう。

「とりあえず、その司祭さんに会いに行きましょうよ。お礼って言うくらいなんだから、きつと報酬も貰えると思うし。」

リユンの期待が外れようとも、こちらとしては報酬の方が大事であるのだ。

「今回、私どもが頼んだ、農作地の改善という仕事に対してのあなた方の行動は、こちらにとって満足の出来る物でした。こちらはその報酬です。どうぞ受け取ってください。」

司祭に会う事を許されたアイム達は、今、目の前で喋っている白髪の老人が居る部屋へと案内された。おそらくこの人物が司祭なのだろう。横には畏まって立っているセイリスが居た。

「あの、これ全部がそうなんですか？」

司祭とアイム達の間にある机の上には貨幣の入った袋がある。その中身は、自分達が働かずとも2、3週間は遊んで飲み食いもできるであろう量の報酬が入っていた。

「ええ、あなた方が集めた資料をセイリスから頂きましたが、それはもう、たった数日ほどで集めたとは思えないほどの成果である事を理解できました。」

そう言ってもらえると純粹に嬉しい。誰かの役に立つというのは、それだけで遣り甲斐のある物なのだから。

あと、報酬が予想以上の物だったのも、まあ嬉しい理由の一つである。

リユンの方はどう思ってるのかと考え、横を見ると、なんだか渋い顔をしている。彼は、この報酬が嬉しく無いのだろうか。

「そこであなた方に、純血教として相談があるのですが。」

老司祭は改まって、こちらに話を続けてくる。

「相談ですか？それは一体。」

リユンが口を開く。どうやら、この話を待っていた様だ。

「あなた方の仕事については、多様聞いていますが、これからも旅を続けるのでしょうか？なら、その旅に彼女を連れて行って貰えないでしょうか。」

老司祭は隣に立つセイリスに手を向ける。

「セイリスが僕らの旅に同行するんですか？」

驚いて声を上げる。今回の仕事でお別れだと思っていたのに、ここに来て、おかしな縁が出てきたからだ。

「はい、アイムさん達には申し訳ありませんわ。でも、旅の途中、私を常に護衛してくれていたフラウも、ああ見えて、もう長旅をあまり続けられない齢になるのです。でも、私自身はまだ、様々な国を周り、純血教の教えを広めなければなりません。本当は、変わりの護衛を教団内で探さなければいけないんですけど、そういった方々は不足しているのが常で。」

セイリスが寂しそうな顔をしながら答える。フラウとは長い間、

旅を共にしてきたからだろう。

「もちろん、同行させて頂くのであれば、その報酬をこちらで払わせてもらいます。また、旅先の旅費についても同様に。」

老司祭の言葉は魅力的に感じる物であった。旅をする上で後ろ盾を得た様な物だからだ。

「リユンさん、受けても良いんじゃないですか？別に僕らの方で不都合とかは、そんなに無さそうだし。」

話しかけるが、リユンは渋い顔をしたままで、何か考え事をしてる様な様子だ。

「アイム、お前の方はつまり、セイリスの同行には賛成なんだな。」  
リユンは突然そんな事を言い出した。

「ええ、まあ、だから受けても良いんじゃないかって聞いたんですけど。」

「なら俺も賛成だ。司祭様、その話、受けさせて貰います。セイリス、君も良いのか？」

「はい、既に司祭様の意見に了承したからこそ、ここにいるのですから。」

セイリス自身もフラウとの別れに対する寂しさがあるものの、同行自体に反対では無い様子だ。

「それでは、皆さん、今回の依頼には同意を頂けたと言う事で、急な話になりますが、1週間後までには旅を始めて頂きたいと思っています。宜しいですかな。」

老司祭はニコリと笑うと、こちらに同意を求めてきた。こちらとしてはもっと早い段階でフィルゴ国を後にするつもりだったので、異存など無かった。

「やられたな。」

二人して部屋を出るなり、リユンがその様な事を言う。

「やられたって、何がですか。」

「セイリスを同行させるって話だ。」

どうにも、その件に関して、ずっと渋い顔をしていた様だ。

「そんなに悪い物でしたっけ？」

旅費も報酬も貰えて、万々歳な話では無いだろうか。

「悪く無い、悪く無いからこそ、こちらが嵌められたという事になる。」

言っている意味がわからない。

「セイリスの同行自体はまあ良いんだよ。教団側からの要求を聞いておくのも双方の関係を深めたい、俺達にとっては渡りに船だからな。」

まったくもって、その通りである。

「じゃあ何が問題なんですか。」

「その結果、報酬を貰うって事が問題なんだ。今回の仕事についても、報酬が多すぎる。」

嬉しい事では無いか。

「報酬を一方的に貰っておいて、向こうの意見を一切聞かない。そんな奴をお前はと思う。」

「嫌な奴ですね。」

「そうだ、だから、俺達が一定の信用を得ようと思えば、今後、俺達が旅をする上で教団の意見をいくらか取り入れなければならぬという状況になってしまったんだよ。」

確かに、あれだけの好条件を提示されて、教団側に不義理を働けば、こちらへの信頼というものは無くなるだろう。商売する側にとってそれは痛手だ。

「首輪を付けられたって事ですか。」

「そうだ、セイリスが同行する以上、定期的にフィルゴ国に戻る事にもなるから、かなり強力な物をな。向こうが上手だった。一応、お前にも話し合いの最中に同意して貰ったが、完全に俺の失策だ、すまんな。」

リユンが急に謝ってきたのに驚く。

「ちょ、ちょっと、謝らないくださいよ。仕方無い事じゃないです

か。後で挽回すれば良い。」

「だが、今回の仕事でお前はしつかりと仕事をしてくれたのに、交渉役の俺がこの様だからな。だが、かならず借りは返すつもりだ。」  
リユンは渋い顔から、あの嫌味な笑みを浮かべた顔に変わる。これがどこか頼もしいと感じるのは、絶対に自分の感覚がおかしくなつたからだろう。

「あら、アイムさんにリユンさん。まだここにいらしたんですの？」  
セイリスが後ろの扉から顔を出す。そう言えば、まだ扉の前に立つたままであった。

「何か話をしてらしたのかしら。」

「い、いや、なんでも無いよ。」

こちらの失策に彼女が関わっているという話など言えるはずもない。

「ふむ。ここで丁度、3人がそろっている訳だから、お互い自己紹介でもして置こうと思つてな。これから旅を続けていくんだ、必要な事だろう?」

素知らぬ顔で、そんな事を言うリユンにアイムは、純粹に感心する。

「まあまあ、それは良い事ですわね。それではアイムさん、リユンさん。私はエルフ族のセイリスと申しますわ。これから旅をする仲間としてどうぞよろしくお願いしますわね。」

こちらの考えなんて知らずに、笑顔で続けるセイリスに少しの罪悪感がわく。

終わってしまった事を気にしても仕方無い事だ。ならば、この罪悪感を少しでも払って、自然に接するのが彼女のためかもしれない。

アイムはそんな事を考えながら、3人目の旅仲間になるセイリスに笑顔で今度は、自分の事を紹介するのであった。



## 四つ目は森の中（1）

旅の半分は準備で終わる。道具を揃え、地図を見て、どのような目的を持って向かうのか。それらをすべて行う事が出来れば、旅はもう下り坂であり、終点まで止まる事無く続いていく。

ランドファーマーのアイムにとっては、まだ旅は始まったばかりであるが、旅をする事を決意した時点で、彼の旅は既に終点へと向かい続けているのかもしれない。

だが、旅人にとっての旅は町と町とを繋ぐ各駅停車であり、一つの目的地に着く度に、次の目的地への旅の準備をしなければならぬ。

まだまだ、旅人として初心者アイムでも、それは他人事では無く、先日、旅人としての仕事をこなしたフィルゴ国内で、未だ次の旅への準備をしていた。

「今度は陸路だから、船が勝手に進んでくれる事は無い。シライからヒゼルの様に短期間で着く保障も無い。だから、それ相応の旅道具を揃えておきたい。幸運にもこの国では揃わない物の方が少ないし、金銭的余裕もある。だが、それで油断なんてするべきじゃあ無いな。特に鍬なんぞを持ち歩くなんてのは愚手中の愚手だ。」

アイムの相棒であるツリストのリユンが道端で講釈を垂れている。どれだけ言われようが、鍬を捨てる事なんて無いのに、ご苦労な事である。

「でも、そんなに大変なんですか？次の目的地までの旅って。」

今は町中で旅道具を揃えるため、あちこちの商店を回っている。主に必要なのは、食料品である。その他の物は既に手持ちの物があるからだ。

「確か、アイムさん達は大陸北部を西海岸に沿って南下していると聞いていますわ。そうになると、今度は大陸南部へ西海岸沿いに向か

うつもりなのでしょう？なら、次の国までは、確か森を越える必要がありませんわね。」

アイルムの疑問に答えるのはエルフであり、フィルゴ国の由来の純血教徒、セイリスである。彼女はつい最近、自分達の旅仲間になった。

「森か、迷わないかどうか心配だね。磁石買いません？磁石。」

森の中で方角が分からなくなって迷うというのは、良く聞く話である。

「当然、用意するつもりだ。あと注意したいのはドラゴンだな。大陸西海岸南方にあるドワーフの森には森のドラゴンが棲む。海のドラゴンと違って、お前が想像する様なドラゴンだが、会いたいなんて思うなよ。」

当たり前だ、ドラゴンに関しては海の上で懲りた。

「というより、ドワーフの森ってドワーフが棲んでるんですか？ドワーフという種族には会ったことが無い。」

「ああ、彼らも森に棲む種族だからな。どうやってか知らないが、森のドラゴンと共存しているらしい。」

それは凄い。ドラゴンと言うくらいだから、あの海で出会ったドラゴンのように棲む世界が違う生物だろうに。それと共存するとはとんでもない種族である。

「でもドワーフに出会うという事は、ドラゴンに出会う可能性が高くなりますの。だから、そちらの方も会いたいなんて、考えないで下さいましね。」

セイリスも自分に対して注意してくる。そう言えば、彼女にもドラゴンに興味がある様な事を船上で話したっけ。

「いくらなんでも、そんな事を思いませんって。それに、森のドラゴンだって、そうそう会う物じゃないんでしょう？海のドラゴンだって珍しい物なのに、そんな偶然続きませんって。」

「確かにその通りですわね。」

あらあらとセイリスが笑う。釣られて自分も笑い出す。

「……。」  
ただ、リユンだけが笑っていない。こういう会話自体が不運を呼びそうな気がするからだ。

良い予感はずれる事が多いのに、悪い予感が当たる可能性が高いのはどうしてだろうか。

実際はどちらも、自分の運頼みである事は変わらないのであるが、そうになると自身が不運である事も認めてしまう事になりかねないので肯定するなどもつての他である。

何故、現在、その様な事を考えているかと言うと、丁度、運悪く森に棲むドラゴンに遭ってしまったからである。

「おい、これはなんだ、ランドファーマーはドラゴンに好かれる体質でも持っているのか？」

リユンがこちらを睨みながら言うてくる。

ドラゴンに出会ったのは、フィルゴ国を出て数日、ついにドワーフの森の中を進む所まで来たところである。

森と言っても、中には交通用の道が敷かれている。だが、それでも道幅は狭く、ここまでは、乗り合い馬車に乗ってきたのだが、森を抜けるまでは徒歩である。アイム達はその道を通り、森を抜けようとしていた。

それは地響きを立てながら、こちらへとやって来た。鱗に覆われたトカゲの様な体に翼を生やし、頭に角が二本。そして、普通のトカゲとは比べ物にならない程の巨体で木々の薙ぎ倒しながら、それは現れたのだ。

「海のドラゴンが現れた時は、ここに居る三人とも船に乗っていたでしょう。だったら、僕だけの責任じゃないですよ！」

木々の間に隠れながら、お互いの不運を罵り合う。ドラゴンが自達の前に現れる前に、その予兆は、あの巨体から出る音と振動で分かっていたので、この様に隠れる事が出来たのであるが、それもあまり意味の無い物かもしれない。

「二人とも静かにして下さいまし。どうやらドラゴンはこちらに特別敵意を持っていない様子。ならこちらが姿さえ現さなければ、どうにかされるという事はありませんわ。」

セイリスはそう言うが、あの凶暴な外見から、例え敵意が無くても襲ってくる気がして怖いのだ。

「それにあいつ、あれだけ大きな体しているくせに、移動の速度が随分と遅くない？いつまでここに隠れていればいいのか・・・。」

「いくら大きいといっても、森の木々よりは背は低いみたいですから、あまり早く動くと、ドラゴン自身が怪我をしてしまうのでは。」

だとすると、もう暫くはここで隠れるしかない。夜が来るまでには、森を抜きたいと考えていたが、それもどうなる事だろう。

結局、ドラゴンが無事、こちらの安全圏まで通り過ぎた頃には日が傾き始めていた。

「このままだと、森で一夜を過ごすことになりそうですわね。」

暗くなりつつある空を見て、セイリスは深刻な顔をしながら話す。

「やっぱり、森の中での野宿って危険なのかな。」

「そうだな、森ってのは、他の場所より生き物が多いんだよ。当然、その中には危険な生き物も含まれている。キャンプ地でも用意されてなきゃ、そうそう、したいとは思わないな。」

アイムの疑問にリユンが少し考え事をしながら答える。どうにも、自分達は少々、困った状況になっている様だ。

「旅慣れた人物であれば、一気に森を抜けてしまっそうですけど、私達の現状を考えると、それも難しいかと。」

順調に行けば、そろそろ森を抜けるはずなのであるが、それにかける時間の半分近くをドラゴンから隠れる事に費やしてしまっている。

つまり、このまま歩き続けても森を抜けるには、夜も歩き続けなければならぬ。ただでさえ危険な夜道で、道を外す可能性すらあ

る。森の中で道に迷うハメになるなど、想像もしたくない事であった。

「ひとつ、当てがあるんだが。あまり気乗りしない当てだけだな。」  
リユンは自分の考えていた意見を言う気になつた様であるが、どこか浮かない表情をしている。

「この際、そんな事も言つてられないでしょう。」  
「この際、そんな事もあるなら縋っておくべきだ。」

「うーん、その当てって言うのは、ドラゴンが居た以上、それと共存するドワーフの集落が近くにあるかもしれないって物だ。」

「それって、日が暮れるまで森に居るハメになつた原因に自分達から近づいていくってことですか？」

ドワーフとドラゴンが共存しているのなら、つまりはそういう事だ。

「だから気が進まないんだよ。なんで一夜の安全のために、わざわざ虎穴に入らなきゃいけないのかって話だからな。それに本当にあるのかもわからん。」

「なら、その案はあまり意味の無い物だろう。このまま、野宿をするよりも危険な選択肢を選ぶというのは。」

「一応、森の入り口で、簡単な地図を頂いたのですが。確かに近くの場所にドワーフの集落があるみたいですね。それも緊急避難場所などと書かれていますわ。」

「え？」

「釣られて地図を見る。確かにそこには、緊急避難場所、ドワーフの里。森の中で歩くのに疲れたら是非ココへと赤字で書かれた文章が地図にあった。」

「何か詐欺に遭っているんじゃないかと心配なんですわ。」

果たして、そこにはドワーフの里が存在した。森を通過するための道から逸れる形で、もう一つ道が存在しており、その先には小さな集落が存在しており、きっちりと看板で「おいでませドワーフの

里へ」と書かれていた。

「いや、俺もドワーフは排他的な種族だと聞いていたんだが……」

なんでも、そのせいで種族としての生態や行動などが殆ど知られていないそう。ただ、知性自体は他の種族と変わらないので、大陸で、自らの権利を主張できる種族の一つとして認められている。

「でも、この看板を見る限りは、それ程、悪く扱われるという事も無さそうですね。もしかしたら、泊めてくれる宿の様な物があるかもしれませんわよ。」

確かに、集落自体は森を切り開いて出来た土地に、そのまま木材を使って建てた家々が並んでいる。思ったよりも町として機能している雰囲気はある。

「ちゃあんとありマスヨ。旅人の方専用の宿ガ。」

間延びした台詞が視線の下側から聞こえる。

「うわ、なんだ！」  
驚いて下を見ると、そこには身長が小さく、その割には横幅がとてつもない男が居た。

「なんだじゃあないデス。ワタシ、ドワーフのポル言いマス。村で宿を経営してマス。看板を立てたのもワタシデスヨ。」

何故片言なのだろう。この大陸にある言語は大陸公用語のみなので、片言な言葉になるはずが無いのだが。まあ、とりあえず、どうやら彼はこの里のドワーフらしく、アイルム達を自分の宿へと誘っているようだ。

「それは良い事ですわ。わたくし達、諸事情で森の中で足止めされてしまい、どうやって一夜を過ごそうか、困っていたところですので宿があるのなら、案内して頂けないかしら。」

背の低いセイリスが、同じく背の低いドワーフに話かけているのは、なんとも可笑しい風景である

「それならワタシの宿に案内スルヨ。心配しなくても格安ダヨ。」

まあ、そこについても心配ではあるが、それ以上にこの集落に漂

う胡散臭さは何なのだろう。

「ポルさんと言ったか。俺達が里に入る事で、里の誰かが不快に思ったりはしないのか？」

リユンも同様に考えていたのか、ドワーフは排他的では無いのかという自分の疑問をポルに向ける。

「なんで不快に思うのデス？旅人さん達、今のところ誰も悪い事してませんヨ？」

ポルという人物は本当に、こちらの意図がわからない様子で返してくる。リユンの情報が間違っていたのだろうか。

「それじゃあ宿に案内してあげマス。シツカリ着いて来てネ。」

ポルはその鈍重そうな体を動かして、里の中へと入っていく。アイム達は里の入り口で立っている訳にもいかず、ポルに着いて行くしか無かった。

宿に着くまでの間、歩きながら里を観察していたが、変わった風景などは無く、通りかかる村人のドワーフも旅人の珍しさからか、こちらに目を向けるも、嫌悪感を持っている様子はなかった。

そんなこんなで、宿に着くまでは別に事件も起こらず、無事に到着したのである。

「思ったよりも立派ですね。」

そこには、この里では一般的なのだろう、すべて木材で作った家がある。他の民家よりも、大型に出来ている様で、外から見た限りは小奇麗にも見えた。

「当然デスヨ。ワタシはコレで商売をしているンデスカラ。」

ポルが自慢気に胸を張っている。当然、宿の中に入ったが、受ける印象は外観を見たときと変わらず、外面だけを良くしているという訳でも無い。

「こりゃあ、案外、儲け物だな。旅人なんかは良く来るのか？」

リユンも感心しながら部屋を見渡す。

「少し前まで八全然来なかったケド、最近は少しづつ来てくれる様

になりましたヨ。ヤツパリ看板を立てテ、地図にも載せて貰ったのが、良かったンデスカネ。」

最初は怪しい雰囲気があったが、ポルの言動を見る限り、彼が一般的な商売人と変わらない様子である事を理解できた。

「実際、宿泊費なんかは幾らくらいなんだ？」

「そうダネ、1泊程度ならコレくらいで良いヨ」

ポルが提示してきた額は、随分と良心的であり、同じ程度の宿であるなら、もう少し値段を張っている。ましてや、森の中で他に休む場所が無いと成ると、まだ高くても良いのでは無いかと感じる。

「本当八、もつと額ヲ上げたいンダケド、マダマダ、来てくれるお客が少ないカラネ。安いと思ってくれたのなら、旅人サンが、旅先でこの事を宣伝シテくれると嬉しいデスヨ。」

言葉は片言だが、言っている事はまともである。話し終わり、部屋へと案内される頃には、すっかりドワーフへの悪印象は消えていた。

「それじゃあ、今晚のゴハンが出来たら呼ぶカラ、それまではくつろいでいて下サイネ。」

ポルはそう言つて、おそらく台所へと向かつて行つた。部屋は二つ用意された。アイルムとリュンの二人部屋と、セイリス用の一人部屋である。こういった気遣いを自分達が言うまでも無くしてくれるのは嬉しい限りである。

「なんか、心配して損しましたよ。しっかりとした人達じゃないですか、ドワーフつて。」

部屋のベッドに座り、一休みしながら、リュンに話しかける。リュンの方も同様で、既にベッドの上で寝転がっていた。

「だな。悪意なんかも感じられないし。しかしなあ、噂で聞いた限りだと、ドワーフはあまり他種族と話したからないし、自分達の集落にも入れようとして聞いていたんだが。」

「この宿にお客が少ないのも、その噂のせいじゃないんですか？実



際は違うんですから、営業妨害ですよ、それ。」

「まあ、そうだろうな。交通の利便性を考えたら、本来、もう少し流行っても良いはずだ。」

現在は日も完全に暮れ、夜の時間帯であるが、自分達以外の客が来た様子も無い。

「じゃあ、旅先でこの森の事を聞かれたら、店主が言っていた様に宣伝してあげるのも良いかもしれませんね。」

「うーん、それは一晩過ごしてから考えた方が良さだろうな。もしかしたら、今晚の飯に酷い物が出てくるかもしれないし。」

「はは、確かにそうですね。」

休みの時間と言う物は早く過ぎる物で、こんな会話を繰り返している内に、ポルが食事の用意が出来たと、呼びに来たのであった。

出てきた料理はまずくは無いが、独特な味をしていた。

「なんとかいうか、肉々しいですね。あと種類のわからないキノコがスープに浮いてたり。」

よくわからない肉を不思議な風味のする香辛料を塗して玉ねぎを和えた焼肉に、キノコスープ、豪勢に肉が入っている。そしてパンにはなんと食べる者を飽きさせないために肉が挟んであるのだ。

「胸焼けがしそうですね・・・。」

セイリスは見た目通り、小食な方なので、こういった料理は苦手だろう。

「ドワーフ族の地域料理って奴なのかもな。こんな森の中に住んでると、文化も他とは違ってくる。まあキノコについては、客に出している以上、毒って事も無いだろう。」

そう言いながら、躊躇なく料理を食べていくリユンには驚嘆するばかりである。

「全体的に味がしょっぱいんだよね。多分、保存食も兼ねているんだと思う。」

口に運んでみた時の味はまずくは無いが、これと言って美味しい

という訳でも無い。そして大量に食べるのは少し遠慮したい。

「わたくし、これ全てを食べる自身がありませんわ。」

「明日も結構歩くから、せめて、このパンくらいは腹に入れておいた方がいいぞ。」

「塩分が多いから、全部食べる必要も無いと思うけどね。」

むしろ、余程体が食料を求めていない限り、これ全部を食べるといっなのは体に悪いと思われる。

「わかりましたわ。せっかく作ってくれた物ですものね。」

そういつてフォークとナイフで少しずつパンを切り分けていくセイリスの姿は、まるで親に食事を残さず食べる様に言われた子どもみたいである。

「皆さん、食事は楽しんでくれてマスカ。」

調理場から出てきたポルは恰幅の良い体に大きなエプロンを着けている。

「え、ええ。大変、美味しく頂いていますわ。」

先ほど言っていた事とは違う発言をするセイリスであるが、彼女を責める者など誰も居ないだろう。

「少ししよっぱいケド、そこは我慢して下さいネ。ココでは保存の効いた物じゃないと、すぐ腐っちゃうカラ。」

彼自身も料理の味自体は理解しているのだろう。申し訳なさそうな表情をしている。だが、聞く限りは仕方の無い事の様な気もする。

「その分、贅沢に動物の肉を使わせて貰いマシタヨ。何の肉かにツイテハ、料理毎に違うから知りタケレバ、一つ一つ説明シマス。どれもこれも森の獲れた動物ばかりデスヨ。」

説明されると余計、不安になりそうなので遠慮しておく。

「森の中での生活ってのは、案外大変そうだな。なんでドワーフはこういったところで暮らしているんだ？」

「ドワーフの生態に關シテネ。少し理由がアリマス。」

詳しく聞きたい事であるが、種族の生態に關しては本人が話す以外の事では、話題に出さないのがこの大陸でのマナーである。

「ふーん、じゃあ客がまだまだ少ないとか言ってたが、この宿は最近始めたのか？」

リユンは別の話題に変えて、話を続けていく。

「そうデスネ。ちよっと前マデ、ワタシたちドワーフの間では旅人を里のナカに入れる様ナ店を作るコトが、出来なかつたデスカラ。」

「あれ？じゃあドワーフが里の中に他種族を入れない話って。」

ポルは話が長引くと思ったのか、こちらの机の空いた椅子に座る。「本当のコトデス。ただ嫌ってイタ訳でも無いんデスケドネ。でも他の種族から見れば、ワタシ達は排他的に見えたデシヨウネ。」

「それも、やはり生態に関する事ですか？」

パンを必死に食べていたセイリスも、気になったのか会話に入ってくる。

「そうデスネ。だからワタシからは詳しい内容を話せマセン。でも、最近はこちらと里に他種族も入れるコトが出来る様にナリマシカラ、安心して下サイ。」

話は終わったが、どうにも疑問だけが残る会話になってしまった。

「ヤッパリ皆さん、ワタシたちの事が気にナリマスか？」

こちらの疑問を感じ取ったのだろうか、ポルは話を続けてくる。

「まあ、気になると言えば気になりますけど。」

偽りの無い本音であるが、無理をして聞きたい訳でも無い。

「皆さん、食事の後は予定がアリマス？ちよっと行って欲しい場所がアルノデス。」

ポルの表情が真剣な物に変わる。

「うーん、近場なら良いが。」

それを見るリユンは、何かを感じ取ったのか、少しの考慮のあと、同じく真面目な顔をして返答する。

「里の端に緩やかな崖がアツテ、そこに一つ洞窟がアリマス。ソノ洞窟の中を暫く行くと、大きな空洞が広がってマス。そこに行つて欲しいノデス。」

「行き帰りはどれくらいの間が必要ですか？」

「それだけなら往復1時間も掛からないデス。怪しいと思うかもデスガ、皆さんの疑問も解けると思いマス。」

「食事を終えて、外出の準備をしてからなら大丈夫だが。」

リユンは洞窟へ向かう事に同意するらしい。

「スミマセン。お客にこういう事をさせるのはイケナイ事だとわかってイルノデスガ。」

ポルは真剣が表情を崩さないまま、席を立ち、その場を去っていた。

食事を終え、部屋に戻るとリユンはどうしたのか、旅支度を始める。

「何してるんですか？洞窟はすぐ近くにあるらしいんですから、そんな準備をしなくても。」

「念のためだ。もしかしたら、あの店主がこちらを騙している可能性もあるからな。」

「そんな風には見えませんでしたけど。」

彼の表情はむしろ、本音を話す者のそれであった。

「俺もそう思う。だが、危険が無いとは言い切れない。洞窟から宿に戻るんじゃないかと、そのまま旅を続けられる服装くらいは、しておいたほうが良い。」

過剰な心配だとも思うが、この場合は経験が上なリユンに従っていた方が良さそう。

「だけど、そう思うなら行かないや良いのに。」

自分で了承しておいて、その事に心配するのはどうだろうか。

「まあ、こっちはドワーフについて何も知らないからな。噂程度でしか聞いたことの無い、ドワーフの生態がわかるかもしれないんだぞ？危険があっても知りたくならないか？」

一瞬うなづきそうになるが、認めると、なにかリユンと同類になりそうだったので、辞めておく。

「セイリスにも伝えておきますか？」

「そつだな、頼む。」

言われた通り、自分の部屋を出て、すぐ横にあるセイリスの部屋の扉をノックする。

「セイリス、ちょっと良いかな。」

女性の部屋に入る以上、こういった行動は面倒でも必要である。

「はい、どうぞ。」

許可を得たので入らせて貰う。

「あら、アイルムさん。洞窟へ行く準備はもうできたのでしょうか？」

当然だが、セイリスは食事を終えた格好のままでリユンの様に旅支度はしてはいない。もししていたら、これが旅人として必要な行為なのかと不安に思っていたところだ。

「リユンさんが旅支度をしてから出かけようって。万が一の事が有るかもしれないからだそうだけど。」

ポルがこちらを騙しているなどといった発言については、話さない事にする。セイリスの性格だと、そんな事は無いと口論になりそうだからだ。

「そう言えば近いと言っても、洞窟内でしたわね。確かに危険があるかもしれないわね。」

納得して貰えた様で助かる。

「だから、そのまま旅に出かけられるくらいの装備をしておこうってさ。リユンさんも心配し過ぎだと思っけど。」

「でも、ポルさんの顔を思い出すと、なんだか凄い秘密が待っているかもしれないわね。」

心なしかセイリスは喜んでいる様に見えた。隠された秘密を明かすという行為に、好奇心が沸いているのかもしれない。

「少し里に寄っただけの旅人に話す秘密というのも、どうかと思っけどね。」

ただ、セイリスが喜んでいるのと同様、自分もこれから何が待っているのか、期待している感情がどこかにあるのは、確かであった。

## 四つ目は森の中(2)

ポルの頼みを聞き、念のため旅の準備を終えて、洞窟に向かう。洞窟まではポルが案内してくれたので、すぐに着いたのだが、

「ここから先はお客さん達で行って欲しいデス。私は入れない理由があるノデ。洞窟内はまっすぐ道が続いてマスカラ、迷う事は無いはずデスヨ。」

という言葉と共に、自分達だけが洞窟へと進む事になった。

「なんか怪しい雰囲気なつて来ましたね。」

入口自体がかなり大きく、人工的に支えられている部分もある、この洞窟の雰囲気は怪しいと言う意味であるが、この洞窟へと誘った本人が、洞窟内に入らないという怪しさについての事でもある。

「まあな、でも進まない訳にも行かないだろう。」

リユンも警戒しては居るが、それでも歩みを止める様子は無い。「二人とも、ポルさんを疑い過ぎでは無いでしょうか。本人が言う様に、何か理由があるのですわ。」

セイリスの方はむしろ、ポルを信用する側に回っている。彼女らしい考え方だ。

「どつちにした所で、進む事には変わりないみたいだし、話の続きは奥にある物を確認してからという事にしよう。」

先に何かあるのか分からず口論するより、自分の目で見た方が手っ取り早いのだ。

洞窟を暫く歩くと、大きな空間が広がる場所へと辿りつく。ここまでの道のりも、それなりで広かったが、ここはそれ以上である。暗いと言つのもあるが、向こう側は霞んで見える洞窟というのは、どれだけの空間が広がっているというのだろうか。

「ここがポルさんが言ってた場所ですかね。」

「少なくとも、ここから先は一本道で進む事も出来ないから、そう

なんだろうが。」

しかし、周りには何も無い。こんな場所で何をしろと言うのだろう。

「あの、お二人とも、よろしいでしょうか？」

この空間に驚いていると、セイリスが話しかけてきた。

「あ、えーと、何？」

意識が別の場所に向いていたらしく、突然のそれに、戸惑ってしまった。

「その、何か、地響きの様なものを感じませんか？」

セイリスは少し、怯えた表情で話す。あたりの様子を集中して観察してみると、確かに揺れている様な気がする。

「本当だ、なんだろう、これ。」

地響きは少しずつ大きくなってきている気もしてきた。というより、確実にこちらへ近づいて来ている。

「ちよつと前に、これと似たような事が無かったか？」

リユンに言われて、こちらも思い出しそうになる。そう、最近の事のはずだ。ドワーフの森に入ってからだろう。森に入って、暫くしてから、こんな地響きが聞こえてきて。

「ドラゴン!？」

やっと、思い出したと思った時、洞窟の向こうから、見覚えのある巨大な影が近づいてくる。

その大きなトカゲを思わせる外見で、こちらへ一気にやってくるのだ。

「みんな!逃げろ!」

リユンが叫ぶが、体が動かない。というより、動かす余裕が無かった。ドラゴンは森の中とは比べ物にならない速さで、その四肢を動かし、彼方に居たはずの影を、はつきりとした姿に変えながら、眼前へと迫ってきたからだ、

体が金縛りにでもあった様に動かない。まるで蛇に睨まれた蛙であった。ドラゴンはこちらを観察するかの様に、こちらを見つめて

くる。

これはいつたいたいどういう事なのだろうか、もしや、本当にあの宿の店主に騙されたのか。自分達はこのドラゴンの生贄に差し出されたのだろうか。

そんな考えが頭の中を巡る中、唐突に場違いな声が聞こえてくる。「おや、もしやあなた達は、ドワーフの里に来た旅人の方でしょうか。」

洞窟中に響く様な、深く重いその声は、当然、アイル達の耳にも聞こえる。しかし、それがどこからの物なのかは理解できなかった。「これは、少し驚かしてしまいましたか？」

まるで、こちらの戸惑いが見えているかの様に再び言葉が聞こえる。ふと、目の前のドラゴンが喋っているのでは無いかと思っってしまった。

「久しぶりの来訪者でしたので、こちらもしやぎ過ぎましたね。私はあなた方にドラゴンと呼ばれる物です。」

「はあ!？」

突然の展開に、そんな間抜けな叫び声を上げてしまう。しかし、この目の前に居る、凶暴な姿のドラゴンから、少々、紳士的な声が聞こえて来たとしたら、誰でも同じ反応をするだろう。

「どうにも、案内役のドワーフの説明不足だった様ですね。どうか戸惑わないで下さい。私は、そちらを襲う意思などありませんよ。」  
目の前のドラゴンは目を薄め、四肢を畳み、敵意が無い事を示すためか、その場に座る。

「あの、本当に、その、目の前にいらっしゃるドラゴンなんですか?」

セイリスも、このあんまりな状況に戸惑っている様だったが、それでもなんとか状況を理解しようとしているらしく、ドラゴンに恐る恐る話しかける。

「ええ、もちろん。間違いなく、私はあなた方の前に居るドラゴンですよ。」



ドラゴンはセイリスの言葉に反応して、頷きながら答える。

「えーと、じゃあ、ドワーフのポルさんが、この洞窟に案内してくれたのって……。」

『私に会わせるためでしょうね。旅人が里に来れば、一度、挨拶を試してみたいと、私の方から言っておいた事ですので。』

そう言っつて、口を釣り上げるドラゴンは恐らく笑っているのだろう。ここにアイム達が来てくれた事を嬉しがっている様だ。

「俺達は、ドワーフの生態について、ここで知る事が出来ると言われて、案内されたんだが。」

リユンの方はこの状況で、なんとか落ち着きを取り戻したらしく、ドラゴンと話を続ける事にした様である。

『ふむ。それならば、確かに、ここに来るべきでしょうね。実際に目を見た方が分かり安いでしょうし。なにより、私の様なドラゴンの事を理解しなければ、ドワーフという種族も理解し難い。』

リユンとドラゴンが話す姿を見ると、何か酷く質の悪い冗談を見せられている気がしてくるが、紛う事の無い真実であるので、目をそらす訳にも行かなかった。

「つまり、あなたは、ドワーフと言う種族に大きく関係していると思う事か？ ドワーフと森に棲むドラゴンは共存しているというのは本当という事か？」

リユンは状況に対する恐怖よりも、興味の方が上回ったらしく、いつもの嫌らしい笑みに表情を変えながら、ドラゴンとの話に熱中しようとしていた。

『共存しているのは本当ですが、その言い方だと、大きな勘違いをしていらいっしやる。私とドワーフの関係とは、共存では無く、対等と言っべきですから。』

「あなた見たいな巨大なドラゴンと、ドワーフが対等な存在なんですか？」

ドラゴンという物に対して、別世界の住人という理解の仕方をしてきたアイムにとって、それは衝撃的な発言である。

『ええ、その通りです。何故なら私とドワーフ達は別個の物では無く、同じ種族なのですから。』

ドワーフの社会構造は親と子の関係で構成される。親は子の行動を統率、監視、保護し、子は親の命令や意思に従う。この関係上、親は子よりも数が少なく無ければならず。ドワーフの集団一つに親に当たる存在は一人しかいない。

『その親として存在するのがドラゴンなのです。親はドワーフの集団がある程度まで大きくなると、その中の一個体が私の様に成長していき、他のドワーフよりも強靱で寿命も長く、他を統率できる存在になれるのです。』

「働きアリと女王アリみたいな関係なんですかね。」

それとも、蜂の様な社会体系なのか。

『私が子供を産むという訳では無く、子であるドワーフ自体も種族としての独立性を持っているという事以外は、概ね正しい見解だと思いますよ。結局は集団としての方針を決めるのは、私ですから。』

「その方針って具体的にどうやって決めるのが、よくわからないんですけど。」

子であるドワーフの集団が独立性を保っているのなら、統率をすゝるといふのも大変なのでは無いだろうか。

『ここに来るまでに、ドワーフの個体に会ったはずですね。その子は言葉使いが拙くありませんでしたか？身体的特徴も、身長が低かったり、どこか子供のまま成長した様な部分があったでしょう？』

そう言われれば、そうかもしれない。

『基本的にどれだけ種族として確立されていたとしても、ドワーフは、どこか精神的に子供のままである場合が多いのです。ですが、一度ドラゴン化をしまえば、その精神性は肉体と同様に驚くほどの成長を果たせます。』

「という事は、自然とドラゴン中心の社会が出来上がる事になるな。」

リユンは得心した様に頷いている。

「ええ、ですが、それにも問題がありました。」

ドラゴンは深刻な様子で頭を下げ、言葉も低くなる。

「ドラゴンの精神性の成長と言うのは、一個体だけに留まるだけで無く、他のドワーフの個体にまで影響を与えてしまうのです。」

「それは一体、どういう事なのでしょう。」

セイリスの方は話をあまり理解して居ない様子である。ちなみに自分の同様だ。

「テレパシーと言えば良いのか……。自分の意思を伝えるだけなら問題無いのですが、私の趣味嗜好が集団としてのそれにまで、影響を与えてしまうのです。」

「あれ、じゃあ、今日の夕飯がやけに肉が多かったのも。」

「ええ、私、実は肉食の傾向がありまして……。」

なるほど、確かにそれは問題だ。偏食家がドラゴンになれば、ドワーフみんなが、好き嫌いをしてしまう事になる。

「まあ、その程度なら、まだ周りに与える影響も少なく済むのですが。」

「もしかして、ドワーフが最近まで排他主義だったのは、そのせいだ。」

「その通りです。私の先代にあたるドラゴンが、どうにも他種族を恐れていた様で。ドワーフの集団そのものも、他種族を恐れる様になってしまいました。」

それで、ドワーフが排他的という噂が流れる一方で、実際に会ったドワーフ達はその噂とは違い友好的だったのか。

「じゃあ、もしかして、あなたは他種族に対して友好的だったりするんですか？」

今までの話が本当ならば、そういう事になるはずだ。自分達がこの里で出会ったドワーフは、他種族を恐れている様には見えないのだから。

「私自身は、そういった物に対する恐れはありません。むしろ、今

までドワーフ達は閉鎖的過ぎた。もちろん、その状態の利点というのもありますが、私たちの生態が、他種族にまったく知られていないというのは、やはり問題です。』

話してみてもわかった事だが、このドラゴンは、一族の長としての勤めを果たそうとしている。決して、別世界の存在などでは無い事にアイムは気づいた。

「それで、僕らみたいな旅人を洞窟に呼んでいたんですか？」

『ええ、実際に私という存在を見て頂ければ、ドワーフという種族に対する理解を深める事が出来るのではないかと……。』

それは正解だろう。実際、こうやって話して見れば、恐怖より親しみの方が強く感じる。

「でも、それでは、なかなか、多くの人に広める事はできないのでは……。」

セイリスが心配そうにドラゴンを見つめる。彼女も、このドラゴンに対しては、どこか親しみを感じ始めているのだろう。

『ですから、旅人のあなた方に、私達の事を広めて頂きたいと思い、旅人が来たなら、こちらへ誘って貰う様、ドワーフに言付けているのです。』

ドラゴンなりの宣伝と言う事が。まあ、多少の効果はあると思うが。

「それだけじゃあ、少し難しいな。実際、ドワーフと森のドラゴンが同種で、今、ドワーフは他種族に友好的という話を他にした所で、信じてくれる奴が多いとは思わない。失礼だが、特に前者は、眉唾ものの噂にでもなれば上出来ってくらい、信じられない話なんだよ。」

『そこまでするか……。』

ドラゴンは落ち込んでいる風に、やや頭を下げ、口からは溜息らしき風が、こちらに吹いてくる。

「実際に会えれば別なんだが。直接、あなたの口から聞いたからこそ、今までの話を俺達は信じる気になつた訳だからな。」

そして信じる人数が多ければ、それは、そのまま真実になる。

『これまで、私に会いにここまで来た旅人は、あなた方を含めて、片手で足りる数なのです。』

ちなみにドラゴンの指の本数は、こちらと同じ5本である。自分達は3人なので、これまで2人しか会ったことが無い計算である。

いや、あの話し方を聞くに1人の可能性もあるか。

「ちよつと、その数では難しいですね。なんというか、流行ってないんですかね、この里。」

『排他的という噂も問題なのですよ。地図にまで書いてあるというのに、誰も来てくれない。となれば、私に会いに来る旅人も、もっと少なくなります。』

とうとう、泣き言まで言い始めたドラゴンを見て、一同はどう対処すれば良いのか困り始めていた。

あと、こういう状況なので、ドラゴンに対する恐怖などは、まったく存在しなくなっている。

「なら、いきなり多くの人間にドワーフの事を知って貰うという高望みは捨てて、とりあえず、ドワーフの里に来る様な旅人を増やすという方向で、努力して見れば良いんじゃないか？」

投げ遣りな態度で返答しているリユンであるが、実際、それくらいしか方法は無い。

『努力ですか。宿を作り、地図に掲載させて貰う。それ以外となると、少し思いつかないのですが。まさか、この姿で宣伝する訳にも行かない。』

宣伝しようとした相手に逃げられてしまふのがオチだろう。

「とりあえず、宣伝に関しては、ここに来た旅人に任せるのが吉だろうな。もともとマイナスの印象を持っていたところで、そこそこ良い雰囲気宿に泊まれたとなると、他人に話したくもなるだろう。ドラゴンに関する話じゃなけりゃあ、まあ信じてくれる奴も増える。」

『となると、私達が知なければならぬのは、旅人の呼び込みです

か。』

ドラゴンはまた、落ち込んだ様子になった。

「そもそも、そういった旅人の方々があまり、いらっしやらないのが問題なのですものね。」

セイリスの言う通り、宣伝してくれる様な旅人が来るのであれば、この様に悩んだりはいらない。

「でもリユンさん、旅の要所としては、結構良い立地にあるって言うてましたよね。」

「だから、それはドワーフに対するイメージの問題で、ここに足を運ぼうとする奴が少ないんだろ。」

少し考える。リユンの言っている事は正しい事である。ドワーフに対する印象が先行して、里へ向かうという選択肢を思考から奪ってしまうのである。なら、何故、自分達はドワーフの里へ向かったのだろうか。

「イメージの改善が問題なんですよ。そして、立地も宿も結構な物だから、一度来てしまえば、悪い印象は無くなる。」

ならば、無理矢理にでも里へ向かわせる様にすれば良い。

「攫つてでも連れてくるか？それだと、もっと印象が悪くなるぞ。」  
「攫われて印象が悪くなるのは、自分の意思とは関係無い方法で連れていかれるからでしょう。なら、自分の意思で、ドワーフの里に来たと思わせるように、呼び込めば良いんです。」

森を歩く旅人を特定の下に置けば、それも不可能では無い。

「具体的には、どの様な方法なのでしょうか。想像し難い方法なのですが。」

答えを急かしている風にセイリスが返答して来る。

「例えばさ、僕らはどうして、このドワーフの里に来たのかを覚えてる？」

「確か森に居る内に日が暮れてしまったからですわ。そうしたら偶然、近くにドワーフの里がありましたので。」

「それは、あくまで理由であって原因じゃあ無いよね。どうして、

森の中で日が暮れてしまったんだろう。本当は1日で森を通り過ぎるはずだったのに。」

「あら、それなら。」

「そう、答えは簡単だ。旅の途中でドラゴンに遭ったからだ。今では安全だと分かるが、前は危険だと判断し、旅の足を止める事になったから、森を抜ける時間が無くなり、ドワーフの里へと向かったのだ。」

「そうか、ドワーフの森自体、1日で抜けるには、かなり急ぐ必要がある場所だ。少しでも足止めをしまえば、宿を探す必要が出てくる。そして、ここらにある宿と言えよ。」

「ドワーフの里しか有り得ない。足止めさえしてしまえば、自然と旅人は自分の意思で、ドワーフの里へと来るはずだ。」

「しかし、足止めをするにも、その方法が荒ければ、問題にもなるでしょう。それにもし、足止めをされた旅人の方が遭難でもされては、私も心苦しい。」

「当然、その点についても考えている。」

「ドワーフの里と、森を抜ける道が分かれている場所でのみ、足止めを実行すれば、その危険も無くなりますよ。分岐点にドワーフの里への案内板でも置けば完璧ですね。嫌でも、そちらへ向かう事になります。」

「それは、なんとも、強引なやり方の様な……。」

「このドラゴン、体は大きい癖になんとも小心者の様だ。強引になるのはこれからだと言うのに。」

「今から、臆病になられては困りますよ。だって、一番肝心なのは、あなたがどうするかなんですから。」

「わたしが？」

「ドラゴンがアイルムの言葉に釣られて顔を上げてくる。」

「そう、あなた次第で、これからのドワーフの運命が大きく変わります。」

「大げさかもしれないが、一応真剣に言っているつもりであった。」

森を歩いている。このドワーフの森では、1日で通り過ぎるのが、旅人の中での常識であるので、かなりの急ぎでだ。森の中で一夜を過ごす事は危険である。だからこそ、日が暮れる前に森を抜けなければならぬ。

だと言つのに、この地響きはなんなのだ。途中までは順調であつたはずなのに、この地響きのせいで、足を止める破目になつた。この地響きの原因はいつたいなんなのか、もしや、これが噂に聞く、森に棲むドラゴンだと言つのか。

その様な葛藤をしているうちに、地響きが大きくなり、森の木々を押し倒しながら、私の目の前に巨大な生物が現れたのである。

「恐らく、あの旅人の方はこれから日が暮れかけるまで、あそこで足を止める事になるのでしょうか。」

木陰に隠れながら、申し訳なさそうな目で、旅人を見るセイリスであるが、だからと言って、ドラゴンを止める事は無い。

「そりやあまあ、それが商売なんだから仕方ないって。ドラゴンだつて承知してくれたでしょ。」

それに、ドラゴン自身はあの旅人を傷つけるつもりも無く。ただゆっくりと、時間を掛けながら、道を横切るだけなので、直接、被害が行く訳でも無い。

「しかし、良く考えたな。ドラゴンを使つての足止めなんて。」

「自分達がドワーフの里に行く事になつた場面を、そのまま再現しただけですからね。ちよつとした思い付きですよ。」

ドラゴンには、決して旅人を傷つけず、ただ、道を通り過ぎるフリをする様にと、話しを通してている。まあ、あの小心者のドラゴンに限って言えば、その必要も無さそうである。ちなみに、これは、後々、わざと足止めをした事に気づかれない様にするためで、最終的にはドラゴンの事を知つて貰い、ドワーフ全体の事も知つて貰う事になるだろうから、ドラゴン側に非が有る様にしないためだ。



「それでも、ばれてしまいましたら、どうしますの？」

「そういつた事に気づける人なら、ドラゴンとドワーフの関係についても、上手く理解してくれるだろうから、それはそれで良いんじゃないかな。」

結局、ドワーフという種族を理解して貰う事には変わらないのだ。

「しかし、この方法で、どれくらい経てば、ドワーフ達についての知識が広まるってくれるんだろうな。」

「まあ、種族間同士の仲なんて、そうそう変わる物でも無いでしょうが、何もしないよりはきつと早いんじゃないですかね。」

努力という物は、利にならない事が時たま有るが、損になる事は少ないのだから。

「そういえば、今回の仕事では、報酬を貰う事を忘れていたな。」

リユンが思い出したかの様に呟く。

「仕事って、ちよつと話しただけじゃないですか。」

あれで何かを貰っては、相手に申し訳が立たない。

「それでも、向こうの利益になりそうな事をしたんだから、その分の対価くらい貰っても良さそうじゃないか。」

リユンとアィムの間で、口論とも言えない会話が続く。

「二人とも、そのまま喧嘩を続けていたら、また日が暮れてしまいますわよ。再びドワーフの里に行く事になれば、格好が付きませんわ。」

二人の口論をセイリスが間に入り止める。

「あー、それもそうだな。日が暮れるまでには、今度こそ森を抜けよう。」

「そうですね。今回は途中からだし、足止め役は今、別の人を相手にしてるから、多分大丈夫ですよ。」

そう言つて、森を抜ける道へと進みだす。今度、ここに来るときは、もっと人が賑わってれば良いと思いつながら。

「そう言えば、二人が言い争っていた報酬についてですけど、実は内緒で、あの後貰っていましたのよ。」

森を歩いていると、セイリスが突然そんな事を言い出す。あの後というのは、ドラゴンと洞窟で話した時の事だろう。

「貰っていたって。いったい何を？」

「これですわ。これ。」

セイリスは自分のリュックの中から、曲がりながらも、先端が尖った骨の様な物を取り出す。

「これは、もしかしてあのドラゴンの角か？」

どこかで見たことがあるそれは、言われてみれば、確かにドラゴンの頭に生えていた角であった。

「ええ、あの後、せつかくドワーフの里に来たのだから、何かお土産になる物は無いでしょうかと聞いたら、これを頂きましたの。定期的に生え変わるそうですから、別に惜しい物でも無いらしいですの。」

「それでも、ドラゴンの角なんて結構、珍しい物じゃないか。」

「そうですわね。ドラゴンさんも、“今はまだ”珍しい物だから、何かに役立つかもしれないと仰っていましたわ。」

なんと、良く言ったものである。これからは珍しく無くなるという事か。

「もしかしたら、次に来る時は、ちよつとした観光地になっているかもな。」

少し冗談の混じったリユンの言葉であったが、なんだか本当にそうなりそうで、あの生真面目で小心者なドラゴンの事を、応援したくなる話であった。

## 五つ目は国の間に(1)

大陸の南端、そこは大陸から西側と東側それぞれに半島状の形になっっている。まるで二本の牙の様に大陸から伸びるその土地は、それぞれ別の国によって治められ、西側の国はサールマ国と呼ばれていた。

今回、そのサールマ国を目的地とするアイム達は、旅の難所であるドワーフの森を抜け、サールマ国まであと一歩という場所まで来ていた。

「サールマ国って、土地の形状を聞くに、ヒゼル国みたいな海洋国家なんですかね。」

ランドフアーマーの少年、アイムはこれから向かう国に思いを馳せる。これから向かう国について想像するのは、楽しみを増やす事に繋がるのだ。

「海洋国家なのは隣のオークマ国だな。サールマはウッドエルフの国家だから、海洋業はそんなに発展しなかったらしい。」

旅に優れた能力を持つツリストのリユンは、この旅においてガイド役にもなっていた。

「ふーん。じゃあ、ドワーフの森みたいな森林地帯が多い国なんですかね。」

エルフはその土地に驚異的な速度で対応できる種族であり、エルフの種族によって、その土地がどの様な場所なのか分かるのである。そして、ウッドエルフの国という事は木々が多いはずであった。「昔はそうだったらいいですね。でも開拓が進む中で、多くの森林が無くなってしまいましたの。今では半島近くにある大きな島の上には残っていないそうです。」

そうやって解説する彼女、セイリスもエルフであるが、特に種族が決まっていないう平均的なエルフである。アースエルフとも呼べば良いのだろうが、彼女等は別段自分達を他と区分けしていないの

で、ただ自分達の事をエルフと名乗っていた。

「そうなんだ。それじゃあ、ウッドエルフって言うのも形無しだね。まあ僕としては、また森の中を歩く必要も無さそうで良かったけど。」

森林風景はこれまで歩いてきたドワーフの森だけで十分に満足している。旅をする以上、もっと様々な風景を見たいと言うのは贅沢な事だろうか。

「それよりも仕事の心配をするべきだろう。今回は仕事がすんなりと見つかる保障は無いんだぞ。」

そう言えば、事前の準備も国内へのコネも無い状態で、他国に向かうのはこれが初めてである。

「わたくしとしては、純血教の教えを広める事が出来れば、それで宜しいですけど。」

セイリスの場合は、宗教的後盾があるのだからそれで良いのだろうか。

「俺達は雇われ者だ、なんとしても結果を出さなければならぬ。結果の出せない商人なんて、遊び人と何が違うと言うのだろうか。」

「まあ、それも、サールマ国がどうなってるかによりますけどね。何をするのに、自分で観察する事から始めるのであり、この目で国内の状況を見てからでないと、どんな考えも予想に過ぎないのだった。」

サールマ国に着くと、さっそく、入国の際にありがちな荷物検査が待っていた。検査をする係員はエルフとしての特徴である尖った耳と、少し長い印象のある腕が目についた。

「あの人達が、ウッドエルフなんですか？」

腕の長さは、ウッドエルフとして、森林の中で暮らすのに役立つのかもしれない。

「多分な。俺もエルフの種族差に関しては、そんなに詳しくないんだが……。」

自信なさげに頷くりュンを見て、そういった知識に関しては自分と大差無いのだと感ずる。

「間違い無くウッドエルフとしての特徴ですわ。髪もどこか緑がかった色をしていますでしょ。あれも保護色としての色ですわね。」  
同種のエルフである、セイリスが言うのであれば間違い無いだろう。やはり、ここはウッドエルフの国なのだ。

「それでも……。少し、特徴が薄いというか、別の場所で見ただウツドエルフの方が、もっと見ただけで分かり易い色合いしていたと思っのですが。」

この国のウッドエルフは、他のウッドエルフよりらしくないと言っ事か。

「開拓で、森林も無くなってるんでしょ？その影響じゃない？」  
今の所、影響がそれしか考えられない訳である。

「そうですね。でも、それにしても急な様な……。」「  
セイリスは悩んだ表情をしたと思うと、考え込み始めた。彼女なりに、何か思うところがあるのかもしれない。

「それにしても、入国審査って相変わらず時間が掛かる物なんですね。」

「サールマ国に来てから、随分と待たされている様な気がする。

「また、荷物に鍬なんて入れてるんじゃないだろうな。」

こちらを睨んでくるリュンであるが、彼も変わらず、こちらの事を理解していないと思われる。

鍬を怪しまれる時間を考慮しても、時間が掛かっているから、聞いているのだ。

「もしかしたら、国内で何かあったのかもしれないわね。」

「セイリスが突然、物騒な事を言い出した。」

「何でそう思うんだ？」

「いえ、ただの予感ですわ……。そうでなければ良いのですが。」  
不吉な事を言うセイリスを見て、なんだかこちらにも不安になってくる。そういう事は思っても言わなくてくれると助かるのだが。」

「どつちにした所で、このまま帰る訳も無いのだから、心配したって仕方の無い事だろう。まあ、一応、注意して置くが、本当に、君の考えは根拠の無い予感なんだな？」

根拠なんて物があれば、それは予感では無く、予想である。当然、後者の方が当たる確率が高い。

「ええ、もちろんですわ。きつとわたくしの思い過ぎだと思われるますの。」

健気にそう話すセイリスであるが、その後、サールマ国の入国審査官が来て、国内では怪しい事を一切しない様にと、必要以上に注意してくる姿を見ると、なんだかセイリスの予感が当たっていそうに感じてしまった。

サールマ国内の様子と言えば、どこか活気が無くなっている様に見えた。道を歩くウッドエルフ達は、多くが肩を落とし、こちらを見ると、一瞬、怯えた表情をするのだ。

「なんなんでしょうね、これ。歓迎されて無いというより、警戒されているというか。それ以前に町全体に元気が無いというか。」

これまで旅してきた国が、皆、活気に溢れているか、何がした前向きだったのに対して、こういう雰囲気は初めてである。

「国風と言えばそうなんだろうが。いや、でも、どうも違う気がするな。」

国民が暗い国風なんて、どんな状況だろうか。

「きつと、何か理由があるはずですよ。これから、この国で仕事をする予定なんですもの、知って置く必要がありますわね。」

確かにその通りだが、展開が強引な気がする。彼女は何か焦っているのだろうか。それとも、同種のエルフに対して、何か思う所があるのか。

「まあ、情報収集も大事だが、それ以上に宿を探すべきだ。拠点が無ければ、仕事を探すのも、国について知るのも出来やしないだろう。」

リユンは、セイリスの焦りを感じ取ってか、それを抑える様に、まずすべき事を提案する。

「宿ですか。そうですね、実は、入国審査に時間が掛かったから、ちよつと疲れてるんですよ。一度、どこか探して休みましょう。」

リユンの提案に乗る形で話を進める。セイリスの件は気になるが、それも、一度、落ち着いてからの方が良いだろう。

「ああ、でも、そうですね。わたくしがどうしようと、仕方の無い事かもしれませんし。」

やはり、何かを悩んでいる様子のセイリスに理由を聞きたくなるが、それに関しても、宿を見つけてからでも遅くは無い。

「なら、決まりだな。二部屋は取るんだし、安上がりな宿があれば良いんだが。」

男女の混じった旅人は、そういった事に気を使う必要がある。野宿であれば、むしろ、あまり気を使う必要が無いのに、宿となれば、別々になるのはどうしてだろうかと思う部分もあるが、まあ、仕様が無い事であった。

結局、町に入っすぐ近くにあった宿に泊まる事になる。探すといっても、宿程度でそこまで時間を掛けるのも何だし、町の入口の方が、旅人向けの宿が多くあるからだ。

一応、リユンの期待していた通り、安値の部屋を借りる事が出来たが、その内装も、値段相応である。

「結構、掃除して無い部分も多いみたいですね。まあ、ベッドや机なんかは、まだマシだから良いのかな。」

借りた部屋に行き、内装を見渡す。宿自体は木材を主な素材として作られたロツジ風である。森が少ないとは言え、ウッドエルフの国らしい宿と言えるだろう。

だが、あまり手入れはされていない様で、目の届かない場所に埃が溜まっていたり、歩きたびに床がギシギシと鳴る。

「というか、教団から旅費は貰ってるはずですよ。なんで、わざ

わざわざ安い宿なんか。」

「借りを作りたく無いんだ。旅費は経費であって報酬じゃあ無いからな。使えば使う程、教団に金を使わせる事になる。」

恩は時に行動を縛る物になる。それが組織からの物であれば尚更だ。だから、教団からの金銭に関しては、あまり使いたく無いのだろうが。

「だったらセイリスは、もうちょっと良い宿で休ませてあげれば良いじゃないですか。」

彼女は組織に雇われているのでは無く、組織の人間であり、恩を受けたところで現状は変わらないだろう。

「まあ、そうなんだが、理由を話して、自分だけ上等な宿を借りる様な娘に見えるか？」

「見えませんね。」

絶対に、自分も安宿の方に泊まると言うに決まってる。

「セイリスと言えば、彼女に関してですけど、なんだか様子がおかしく無かったですか？」

この国に来てから、何かに悩んでいる様にも見える。

「うーん、そうだな。同じエルフの国だし、思うところがあるんじゃないか？」

「そんな事言ったら、大陸中のだいたいの中で、彼女はあんな調子だつて事ですか？ 有り得ないですよ。」

大陸で一番繁栄しているのがエルフなのだから、殆どの国がエルフの国と言う事になってしまう。

「しかし、悩みなんてのは本人にしかわからん物だしなあ。打ち明けてくれるんなら兎も角、本人が自分で抱えている内は聞いても意味が無い。」

「そんな事わかってますよ。けど、あからさまに、考え事をしていきますって態度は、こっちの調子までおかしくなりそうというか。」

悩んでいる本人より、その周りの方が気を揉むというのはよくある話なのだ。



「だな。それじゃあ、仕事を探すついでに、そこらへんを探って見るか。国内の情勢がわかれば、彼女が何に気を取られているのかわかるかもしれんぞ。」

つまり、やることと言ったら、いつもの様に情報収集と言う事か。「結局、出来る事なんてそうそう無いって事なんですかね。」

「当たり前だ。」

何を今更と言った目で、こちらを見てくるリユンであった。

情報を集めていれば、自然とこの国の事が知れてくる。別に誰もが、国の事を話すのでは無く、その仕草や雰囲気だけ見ても、国独自の物があるのだ。つまり、ただ会話しているだけでも、国の情報と言つのは自然と集まってくるのである。

基本的に、話を聞くのは商店の店員だ。こちらでも仕事を探しているのだから、そういった商売と関係がありそうな人物から話を聞いていく。

特に利用するのは、食料品店だ。こちらが、農業に関係する仕事を探しているのに対して、向こうもそれに縁深い。そして、情報の聞き易さも重要だ。こちらが、旅用の食料を買うだけで、聞き込みのし易さが大きく違ってくる。店員と言つのは、客に対する態度を軟化させる物だ。

「そこで分かったのは、この国の人たちは、森林地帯の増加を目指しているって事なんですよね。」

宿で一夜を過ごし、その後の朝から始めた情報収集で集めた情報を、リユンと街路を歩きながら話し合う。ちなみにセイリスは、別口で国内の状況を知りたいと、一旦、完全に離れて行動している。

「こつちでは、国内産業をもっと発展させるべきだという声が、国内で大きくなっているらしい話を良く聞いたな。実際、もつと国に対して誇りを持つべきだとか、自分達の立場をもっと明確にとか、独立という観点の話を聞きもしないのに、話す奴が多かった。」

「これって何か関係があるんですかね。」

手当たり次第、聞いてみたが、関係の無い話であるならば、かなりの無駄骨になる。

「国内の情勢に限って言えば、関係の無い話なんて無いだろうさ。まとめれば、この国は独自産業を発展させたいという考えの元、森林地帯の増加、いや、元々はここだって森林地帯だったんだから、復興か。その復興を目指しているって事になる。」

森の復興。一度、開拓した土地を、もう一度、森に再生させようと言うのは、なんだか、綺麗な言葉に聞こえるが、便利な土地を不便な土地にしようとしているのだから、何某かの思惑を感じずには居られない。

「木材の輸出を計っているとか。」

「うーん。確かにサルマ国産の木材は、品質が良いとは聞いたことがあるが。結局は、森林地帯の開拓する上で出る、木材を商売に使っていただけらしいからなあ。木材を売るために、土地をまた、森林地帯に戻すのなんて、本末転倒じゃないか？」

「だから、その本末転倒が起ったんじゃないですか？この国では、森林地帯の開拓が、かなり進んでいるんですよ。進み過ぎて、商売用の木材が産出できなくなったとか。」

だとすれば、これは自分達の仕事に関わってくる事かもしれない。林業と農業の違いはあれど、植物を育てる事には違いが無い。もしかしたら、こちらの技能が役に立つ仕事というものも、見つかる可能性が高いだろう。

「まあ何にしても、今、この国では森林に関する事柄が、かなり重要な物らしいな。」

「でも、それがセイリスの悩みと、どう関係してくるんでしょうね。」

情報を集めれば、分かってくるかもと思えたが、どうにも関係性が思いつかない。

「あ？あー、そうか、そういう事も考慮して情報を集めてたんだっけか。」

「もしかして忘れていたんですか？」

国内情報を収集していれば、彼女の悩みが判明するかもしれないと言ったのは、そっちだろうに。

「いやあ、ちよつと頭の中から抜けていたと言うか。そうだ、実は彼女は、森林を守る会という組織に入会していて、森林開拓が進む、この国内情勢に危機感を覚えている。とかはどうだ？」

「どうだと言われても。」

その想像に何の意味があるのか。

「まあ、実際、これだけ調べてみて分からないなら、もう気にしない方が良いんじゃないかね。そもそも本分は仕事探しなんだから、そちらに集中すべきだと俺は思うぞ。」

そう言われれば、肯定するしか無い。

「でも、仕事って言ったって、当ては無いじゃないですか。」

森林業に関する物があるかもしれないと言ったが、それもまた想像でしかない。また、例え仕事があつたとしても、一介の旅人に任してくれる仕事かどうか。

「それこそ、森林を守る会なんてのがあるんじゃないか。」

「都合良く？ 本当にそう思ってます？」

「あまり自信は無い。」

リユンは頭を掻きながら、困り顔で答えた。

さて、当てが無くとも、探さなければならぬのが仕事と言う物である。しかし、やる事は変わらず情報集めなのだから、進展という物はなかなか無い。であれば、冗談めかして言った森林を守る会といった物が、本当に無いのかについて聞いて回るというのも仕方無い事である。

ただ一つ誤算があるとすれば、それが本当にあつたという事だろう。

「探せばあるもんなんですネ・・・。」

アイムは目の前にでかでかと看板に書かれた「森林を守り増やそ

う！国のため。」という文字を見る。看板は建物の入り口の右横に立て掛けられており、左側には「森林を守る会」会館と書かれた表札がある。

「名前まで一緒なんだものなあ。人が考える事なんて、結局変わらないのかもしれない。」

うんうんと肯くリユンであるが、自分の想像が当たって嬉しいのか、どこか満足気である。

「まあ、それはそれとして、どうやって僕達を売り込むんですか？ヒゼル国みたいに旅人用の仕事紹介がある訳でも無いんですよ？」

「ああ、それほど大きな組織でもなさそうだしなあ。でも、入ってみなければ、何も始まらないだろ。」

そう言ってリユンは会館の扉を開く。

「あら？ どうしてリユンさん達がここへ？」

確かに入ってみなければ何も始まらない。扉の先に、何故かセリスが居る事なんて、思いもよらない事だからだ。

森林を守る会にセリスが居る。それはリユンの予想を裏付ける結果であり、セリスがこの国の森林開拓に心を痛めているという証明でもあった。

「ちよつと待って下さいまし。わたくし、その様な事は一切ありませんわよ。」

セリスが弁解する様に慌てて言い返してくる。

「だったら、なんでこんな場所に居るのさ。森林を守る以外に、森林を守る会に居る意味なんて無いでしょ。」

きつと彼女は、この国に来てから、今に至るまで、この国の現状を憂いていたに違い無い。

「だから、違つと言っています。私、ここに来たのは今日が初めてですよ。」

「そうですね。彼女は森林の心配と言うよりは、私たちウッドエル

フの心配をなさってここまで来たのですから。」

反論を続けるセイリスの横に、突然、男が現れる。男は、整えられた髪形と唇の上にしつかりと切り揃えている髭、服も新品同様の皺の無い服装で、見るからに紳士風の出で立ちであった。

「えっと、あなたは？」

突然現れた男に一瞬、戸惑う。その特徴は今まで見てきたウッドエルフの特徴を、さらに強くした様な風貌だったからだ。

髪は深い濃緑色で、腕は体に対して、不自然な程長く感じる。

「申し送れました、私、森林を守る会の会長をしております、ウッドエルフのフェリウスと申します。」

どうしよう、いきなり大物に出会ってしまった。いや、まあ、森林を守る会とやらが、権力を持つていれば、そうなのだが。

「そんな人がいきなり出てくるなんて、もしかしてセイリスのフィアンセとか。」

「わたくし、この方に会ったのも、今日が初めてなのですが。」

「じゃあ、今日から恋が始まったって事！？」

「どうしてそうなりますの！」

どうにも、合いの手が漫才みたいになってきた。なんだか、先ほど自己紹介を果たしたフェリウス氏が、生暖かい視線で、こちらを見ている様な気がする。

「この二人については置いておくとして、フェリウスさんと言ったか、さっきの話の続きをして欲しいんだが。確か、セイリスがウッドエルフの心配をしようとか。」

今まで黙っていたリユンが口を出してくる。まあ、不毛な言い争いが止まったのだから良いのかもしれないが。

「その事でしたら、彼女はこの国のウッドエルフが抱えている問題を、同じエルフとして相談に乗りたいと申し出て来られたのです。」

フェリウスというウッドエルフは嬉しそうに、その事を話す。

「それと言うのは、もしかして純潔教として相談に乗ったと言う事なのか？」

リユンはセイリスに向かって聞く。純潔教に関しては敏感になっている彼である。

「はい、私個人で解決出来る物では無いと思いますので、そういう事になると思いますわ。」

つまり、セイリスはさっそくこの国で仕事を見つけたらしい。

「出来れば詳しい話を聞かせて貰えないだろうか。我々も、そこに居るセイリスと同様、純潔教と無関係では無いし、仕事の内容上、役立てる知識があるかもしれない。」

せつかくの商売の機会を逃す訳には行かぬと、どうやらリユンは自分達も売り込むつもりらしい。

「仕事の内容上ですか……。セイリスさんには話をするつもりでしたが、あなた方に関しては、その商売の内容というのを教えて頂かなければ、容易に教える事が出来ないのですが。何分、デリケートな問題です。」

こちらの提案に関して、すぐに同意を貰えなかったが、それでも話を聞いて貰える状況になった。あと、リユンの交渉次第である。

「当然、私たちの仕事については話します。その仕事の内容を聞いてから、話をするかどうか決めてくださっても結構ですよ。」

だがまあ、話の上手いリユンの事であるから、成功する可能性は高いと思われる。

結局、予想通り、セイリス以外の自分達にも、この国の問題とやらを話してくれる事になった。

リユンが、この会の性質上、問題とは森林に関する事だろうという予想し、こちらの仕事内容を、植物に関して有用な物であると、少々、捻じ曲げて伝えたのが効いたらしい。

「純潔教の方と、植物に関する仕事をなさる方。その様な方々が、この時期に来てくださったのは、大変嬉しい事です。運命めいた物すら感じます。」

フェリウスの話は想像した以上に深刻な物で、まさにウッドエル

フ全体に関わる問題であった。

エルフ種族は土地に適応して、その体質を変えていくのは周知の事実であるが、それはつまり、再び環境が戻れば、体質変化も元の状態に戻ってしまうという事である。

他種族から見れば、便利な体質だと考えるかもしれないが、エルフ達にとって、変異した体とは一種の誇りに近い物なのである。その変異が、森林の減少によって元に戻ってしまうのは、この国のウッドエルフ達から見ると、抛り所を失ってしまう事になりかねないのだ。

「そうか、だから、この国のウッドエルフの人達は、見た目が、他のエルフと見分けが付き難いんですね。」

セイリスも、確かこの国のウッドエルフは特徴が薄いと言っていた気がする。

「ええ、私などはまだ、その変化が弱い身ですが、だからこそ、危機感を覚え、この会を作ったのです。」

そう言えば、フェリウスはウッドエルフとしての特徴がしっかりと有る。

「あれ？ でも、ちょっとまって下さいよ。サールマ国で森林の開拓が始まったのは結構前の事なんですよ？なんで、それに対する体質の変化が、今になって問題になるんです？」

それなら、そもそも森の開拓などしなければ良いのだ。

「森林開拓によって、体質が変化して行く事への懸念は当時から既に存在していました。だから、ある場所を除いて森林開拓を進め、定期的に、その場所へと滞在する事で体質を維持し続けるという事を、文化として受け入れていたのですよ。」

「ある場所、もしかしてサールマ国で唯一、森林地帯が残っているという島の事か。」

合点がいった様に、リユンは手を叩いた。

「その通り、シクラ島という名の島で、我々にとっては聖地とすら呼んで良い程、重要な島です。」

自分達種族を確立するための場所であるのだから、そうもなるだろう。

「つまり、その島に問題が発生してしまったということですよ。」  
セイリスが深刻な顔をしながら続ける。彼女は、同じ体質と似た考えを持つ同種として、ウッドエルフがどのような状況になっているのかを、薄々感づいていたのだろう。

「島に問題？ 森が無くなって行ってるのか。」

それならば、自分達の技能が役に立つかもしれない。

「いえ、事態はもっと俗な状況で……。」

頭を抱えるフェリウスを見ると、それが、一朝一夕に解決できる物では無いと感じる。

「実は、隣国オークマが、シクラ島の領有を主張し出したのです。」



## 五つ目は国の間に(2)

サールマ国とオークマ国の関係とは、元々は相互依存の関係にあった。サールマ国側が森林開拓を進める上で出る木材をオークマ国側が買い取り、その対価として開拓に必要な物資や労働力がサールマ国に供給される。

一方、オークマ国側は海運業を生業としている以上、船の材質に良質な木材は必要不可欠であり、どれだけ、サールマ国側が木材を売り込もうとも、それを消費できるだけの需要がある。当然、船の総数が増えれば、オークマ国側の利潤は増える訳で、双方にとって損が無い関係が続いていたと言える。

そんな関係が崩れたのは、サールマ国側が森林開拓を完了させた時期からである。持ちつ持たれつと言っても、実際には不平等が生じていたからだ。

その不平等とは、この交易にサールマ国側の損が無い事であった。オークマ国側は木材を買う代わりに、その代金を払っていた訳だが、サールマ国は開拓業そのものが、土地の効率化を向上出来る物であり、さらに邪魔な木材を買い取る存在が居る。サールマ国側が得る利益の方が、オークマ国側よりも圧倒的に多いのだ。

それも、交易が続いている内は顕在化しない、不平等と言っても存在する利益がそれを隠し抑えていた。

だが、サールマ国が開拓を終えた結果、オークマ側が要求し続けた木材の供給が滞る事になり、オークマ国は事の不平等によろやく気付く事となった。相互の依存では無く、自分達のみが、この関係に依存していたのだと。

「それからは、決定的に関係が悪化して行きました。それまで、順調に行っていた交流も少なくなっただけで、今では、向こうは前までと同じ量の木材を、前より安く提供しなければ、交流を再開しないとまで言ってきています。」

話を聞いた限り、フェリウスが頭を抱える理由も分かる。オークマ国の要求は、到底不可能な物だからだ。

「それでも、心情的にはオークマ側の気持ちがあつてしまひますけどね。一方的に利用されたと感じても可笑しく無いし。サールマ側は何か対策をして無かつたんですか？」

アイム達は部外者である以上、どちらの国にも公平な目線で状況を見る事が出来る。そしてその目線で見れば、非はサールマ国側にあると感じる。

「交易が上手く行っている頃でも、その交易自体に相互の関係を悪化させる要因があると気が付いている方々は居たそうですが、やはり、利益が出ている状況では、見向きもされなかつたらしく。」

まあ、結局はそういう物だろう。特別に悪意があつた訳でもあるまい。臭い物には蓋をして置きたいのが人情だ。

「それで二つの国は、最終的にシクラ島の領有権争いにまで発展したのか。下手を打てば戦争じゃないか。」

珍しく深刻そうな表情をするリユン。

「ええ、その通りです。現在、国の方もなんとか対応しようとしているのですが、シクラ島の領有権主張自体が、オークマ国の利益のためでなく、感情論から来ている節がありまして、それもなかなか。」

「あれ？ シクラ島には木材用の森林があるから主張しているんじゃないの？」

感情論が入っていないと言えば嘘だろうが、それでもオークマ側は国家の利益を考えていると思つていた。

「国内に無い資源を確保する場合、別の国が格安で資源を輸出してくれるという状況だからこそ、その資源を利益に換える事が出来るのですわ。一方的に資源を奪つた所で、生産、加工といった工程を自国だけであるコストが、これまでを上回れば、結局、奪うだけ損という事になりますの。」

歴史の知識が深い純血教徒だけあつて、セイリスの話は国家の関

係に詳しい。

「つまりオークマ側は利益だけ考えれば、シクラ島を領有するのは意味があまり無いという事か。」

「ええ、オークマ国は、今現在も海運業を営む国家なのでしよう？シクラ島を領有するという事になれば、それに加えて、林業にまで力を入れる必要がありますわ。でも、それには新たな人材や、技術を育てる必要がありますもの。オークマ国がその様な事をしていると聞いた情報は、ありませんの？」

「そうですね、その様な事は聞いた事がございません。」

セイリスの問いに頷くフェリウス

「という事は、完璧に向こうの国家感情自体が悪化しているって事じゃないか。フェリウスさん、それは個人間同士の対応じゃあとても解決できない物だし、失礼だが、この森林を守る会とやらの力を大きく越えているんじゃないですか？」

確かに、国の代表同士の話し合いならともかく、民間人が作ったであろう組織が出来る仕事じゃないし、そもそもする責任は無いはず。

「そうですね、それは確かにその通りなのですが……。」

こちらの返答に俯くフェリウス。

「フェリウスさん。我々は自分の仕事はするつもりですが、あなた方の目的は何なんでしょう。悪いが、この会は権力を持った組織には見えないし、かと言ってサールマ国側のやり方に対しての反発から生まれた組織にしては、あなたは実に冷静だ。状況という物が分かってらっしゃる。まさか、本当に森を守るだけの会とは言わないでしょうね。」

リユンは畳み掛ける様に話し続ける。交渉では、相手を戸惑わせた方が上手くいくと考えているリユンらしい話し方だと考える。

「いえ、一応、表向きはただ、森林を守るためだけの組織なのでですよ。」

「つまりその表とは違う裏があると。」

リユンはすぐさま口を入れる。話を止めるつもりは無いのだろう。あくまで、こちらを優位に置きたいのである。

「裏、そうですね。裏です。この組織にも、実に利己的な裏側があるのですよ。ただ、それを聞かせるとなると、確実にあなた方が我々に協力してくれるという補償が無ければなりません。逆に聞きますが、あなた方は私達の仕事を手伝う事に同意してくれますか？」

これ以上聞きたくば、嫌でも手伝って貰うという事だ。なるほど、交渉云々に関しては、ここらが限界なのだろう。情報が不確かな状態でも、仕事を受けるかどうか決める必要があるくらいのデメリツトは、こつちで持つべきとも思える。

「それじゃあ、一つだけ良いですか。内容については詳しく言わなくてもいいです。ただ、あなた達がしている仕事について、あなた達自身、正当性のある仕事だと思ってるやっていきますか。」

これは絶対に外せない質問だ。これにいいえと答える様な仕事であるのなら、決して受ける訳には行かない。

「当然です。我々は自分の利益は考えてはいますが、それでも、自分の正義感に背いた覚えはありません。」

決まりである。

そして現在、アィム達は、サールマ国からオークマ国へと向かう道を歩いている。サールマ国に一泊して直ぐの事であるから、かなりの強行軍だ。

フェリウスがまずこちらに頼んできた仕事は、オークマ国へ入り、国内がどの様な状況になっているか調べる事。つまり諜報である。

「なんだか、農業から仕事がどんどん離れて行ってる気がしますね。」

「確か自分は農業技術や知識を集め、売るために各地を回っているはずなのである。」

「まあそのうち、それらしい仕事も来るだろ。今回はたまたまこういった仕事が回ってきただけだ。」

だと良いのだが。最近、自分の知識が役に立っているのか不安に思うことがある。

「そんな事より、森林を守る会の裏側についてだ。思った以上に根が深い物で驚いたな、あれは。」

仕事を請け負う上で、フェリウスから教えられた事である。組織の目的を知らなければ、十分な仕事は出来ないのだ。

「根が深いと言っても、構造は単純な物でしたわ。要するに両国の関係が良好だった頃に利益を得ていた方々がスポンサーになり、組織運営をしているということですから。」

つまり、森林を守る会のトップは両国間の関係を維持したい人物という訳である。

「となると、今回の仕事は、相手国の様子を見て、両国間の関係改善の糸口を探るって事かな。」

「それは宜しい事ですわね。」

ひさしぶりに嬉しそうな顔をするセイリス。彼女がサールマ国に来てから塞ぎ込んでいた原因を、自分達の仕事で解消できるかもしれないからだろう。

「そんな簡単に行けば良いけどな。」

そこに水を差す様に話すのは、当然リユンだ。

「というと？」

意味の無い事を言わない奴ではあるので、詳しく話すよう促す。

「仕事内容はオークマ国内に潜入して、二国間の改善に繋がる情報を探れという物だろ？」

「ええまあ。僕らは旅人ですからね。潜入もサールマ国人より簡単だし。情報収集だって新しい国に来たら、だいたいしている事でしょう？」

特別、難しい事も無いだろうに。

「それだけの仕事のために、組織の内情を明かすかね。実際、向こうに入国してみたら、厄介ことが飛び込んで来る気がしてならないんだ。」

不安になりそうな話をするリヨン。古今東西、嫌な予感とやらは、外れる事の方が少ないと聞くので、その様な事は言わないで欲しかった。

オークマ国への入国も、サールマ国と同様に厳しい物であった。やはり、こちらの国も隣国への警戒心から、監視を強化しているのだらう。自分達が来た側が、サールマ国からの道だったのも、その理由の一つかもしれない。

とは言っても、自分達は所詮旅人である。まさか、サールマ国内の組織から国内情勢を探るような仕事を請け負っているなど、直接見ていない限り、知る由も無い。

時間は掛かったが、仕事だと思えば何のことは無い。無事、オークマ国への入国は済んだ訳である。

入国した際のオークマ国内の風景は、どこか見覚えのある物であった。

「なんでだろうと思いましたが、多分、ヒゼル国に似ているんですよね。」

同じ海運業を営むという点で近い文化が出来るのかもしれない。「ヒゼルとオークマは、それぞれ大陸の北西端と東南端に位置する半島国家です。そのせいか、海運業を主体とする点も似ています。その文化自体もどこか似通った物に成っているらしいと聞いていますわ。」

セイリス自身はこの国に来た事は無いらしいが、よく聞く話だそうだ。

「それじゃあ、ヒゼル国みたいに、商船組合みたいな物があったりして。」

「いや、この国は組合が牛耳ってるんじゃないやなくて、開国当初に、商船業で稼いで力を付けた奴らが貴族を名乗って、国家運営をしていると聞くな。」

つまり、儲けた者勝ちな国であるという事か。

「なんというか、堅苦しそうな国って印象を持ちそうなんですけど。」  
自分達を貴族と名乗っている時点で、なんとなく、嫌な印象しか持たないのである。

「そうは言うが、貴族を構成する種族が一つの種族だけって訳じゃ無いから、ヒゼル国みたいに、種族間の対立が深刻化してないって利点もあるんだがな。」

そう言えば、ヒゼル国ではシーエルフと他の種族とで、対立問題が起こっていたが、この国ではそれが無いのか。

「あと、貴族制が悪いという事になれば、サールマ国だって似たような国制ですから、同じく、悪い印象を持ってしまおうという事になりますよね。」

セイリスの説明を聞いて驚くアイム。

「え、サールマ国もそうだったんだ。でも、そう言えば、あんまり窮屈には見えなかったなあ。」

サールマ国に入ってから、すぐにオークマ国に向かう事になったので、国制なんかについては、あまり知らずに通り過ぎてしまい、知る機会が無かった。

「結局、貴族だ王様だと言っても、国の方針を決める程度の役目だからな、ヒゼル国の商船組合なんか見てもわかるだろ、いくら強力な権力を持つてたって、あちこちに良い顔しなきゃ行けない以上そんなにその力を行使する機会なんて無いのさ。だから、国風なんでものを決めるのは、国民自身なんだろうな。」

という事は、この国の雰囲気がい暗いのは、貴族がどうかより、国民が総じて暗いのか。

「というか、本当に、暗いですね、みんな俯いている感じがするかどうか、お先真っ暗って雰囲気は漂ってきてますよ。サールマ国だって大概でしたが、ここはもっとだ。」

サールマ国の領土を奪おうとしている国と思っていたので、むしろ好戦的な雰囲気があるのかと思ったが、まったくの正反対であっ

た。

「何か、理由があるのかもかもしれませんわね……。」

何かとは、つまり、新たな問題があると言う事か。

「だから言っただけ、一朝一夕で出来る仕事じゃ無いってさ。」

リユンの投げやりな笑顔を見て、体がドツと疲れだすのを感じる  
アイムであった。

さて、どれだけ疲れて居ようと、オークマ国内の情勢を探るのが  
仕事であるので、やらない訳にも行かない。

「で、どうします。とりあえず、お約束で宿でも見つけますか。」

旅先での基本はやはり拠点探しから始まるのだ。

「あー、一応、フェリウスさんから、紹介された場所があるんだよ。  
と言っても、向こうはオークマ国と交流を絶って暫く経つから、ま  
だあるのかどうか心配らしいんだが。」

リユンがフェリウスから預かったらしきメモ用紙を見る。内容は  
大まかな地図の様である。

「ここから結構近いみたいですね。行くだけ行って見ましようよ。

無くても、別にこれといって困る訳でも無いですし。」

「そうですね。フェリウスさんの紹介された場所ですもの。悪い場  
所では無いと思いますの。」

エルフ同士、何か通じ合う物があるのか、セイリスはあのウッド  
エルフに対して、ある程度の信頼を感じているらしい。

「うーん、それもどうなのかな。と、着いたぞ、ここだ。」

リユンがどこかへ歩き続けていたので、それに付いていきながら  
話していた訳だが、どうやら、そもそも紹介された場所へ向かって  
いた様だ。

だから、話している内に、その場所へ辿り着いてしまった。

「宿か何かと思ったが、どうやら違うみたいだな。」

その建物の前には、例のごとく「平和を守る会」と書かれている



看板が立て掛けられていた。何故だろう既視感がある。

「森林を守る会からの指示で、平和を守る会に向かうというのは、なんだか複雑な気分ですわね。」

確かに、というより酷く陳腐な展開に思えてきた。

「これで、扉を開けたら仲間のエルフが居たなんて展開になったら、面白いんだろうけどな。」

そこまで一緒と言う事もあるまい。何よりその仲間のエルフは既に隣に居る。

「とにかく、入ってみましょうよ。絶対、ここが紹介されている場所ですから。」

名前だけで、森林を守る会が、とりあえずここを目指せと言っている事が分かるのだ。

扉を開けて、中に入ると、そこには知り合いのエルフが。なんて展開は無かったが、変わりに紳士風の人影が見えたのは、既視感の一部に数えても良さそうな物である。

「おや、客人ですかな。」

こちらの来訪に気づいたらしく、紳士風の人影が近づいてくる。どうやら男性で、見た目の印象はエルフでは無く、人間に見えた。

「失礼します。フェリウスという方から、こちらを紹介されて来たのですが。」

リユンが口を開くと、紳士風の男は少し考えた素振りをしてから、ふと思い出したかの様に話し出した。

「ああ、フェリウスさんですか、森林を守る会の。」

男性の口振りから、この場所が間違いなく、フェリウス氏が紹介してくれた場所である事がわかった。

「ええ、その会の紹介で、オークマ国を訪れたら、この場所に来る様にと伝えられていたツリストのリユンと申すのですが。」

リユンが率先して話を続けていく。とりあえず話し合いの場で、彼が目立って話を続けるのはいつもの事であった。

「我らが会をですか……。もしや、御三方はサールマ国からの客人では？」

男は何故か、こちらの素性に気がついた様だ。

「ええ、その通りです。この国でサールマ国の名前を出すのは、危険な事なのではないかと思ひ、名乗りませんでした。」

現在、両国間の関係が複雑な状態である以上、誤って、サールマ国の名前を出すのは無用の騒動を引き起こす可能性がある。

「ああ、そうですね、その通りです。懸命な判断と言えるでしょう。両国の関係は今、深刻な状態にあります。」

男は深い溜息を吐きながら答えてくる。

「しかし、サールマ国に対して悪い印象をあなたは……。えーと。」

「おや、これは失礼しました。私、人間種族のケイという名前です。」

「ああ、ケイさんはサールマ国に対して、言われるように悪い印象を持ってらつしやらない。」

確かに。むしろ、こちらがサールマ国から来た事を知ると、少し喜びの混じった表情をしている様子であった。

「その事でしたら、私はこの会の名前と同様に、平和を愛していますから、サールマ国に対するそれも、この国の他の方々より悪くは無いでしょう。」

「じゃあ、今は平和を守るためにどんな活動をしているんですか？」

「気になったので、ケイに尋ねてみるアイム。ちなみにその質問にケイの表情が少し硬くなった様に感じる。」

「それは勿論、両国間の関係を改善するための運動を、継続して行っています。しかし情勢が情勢ですので、なかなか上手く行きませんが。」

もつともな返答であったが、何か重要な事を隠しながら話している気もする。

「ケイさん。率直に言って、私達は「森林を守る会」に雇われてこ

ここまで来ました。依頼内容は、オークマ国内の情報を集める事。つまり、サールマとオークマの関係を改善させる切欠となるものを探すようにと。」

「ちよっと、リユンさん？」

本来、隠すべきである依頼内容を、突然話したりリユンを止めようとしたが、逆にリユンの手に遮られてしまう。

「その際にオークマ国内のこの場所を紹介されたのです。これは、この「平和を守る会」という物が私達の仕事に大いに関係のある場所と言う事でしょうか？ いっその事、そちらの内心も話してもらえませんか、それがお互いの役に立つと思うのですが。」

要するにリユンは「平和を守る会」と「森林を守る会」が敵対する両国に存在しながら、裏で繋がっていると考えているのだ。

名前が似ている事からの発想という訳でも無いだろう。そもそも、このケイという人物は、両国の情報が伝わり難い状況で、「森林を守る会」のフェリウスの名前と、彼がサールマ国の人物である事を知っていた。

今回の仕事に無関係であるはずが無いのである。

「なるほど、という事はやはり、あなた方はフェリウスさんから、両国の現状をどうにかするために、オークマへとお越しになったのですね。」

ケイの顔つきが優しげな表情から、鋭い目付きになる。

「そこまで大それた物ではありませんわ。ただ、両国間が直接争う様な状況を避けるために、何か情報が欲しいとだけ。」

今まで黙っていたセイリスが話します。そもそも、この仕事自体彼女が最初に見つけてきた物だと言える。

「とは言っても、「森林を守る会」も「平和を守る会」も、別にそれほど大きな組織ではありませんから、何か有益な事を行える保障は無いのです。」

ケイの言葉には若干の嘘が混じっている。確かに会自体は大きい物では無いが、「平和を守る会」が「森林を守る会」と同じ様な組

織であるならば、国に対する影響力を少しは持っているはずなのだ。「フェリウスさんから「森林を守る会」の内情を聞く機会がありましたわ。会のスポンサーは、両国間相互の交易によって利益を得ていた方々であると。」

「はい、その通りです。「平和を守る会」も同様ですが、それが何か。」

ケイは引き続き、話をはぐらかす。

「ああ、そっか。その事で利益を得る様な人物って言ったら、国の最初期から交易を続けている貴族達じゃないか。そりゃあ、影響力があるよね。」

実は、あまり状況を理解していなかったアームは、ここに来て、ようやく二つの会の内情という物を理解出来た。

会は両国の友好を望んでいる。それは、別に平和主義でもなんでもなく、その状態が利となる者達が裏に居るからだ。

では、その者達とは何なのか。古今東西、平和状態で利益を多く得られるのは、その国の統治者層である。それも古くから既得権益に少しずつ根を張らす様な歴史ある貴族こそ、平和状態を望むのである。

「え、ええ、まあ、確かにそうなのですが。」

空気を読まないアームの発言によって調子を崩したのか、あっさり認めてしまうケイ。

「なら話が早いじゃないですか、両国間に権力を持った人達が似たような会を作ってるんだから、僕達みたいなのを雇って意思疎通しながら最悪の状況にならない様にすれば良い。」

権力の正しい使い道とは、本来そういう物だろう。

「いや、そもそも協力関係自体は険悪になる前が存在していたのですから、両国が国交を無くした後でも、暫くはある程度の情報交換が存在し続けたのです。」

「なら、なんで今はそれも無くなってますか？」

わざわざ、偶然立ち寄った旅人に仕事を頼まなければならぬ

らい、情報の疎通が無くなっているというのは可笑しな話である。  
「つまり、両国の国民では、情報交換できない状況になったって事  
だろ。」

アイムの疑問に答える様にリユンがこちらを向いて話す。

「その通りです。両国間の状態が悪くなっていく中で、とある団体がオークマ国内に生まれました。その団体はいわゆる過激派という連中で、サールマ国との繋がりを持つ者はすべて反逆者だとして、暴行を加え、悪評を広めるなどをして回り、辛うじて残っていた交流もそれによって絶たれてしまいました。」

なんとも恐ろしい団体である。相手国との繋がりだけで危害を加えてくるとは。

「あれ？ ちょっと待ってくださいよ、だったら僕らも危ないじゃないですか。自警団は何をしてるんです。なんでそんな危険人物たちを放つて置くんですか！」

まさか、思いがけない所からこの様な危機が迫ってくるとは。

「国内でサールマ国に対する印象が悪くなっていくなら、住民自身がその団体に味方をしているのかもしれない。自分の心の苛立ちを解消してくれる相手には、寛容になるのが人情だ。」

そんな危険思想の人情なんていらぬ。

「安心しろよ、俺達はオークマ国に来てからそんなに時間も経ってないし、サールマ国の名前も出してない。襲われるなんて事にはならないさ。」

リユンはそう言うが、だからと言って安心出来る物では無い。

「でも、わたくしたちが仕事をしていく過程で、その団体に目を付けられる可能性があるのでは？」

セイリスの言う事ももつともである。サールマ国のための情報収集が仕事なのだから、その団体から見れば十分に敵である。

「その件に関してもご安心を、あなた方の仕事は、恐らく、我々が集めた情報を向こうの会に渡すだけで終了しますから。」

突然、ケイがそんな事を言い出す。

「は？ どういう事ですか。」

「御三方の話を聞くに、「森林を守る会」が望んでいるのは、私達「平和を守る会」との再交流でしょう。真つ先にこちらへ来る様にと指示されたのはそれが理由だと思われます。国内の情報をまとめた資料を作らせて頂きますので、それが出来次第、サルマ国へと帰って頂いて構いませんよ。恐らく、明日の朝までには完成するはずですので、この会館に泊まってくさつて結構です。」

途端に饒舌となったケイに圧倒されるが、つまり、自分達の仕事はここまでと言う事か。

「でも、ちよつと待つてくださいよ。散々、国内情勢の不安みtain話を聞かされて、今回の仕事はこれで終わりだから、さようならつてあんまりじゃないですか！」

ずつと先にゴールがあると思っていたら、目の前にいきなりゴール線を引かれた気分だ。

「とは言つても、これ以上の仕事はあなた方に危害が及ぶ可能性がありませんし、あなた方にとっては、一応、仕事が成功した部類に入るでしょうから、それほど悪い話では無いのでは？」

ケイの言う事も確かにそうなのだが、何故か納得行かない。

「リユンさんはそれで良いんですか？」

彼も自分と同様に、仕事に納得していないのでないか。そう思い声を掛ける。

「いや、確かにケイさんの言う通りだ。ここで終われる仕事なら終わつておいた方が良いでしょうな。セイリスもそれで構わないな。」

「そうですね。依頼人の意思が最優先ですもの。」

何故か彼らも、仕事がここで終わる事に同意している。アイムは納得の行かない心持ちのまま、何も言えなくなつてしまった。

「ただ、我々もオークマ国に来て直ぐに、こちらの会に来たので、この国についてあまり知らない。情報集めに来たというのに、それもどうかと思うので、観光ついでに少し、周らせて貰つても良いだろうか。」

リユンは呆然とするアイムを無視して、話を続けていく。

「それは勿論構いませんよ。会の扉は夜には閉まりますので、それまでならご自由に。」

ケイの了承を得てリユンは立ち上がる。釣られて、セイリスも立ち上がり、会館から出る事になった。

「おい、何してるんだ早く行くぞ。」

ただアイムのみが立ったまま、中々動こうとしないので、リユンがその様な言葉を掛ける事となった。

不満があったのでは無い。ただ、ここで仕事が終わる事に寂しさを感じてしまったのである。

### 五つ目は国の間に(3)

「さて、過激派の連中とやらに会ってみるか。」

「平和を守る会」の会館を出て、暫く歩いた後、突然、リユンがそんな事を言い出した。

「へ？ いきなり何を言ってるんですか。さっき、仕事はこれで終わりだと言ってますでしたか？」

そのせいで、少し納得の行かない思いを感じたばかりであるアイムは戸惑うばかりだ。

「確かに「森林を守る会」に依頼された仕事は終わりかもしれませんがね。でも、それだけで、二国間での仕事探しを終えるというのは勿体の無い事だとは思いませんか？」

続いて、セイリスがリユンの考えに同意するかの様に話す。

「ちよつと待って。だったら、さっきのやりとりは何だったよ。いきなり、ここで仕事は終わりなんて言われて、結構、シヨックだったんだけど。」

「だから別の仕事を探すんだ。あそこまで、国の内情を聞いておきながら、「森林を守る会」の仕事だけで終わるなんて勿体の無い事じゃあ無いか。」

つまり、今回受けた仕事の成果を元に、さらなる大きな仕事を探すという事か。

「それならそうと言ってくれれば良いのに。二人して騙す様な真似をするなんて悪趣味ですよ。」

「騙した相手は、お前じゃなくてあのケイって人物なんだがな。」

まあ、さっさと仕事を終わらせると言われたのに、さらに掻き回すつもりだなんて言えはしないだろうが。

「でも、わたくしもわからない事なのですが、どうして過激派の方々の接触しよう？ てつきり、「森林を守る会」で仕事を終えてから、別の仕事を探すのだとばかり。」



セイリスも、仕事探しは続けるつもりだったみたいだが、リユンの提案自体は理解して無かった様である。

「そうですね。わざわざ危険に飛び込む様な物じゃないですか。ただでさえ、僕等はサルマ国と繋がりがあって言うのに。」

火中の栗も虎穴の虎子も理由が無ければ取りたくなんてない。

「過激派って説明をされていたが、どうもそれだけだとは思えないんだよ。例えばだ、その過激派の連中が暴れたせいで、国交が無くなったなんて言うていたが、本当にそんな事があると思うか？」

「どうだろう。受ける被害が大きいのであれば、率先して相手の交流を持つとはしないとと思うが。」

「まあ、でもすべて無くなるなんて事は有るのかなあ。」

隣り合った国同士ですべての交流の無くすのは、いくら悪感情や暴力が有ったとしても難しい事だと思える。

「むしろ、弾圧されればされるほど、反発も強くなるというのが納得の出来る展開ですわ。」

セイリスは職業上、国家という物の知識が豊富な少女で、彼女が言う、国内の大きな動きについての意見というのは説得力がある。

「それを抜きにしても、交流を阻害すればするほど、交流をする事自体の利益つてのは大きくなるんじゃないか？」

「どういう事だろうか。」

「国同士の交流とは基本的に相互利益に基づいてする物で、そこに参加する方々は、そうやって生まれた利益を得ようとさらに交流を進めて行く物ですの。その過程で参加人数が多くなればなる程、個人が受ける利益というのは少なくなっていくのは当然の事ですわね。」

「まあ、受ける利益がそれほど増えなければ、そういう事になるのかな。」

自分達みたいに個人で国に同士を渡り歩けば、それに対する報酬という物が分かりやすく手に入るのに対して、国が率先して交流をする場合、個人がそれに対する利益を理解し難いのもそれが原因か

もしれない。

「この国で起っている問題は、その逆ですの。交流に参加する人数がどんどん減ってきている。」

相互の印象が悪く、それを阻害する者達まで現れているのだから、そうもなるだろう。

「となると、交流を行う事による、個人の利益というのはどんどん大きくなって行くという事でもありませんわ。」

ああ、なるほど、確かにそうだ。

「その行為がどれだけ危険でも、見返りが大きくなって行くのなら、する人がまったく居ないというのも可笑しい話だね。」

目の前の利益と将来の危険性なら、利益を取るという者は少ないのだから。

「ただでさえ、その交流を行う上での発生する利益という物が、本来、国家同士で受ける物でしたから、それを個人で行えるとなれば、それはもう、自分の命がかかっていると見ても、行う方はいらっしやるはずですよ。」

言っている事はもっともである。

「けど、実際、通りすがりの旅人に頼まなきゃ行けないくらい、交流が無くなっているっていうのは事実じゃないか。」

もし、利益が大きい物であるのなら、自分達の様な人物にそれを頼み込もうとするだろうか。利益を搔っ攫われる可能性すらあるのに。

「だから、本来、不可能に近い交流の根絶を、実際に実行出来ている過激派というのが、その字面だけの連中じゃあ無いと予想出来るんだ。」

セイリスの説明は、おおよそブルーの考えと合致していたらしく、まるで話の続きの様に、過激派との接触に関する話へと戻った。

「だから、過激派の人達がどんな感じなのか調べてみよう？」

アイム自身、気になる事ではあるのだが、しかし、聞いただけで危険な雰囲気漂っている。実際に会う事を想像すると、アイムは

身震いしそうだった。

「その通り。気になった事は直接調べてみるに限る。」

一方でブルーは乗り気だ。そういえば彼は、自分の趣向のためならば、危険を省みない節が多々あった。

「ですが、接触してみると言っても、どこに居るのかもわかりませんわ。」

腕を組んで考え込むセイリスの言葉に、少しだけ安堵を覚える。

確かに会えないのであるならば、仕方の無い事だ。

「まさか、これまでの会の様に立て看板を掛けて、分かりやすく案内してくれる事も無さそうな人達なんですから、調べるって言うたって、難しいんじゃないですか。」

出来れば、そのまま出会えないという方が望ましくもある。

「俺も最初はそう思っていたんだが、案外、簡単な方法が見つかった。」

なんと嫌な予感がする言葉である。

「なんですか？」

「このまま、ここで立ち止まっていればいい。どうも過激派らしき連中に囲まれてる。」

ふと、周りを見ると、覆面らしき物を被った人々が、アイム達を取り囲む様に円陣を組んでいた。

「ほう、ではお前達は偶然、あの「平和を守る会」に居ただけで、特に関係など無いと言っただな。」

覆面を被った集団に囲まれた後、彼らのアジトらしき場所へと攫われた。そして、そこで待っていたのは手足を縛られた状態での尋問だったのである。

「とりあえず、変わった会だなと思ったから、どんなもんか直接聞くために入ったんでね。関係あるのかと聞かれても何の事やら。そもそも、あんたらは何なんだ。」

こういう物騒な場でも率先して話すのはリユンであるが、彼の言

葉の端には、相手に対する気配りという物が無いので、この覆面集団を挑発する事にならないのか心配である。

一応、彼らが恐らくケイの言っていた過激派であり、アイルム達をサールマ国の関係者だと考えて攫ったのだと予想しており、その関係性を隠すため嘘の話で通しているが、それがバレた時はどうなるのだろうか。

「我々はこの国の利益を、売国奴の連中から守るために集まった者達だ。貴様らがその連中と何らかの接点があるとの情報が入り、ここに案内させて貰った。」

随分と立派な事を言っているが、やっている事は暴漢だろうに。アイルムはつい反論したくなるが、彼らを怒らせてしまった場合、目も当てられない結果になりそうなので、話はリユンに任せる事にする。

「情報？ この国に来たばかりの、たかが旅人3人を、その売国奴とやらに関係すると考える様な奴等の情報を、あんた達は信じられるのか？」

まったくだ、たかが旅人3人が、本当に関係ある存在であると誰かが信じられるのだろうか。

「どうにも我々の情報網を侮っているようだが、入国審査官の内にも、我々の仲間が居ると知れば、そんな事を言えるかね？」

覆面集団の内、リーダー格らしき男の言葉にゾクリとした感覚が背中に走るのを感じる。入国審査官には、自分達がサールマ国から来た旅人であるという事が知られている。

入国審査に関しては、迂闊な嘘をつく事も出来ないの、仕方無い事ではあるが、そこから情報が漏れたという事は、自分達が「森林を守る会」から仕事を請け負っているが知られてしまう可能性がある。

「・・・まあ、なんとなくそうなんじゃないかと思つたよ。あんたら過激派は、二つの国の交流を絶てるくらいに組織力を持っているそうじゃないか。それくらい出来ても可笑しくないか。」

渋々といった様子で、リユンは自分達の身元をバラそうとする。

「ちよ、ちよつとリユンさん。ここで話すんですか!?」

ただ情報のやり取りを行うだけの仕事だったと言え、彼らは、自分達の様な存在に敵意を抱く可能性がある。

手足を縛られた状況で、それはかなり遠慮したい。

「多分、俺達の仕事も知ってるんじゃないか？ だったら、自分達から話した方が受けも良さそうだ。」

そうかもしれないが、そうであって欲しく無い。

「ふふ、少しは頭も回る様だ。その通りだよ、我々は君たちが「森林を守る会」から仕事を請け負っている事を知っている、その内容が、オークマ国での情報収集である事もな。どうだ？ 当たっているだろう。まあ、「平和を守る会」からすぐに出てきた事を見ると、大した仕事を任された訳でも無い様だが。」

全部当たっている。隠そうとしていたのが馬鹿らしく思えるくらいのパレっぷりだ。

「「森林を守る会」と「平和を守る会」が再交流を図るので、その意図と国内情報の交換程度ですわ。それ以上の事は頼まれもしませんでしたし、情報自体もまだまとめている最中でしたので、わたかし達から得る物は何も無いかと思えますけど。」

セイリスも、隠す必要は無いと感じたのが、頼まれていた仕事内容を話し出す。しかし、こう聞くと、使い走りみたいな仕事内容だ。

「まったく、あの二つの会め。性懲りも無くその様な事を考えていたか。まあいい、それもここで防げる。」

そう言っつて、覆面の男はどこからか包丁の様な刃物を取り出してくる。

「え、そういう物騒な物は出さないでくれると有り難いんですが。そんなアイルムの懇願を無視する形で、覆面の男はアイルム達に近づき、その刃物を振り降ろした。

「ひっ！」

情けの無い声を出してしまったが、仕方の無い事である。アイルム

にとつては、これほどに直接的な命の危険に陥った事は初めてなのだから。

「つて、あれ？」

しかし、来るべき痛みが来ず、恐怖で閉じてしまった目を開ける。すると、自身は怪我をしているどころか、自分達を縛っていた縄が、刃物によって切られていた。

「お前たちが、二つの会から仕事を請け負っているというなら、こちらも頼みがある。聞いてくれるなら、この場から逃がしてやるし、報酬もはずもう。返答を聞かせて貰えるか？」

顔をこちらに近づけ話をする覆面の男であるが、彼から出た言葉は、脅しでは無く、依頼に近い物であった。

曰く、過激派団体の正式名称は「国民の利益を守る会」で、組織方針は今までの国家の構造上で得る利益を、一部貴族だけで無く、国民全体に配分するべく活動する団体だそつだ。

またもや、どこかで聞いたような会名と、ご大層な組織方針である。

「その割には結構、行動的と言つが、ぶつちやけ暴力的ですよね。」  
手足の自由が戻る事で、恐れが薄れたアームは、嫌みを言つ余裕が出来た。

「何かを成す為には、直接的な手段を取る必要が出てくる。我々として、それが褒められる行為でない事は重々承知しているが、結成当初は、そうする他無い程、組織の力も弱かつた。」

つまりは、話し合いで解決する自信が、当初は無かつたという事だろう。それについては、部外者の自分達が文句を言える立場では無いが……。

「どう思います？」

自分一人では良くわからないので、同行者達に聞いてみる。

「わたくし個人の意見としては、暴力行為には反対ですので、納得する事は出来ませんが、今は違つと仰られるのであれば、話を聞く

価値があると思いますわ。」

彼らの話を聞く。それは「森林を守る会」の依頼に反し、交流を阻害する組織に肩入れする事だと思っただが。

「だったら、聞いてみたら良い。少なくとも、今回、俺達がここに呼ばれた事に関しては交渉する意思のある行動だからな。」

リユンが縛られていた手足をほくしながら答えてくる。

「困まれて、手足を縛られるって言うのが交渉なんですか。」  
物騒な業界も在ったものだ。

「脅しはあくまで交渉の内だぞ。今回やられたことと、でかい組織が言う事を聞かなければ、社会的に抹殺してやると言うのに、何の違いがある。」

どちらも、関係性を持つのは断りたい相手ではある。

「酷い言われようだが、こちらとしては一応の正当性があるし、襲う相手も選んで襲っていた。国交を絶つために無差別に襲うなんてのはとんだ言い掛かりだと言わせてもらう。」

覆面の男が、こちらの話し合いに加わって来る。ちなみに、彼以外にも、覆面をした者達が部屋に居たはずだが、脅し役としての任を果たしたからか、既に多くが部屋から出て行っている。

「そんな事、覆面を被った人に話されても、信用出来ませんよ。襲う相手を選ぶって言うのも、なんだか怪しい話だし。ここだけの事にしますから、顔見せとか出来ません？」

顔を隠した相手と話すのは、どうにも気分が良い事では無い。

「それは無理な話だ。暴力は辞めろという命令なら聞けても、覆面を外せという願いは聞けない。」

順番が逆の様な気がするが。

「覆面は絶対に外せない……。もしかして、あなた方は国民の集まりなのでは？」

セイリスは少し考えた後、顔を上げ、何かに気付いた様子で話を出す。

「国民の集まりって、そんなの当たり前じゃないか。」

まさか、この覆面集団が外国人の集まりという事も無いだろう。

「そういう事じゃ無い。つまり、彼らは、八百屋だったり、主婦だったり、それこそ何処にでも居る様な者達の集まりなんじゃないかという事だろう。」

リユンの話に頷くセイリス。“一般”国民の集まりという事か。

「その通りだ。私も、この覆面を外せば、そこから店屋でも開いている様な存在だ。だから覆面は外せない。外してしまえば、この組織を作った意味が無くなる。」

だから、何故そうなるかがわからないのだが。

「オークマ国に置いて、「平和を守る会」の考えが、貴族の代表的な意見だとすれば、「国民の利益を守る会」は、その名の通り、一般国民の代表的な組織という事です。基本的に一般国民は、貴族に対抗しようとするれば、個人としては無く、集団で対抗する方が得策ですから・・・。」

「顔を隠して、個人じゃなく、集団として存在する様にしているって事か。なるほど。って、だったら、オークマ国内で、貴族と一般人の争いが起こっているって事じゃないか。」

なんてこった。いつのまにか想像以上にやっかいな事に巻き込まれている。

「だが、これで合点がいった。「平和を守る会」がそうそうに俺達の仕事を終わらせようとしたのも、この争いに気付かせずに「森林を守る会」とコンタクトを取ろうとしていたからだな。シクラ島の領有争いも、貴族側の意見じゃなくて、「国民の利益を守る会」みたいな組織の意見なんだろう。」

そういう事なのだろうか。ならば、この覆面集団の依頼というのはどういった物になるのだろうか。

「我々の依頼も、その件に関しての物だ。それと言うのも、今のオークマ国の現状を聞き、シクラ島の領有争いを知った人物は、大抵我々がシクラ島をサルマ国から奪うおうとしているなどと考えるが、我々は一度も、その様な事を要求した覚えは無いのだ。」



「国民の利益を守る会」は、サールマ国に対して、何かを要求した事は一度も無い。覆面の男はそう答える。

そもそも、「国民の利益を守る会」自体がオークマ国の利益を独占する、貴族達に対する反発として生まれてきた組織であり、外国であるサールマ国に領土を寄越せなどと要求する理由が無いのだ。

「確かにサールマ国に対する恨みはある。長い貿易関係で、オークマ国から膨大な資産や資源が流れて行った訳だからな。だが、貿易である以上、こちらにも得る物はあった。ならば、我々のサールマに対する要求は、貿易関係の変更のみで、領土を奪おうなどと考える訳が無いだろう。」

まあ、彼らの言い分通りだとすればそうなるだろう。

「でも、現にオークマ国はシクラ島の領有権を主張しているって聞きますよ。過激派がそう言ってるんじゃないければ、誰が言ってるんですか。」

アイムの言葉に反応して、覆面の男が顔をこちらに近づけながら答える。

「だから、その調査を依頼したい。このまま我々がシクラ島の領有権を主張しているなどと言われると、貴族から国内の権益を奪い返すという我々の組織方針が、ただの戦争推進運動に成り代わってしまう。」

男の言葉には惹かれる物があった。これまでのあっさりとした依頼とは違い、この国の根本に関わりそうな予感のするものだからだ。しかし、アイムはそれが危険な依頼かもしれないという考えも同様に頭の中に渦巻いていた。だから、相棒のリユンを見る。彼ならば、何かしかの決断を下せると信じている。

「依頼を受けるにあたって、二つの要求がある。それを飲んでくれるのなら、依頼を受けよう。」

リユンはアイムの視線に気づいているのか、「国民の利益を守る会」に対する依頼への交渉に入る。

「二つか。内容を聞いてみなければ、どう答える事もできんな。」

とは言っても、その要求が妥当な物であるならば、彼らはこちらの要求を飲むつもりだろう。

「一つは、かなり危険な依頼の可能性もある。それなりの報酬を貰いたい。」

まずは値段交渉。商売人としては当たり前の行動だ。

「もし、依頼を成功させてくれるのなら、当然、ある程度の報酬は用意する。何分、組織の存続に関わる可能性がある依頼なんですね。金貨で用意した方が良いか？」

金貨と来たか、それがどれほどの量かはまだ図りしれないが、たとえ金貨一枚だとしてもこの大陸では、旅行者が暫く旅を続けるのには十分な資金になる。

「それと、旅道具を幾つか報酬として貰えると嬉しい。そちらの団体の中には、そういった物を販売している業者も含まれているんだろ？」

国内の利益に関する組織ならば、確かに、卸売業者などが参加している可能性は高いが、金貨を報酬として貰えると聞いて舞い上がっていたアムにとっては、リュンのさらなる報酬要求に驚く物があった。

「ふむ。それくらいなら追加で用意出来るが……。ならば、二つ目の要求は何になる。これ以上の金銭や報酬の増加は、組織の許容を超える可能性もある。」

一般国民の集まりと言うなら、組織自体の資産は少ないのだろう。過剰な要求は、彼らを怒らせるかもしれない。

「二つ目に関しては、仕事を成功させるための要求だ。」

「ほう、なんだ？」

男の、覆面から覗く目が興味深そうに輝く。

「シクラ島までの船を用意して欲しい。誰にも気づかれ無さそうな小舟が良いな。依頼の内容がシクラ島に関する物なんだ、直接乗り込んでこない限り、上手く行く物でも無いだろう？」

アムはひさしぶりに、リュンがニヤリと笑うのを見た様な気が

した。

夜が深まり、星と月が輝いているというのに、辺りは暗闇に覆われている。そんな中、アイム達は波の音を聞きながら、小舟に揺られていた。

「結局、あれやこれやとしている内に、別の依頼を受ける事になっちゃいましたね。冷静になって考えてみると、良かったのかな？」

特にセイリスなどは、純潔教徒としての仕事なので、問題があるかもしれない。

「問題になつたら問題になつた時に考える事ですもの。今は、目の前の仕事に集中しませんこと？」

背が小さいと言うのに、なかなか豪快な意見だ。いちいち気にしているこちらが小さくなってしまいたいそうさ。

「純潔教としては、サールマとオークマ、どちらにもコネが出来そうな一件なんだから、別に損になる事はないだろうさ。もちろん、旅の商売人である俺達は、報酬が多く貰える様、仕事をするだけだ。」

船のオールを漕ぎながらリユンが答えてくる。その内容は、「森林を守る会」の仕事では無く、「国民の利益を守る会」の仕事を取るといふ事だろうか。

「まあ、そうですね。それより、こんな小舟で大丈夫だったんですか？ 一応、ここらは海なんですよね。」

一度、航海に出た経験から、船酔いになる事は無くなったアイムであるが、この広い海を見ると、やはり自分がちっぽけに思えて不安になる。

「別に外海に出る訳じゃないしな、暗闇だから、方向を間違えれば大変な事になるが、一応、オークマの海岸から、シクラ島までは泳いででも渡れる距離だと・・・お、さっそく見え来たぞ。」

暗闇によって隠されては居たが、確かに小舟に乗ってから、直ぐの距離にシクラ島の影が見え始めた。

サールマ国にとっての聖地であり、オークマ国がその領有を主張する、森林に覆われた、その大きな影が、アイルムの目的地である。「二つの国の間で、争いの種となる島……。別にシクラ島自体はどこにでもある島だって言うのに、可笑しな話ですね。」

土地と共に生きる種族であるランドファーマーにとって、土地そのものに貴賤を付けるのは、なんだか違和感を覚えてしまう。

「まあ、その争いの種が、島にある木々って言うならまだマシな方さ。酷いになると、本当に何も無い土地を取り合ったり、利用したりする国もある。」

そういう状況には巻き込まれたく無いと思う。土地に潜む地霊が唯一見える種族であるアイルムにとって、その土地で血が流れる事は、地霊が悲しむ事であると思ってしまうのだ。

もちろんランドファーマーと言えども、地霊が喋ったり、喜怒哀楽を示した姿を見たことは無いのだが。

「争いにも色々ありますわ。肯定するつもりはありませんけど、国や土地に生きる人々にとって、無為に思える行為だとしても、やらなければならぬ事と言う物もありますもの。」

多くの国を知識として知るセイリスは、何か思う所でもあるのだろうか。

「さて、そろそろお喋りもお仕舞だ。島に近づけば、見張りも居るだろうし、見つければ、捕まるだけじゃあ済まない。」

シクラ島は、一応、現状はサールマ国の領土であるが、オークマ国側も領有権を主張する以上、オークマ国側からも人が住んでいると聞いている。

当然、現地人では無く、領有権を主張してから住む者達だが。

「もう一度確認しておくが、俺達がシクラ島で何をするかと言えば、あの島に住む人々を調査する事だ。」

あの島に住む者達は、皆、領土争いの話が出てきてから、住み始めた者達だと聞いている。つまり、あの島に住む人を調べれば、シクラ島に関わる問題がどの様な物であるか、解決する糸口になるの

である。

「住む人と言っても、争い事にわざわざ首を突っ込んでくる、荒っぽい奴らだ。何度も言うが、見つからずに、島中を調査するというのが望ましい。」

そう言いながら、リユンはオールを漕ぐ手を止め、その場で立って腰に手を当てた。

船がシクラ島へとたどり着いたのである。

## 五つ目は国の間に(4)

シクラ島に上陸するアイム達は、森の中に紛れて進んでいく。道が無い訳では無いのだが、そういった場所には見張り台らしき物が建てられており、自分達の存在が見つかってしまう可能性が高かった。

「島自体がそれほど大きく無いのは幸運ですね。迷っても、適当に進めば島の端のどこかへ行き着きますし。」

暗闇の中、森の中を進む不安感を、当然アイムも持っていたが、上陸までに居た海の上よりは、限りがある場所であるので、まだ随分とマシであるのだ。

「そのどこかが、島の住人の目の前とかじゃ無かったら良いんだけどな。」

いつもは無駄に自信に溢れているリユンであるが、今回も彼が提案した作業であると言うのに、どこか不安気であった。

「ぶっちゃけると、仕事を成功させるには、島への上陸は必要不可欠だと判断して、ここまで来たが、潜入して情報収集なんてのは殆ど経験が無いから、問題無く出来るかどうか、不安なんだ。」

彼の職業は元々旅の商人であるので、仕方の無い事であるが、ここまで来て、その様な事を言うのはどうなのだろう。

「とは言っても、やらなければいけない事は決まってるっしょるのでしょう？　なら、それをするしか無いのでは？」

唯一平常心で居るのは、セイリスのみである。小さい彼女を見てみると、まったくそうは思えないのだが、彼女の度胸と言うのはなかなかの物である。

「島の住人を調べるんですよね。具体的には何を？」

住人の家に忍び込むとか、そう言った仕事であるならば、途端に難易度が上がりそうだ。ここに居る3人は、盗人の経験などまったく無いのだから。

「まず調べたいのは、サールマとオークマ両陣営に所属する者の服装だな。両者が島内で入り乱れている状況なら、両者を区別する共通点みたいな物が、服装にあるはずだから、それを調べたい。あとは、両者の装備や、島に対する執着がどれほどの物かとか。」  
「服装や装備ならともかく、執着ってなんですか。調べられる物なんでしょうか？」

相手の感情を調べる様な技能なんて持ち合わせては居ない。

「うーん、人の感情とかじゃなくて島への入れ込み具合がどうなのか調べたいんだよ。例えば見張りを真剣にやっているかだったり、島に何人の人を送り込んでいるかだったり。」

それなら調べられなくはないが。

「つまり、両国がどれだけ島の領有争いに取り組んでいるか、調べたいという事ですか？」

「あー、そうそう、そういう事だ。」

そう言われると、確かに「国民の利益を守る会」の依頼に関係しそうな事である。

「特にオークマ側だな、調べたいのは。オークマ側の立場でいったいどんな連中が、島の領有権を主張しているのか。「国民の利益を守る会」との接触で、いったい誰がサールマ側に喧嘩を売ってるのか、分からなくなってるからな。」

過激派がサールマ国に対して、強い敵意を持っていない以上、いったい両国間の争いは何故生まれているのか。それを調べる必要がある訳である。

「もしかして、何か検討が付いているのでは？」

森林の中を、枝を折り、葉を踏みながら進み続けていると、セイリスがリユンを見ながら話し出す。

確かにリユンの行動は、目的が無くては出来ない事である。今だつて、迷いも無く真つ直ぐ進めているのは、彼が指針を決めて居るからだろう。

「んー、まあな。多分、オークマ側を重点的に調べる事になると思

う。」

つまりリユンは、オークマ側に事の発端があると考えている訳だ。「でも、島を欲しがってるのはオークマの過激派じゃあ無いんですよ。だったら……。あれ？　つまりは……。」「何だろう、何か気付きそうな気がする。」

「おっと、話はそこまでだ。どうやら、どちらかの国の集落が見えてきたぞ。」

木々の隙間から光が漏れている。恐らく火によるそれだ。

隙間から覗くと、簡易的に作られた小屋が幾つか並んでおり、中心に大きな篝火が焚かれていた。

篝火の周りには何人かの人影が、深夜だと言うのに忙しく動いていた。

「一見するとエルフが多いようですわね。サールマ側の集落かしら。」

オークマ国側から上陸したのに、サールマ側の集落に辿り着いたという事は、どうにも島の反対側まで歩いて来てしまったという事だ。思った以上にこの島は小さい。

「だよな。ほら、腕も思いのほか長いし、暗いし遠いしで、髪の色は良くわからないけど。」

だが、ウツドエルフらしき人影が多いという事は、サールマ側の可能性は高い。

「腕に腕章らしき物を付けてないか？　それも全員。サールマ国の文化か何かか？」

リユンが目を細め、暗闇の中を見ようとしている。その行為のおかげかどうかかわからないが、どうやら、自分以上には視界が広い様である。

「腕章については良く見えませんが、サールマ国ではそんな物を着けてる人は見ませんでしたよ。」

まあ、それほど長い期間居た訳でも無いので、断言は出来ないが、「文化云々に関しても、わたくしはその様な事を聞いた事がありま



せんわ。」

つまりは、あの腕章はここに居るウッドエルフのみが着けているという事だろう。

「なら、あれはサールマ国側だと証明するための物って事か。幸先が良いな、サールマ国側の情報については、だいたい知りたい事がわかった。」

「え、これだけで分かったんですか？」

随分と早い。何の危険も無く片方が終わってしまった。

「服装と装備と、島に対する真剣さを知りたいって言ったろ？ 服装については、腕章がサールマ国の目印だし、装備はなかなか重装備じゃないか。」

確かに、ウッドエルフ達はどれも肩幅が大きい。別に体の構造がそうなのでは無く、皮鎧を着ているからだろう。何人かは小さ目の弓らしき物を持っている様だ。

「小さな集落なのに、夜にこれだけの人数が出歩いている事を見ると、夜も島の防衛に動いてるって事だ。まだ、オークマ国と小競り合いさえ無いだろうに、準備段階ですらかなり真剣なんだろうさ。」

今にも、戦争を始めそうな様子ではあるか。

「まあ、これで欲しい情報が集まったんなら良いんですけどね。島に対する意識も真剣だって言うなら、見張りも真剣そうで怖いし……。」

「おい！ 誰だ、人影が見えるぞ！」

やばい、見つかった。

「ちょ、二人とも、逃げましょう！」

そう言って、リユンとセイリスを見るが、そこには二人の背中が見えるのみである。

「あ、二人ともズルい！」

どうやら、声が聞こえた時点で、直ぐに逃げ出したらしい。旅人として、必須の技能かもしれないが、なんだか釈然としない心持ちのまま、アィムは二人を追いかけるのだった。

森林の中というのは、当然走りにくい。肌を晒している場所には小枝がぶつかり、血は滲むし、木の根に躓きそうになる。

だが、それは追う側だろうと同じ事で、むしろこちらの方が軽装備なので、木に行く手を阻まれる事が少なく、無事に逃げ切るというのは可能であった。

「はあ、はあ、ちょっと、二人とも、逃げ足が随分早くありません？」

「こちらに声くらい掛けてくれても良さそうな物である。

「危険だと思つたら、真つ先に逃げ出せ。旅人としての基本だな。」

「何故か得意気なりユン。笑つた顔が何とも憎らしい。

「でも、アムさんだつて逃げ切る事ができたじゃありませんか。」

「まあ、それは農家としての脚力を舐めないで貰いたいところだ。

「ランドフアーマーは持久力が結構あるから、長距離を走るのには得意つてもあるんだけどね。」

「逃げ足には、短距離の速さより、長距離を速度を落とさず走る事が重要なのである。」

「あら、それとても宜しい事ですわ。」

「逃げ足が速い事がそんなに宜しい事なのだろうか。」

「でも、サールマ側に見つかったつて言うのは危ないんじゃないですか？ 森の中の見張りが嚴重になるかも。」

「そうなれば、シクラ島での調査も、ここで終わってしまう。」

「確かにそうだが、恐らく、オークマ側はサールマ側よりは、見張りが嚴重じゃ無いだろうから、急げばまだ調査する時間が残っているだろうな。」

「どういう事だろう。島を守る側が真剣ならば、島を攻めようとする側も真剣であるべきだろうに。」

「とりあえず、行ってみればわかるさ。時間が経てば、調査の機会が少なくなる事には変わり無いしな。」

「そう言つて、歩き出すリユンの足は、先程、全力疾走したとは思

えない足取りであった。

「まあ予想していた通り、オークマ国側の警戒は薄い薄い。」  
確かにオークマ側に向かうに従って、道に配置されているはずの見張り台の数が極端に少なくなっているし、何より、人影自体が無い。

「みんな眠ってるんですかね。」

オークマ側の集落にまで辿りついたが、そこにはサールマ側で見た様な篝火も無い。おかげで、様子を見るのも一苦労のはずなのだが、人が居ないせいで、じっくりと観察する事が出来た。

「かもな、なにせ夜だし。」

「先ほど、サールマ側で騒ぎがありましたのに？」

セイルスも、オークマ側の様子に疑問を持っているらしい。

「サールマ側での騒ぎなんだから、オークマ側の誰かが起こしたと思ってるんじゃないか？ なら自分達が慌てる必要も無いしな。」  
本当にそうだとしたら、とんだ腑抜けの集団だ。

「本気で、オークマ側は何を考えているのか分からなくなって来ましたよ……。」

そもそも、シクラ島での問題は、オークマ側がシクラ島の領有を主張し始めた事では無いか。だと言つのに、この真剣さの無さは何なのだ。

「アイム、お前、さっき何かに気付きかけていただろ。あれは何だ？」

「なんだと言われても、馬鹿馬鹿しい考えですよ。ちょっとと思いつき程度の。」

よく考えればそんな事はありえないのに。

「良いから言ってみろって、当たってるかもしれないだろ。」

「だーからー、オークマ国の過激派が島の領有を主張してないんだったら、穏健派が主張してるんじゃないかって思っただけです。でも、そんな事する必要が無いでしょう？」

穏健派は、相手に攻撃的にならないから穏健派なのだ。

「なんだ、当たってるじゃないか。」

リユンはアイムの答えに満足そうに頷く。

「え？ 当たってるって、じゃあ本当に穏健派の人達が争いを扇動しているって言うんですか？」

その通りだと、リユンは自分の予想を明かす。つまり、このシクラ島での騒動は、オークマ国の自称穏健派と呼ばれる連中が引き起こしているのだと。

「わかりましたわ！ 穏健派の方々には、オークマ国の貴族が多いのでしたわね。」

セイリスも状況が理解出来たらしく、手を叩き、何やらヒントになりそうでならなさそうな、話をする。

「ちよつと二人とも話の内容まで置いて行かないでくださいよ。こっちはぜんぜん状況がわからないんですから。」

逃げ道で先に行かれて、仕事まで放って置かれては立つ瀬が無い。

「簡単な話だ。穏健派は貴族が多い。そして貴族は事なかれ主義で、騒動を嫌う。」

だから、シクラ島の領有を主張する事は無いのでは。

「シクラ島の問題は騒動その物じゃ無いですか。」

「騒動の順番が違うのさ。シクラ島の問題の前に、オークマ国の中ではサールマ国との間で、交流関係の悪化が起こっていて、そのせいで過激派である「国民の利益を守る会」が生まれている。」

つまり、シクラ島での問題より先に、過激派が国内で暴れているという騒動が起こっていたという訳だ。

「貴族連中、まあ恐らく「平和を守る会」みたいなのが行動を起こす様になったのは、その頃だろうな。何とかして過激派達を鎮静化したいと考えたんだろうさ。」

過激派と言っても、彼らは一般国民の集まりだ。無理矢理鎮静化したって、新たな騒動の原因を生むだけでは無いだろうか。

「ですから、シクラ島の領有を主張して、問題の矛先を変えようとした訳ですね。」

騒動の解決のために、新たな騒動を起こすというのはどうなのだろう。

「結局、解決しなければならぬ問題が増えただけじゃないですか。」

「増えた問題の内容によりますわよ。例えばその騒動が、元々あった騒動を潰してくれるとしたら……。」

毒を持って毒を制する形になる訳か。

「「平和を守る会」はシクラ島の問題に対して、どんな意見を言っていた？」

「特に何も。国内の過激派には困ってるとは言ってましたけど。」

良く考えてみればそれも可笑しな話だ。シクラ島の問題があるから過激派にも困っていると言えば良いのに、その話をせずに、過激派だけに困っている様に話すとは。

「一応、俺達はサールマ国側からの使者だからな。嘘を吐かず、それで居て、すべての問題が過激派にあると思わせたかったんだろうな。だから、シクラ島の問題にはあえて触れなかった。そもそも、サールマ国にはしっかりとシクラ島の領有を宣言しているんだ。本来、そういうた事をするはずの貴族達が後ろについている穏健派が無関係なはずが無いだろうに。」

そうか、シクラ島での問題を詳しく話せば、過激派が何故シクラ島の領有を主張しているのかという意見が当然出る訳で、そこから、過激派と呼ばれるそれが、いったいどういう存在なのか興味を持たれる可能性がある。

「詳しく調べられて、シクラ島問題が穏健派の自作自演だと知られたら、それこそ両国間の関係が最悪な状況になりますね。」

下手を打てば戦争か。恐ろしい話だ。

「さて、そこで問題だ。もし、穏健派の思惑通り、シクラ島や諸々の問題が、過激派達の仕業と言う事になればどうなると思う？」

サールマ国の敵意は当然、過激派へと向かう。国内でも悪戯に両国間を争いへと巻き込もうとする団体なんて支持される事は無くなるだろう。

「全部の責任が過激派へと向かつちゃいますね。」  
「まったくもって笑えない話である。これだから悪巧みというのは嫌いなのだ。」

「それだけじゃあ無い。過激派が潰れた後は、これ見よがしに被害者を気取るだろう。そうなれば、サールマ国からの敵意は薄れるだろうし、何より元々、サールマ側には交易上の不公平をオークマ側に与え続けてきたという罪悪感が残る。それは、今後の交渉を上手く運ぶ手段として使われる事になるだろうな。」

「なんという事だ。問題の元凶を作った穏健派だけが得をする構造になっっているとは。」

「でも、自分達の利益を守るために全力を尽くすのは、人として当然の行為でもあると思いますわ。」

「穏健派をかばう様にセイリスが話す。純潔教的には、そういった事も許容範囲らしい。」

「だって、状況を放っておけば、被害を被るのは穏健派の方々だったのですから。それを何とかしようとする行為に後ろめたさはあっても、一概に悪と言う事は出来ないと思いますの。」

「結局は、誰かが損をしなければならぬのだから、誰かが悪いという訳では無いのだろう。まるで、いつか爆発する風船を、押し付けあっている様だ。」

「なんとも複雑な問題だな。結局は他人事なんだろうが、そこに仕事として関わっている以上、無視する事も出来ない。」

「さすがのリユンも、国家間やら組織間の問題には、思い悩む事もあるらしい。本当に珍しい事である。」

「でも、やっぱり穏健派に一番の責任があると思いますよ。」  
「あん？」

いきなり何を言い出すのかという表情をするリユン。

「だって、このまま何もしなかったら、サールマ国と「国民の利益を守る会」の人達が損をして、穏健派だけが得をする事になるんですよね。一つの利益のために、二つが不利益を被る。これってすごく不公平です。」

アイムと話を聞いた後、リユンとセイリスの表情は途端にきよとんとした顔へと変わり、そしてリユンのみ、そこから笑い顔へと変わって行った。

「あつはつは。その発想は中々の物だな。そうか、損をする側が多いのは不公平か。その通りだ。おい、どう答える、セイリス。」

誰かが損をするなら、それ以上の利益を誰かが得ないと意味が無いではないか。笑う程の物なのか。

「それは、まあ、その通りですけど・・・。」

セイリスと言えば、アイムの発言に反論する事は出来ないが、引つ掛かる物はあるという様子だ。

「なら、もう一つ、俺達が穏健派の企みを何とかしなければいけない理由があるんだが、それを聞けば納得するか？ 今、アイムの話聞いて思い出したんだが。」

思い出す事など有っただろうか。

「それはいつたい？」

セイリスの返事を聞いたリユンの顔には、既にあの、嫌らしい笑顔が浮かんでいた。

「俺達に仕事を依頼したのは穏健派の「平和を守る会」じゃない、「森林を守る会」と「国民の利益を守る会」だ。なら、俺達がしなきゃいけない仕事は何なのかわかるな？」

当然、穏健派では無く、サールマ国と過激派の利益について考えなければならぬ。

だから、二手に分かれて行動しようと言う意見はどういう事だろうか。

二手というのは二つの国にそれぞれ分かれるという事であり、リ

ユンがオークマ国の「国民の利益を守る会」に接触している間、アイムとセイリスがサールマ国へ戻り、「森林を守る会」の依頼を果たすという事でもある。

「という事で、これがオークマ国へと渡り、状況を調査した結果ですわ。」

「どうやらセイリスの話が終わった様だ。現在、アイム達は「森林を守る会」の会館へと向かい、会の代表であるフェリウスに再び会う事になった。オークマ国の情報を伝えるという依頼を行っているのである。」

「これは、想像した以上の成果というか。これが真実であるならば、我々「森林を守る会」の方針を考えなければならぬ情報ですね。」

「まあ、その伝えた内容がわざわざシクラ島に渡ってまで集めた情報なのだから、それくらい驚いて貰わなければ甲斐が無いと言う物だ。」

「しかし、比較的友好だろうと思われた穏健派の方々が、そもそもの元凶とは……。思い悩む物があります。」

額に指を当てて、嘆くフェリウス。彼としては、オークマ国との穏健派を交流再開相手にしたかったのだろう。だからこそ、オークマ国に向かった後には、「平和を守る会」へと立ち寄る様に、場所をアイム達に紹介したのだから。

「失礼ですが、元凶と言う意味では、サールマ国にもあるのでは無いでしょうか。元々は交易の不平等から始まった問題ですもの。でしたらオークマ側の行動も、ある程度、理解くらいはしても宜しいのでは？」

「少々、辛辣な言葉であるが、彼女なりに両国間の今後を考えての言葉に違い無い。」

「ですが、国民感情と言うものもあるでしょう。それを抑える権限や力など、この会にはありません。」

「もったもな話であるが、一応、スポンサーとして裏側には財力という力を持った人々が居る会なのだから、何か行動を起こすだけの



余裕はまだ有ると思われる。

「元々、オークマ国との再交流を図るつもりだったのでしょう？  
でしたら、その相手を変えろという事はできませんの？」

一応、これからセイリスが話す内容こそ、アイム達が考えたオークマ国穏健派を出し抜く方法である。

「というと？」

フェリウスは額に置く指を下げ、少し興味深そうに顔を上げる。

「先程話した様に、オークマ国には過激派という方々がいらっしやいます。どうにも、それ程、サールマ国に敵愾心を持っている訳ではありません。当然、良い感情と言う物が有るといふ事も無いのですが、彼らの第一目標は、オークマ国内における利益の再分配ですわ。妥協と言う訳ではありませんが、手を組む事は可能と思われませんか？」

穏健派が、自分達を被害者側として演出しようとするなら、それを見るサールマ国と加害者側にされる「国民の利益を守る会」を結び付けてしまおうという事である。そうすれば、穏健派が下手な演技をしている間に、両者は新たな利益を生む関係へと進んで行ける。「こちらとしては、当初の目的は変えずに、手を組む相手だけを変更する事になりますね。確かに可能だと思いますが、相手方はどうなのですか？ それで納得出来る方々なのですか？」

「それは、私達の仲間の一人である、リユンさんが、現在、オークマ国内で説得を行っている所ですわ。恐らく、上手く行くと思われませんか？」

まあ、確かに上手く行くだろう。これらは全部、リユンが考えた事であり、彼がこういった絵図を描いた時は、だいたい、彼の思い通りに事が進むのである。

しかし、そこに不満を覚えてしまうのはアイムであった。リユンに対して不満があるのでは無い。

オークマ国で行動しているのはリユンで、サールマ国で「森林を守る会」と交渉をしているのはセイリス。これでは、アイムだけが

まるで置いてけ堀にされているようで、何か歯痒い。実際、今回の仕事で、自分が役に立った事はあっただろうか。

自分とて、彼らの仲間なのだ。何か行動を起こしたい。だが、交渉に関しては他の二人がした方が上手く行く。ならば、自分が出来る事はなんだろう。

そんな事を考えて、アイムが思いつく事と言ったら、一農家としての意見であった。

「ちょっと待って下さい。交流再開や、相手の変更はそれでも良いですけど、本当にそれで解決するんですか？ 結局、外観が変わっただけで、問題の原因である交易の不公平はそのままになると思っていますけど。」

上がどう動こうと、下に居る物は状況が実際に変わってくれなくては、実感と言う物が無く、不満を覚えてしまうのが普通なのだ。

「ですけど、これ以上、わたくし達や「森林を守る会」の方々に何が出来るとおっしゃいますの？ リュンさんとも話し合って、こうするのが一番という事になりましたのに。」

確かにそうだ。だが、まだ、アイム自身の意見をすべて言った訳でも無い。

国家間などと言う良く分からない物を理解する事は、アイムには不可能だったから、意見を出さなかったが、それでも農家として何か口を挟みたかった。

「しかし、アイムさんと言う事ももつともです。「森林を守る会」としては、そう言った二つの国の間にある溝こそを解決したい。」

そうだ、それが理想なのだ。理想は夢と同義かもしれないが、自分達は報酬を貰う側なのだから、それに近づける努力をしなければならぬ。

「結二国間の不平等は、相互依存の関係から、サールマ国側だけが抜けだしてしまった事に問題がありますわ。この状況をどうにかするには、オークマ国も自国だけで成長して行ける様になる事が重要ですけど……。」

それが出来れば苦勞しないという事か。確か、その相互依存の關係とは、木材の交易に関わる事であった。サールマ国が自国開拓のために森を切り開き、オークマ国は商船用としてそれを購入する。

だが、これではサールマ国の得が圧倒的に多い訳だ。これをどうにかする。木に関する事なら、農家としての意見が出せるかもしれない。

農家として、木を、交易で。様々な考えがアイムの頭に浮かぶ中ふと、一つの考えが、アイムの頭に広がる。

「あのお、木をオークマ国で生産するのは割に合わないって話だったよね。」

その考えを補強するため、セイリスに意見を聞く事にする。

「ええ、その通りですわ。あくまで、別の国が木材に関する生産と加工を、すべて行っているからこそ、それを利益有る物として扱う事ができますから。」

そう、そして、そこを解決出来れば、オークマ国は自国で木材を生産し、自国のみで商船を作る事が出来る。

そうすれば、二国は両者、自立した立場で交流を行う事が出来るのである。

「やっぱり、それは絶対なのかな？ 適当な技術と労働力があれば、利益とまでは行かないまでも、商船用に木材を賄う事って出来るんじゃないかって思うんだけど。」

「まあ、確かにそうですね。それがオークマ国に現在無いから問題が起こってるのでしょうか？」

彼女の言う事はもっともである。しかし、解決する方法が無い訳では無い。

「技術なら有るじゃないか。今、この国に。だって、木材を他国に売り続けた実績があるんだから。技術と労働力は十分有ると思うけど？」

オークマ国に木材に関する適正が無いのであれば、サールマ国で調達してしまえば良い。

「それで、今までの関係とどう違つと言いますの？」

「そうだ、今までの関係と変わらない。ただし、やはり、サールマ国がオークマ国に売る物が違つのだ。」

「サールマ国は、これまでの開拓で、もう木を売り払う必要が無くなつたんですよ。でも、木を加工する技術はそのままだ。きつと「森林を守る会」なんて物があるくらいなんですから、育てる技術だつてあるんでしょうけど、勿体無くないですか？ そのまま技術を廃れさせるなんて。」

アイムは、口を開く度に自分が饒舌になつて行くのを感じていた。そうだ、これなのだ。自分がリユンの付いて行く事にしたのは、こつた仕事が出来ると、彼に唆されたからだ。

技術をその技術を持たない者に売る。これが当初、リユンがアイムへと話していた仕事であつた。

「案外、そう言つた技術つて職人気質で伝達する事が無いんですよ。でも、それつて凄く勿体無い。必要としている国がある一方で、必要無くなつて、廃れていく事になる国が有るんですから。」

今までの交易も、形だけでも上手く行つていた時期があるのだ。だから、その形だけでも真似てしまえば、また上手く行く様になる。「しかし、それを行つていても、再び両者の不平等が起こるので無いのですか？」

フェリウスの疑問も尤もだ。しかし、技術という物は少々性質が違つ。

「技術と言つたものは一度伝われば、長い間受け継がれて行く物ですよ。木材は、一度使えば無くなりますけど、目減りする事は少ない。」

サールマ国がオークマ国に技術を売り続ければ、それだけオークマ国の木材に関する技術が増え続けるのだ。

いつか来る交易の破綻はと言えば、サールマが伝える技術が無くなつた時であるが、サールマ国自体は、自立した状態であるので、それによる被害は少ない。

一方でオークマ国も、最終的に自国で木材を賄える状況になるのである。

「面白い考えですね。しかし、それを行うには、木材を用意する場所が必要です。サルマ国でそれを用意してしまえば、結局、同じ事では無いですか。」

批判的な意見であるが、フェリウスの目線は真剣な物となっている。手応えがあったのだ。自分の意見は、役に立つかもしれない物と判断されている。

「だから場所自体をオークマ国で用意するんです。それも植林の段階から。当然、その労働力は一時的にでも、サルマ国の方々が賄います。元々、開拓が終わった結果、余剰分の労働力はあるはずですよ。」

そして、最終的にはオークマ国だけで生産活動を行える様になれば、交易の不平等は無くなる。両国は対等な関係で交流が行える様にもなる。

「うーむ、確かにそれを行えば、両国の溝も無くなるでしょうね。両国の国民自体が、他国で交流する事になるので……しかし、準備が必要だ。話し合いと、実際に植林に適した土地探し。それに、今現在、両国の仲は険悪だ。それを進めて行く間に、反対だって起こるでしょう。」

だが、それでもフェリウスの興味は自分へと向かっている。アイム自身、この仕事を始める時に何か一押しが欲しかった様に、彼も同様なのだ。

ならば、自分はその一押しを行う必要がある。

「当然、交渉や国内外の反対については、僕らが干渉出来る物ではありません。ですが、土地に関しては別です。僕は見ての通りランドファーマーですから、植林に有効な土地探しは十分に行う事が出来る。そうしたら、次はあなた方の出番ですよ。なにせ「森林を守る」会」なんでしょう。新たな森を作るのは、あなた方の会が望む仕事であるはずですよ。」

フェリウスはアームの話を書く度に、その表情を真剣な物へと変えて行く。確かに、アームの言葉は、彼に通じたのである。

アームは、その成果に満足感を覚えると同時に、自然と笑みを浮かべていた。アーム自身、不本意な事であったが、きっとその表情は、リユンのあの笑みに似ているのだろう。

オークマ国へと再び向かい、リユンと合流した後は、交渉や根回し役を、リユンとセイリスに任して、ただひたすら土地探しをしていた。

初めて、自分で提案した仕事なのだ。甲斐と言う意味であれば、十分な物だった。

アームはオークマ国内を周りながら、地霊が植林に適しているだろう状態になっている場所を探し続けている。

「よう、仕事熱心で結構な事じゃないか。」

土地を探して歩くアームの背中から、リユンが話し掛けてきた。場所は町から離れては居るが、歩いて来れない場所では無いので、旅慣れている彼にとっては、アームに追いつくのは簡単な事なのだろう。

「そりゃあそうですね。自分の腕に両国間の仲が懸かっているんですから。熱心にもなりません。」

半分は吹かしであったが、もう半分は本気である。それくらいの仕事をしているつもりであった。

「過激派との交渉は、まあ順調だよ。暫くすれば、「森林を守る会」に引き継ぎが出来る状態になるんじゃないかな。そっちはどうなんだ？」

リユンは早歩きになって、アームの横に並ぶ。

「隣国が元々、森林地帯だったんでしょ？ だったら、オークマ国内だって植林に向いている土地はあるはずですよ。」

後は、それを自分が見つけるだけなのだ。これは自分にこそ向いている仕事だと考える。

「お前が、「森林を守る会」から別の仕事を取ってきた時は驚いたよ。正直、そういう事が出来るって期待はしてなかったからな。」  
まあ、そうだろう。実際、今では、あれ程饒舌になった事が嘘み  
たいな気分であった。

「どこかの誰かに影響されたんですかね。なんだが、自分の能力と  
周りの状況とを見比べて、言う事が自然と出てきたというか。そん  
な感じなんです。」

上手く言葉に出来ない。やっぱり、話し合いという物には、まだ  
まだ経験が足りない様だ。

「はは、まったく、何時の間にか一端の商人じゃないか。農家を辞  
めて、そっち一本で生活するか？」

まあ、実際、現状がそうなのであるが、農家を辞めるとい  
う選択肢は自分には無い。

「僕は農家として、この旅を続けていきたいですから、遠慮しとき  
ますね。だって、農家だから、今、この仕事が出来てるんですから。」

肩に背負う荷物の中から顔を出す、一本の鍬に目を向ける。これ  
は、その意思の証でもある。自分は農家として、この大陸を見続け  
たい。そう思うのだ。

「ま、お前らしいと言えばらしいか。」

リユンはアームから視線を外すと、視界いっぱい広がる土地に  
目を向ける。アームも釣られて目を向ける。

どう見たって、どこまでも続いている様に見えるし、何より果て  
しない。ここから、目的の土地を探す必要があるのだが、気持ち  
が萎える事は無い。きっと、自分の仕事を果たしてみせる。

アームの視界には、そんなアームの決意を祝福する様に、地霊達  
がはしゃいでいるのだった。

## 六つ目は星空の下で（1）

旅に慣れれば余裕が出来る。余裕が出来れば考え事が増える。

揺れる馬車から、空を見ていたランドファーマーの少年、アイムはまさにその様な心持ちであった。

アイムが乗っているのは乗り合い馬車であり、馬車には他にも何人か、客らしき人々も乗っていた。アイムもその客の一人である。

先に立ち寄っていた、オークマ国での仕事を終えたアイムは、今、次の国への道を進んでいるのだ。

大陸南側で良く見る森林地帯から、荒野に近い平野へと徐々に変わる風景を見て、確かに自分達は旅をしているという実感を覚えながら、アイムは何とは無しに様々な事を考えていた。

最初は、良くここまで来たものだという考えから始まり、自分も随分この仕事に慣れてきたという感慨に耽る。

考えてみれば、アイムの出身国であるシラヒ国は大陸の北側であり、今居る場所は南側。つまり大陸を縦断した形になるのである。それはもう慣れると言う物だ。

アイムの次に考える事は、今までしてきた旅がどの様な物であったかについてだった。

平凡では無かったはずだ。特にドラゴンに会うというのは、決して一般的な旅人が経験する事では無い。

「そういえば。」

天上を見るのを辞め、正面を向き、突然言葉を発するアイムを見て、同行している旅仲間達がこちらを向く。

「うん？ どうした、間抜けな恰好で考え事をしているな思えば突然。」

話しかけてくるのは、アイムを旅に誘った張本人である、ツリストのリユンであった。

それにしても、間抜けな恰好とは失礼な。あれこれ考えるのは、



地面を見るより空を見た方がランドファーマーには都合が良いのである。地面を見ていると、彼ら種族だけが見えると言う、地霊がこちらに映り、正直、目障りなのだ。

「いえ、森に棲むドラゴンに貰った角は、どうしたのかなと。」

今までの旅で、リユンは4種類居る内、2種類のドラゴンに出会っている。しかも、二度目の出会いでは、仕事を依頼され、その報酬としてドラゴンの角を貰ったのであった。

「あー、確か金目の物には成るだろうと渡されたんだっけか。」

リユンも、その存在を忘れていたらしい。まあ、その後に寄った国で、別の仕事をすぐ見つけたせいで、思い出す機会が無かったのだから仕方ない。

「お二人とも、せっかく頂いた物を、忘れるなんて失礼な事ですよ。」

旅のもう一人の仲間である小さなエルフのセイリスは、他の二人にそう言いながら、旅行鞆の荷物を漁っている。

「ほら、まだ、荷物の中にしっかりとありますの。」

鞆の中にある他の荷物を押し分け、それなりに大きさがあがる曲線状の尖った骨が出てくる。

「ぶつちやけ凄く邪魔になっている様に見えるんだけど。」

旅をしていて役に立つ物でも無いし、さっさと売り払った方が良かったのでは無いだろうか。

「まあ、そうだな。次の国に着いたら、さっさと処分するか。二束三文でも値段が付いたら良い方だろ。」

ドラゴンからは、きつと高く売れるだろうと言われて渡されたが見た目がそれほど良くも無いので、そうは思えない。

「二人とも本当に失礼な方ですね。人との出会いは、価値ある物で、これはその証明ですよ。」

人では無くドラゴンだし、別に証明とやらも欲しい訳では無いのだが。

「まあ、ドラゴンの角に関してはとりあえず置いておこう。次に気

付いた時に対処したら良い。」

それは、次の国に着く頃には忘れてそうな話である。

「しかし、なんでまたドラゴンの角なんかを思い出したんだ？」

「そりゃあ、気になったからである。では、何故気になったかと言うと……。」

「ちよつと、旅の途中で出会ったドラゴンについて考えてたんですよ。僕らつて、これまでの旅で2種類のドラゴンに出会った訳ですよね。」

それは珍しい事では無いかと思うのだ。

「最初に出会ったドラゴンに関しては、わたくしとアイムさん達との出会いでもありましたわね。」

なにやら、運命めいた言葉を使っているが、あの時、船の舳先に上らされた事は絶対に忘れる事は無いだろう。

「4種類居る内の2種類に出会っちゃったんですから、もう2種類も会う機会はあるかなと。」

出会えば危険な場合もあるが、他のドラゴンへの興味という物も、また膨らんで来ているのだ。

「うーん、残り2種類ね。まあ、内1種類はそんなに危険でも無いし、出会う可能性はどこにでもあるが……。」

なんだろう、興味深い話である。

「空に棲むドラゴンの事ですわね。基本的に見たという方々から、危険な事になったなどと言う話は聞いた事ありませんの。」

ふむ、だった一度会って見たくはあるドラゴンだ。

「でも、空に棲むってどういう事なんですか？ ずっと鳥みたいに羽ばたいているとか。」

ならば、空のドラゴンは大きな鳥の様な姿なのだろうか。

「俺も詳しくは知らないが、アイム、流星は見たことがあるか？」

「流れ星ですか？ そりゃあ何度か。願い事が叶った事は無いですけど。」

それにしても、流れ星に三度願い事をすれば叶うなどと言い出し

た奴は、どんなに嫌らしい奴なのだろう。

「その流れ星の内、幾つかは空のドラゴンらしいって話だ。遠くから見ると、ほとんど流星と見分けが付かないんだと。」

ほう、という事になると、実は空のドラゴンとは既に出会っている可能性もある訳だ。

「君たちはドラゴンに興味がお有りかね？」

「うわ！」

アイム達の会話に、突然、ずいっと顔を出しながら小太りの男が入って来た。恐らく、乗り合い馬車に乗っていた他の客だろうが、心臓に悪い事はやめて欲しい。

「おおっと、驚かせてしまったかな？ 私は人間種族のドロクモと言う者でね。」

小太りの男は礼儀正しく、腰を曲げて挨拶をするが、その丸め体が原因でコミカルに映るのは何故だろうか。

「ドロクモさんですか？ ええっと・・・。いったい何の御用で？」

「

違う旅人の話に、突然入ってくるなど、普通はしない事である。

どの様な目的で話し掛けて来たのだろう。

「ええ、私は生物の調査をしながら旅をしていてね。特にドラゴンについての調査が主体だから、君たちの会話に興味を持った訳だよ。」

「

ズボンから突き出た腹をどうだと言わんばかりに揺らしながら、ドロクモが自分について話して来るが、何が凄いか分からない。

「人間種族つてのは、そんな事を趣味にして居るのか？」

リユンが飽きた顔でドロクモを見る。即物的な彼にしてみれば、危険が有りそうなドラゴンの調査を行うというのは、価値の無い物に映るのだろう。

「趣味ではあるが、職業でもある。調査をする上で金銭を得ている身だね。所謂、学者と言う奴だ。であるから、多少危険な調査であるろうとも、やる意欲は十分あるのだ。」

まあ、趣味と実益を兼ねていると言うなら、納得も出来る話だ。アトム自身だって、似た様な立場ではある。

「でも、ドラゴン調査で金銭を得る事が出来るというのは、どういう事ですか？」

セイリスも、ドロクモに興味を持った様だ。だが、食いつく部分が実利的な方面であるのは何故だろう。

「そういつた事に対して興味を持っている連中と言うのを考えてみたまえ。大概が金持ちだ。そんな者達をスポンサーにしている学者と言うのは多いよ。かく言う私も、とある貴族の後ろ盾があって、この仕事が出来ている。」

確かに純粋な調査や、生物に関する興味などから学者を雇う者と言うのは居るかもしれない。

しかも、その様な人種は金銭的に余裕のある事が常であるし。

「でしたら、ドラゴンの角にも興味があるのかしら。他の二人は、さっさと売ってしまおうと連れない事を言いますの。」

脇に置いていたドラゴンの角を、再び持ち上げるセイリス。そんな姿を見て、ドロクモは目を輝かせ始めた。

「ほう、これは……。本物なのですか？ 角のあるドラゴンと言えば、森に棲むドラゴンが思い当りますが。」

ドロクモはセイリスの手にある角を、凝視し続けながら聞いてくる。

「え、ええ。証明しろと言われれば難しいですけど、間違い無く、森に棲むドラゴンですよ。」

ドロクモの様子に、若干怯えながらも、セイリスは話を続けている。まあ、その上半身を、ドロクモから離そうとしているのは仕方の無い事である。

「ほほう。なるほど、なるほど。森に棲むドラゴンの調査には、ドワーフの協力が必要不可欠なのだ、彼らは他種族に排他的であるから、実際、難しいらしいのだよ。だから、これが、森のドラゴンの角だとすると、大変珍しい。宜しければ、譲る気という物はある

ますかな？」

「そこまで、大切な物という訳でも無いので、譲ってくれと言われれば、交渉次第で譲っても良いのだが、なんとなく、この学者の雰囲気には押され気味になってしまおう。」

「無償でつてのは無理だが、まあ、対価を払う気があるのなら譲っても良いぞ。」

ドロクモの勢いを止めたのは、リユンであった。

「対価か……。まあ、これくらいならすぐにだせるが。駄目かね？」

ズボンのポケットに手をやり、金銭を幾ばくか取り出すドロクモ。出した額は子供の駄賃程度のものであった。確かにこれならすぐだせるだろうが。

「あんまりと言えば、あんまりな対価じゃありません？　いくらなんでも、その額で取引って有り得ませんよ。」

「一応、この角だつて自分達の仕事の報酬なのだから。」

「よし、売った！」

「はい！？」

「そのあんまりな値段にに応じてしまおうリユン。いったい、何を考えているのか。」

「実際、見た目はそこらの石ころと違いが無いんだ。それくらいでも売れた方がマシだろうに。何より荷物になる。」

「まあ、それもそうだが、こつもあつさり扱われるのは少し抵抗がある。」

「私としては嬉しい限りだがね。貴重な標本があつさりと手に入るのだから。」

「うーん。あの角が学者に扱われるというのは、まあ良い使われ方なのかもしれないが……。」

「まあ、貴重とは言っても、現地に行けばあつさり手に入りかねない物ですけども。」

あのドラゴンなら、親しくなった相手がくれと言えば、差し出す

事になるだろうし。

「ふむ？ 君たちはこの角をドラゴンの居る土地で、直接手に入れたのかね。」

しまった。実は森に棲むドラゴンが存外にフレンドリーで、直接会えば、角どころか、自身の調査さえ、快く許してくれるなどと知れば、角の価値が、子供の駄賃以下にまでなってしまう。

「いや、ドワーフが排他的って言うのは、実は噂程度で、調査するなら、丁度良い宿がドワーフの森にあるんですよ。だから、ドラゴン調査も、し易い状況なんじゃないかなって。」

とりあえず、ドワーフについての話で場を濁して置く事にする。ドワーフ自身から宣伝して欲しいというお願いもされて居るので、こういう話に使っても別に構わないだろう。

「ほう、そうなのかね？ ならば、言ってみる価値はあるかな。だが、今は別の調査をしているからね。また別の機会になりそうだが……。」

ふむふむと考え込むドロクモを見て、金を返せと言われない事を祈るアイム。横見ると、リユンが、セイリスから角を受け取り、ドロクモから代価を受け取るうとしていた。

なんとも、商売熱心な事だ。

「そういえば、調査と言われましたけど、やはりドラゴンの調査をするつもりなんですか？」

その事に関しては、少し興味がある。なんだかんだ言っても、ドラゴンに憧れを持っているアイムであった。

「ああ、その通りだよ。実を言うと、君たちに話しかけたのもそのためだね。」

うん？ どういう事だろうか。

「君たち、ドラゴンに興味があるのなら、私の仕事を手伝ってみないか。」

ドロクモはウインクをしながら話すが、見るからに年配で、尚且つ男にその様な事をされても、心はときめかない。

「仕事の依頼って事か？ それなら、角と違って、それ相応の報酬を要求するぞ。まさか、さっきの駄賃程度の報酬じゃあ無いだろうな。」

さすがは仕事の交渉役である。依頼に関しては厳しい態度だ。金銭に関する欲が深いとも言つ。

「学術的興味を満たせると言うのは、十分な報酬とは思えないのかね？ まあ、アルバイト代くらいなら出せる余裕はあるが。」

「なら、無理だな。それでも旅をしながらの商売で食ってるんでね。しっかりとした物を貰えないなら、こつちが困る。」

リユンの言うこともわからなくは無い。

「でも、ちよつと、仕事内容だけでも聞いてみませんか？ ほら、なんてったってドラゴン関係の仕事ですし。」

理由になつていない事を言うアイムであるが、実は凄く興味があり、もう少し話を聞きたいのであった。

「アイムさんは、ドラゴンにそんなに関心がありましたの？」

仲間の様子に小首を傾げるセイリス

「いやあ、旅で出会う内にちよつと興味が湧いちゃってさ。」

自分達はドラゴンに出会った事があるが、詳しい事はあまり知らないのだ。それを知る事が出来る機会があるのなら、関わってみてみたいというのが本音である。

「もし、仕事内容に不安があるのなら、心配はいらんど。やって貰う事は雑用仕事に近い。」

だとするなら、アルバイト代程度の報酬でも元は取れるのでは無いだろうか。アイムは、事の方針を決めるであろう、リユンを見た。「あー、セイリス、君はどう思う？ 今のところ、仕事を受けるか受けないかで半々なんだが。」

結局は、多数決で決めてしまった方が、手っ取り早いと判断したらしい。まあ、アイム自身も、そこまで積極的に仕事を受けたいと言われれば、それでも無いので、これで決着するならそれでも良かった。

「金銭面に関しては、前の仕事の報酬で余裕がありますわ。だから、今回の仕事で報酬を気にし過ぎる必要は、そこまで有りませんの。でしたら、興味を満たす程度の報酬でも構わないと考えます。」

と言う事は、彼女は今回の仕事を受ける事に賛成と言う事か。

「それに、わたくし自身、ドラゴンについて知る機会があれば、知りたいですし。」

「それって、セイリス自身として？ 純潔教として？」

彼女の場合、裏に宗教団体が着いており、その組織の意向によって、方針を決める事がある。

「どちらもですわ。わたくしとしては、面白そうな仕事だと思いますし、純潔教としては、様々な物事に大きな影響を与えるドラゴンを知るといのは良い事だと思いますの。」

仕事と趣味が両立出来る仕事だから、受けたいと言う事か。

「という事は、賛成2と反対1で私の仕事を手伝ってくれるのだねいや、これは助かった。」

膨れた腹を揺らして笑うドロクモ。まあ、部下やら配下やらが居る雰囲気的人物では無いので、大よその仕事は一人でやってきたのだろう。誰かが手伝ってくれるというのは嬉しいらしい。

「ま、そういう訳だ。個人的には、まだ反対だが、俺一人で仕事をしている訳じゃ無いしな。だが、一応、詳しい仕事内容くらい確認させてくれよ。」

それは、アイムも知りたかった。ドラゴンについて知る事が出来ると言っても、それがどの様な物かによって、意気込みも変わってくるだろう。

「ふむ。その通りだが・・・。まあ、この乗り合い馬車の中では何だ。次の町で一旦止まる予定だから、そこでしよう。そもそも、その町を拠点に調査をする予定でもあったのね。」

ドロクモは馬車から、身を乗り出し、馬車の進行方向を見る。そこには、どこまでも続きそうな道だけが続あったが、彼は次の目的地を見ているのだろう。



馬車が止まった場所は、ウエストモルタルと呼ばれる町だ。一応、オークマ国に属しているが、国境付近の町として、旅の拠点の様な位置づけであった。

宿場町としてはそこそこ栄えている様で、これから旅に出る者と国へと帰る者と共に行き交い、賑わっている。

「まあ、ドラゴン調査の拠点にするには丁度良い場所なんだろうよ。近くにドラゴンが居ればの話だがな。」

そんな物が近くに居ては、宿場として発達するはずも無いだろうに。

宿場町を歩きながら、リユンは不信感を隠そうともせず、ドロクモと会話をしている。

「おやおや、これだから素人は困る。しっかりと、この町の近くではドラゴンが発見されているのだよ。」

だとするなら、それは危険な事では無いだろうか。ドラゴンとは人の手に余る物の象徴みたいな存在なのである。

「まあ、一部は実際に会えば、そんな事も無いんだけどさ。」

森に棲むドラゴンは、見た目こそ恐ろしいが、別に脅威になる存在などでは無かった。

「うむ、その通り。いかにドラゴンと言えども、生物は生物。しっかりとこの地に生きている存在なのだ。良くわかっていないじゃないかアイム君。」

随分と親しげに話して来る様になったものだ。つい最近会ったばかりだと言うのに。

「だとするなら、これから調べるドラゴンも、それほど危険では無いと言う事ですか？」

セイリスの意見は、アイムも聞きたかった事だ。つい最近、ちょっと命に係わりそうな仕事をしてきたばかりなので、今回は平穩に行きたい。

「うむ。まったくわからん。まあ、多分、危険が無いと言えば無い

のだが、もしかしたら、万が一の危険があると予想出来なくも無い。

「どっちだよ。」

ジト目になってドロクモを見るのは、リユンだけで無く、他の二人も同様である。

「それが分かれば、調査するなどと言えんだろう。相手がどの様な存在か、知るために調査と言う物は行われるのだよ。」

さっき、ドラゴンはこの地に生きる存在だとか、良く知っている風な事を言っただばかりなのに、どういう事だ。

「いい加減、仕事内容を教えてくださいよ。こっちだって、それを聞いてないから不安になるんですから。」

町に着いてからも、ドロクモは仕事内容に関して、はぐらかすのみであった。

「うーむ。私自身、そこまで詳しく話せる立場で無いと言うか。この町で、それを調べる事から、調査は始まると言えば良いのか。」

まったくもって理解できない内容だ。本当に自分達を雇う気があるのだろうか。

「つまり、あんたも良く分かってないって事じゃないか。」  
リユンはドロクモの態度に、心底飽きた様子であった。

「そう言われれば、そうとしか言えんが……。おお、あそこが丁度良い。どうか、最初から説明させてくれんかね。それが一番手っ取り早いのだ。」

ドロクモは、歩く先で見つけた町の広場を指さす。ある程度開けた場所であるが、説明するのに丁度良いとはどういう事だろう。

「だから最初から説明して欲しいんだが……。」  
とにかく、仕事内容を聞きたいこちらとしては、何も話さず、仕事を請け負うより、どの様な形であれ、説明を要求したい。

「ふむふむ。ならばじっくり話そうでは無いか。ふう。」

ドロクモは広場に設置されている石のベンチに座り、一息吐く。もしかして、これが丁度良い場所と言った理由なのか。

「君たちは流星群というのは知っているかね。」

人差し指をピンと立て、空を指さすドロクモ。

「確か、空に流れ星が多く見られる現象ですわね。」

それくらいなら、アィムも知っている。実際に何度か見たこともあるのだ。

「その通り。これは知り合いの天文学者に聞いた話だが、流星群とは、星々の動きを見れば、ある程度、起こる時期と場所を予測出来る現象らしい。」

それは初耳である。星の動きを予測できるとは学者と言うのも侮れない。

「という事は、その流星群の中から、ドラゴンを探すって事ですか？ 流星と言えば、空に棲むドラゴンだ。」

だとすれば、今度は三種類目のドラゴンと出会う事になるかもしれない。

「しかし、いくら流星が多く見られる現象と言っても、実際にこの目で見える事が出来るとは限らないだろう？」

確かに。空のドラゴンが流星に見えると言っても、流星がすべてドラゴンな訳では無いのだから。

「ふふふ。だが今回は違うのだよ。流星群の中からドラゴンを探す事には違い無いがね。」

「言っている事がさっぱり分からないんですが。」  
まあ、それも今に始まった事では無い。

「つまりだね、先程、流星群が起こる時期と場所は、天文学に精通していれば予測出来ると言ったが、今回、ドラゴンを探す流星群は、その例外で、天文学上起こり得ない流星群だと言う事だ。」

そのつまりを理解出来ないのは、アィムの頭が悪いからだろうか。それとも、ドロクモの説明が原因か。

「普通の流星群が天文学に関係して起こる物なのでしたら、そうでは無い流星源は、普通の流星では無いという事かしら。」

一方でセイリスは理解している様子である。もしかしたら、自分

の頭の方が悪いのかもしねないと、焦るアイム。

「悪いがもうちょっとばかり、分かりやすく話してくれないか？」

良かった。話を理解出来ないのはリユンも同様であった。

「予測出来ない流星群は、ドラゴンが原因で起こっているという事ですの。」

ああ、要するに今回調べる流星群は普通じゃ無いから、ドラゴンを発見出来る可能性が高いと言う事か。

「このウエストモルタルは、多くの流星が、定期的に降る場所としても知られていてね。それ目当ての観光客も少なくは無い。だが、知り合いの天文学者曰く、その流星群を見る事が出来る頻度は、普通では無いくらい明らかに多いと言う事らしい。」

つまり、この町で見られる流星群の正体はドラゴンであるかもしれない訳だ。

「だったら、別に僕たちに手伝いをして貰う必要は無いんじゃないですか？ ただの観光客でも見れる現象なんですよ？」

むしろ手伝いに駄賃が必要な以上、出費が増える。

「だが、この町で見ると言ったかね。見る場所はここでは無い。もっと近くから見るのだよ。そうすれば、さらに詳しくドラゴンを観察出来る。」

ドロクモは、まるで出来の悪い教え子に授業をする様に話し続ける。もっとも、アイム自身は頭の固い教師に説教をされている気分なのだが。

「近くって、ドラゴンは空に棲んでるんですよ。そりゃあ、空に浮かぶ月を見てれば手の届く距離に有りそうだなって思う時はありますけど、地べたを這いずり回ったって、お月様には近づけ無いでしょう？ ドラゴンだって一緒ですよ。」

まさか長い梯子で、星を手に取りうつなどと考えている訳でもあるまい。

「ふう、やれやれ、月とドラゴンを混同しないで貰いたいものだ。月はそれこそ、空の彼方に有るが、ドラゴンは確かに、我々と同じ

世界で生きているのだよ。それに我々だって地面を歩きながら、空に近づく方法が存在する。」

自信満々に胸を張るドロクモであるが、その自信がアイム達に感染するのと言えは、そうでも無い。

「で、その方法って？」

結局は、その方法が自分達の仕事にも関係して来るのだらう。

「“山”を登るのだ。町の近くには、登山のし甲斐のある高い山があつてね、例え歩いて空に向かえ無いとしても、山に登れば空に近づけるだらう。」

その意見は、長い梯子で星を取る事の延長線上にある考えでは無いかと考えるアイムであった。

## 六つ目は星空の下で(2)

山登りを楽だと考える人は居るだろうか。例えば、生涯を賭けて山に登り続ける登山家が居たとして、その者に山に登る事が楽か否かと聞けば、きっと苦しい物であると答えるはずだ。

つまり、今、アイムは苦しみの中に居ると言う訳である。

「ちょっと、みんな、待ってよ。ペースが速いって、もっと、ゆっくり行こうって。」

息も絶え絶えでアイムが登り続けるのは、ウエストモルタルのさらに西にある、タクリホウという山である。

町で一旦登山用の装備を準備し、一泊してから、夜明けより少し前に出発したアイム達であるが、今は太陽が丁度、頂点に達する時間帯であり、要するに朝から昼に掛けて歩き続けているのだ。

「とは言っても、歩くのは普段の旅で慣れてるだろう。ちょっとバテ過ぎじゃないか？」

アイムの様子を心配してか、前を歩くりュンが歩く速さを少し落として、アイムに並ぶ。

「いやあ、持久力には自信があるはずなんですけどねえ。やっぱり普段歩き慣れてない、山を登ってるからでしょうか。」

自身の種族としての能力には、結構、自信があったのであるが、山に登り始めて、暫くしてから、突如として息が乱れ始めたのだ。

「ですから、宿に荷物を預けましょうと申しましたのに。アイムさんったら、絶対に自分の荷物は自分で持つと聞かないんですもの。」

セイリスもアイムの歩く速さに合わせてくれたのか、いつのまにかすぐ近くに居た。

「荷物を持っている事に関しては、いつも通りなんだから関係無いと思うけどなあ。まあ、登山用の道具も入ってるから、いつもより重いのもしれないけど、山に登るまでは、別に辛くも無かったし。」

ちなみに、荷物を預けて置けば良かったという話は論外である。自身が持つ荷物の中には、自らの魂とも呼べる農作業道具が入っているのだ。

「ランドファーマーは平地を好むと聞いた事がある。」  
「うわ！」

今度、アイムに話しかけてきたのはドロクモだった。リユン、セイリスと来て、次はドロクモが話しかけてくる事は予想出来る事だったが、それでも驚いたのは、彼がアイムの背後から話しかけて来たからだ。

「それと、言うのも、ランドファーマーの、大陸分布図を作ると、極端に、高低差の、ある、地方には、住んでいない事が、わかるのだが、これは、逆説的に、ランド、ファーマーが、平地以外では、他の種族より、適応性が、低い、のでは無いかと・・・。」

ドロクモが何やら、アイムの状態について説明しようとしているが、アイム以上に息を切らしているので、何を言いたいのかさっぱりわからない。

なるほど、背後から話しかけられたのも、歩くペースの落ちたアイム以上にドロクモが遅く、いつのまにか追い抜かしてしまったからだろう。

「あの、ここらで一旦休憩にしません？ まだ夜までには時間がありますし。」

現状を適切に判断したアイムの提案を、拒否する者は誰も居なかった。まあ、依頼主であるドロクモの様子に、呆れてしまったと言うのも、理由の一つではあるう。

タクリホウは、登山家達の間では、初心者から中級者までが登る山であるという話を、町で聞いた。熟練者になると、半日程で山を登りきってしまうくらいに、それほど標高のある山では無い。

であるから、早朝に出発したアイム達にとって、山頂への道のりはそれ程急ぐ事も無い旅なのである。

「だからまあ、ここでもう少し休んでも夜には間に合うんじゃないですかね。」

山道の中腹には、開けた土地があり、昼時にそこに辿り着いたアイム達は、そこで休憩に入った。そうして携帯食で腹を満たす。さらに出発の段階となった時、アイムは自身の疲れがそれ程引いていない事に気が付いた。

「どうしたんだ。本当に調子がおかしいんじゃないか？」

長く旅を共にしてきたリユンから見れば、アイムがこの程度の運動で根をあげる人物で無い事を知っている。

「風邪とかの病気でも無いと思うんですけど、なんだか疲れがどんどん溜まっていくんですよね。ドロクモさんはランドファーマーがどうか言っていましたけど、関係あるんですか？」

こんな状態になったのは初めて事であった。別に体の調子自体が狂っている訳でも無いのだ。これが、何かの病気であるのなら、体に痛みや咳、熱などの症状が出るのだろうが、とにかく体力の戻りだけが遅くなっているのである。

「だから、ランドファーマーの肉体は平地向きだと言っているだろう。体の構造がそうできていると、種族間の差異を専門に調べている同業者が言っていたよ。体力の戻りが遅いのは無く、何気ない動作一つ一つに必要な以上の体力を使ってしまっているのだろうな。休憩中、疲れが取れないのも、そこが原因であろう。これまでの旅でその様な事は無かったのかね。」

ドロクモの質問に対して、思い当たる点は無い様に思える。旅の途中で困った事と言えば、船酔い程度である。

「船酔いと言うのも、そこに原因が無い訳では無いだろうさ。常に足元の揺れがある状態だからこそ、船酔いと言う物が起こるんだ。ランドファーマーであるのなら、それがより顕著に現れると予測できるね。」

自分自身としては、旅に向いている特徴だと思えた、ランドファーマーという種族に対して、そう言う欠点があるとは思っても由らな



かった。

「じゃあなんですか。やっぱり、僕ってここでリタイヤしたい方が良いんですか？」

「なんとかそれだけは避けたい。そもそも、ドロクモの依頼を請けたのは自分なのだ。ここで諦めるなんて考える事もできない。」

「そうとも限りませんわ。だって船酔いもアイムさんはすぐに克服したじゃありませんか。そもそも、もう山頂まで半分という所まで来ていますのに、わざわざ山を降りると言うのは理屈ではありませんし。」

確かに山を降りるのも登るのも、同じ距離であるならば、依頼を全うできる道を選ぶべきである。

「そう言うのはあるかもしれないね。慣れや経験と言うのは欠点を克服出来る物だから。それに、まったく疲れが取れない訳でも無いのだろう？ もう少し休めば山頂までに向かう体力くらいは戻ってくるはずだ。」

だと良いのだが。

「まあ、学者さんはそんな欠点持ちのアイム以上に疲れ果てて居たがな。」

場を和ますつもりか、リユンは先ほどのドロクモの姿を思い出す様に話す。

「あれは仕方の無い事だよ。何せ私は君たちよりも体が重いのだ。肉体に対する負担も大きい。」

腹を揺らして偉そうに言うが、誇るべき物でも無いだろうに。

「でも、暫く休むにしても暇ですね。小話でもしますか？」  
休みに時間を掛けるのは自分の責任であるので、なんとか周りに負担を掛けない様に気などを使って見せた。

「小話と申されましても、急に言われては何も思い浮かびませんの。」

「まあその通りだ。慣れぬ気など使うべきでは無かったか。」

「なら、これから調査に行くドラゴンについて話して貰うってのは

どうだ。多分役に立つし、なにより詳しい学者先生が居る。」

リユンがちらりとドロクモを見ると、待ってましたと言わんばかりに背を伸ばした姿が映った。

「うむ。確かに丁度良い機会であるな。では話そう。今から調査に向かうのは空に棲むドラゴンで有るとはもう説明したな。ならば君たちは、それをどの様な姿であると想像するかね。」

ドロクモが話を始めると、その雰囲気が大きく変化する。これまでがただの中年男性らしい姿だったとしたら、今は確かに学者であると感じさせる物になっている。

「空を飛ぶくらいなんですから、羽根があるんじゃないですか？」

羽根と言えば、森に棲むドラゴンにも生えて居たが、空に棲むかには、さらに大きい物を持っているかもしれない。

「流星と見紛うくらいですもの、もしかしたら胴が細長い生き物なのでは？」

セイリスもドロクモの授業には乗り気らしく、積極的に発言するつもりの様だ。

「この場合、セイリス君の方が近い姿を言い当てているね。アイム君の意見は、一見正しい様に思えるが、大きな翼はそれ自体が重りとなり、空を飛ぶ上で邪魔になる場合がある。空のドラゴンは常に空を飛び続けているから、その様な重りを持つ事は無いだろう。」

そう言う物だろうか。鳥にはあまり興味が無かったので、詳しい事を言われても反論すら出来ないだろうから、素直に受け止めて置く。

「私自身、近くでその姿を見た訳では無いが、多くの伝承や言い伝えで語られるその姿は、蛇やミミズの様な物らしい。」

「蛇とミミズですか・・・。」

なんとも威厳の無い姿ではないか。特にミミズが空を飛んでいる姿を想像するのは、なんとも可笑しい気分になる。

「まさか正真正銘、それらが空を飛ぶ訳では無いから、恐らく細長い印象と、手足が無いという身体的特徴から、その様な姿が導き出

されたのだろう。」

確かに、本物の流星も細長く、手足などは無い。しかし、本当にミミズでは無くて安心した。

「でも、それはおかしくありませんこと？ 手足の有る無しはともかく、翼が無いのに空を飛ぶと言うのは、少々想像できませんわ。」  
虫や鳥だつて翼があるから飛べるのだから、セイリスの意見は理解できる物だ。

「それに関しては色々説があつてね。本当は翼があるという物や、体自体が空気に浮いてしまう様な生物なのではと言つた物から、玉石混交だ。これらは、実際にその姿を間近で確認した者が殆ど居ない事が原因と私は考えた。」

見た事も無い物を想像するのは簡単だが、結局意味の無い物になつてしまつていふという事か。

「だからこそ、今回の調査では、この足で出来る限りドラゴンに近づきたいと考えてね。もちろん、君たちを雇つたのは、ドラゴンを観察する目を増やすためだよ。」

なるほど、ドラゴンの姿がどの様な物かを確認するのだから、その人数は多い方が良いと言うのはわかる話である。

「聞いた限りじゃあ、そんなに危険でも大変でも無いですけど、じやあなんで、僕らが仕事内容を聞いた時、あやふやな答えで返したんですか。」

ドラゴンの調査だと言えば、大変な仕事だと思われてしまうかもしれないが、しっかりと説明を聞いてみると、それほど難しい仕事でも無い。

「空のドラゴンと言うものが、まったくもって調査の進んでいない生物だからだよ。それに近づくと言うのは、もしかしたら危険かもしれない。」

「つまりは、あんた自身も良くわかつて居ないって事か。別に仕事内容を心配する訳じゃあ無いんだが、実際、そんな状態で山頂に登つたところで、上手く行くと思つていいのか？」

リユンの発言は、皮肉では無く単純にドロクモへの心配であった。未知の物に挑むと言うのは、それだけで不安定な物であり、綿密な準備が必要なはずだ。

「一応、スポンサーの富豪から、こういった物を借り受けている。」  
ドロクモは自分の荷物を探ると、そこから一本の筒を取り出した。  
「それは望遠鏡ですか？」

望遠鏡とは、その名の通り遠くの物を見る道具である。どのような構造によって、その機能を果たしているかをアイムは知らないが、それが随分と高級品である事は知っていた。

「その通りだ。遊興に使うくらいなら、実益に繋がるかもしれない方法で使ってくれとの事だね。一本しか無いから私が使わせて貰う事になるが、それでもドラゴン調査には役立つはず。」

空のドラゴンの正体が良くわからないのは、対象との距離が遠い事もあるので、確かにその通りだろう。

「だが、それで十分と言う事でも無いんじゃないか？」  
まあ、レンズ付きの筒が一本あれば、ドラゴンの正体に繋がるのなら、苦勞は無いだろう。

「それもその通りだ。だが、誰もが準備が出来た上で物事に挑むのでは無い。何事も開拓者と言う者が居て、それらは皆、不十分な状況で物事を成して行ったはずだろう？ 私がそれになってみるのもまた一興。」

この人はもしかしたら学者と言うより探検家の方が向いているのかもしれない。そのためにはまず、体力を付ける事から始めた方が良いかもしれないが。

「そう言う事なら、ここらで休むのを辞めて、一気に山頂を目指してみましようか。話を聞いている内に、なんだか体力も戻ってきたみたいだし。」

体はまだ休息を必要としているのに、その様な嘘を吐くアイム。だが、それでもやる気だけは何故か溢れてきていた。

その原因と言えば、もしかしたら、未知の物事に挑もうとするド

ロクモの姿を、旅に出た時の自身の姿に重ね合わせて居たからかもしれない。

息と息との間に隙間が無くなるほどに、呼吸を乱し、額から足先まで汗だくになる。その様な疲れの代償として、アイルが手に入れたのは山頂と言うゴールだった。

「は、はは、な、なんとか、辿りつきましたね。」

山の中腹から、山頂に至るまで、アイルは休む間もなく登り続けて来た。中腹での休息も、それほど疲れを癒す物では無かった以上、やる気と見栄だけでここまで来たと言える。

「夜までには時間があるんだ。少し休んだらどうだ？ どうせ、山頂で一夜を過ごす事にもなるだろうしな。」

リオンが見るアイルの顔は疲労と長時間の運動によって、真っ赤に染まっている。あと少しでも無理をすれば、この色が青くなる事だろう。

「え、ええ、そうします。でも、せっかく山頂まで来たんだし、山の風景を一度でも、見て、みたいかなって。」

どうにも息が続かない。一日で登りきる事が出来る山と言っても、さすがに山頂は空気が薄いらしい。

「そうですね、せっかくの記念ですもの。ほら、あそこから、良く周りの景色が見えますわよ。」

山頂付近は木々が少なく、風景を見ようと思えば、すぐに見る事が出来た。他の場所ではこうは行かない、自然が多く、むしろ視界が遮られるからだ。

「というより、山頂が、不自然なくらい、開けているって言った方が正しいかも、しれませんが。」

先程言った通り、木々も少ないし、地面がしっかりと固められているので、火とテントがあれば、すぐにでも野宿が可能な場所である。

「辿り着いたゴールが鬱蒼とした森の中だと、なんだか嫌だろ。登

山客だつて居ない訳でも無いしな。」

確かに、今は山頂には自分達だけしか居ないが、自分達が登つて来た山道を見るに、前人未到の地というのは有り得ない。

「ドロクモさんが居れば、詳しく説明して頂けたかもしれませんが、  
。。。」

彼は今、山頂に登り切つたすぐ後に倒れた。別段、健康に支障は無く、ただ単に体力の限界が来て休んでいるだけである。

「お前も景色を見たらそうしろ。本番は夜が来てからだしな。」  
その通りだ。疲れ果てて依頼を十分に行えなければ本末転倒になる。

「は、は、夜までには、なんとか体力を戻して置きますつて。」  
そう言いながらも、重い足を動かして、山頂からの景色が見える場所まで歩く。

「へえ、さすがに凄いや。」

山から見える風景は、すべてが小さく見えた。遠くに見える町も野原も、まるでミニチュアの様で、今にもこの手で覆つてしまえそうだ。視線を下に向けると、これまでの道のりの証である麓から山頂まで続く、山の輪郭が映る。それは決して小さい物では無く、むしろ自身がどうしてここまで登つてこれたのか信じられない程だ。

なにより驚くのは空である。日が傾き、青と赤が混じり始めたその空には雲が浮いている。雲は、地上で見る景色と同様に天高くを浮いているが。中には、手が届きそうに思えるくらいに近い物があり、この場所が下界とは少し違う場所であると言つのを、どこも無く感じさせてくれる。

一瞬であるが、自身の疲労すらも忘れて、その絶景に見入る。

「これなら、確かに地上より流星が良く見えそうですね。」  
錯覚なのだろうが、確かに空が近くに見えた。

「雲の流れも早い。この調子だと夜は満開の星空が見えるだろうな。」

それは、ドラゴン調査をする上で幸先の良い話だった。

「それじゃあ、山からの景色も確認出来た事だし、ちょっと休ませて貰いますね。実はもうへとへとで。」

「いちいち言わなくても、一目見ればだれだってわかることだから、さっさと休んで来い。」

そんなリユンの言葉を背中に受け、ドロクモの居る場所までのろのろと歩いて行くアイムであった。

暫く歩くと、山頂にある広場が見える。ここで、登山者などはテントを設置して、一夜を過ごすのだろう。

アイム達もそのつもりであり、彼らが設置した旅用のテントが広場の中央付近にぼつんと存在していた。

どうにも、他の登山客は居らず、自分達だけの様であるが、それには訳があった。

「神様が降りた山だっけ。もしかしたら、空のドラゴンが関係しているのかもしれないなあ。」

ウエストモルタルで、このタクリハウと呼ばれる山は、神が天から山頂へと降りてきたと言う話が伝えられているらしい。

特に流星群が見れる時期は、その神が降り立った時期と重なるらしく、土地の者はこの時期に山を登る事に抵抗感がある様だった。

「おかげで、登山用の道具を集めるのに苦労したっけ。」

少なくとも、良い目では見られなかった。だが、別に山登りが禁止されている訳でも無く、無理矢理止められると言う事も無かったが。

「ま、なにはともあれ、夜まで待とう。きっと面白くなるはずさ。」

例え、見える流星群がドラゴンで無かったとしても、それはそれで良いと思える様にもなった。

この山から見える流星は、きっとドラゴンで無くとも、アイムの心を湧き起こす物だろうから。

「とと、危うく通り過ぎる所だった。ドロクモさん、居ますか？」

「ちょっと僕も休ませて貰いたいんですが。」

・・・返事が無い。何事があったのだろうか、テントの中を覗いてみると、ドロクモがいびきを掻いて眠っていた。

「よくやるよなあこの人も、まあ、本番は夜だから、今の内に寝ておこうって考えはわからなくもないけど、火も点けずに寝るなんて」

旅の途中で、この様なテントを張り、休む場合は付近にたき火を起こすのが決まりの様な物となっている。

ただでさえ、テントと言うのは不用心な物なのだ、そこで暖をとりに、野生の獣が寄り付かない様にするのは当たり前のことであるのだが。

「山登りに向かないはずのランドファーマーより、体力が無くて、さらに不用心。良くドラゴン調査なんかしてるよね、この人も。」

これまでして来た調査と言うのはどの様な物だったのだろうか。彼が起きれば聞いてみるのも良いかもしれない。

「それより僕も少し休まない」と。

実は、もう少しで立つのも困難になりそうなのである。当然、焚き木を集める体力は既に無いので、携帯燃料と、焚き木の代わりとしていつも旅道具に用意してある木炭で火を起こす。

これでは長時間、火は持続しないだろうが、すぐにリユンやセイリスも戻ってくるだろう。それまで持てば良いのだ。

「よし、これで、とりあえずは大丈夫だね。」

どうにも、これだけの作業で、残った体力も無くなってしまった様だ。ドロクモの事を悪くは言えまい。

アイムも彼にならってテントへ向かい、一眠りする事にした。

「お・・・い・・・は・・・ろ・・・もう・・・は・・・っ・・・ぞ・・・。」

。なんだろう、何かが聞こえる。誰かの声だ、それも良く聞く・・・。

「おい！ いい加減に起きろ、もう外は夜だ、仕事の時間だぞ！」



声の正体はリユンであった。彼は少し苛ついているのか、声を荒らげ、アイルムの肩を揺すっている。

「……あれ、僕……寝てました？ いやあ、確かに疲れたんで一眠りしようかなとは考えてましたけど……何時の間に。」

眠る瞬間と言つのを憶えている者は少ないが、そのさらに前の記憶まで無くなっている。これはさうとう疲労が溜まっていたのだからと理解するアイルム。

「まったく、寝惚けるのも大概にしとけ。あの学者先生と言い、どうしてそんなに寝起きが悪いんだ。」

なるほど、リユンが苛立っているのは、ドロクモを起こすのに相当苦労したからだろう。その怒りが自分に周ってくるのはとんだとばつちりである。

「あはは、それより外はどうなってます？ 流星、もう流れちゃいました？」

「ここで寝過ぎしたなどとなったら、苦労した意味が無い。」

「安心しろ、今は丁度、夕日が沈んだ頃合いだ。夜はこれからだよ。」

「となると、それほど長時間、眠っていた訳でも無いのだろう。アイルムがテントで休んだのは、夕刻に近い時間帯であつたはずだ。」

「うーん、でも、やっぱり一睡すると疲れの取れ具合がぜんぜん違いますね。」

腰を上げて、伸びをする。筋肉痛から何かか、体中に若干の痛みとダルさが広がるが、我慢出来ない程では無い、むしろ心地よいらいだ。

「こつちはこれから徹夜になりそうなのに、睡眠を摂れなかったがな。」

とは言つものの、今のリユンがそんなに眠そうと言つ訳でも無い。朝が早かつたとは言え、彼は経験のある旅人だ。一日二日の不眠だろうと、ものともしないのかもしれない。

「一応言つとくが、俺は途中で仮眠くらいはするからな。ドラゴン

に興味があるのは、お前らなんだ。しっかりと調査しろよ。」

そう言えば、彼はそれほどこの依頼に乗り気では無かった。いつもの仕事に対する真剣さが無い。まあ、あの嫌らしい笑みを浮かべながら空を見つめる彼など、想像したくも無いが。

「そりゃあしますよ。これから、新しいドラゴンとの出会いがあるかもしれないからね。」

腰を上げた状態から、完全に立ち上がるうとして、テントの外に出る。簡易テントには、一人が立つだけのスペースも無いのである。

「へえ、やっぱり、山の上は夜の景色も良いんだ。」

空気が澄んでいる。空の上には、いつもの旅路で見る星々よりもさらに多い光が天空を染めていた。

「ああ、でもちよつと寒いかな。まだ暖かい季節だけど山の上だし仕様が無いか。」

むしろ、肌に触れる寒さが目を覚ますのに丁度良かった。

「一応、火は絶やさない様になっている。こんなところで凍死とか笑えない冗談だからな。」

アイムが点けた携帯燃料と木炭に火が、今はちゃんとした焚き火になっている。リユンかセイリスか、恐らくその両者が焚き木を集めてくれたのだろう。

「すみません、なんか、お世話させちゃったみたいですね。」

本来なら自分の仕事でもあるそれを、自分が寝ている時にやって貰うと言うのは、なんだか申し訳無かった。

「別に良いさ。こう言うのは出来る奴がやれば良いんだ。どう考えても、お前は出来る側じゃなかったしな。」

片方の口を吊り上げ、笑うリユン。彼なりのアイムに対するフォロのつもりなのだろう。実際、少し重荷が無くなった。

「それより、仕事だ仕事、あの先生、こつちがさんざん怒鳴っても起きなかつたくせに、夜だと聞くと、跳ね起きて流星を見に行ったぞ。」

なんとも目に浮かぶ様な光景だ。それにしても、アイムはドロクモの近くで眠っていたはずであり、怒鳴り声だつて聞こえる範囲に居たはずだ。だと言うのに、さっきまで起きなかったのは、ドロクモ以上に寝起きが悪いと言ふ事だろうか。

「あつれえ？ そんなに起きるのに苦労した事は無いのになあ。」  
これもランドフアーマーが山に弱いと言ふ奴のせいだろうか。まあ、考えても仕方の無い事である。

アイムは疑問を覚え、手で頭を掻きながらも、今は依頼に集中しようと考え事を頭の隅にへと追いやつたのだった。

### 六つ目は星空の下で(3)

星々の輝きが山頂を照らす。その光は木々や雲に遮られる事無く、アトムにまで届き、彼の心を躍らせていた。

月はいつもより心なしか大きく見え、美しさもそれに比例する様に増している。月には人を魅了する力があると言ったのはだれだろうか。アトムも同じく、月の光に魅せられ、視線を外そうとしない。

山頂にある高台に全員で登り、アトム達は空を見続けていた。流星はまだ流れず、空は変わらず星と月を浮かばせているが、不思議と飽きない。ふと月とは別の光がアトムの目に映る。星の光だと思っただが、その光が月を横切るのを見て、そうでは無いと知る。流星である。

「おお、とうとう流れ出したぞ。さつそく観察だ。」

アトムと同様に空を見ていたドロクモが、望遠鏡を持ち、空を覗く。流星は少しずつであるが、空に増えており、それが明らかにただの流星では無い事がわかった。

「想像以上の近い距離に、流星がある様に感じますの。」  
セイリスは、空に溢れようとする流星を見て、そんな感想を漏らした。アトムも同意見である。今、空に流れている物は、普通の流星よりも近い距離、それも、雲のこちら側に星がある様にすら感じる。

「いや、確かにこれは流星が空の下にある。あれは間違いなく、星以外の何かだな。」

リユンは目を細めて空を見る。彼の目は遠くの物が良く見えるらしく、アトムには見え難い物が見えるのだろうか。

「へえ、ドロクモさんは何かわかりましたか。」

目が良い程度のリユンでそうなのだから、望遠鏡で夜空を見続けているドロクモには、あの流星が何なのかがわかるかもしれない。

「うむ、わからん。」

自信満々でドロクモが頷く。

「ちよつと、なんのためにその筒を覗いてるんですか。」  
それにその満足気な表情はなんだと言うのだ。

「いや、見える事には見えたのだがね、光輝いて居るからか、正確な輪郭が、良くわからんのだよ。」

目を何度も瞬きさせながら、ドロクモは言い訳をする。まあ、光る物を見続ければ、良く見えないし、目も疲れるだろうが。

「じゃあ、僕にも見せて下さいよ。もしかしたら、何か見えるかもしれませんし。」

アイムの要望に、ドロクモはあっさりとして、手に持つ望遠鏡を渡す。高価な物かもしれないが、使わなければ損だと考えたのだろう。

「う、うーん。」

望遠鏡を覗き、天を見るも、その円状の視界の中に、流星を捉えるのにまず苦労し、捉えたとしても、その光によって、流星が良く見えないまま、視界の外へと逃げて行く。

「なんですかね。本当に良くわからないや。」

これではドロクモの事を悪く言えないでは無いか。

「とりあえず、空のドラゴンは、光輝いていると言う事はわかったんじゃないか？」

茶化す様にリユンが笑いながら、アイムを見る。そんな暇があれば、空を観察したらどうなのだ。

「ほう、それは興味深い。体に発光器官でも備えているのか・・・。」

リユンの言葉を聞いて、何か思う事でもあったのか、急に考え込みだすドロクモ。

「ちよ、ちよつと、今はせつかく空にドラゴンが居るんですから、そつちを見ましようよ。」

アイムはなんとしても、ドラゴンが放つ光の向こうを見たかった。なんとしても、ドラゴンの真の姿をこの目に収めたいのである。

もしこの気持ちを探求心と呼ぶのなら、アイムの心は今、それ

に溢れていた。

「そんなに慌てる必要は無いと思いますわ。だって……。」  
セイリスが空を指さすと、その先には多数の大きな流星が流れている。

「あれ、大きい？」

どんな世界であろうとも、流星とは細く小さく見える物だろう。だが今、空を流れるそれは、太く大きく見える。というよりも、徐々に大きくなって居る様な……。

「おい、どういう事だ。あの流星、こっちに近づいて来ているぞ！」

頬に汗を流し、リユンが叫ぶ。叫ぶ相手はドロクモだ。

「ふむ、一つ仮説があるが、聞いてみるかね。」

悠長にそんな話を話すドロクモであるが、他の3人はただ、近づいて来る流星を見ている。

「とりあえず、この山は神が降りる場所として知られているが、それは何故だろうか。昔話や民話には何か、ルーツとなるものが存在しているはずだ。」

ドロクモは返事を返さないアム達を肯定の意味であると勘違いしたのか、話を続ける。

一方、アム達は空から目が離せない。近づいてくる流星が、一つでは無いと気付いたのだ。

「そして、この地方では流星が良く見えると言う話も伝わっている。この二つの語り継がれてきた話は、無関係では無いのかもしれない。つまり、山に降りた神と、流星がだな。」

流星は既に、その大きさを月と同じほどに広げながら、なおこちらに近づく。まるで、山に向かって落ちて来ている様だ。

「ちなみに、この地方の流星は、どの方角から見ても、山に向かって流れる様に見えるらしいね。これは聞いた話だが。」

それはつまり、流星は山に落ちると言う事だろうか。

「今日、この日に、山に登っているのが僕達だけな理由が、なんと

なく理解できた気がします。」

ただ、もう少し、その理解が早ければ良かったとアイムは考えていた。

落ちる流星は、もう既に月よりも大きくなり、山頂を照らしている。まるで昼の様に輝くその場所で、アイムは立ち尽くすしか出来なかった。

光は山を包み込む。アイムはもう光で前も見えず、よく光と闇が対比される事が多いのは、光が集まれば、何も見えなくなるからなんだろうな、などと考えていた。

世界が夜の黒から光の白へと移り変わる。闇夜の方が、物が良く見えるというのは、なかなか可笑しい話であった。アイムはその白の世界が、もしかしたら死後の世界なのかもしれないと考えていた。それ程までに、この光の輝きは、激しかったのだ。

しかし、体の感覚が、まだ自身は山頂に居る事を教えてくれる。どうやら、山頂へと落ちてきたドラゴンに、押し潰されたと言う訳でも無い様だ。

「い、いったい何が。」

どうやら、言葉も発する事が出来るらしい。と言う事は、自分は山頂に立ったままで居るのだろう。光の原因は、山に落ちてきた流星である事はわかってる。

そこまで考えて、今、自分達は落ちてきた流星である、ドラゴンに囲まれているのでは無いかという事が思い浮かび、アイムは身震いをした。

「もしかしてじゃなく、この光はそう言う事だよね。」

妙な怖さをアイムが感じている内に、視界を覆う光が徐々に晴れて行く。目の慣れもあるのだろうが、それより、光自体が弱くなっているのだ。

「なんだろう、嫌な予感しかしないや。」

光から解放された視界に映る影は、アイムに恐れしか感じさせな

い物である様だ。

最初に映るのは、アィムの仲間達の影。それは、アィムと同様に茫然とした者の影でもあった。

そして次に映るのは、山頂の影である。山頂はそこに変わらず存在するのだが、どうにも様子が変である。流星が落ちる前と風景が違っている様な。

その原因は三つ目に映った影である。その影は一つでは無く、複数存在した。影達は蛇の様に細長く、とぐろを巻きながら、山頂でうねうねと動いている。

蛇と違う点と言えば、その大きさで、小さい物でも、アィム5倍以上の身長はあるし、それもとぐろを巻いている状態での高さである。この影の大きさによって、山頂の様子がおかしく見えたのだろう。

この蛇の様な巨大物からは、まだ薄らと光が出ており、未だその輪郭を知る事は出来ない。

「な、なんなんですかね。あれ。」

アィムと同じく、山頂に存在する大きな蛇らしき物に、意識を向けている、リユンやセイリス。

彼らの意見を聞きたくて、アィムは話しかける。

「なんなのかって、俺にわかる訳無いだろう・・・。」

真っ先に返してきたのはリユンであるが、あまり役に立たない返事であった。しかし、この状況では仕方の無い事であろう。

「間違いなく、空から落ちてきた流星だろうねえ。まあ、ドラゴンでもあると思うが。」

答えたのはドロクモである。他の三人とは違い、どこか冷静な表情で、大きな影を見つめている。

「でしたら、あの、わたくし、この状況は、とても危険なのでは無いかと思いますの。」

混乱と緊張が入り混じった様子でセイリスは話す。確かに、今、自分達はあの大きなドラゴンの群れのと真ん中に居ると言う事だ。



もしドラゴンが凶暴な生物であれば、自分達の命はここで終わる可能性が高い。

「恐らくは大丈夫だとは思うが、まあ、今は襲われていない訳だからね。」

その答えはちつとも安心出来る物では無かった。今、襲われていないと言うだけで、次に襲われる可能性は有るからだ。

「余計な行動は、危険かもしれないな。下手に刺激したら、どうなるか分かったもんじゃない。」

リユンの言う通りである。例え、この生物にこちらに対する敵意が無いとしても、この大きさと数である。ドラゴンの何気ない行動一つ一つが、こちらにとっては危険である事を、アームは承知していた。

「.....」

誰と無く、言葉を発する事を辞める。今はただ、目の前のドラゴン達が危険なのかどうかを観察する時である。

光が弱くなって行くのを感じる。影としか見れなかったドラゴン達が、再び山頂に星々の光が届く事で、その姿を現す。

胴体を見た瞬間は、それが巨大な蛇の印象を受けた。鱗と蛇腹を、そのまま巨大化させた様なそれは、確かに蛇であった。

しかしその顔は蛇と言うよりワニに近い形相だ。だが、まるっきり同じと言う訳では無く、どこか獣を思わせる印象も混ざる。頭部から生えるたてがみと、森のドラゴンとはまた違う、木の枝に近い形の角が、そう感じさせるのだろうか。

一方で尾は細かい毛が縦に生えそろっている。農家のアームには、それが鋤の様にも見える。

しかしそれでも、手足の無い外観は、全体の印象として、蛇を巨大化させた物なのだろう。

何故、この様な生物が、体を光らせ、空を飛び、なおかつこの山頂に降り立ったのか。アームの思考では、その答えを見出す事が出来ない。

どれだけの時間が経っただろうか。少しか、それとも多くなのか、感覚が麻痺しているせいか、わからないが、夜が明けるまでの時間では無く、まだ、山頂が星空の下にある頃、AIM達を無視する様に、ドラゴン達は山頂の中心へと動きだした。

その動きはさっきまで空を飛んでいたとは考えられないくらい、地べたを這いずり回る動きであった。

「どうにも、敵じゃあ無いとは思ってくれたみたいだな。」

暫くの静寂の後、最初に言葉を発したのはリユンである。

「あれ、それほど凶暴じゃあ無いって言うのは観察できたな。」

彼はドラゴンを指差しながら、そんな軽口をたたけるくらいには余裕が出てきたらしい。

「もしかしたら、今はお腹がいっぱいで、食べる気にならないだけかもしれないよ。」

ドラゴンのいかつい顔は、肉食獣のそれに見えてしまうAIM。

「今まで空を飛んでいたのですから、食欲が無いと言う訳でもないと思いますの。」

怖い事を言わないで欲しい。ただでさえ麻痺していた感覚が戻ってきて、恐怖を感じだしたと言うのに。

「私の予想では、あれは人を襲うと言う事は無いはずだよ。空のドラゴンに襲われたと言う話も聞かないしね。」

今まで、うむうむとドラゴンを見ながら頷いていたドロクモが、会話に入ってくる。

「それって、襲われた人が生き残っていないって可能性もある訳ですよね。」

死人に口無しと言う奴である。

「確かにな。だが、彼らの生態を考えれば、そうでは無いとわかるはずだ。」

そう言われても、その生態とやらがわからないから、こつやつて調べている訳で。

「彼らのあの巨体を見給え。あの巨体と体格、どう見ても空を飛び

そうに無い体で、空を飛んでいるのだよ。そのためのエネルギーは莫大かつ特殊な物となるはずだ。それを補うための食事が、ただ我々を襲うだけのはずは無いだろう。」

もしかしたら、燃費の良い体をしているだけかもしれないではないか。

「まあ、いくら心配したって仕方の無い事ではあるんですけどね。ドラゴンがこつちを襲うつもりなら、もう逃げ場なんて無いんだし。」

それよりも、ドロクモの様にドラゴン観察と考察をした方が賢明なのかもしれない。

「なら、仕事だなあ。でも見た目はあんな通りだと分かったなら、今回は大収穫なんじゃ無いか？ 空に棲むドラゴンをこれだけ身近に観察したのは俺達くらいだ。」

それも、この地方に流星が降る時期に見れる物だとわかった訳で。定期的に観察出来る場所も見つけた事になる。

「あら、でしたら、隙を見つけて山を降りるだけで、今回の仕事はお終いですわね。」

まあ、その隙を見つけると言うのが大変な事かもしれない。うかつに動けば、あのドラゴンはどの様に反応するやら。

「ちよつと待ちたまえ君たち、観察対象が目の前に居るのに、ここで山を降りるなどと、正気なのかね？」

学者先生の意見はそれで正しいかもしれないが、これまでに起こった件でいろいろと混乱しているので、そろそろ勘弁して欲しいのが本音である。

「だいたい、これ以上素人が見たって、得る物がありますかね。」

あのドラゴンの見た目の印象が怖いという観察結果以外を、アイム達を知る事は困難に思えた。

「私は素人では無く学者だ。それもドラゴン専門のな。」

自慢げに言うが、空に棲むドラゴンについては、それほど詳しく知らなかったでは無いか。

「もしそうだとしても、観察するのは先生だけで良い事になるな。俺達は先に下山してるから、じっくりドラゴン調査を続けてくれ。」  
無情にもそう返すのは、もちろんリユンだ。彼にしてみれば、少ない報酬で危険な事をしたくはないのだろう。

「いやいや、君たちにもすべき事は沢山あるぞ？ 例えば、あのドラゴン。降りてくる時は、発光していたが、今はしていない。どうして光っているのか、何故、今は光っていないのか。そんな事を考えるくらいは、君たちにもできるだろう。な、な？」

ドロクモはどうにもアイル達をこの場に引き留めたいらしく、リユンの服の袖を掴みながら力説する。

「その様な事を仰られましても、わたくし、生き物が光る理由なんて思いつきませんわ。」

まあそうだろう。セイリスは博識であるが、それは生き物にまでは及ばない。当然、セイリス程の知識も無いアイルにとっては尚更だ。

「ふむ。ある種の魚は雷にも似た光を発する事がある。それも、あのドラゴンの様に細長い体の構造をしているのだよ。ドラゴンの光は、雷の様に周囲へ衝撃が走る物では無かったが、あのドラゴンが光を発する能力を、身体の内秘めていたとしても、おかしくは無いだろうね。」

なるほど、生命の神秘と言う奴か。ドロクモはドラゴンだけで無く、他の生物に対しても詳しいのかもしれない。

「なるほど、なら、なんでそもそも光っているんですかね。」

わざわざ遠くからも見えるくらいに光を放つ以上、何か理由があるだろう。

「それについても、様々な理由があると思うよ。仲間の識別、空を飛ぶ際の目印。威嚇の意味合いだってあるかもしれない。実際、強い光に対して恐怖を覚える生物は多い。」

やはり、ドロクモはドラゴン以外の生物に対する知識も、一応は備えているらしい。まあ、そうでなければドラゴンを調べてみよう

と考える事も無いか。

「よし、これで謎に対する考察は出来た訳だな。さっそく下山しよう。」

ドロクモ一人で、ある程度の調査が出来る事が確認できたので、尚更、ここに居る理由が無くなった。

「ま、待ってくれ。そんないけずな事をするな。こんな所で、こんな状況の中、一人で置かれたら・・・。」

「あ。」

ドロクモはアイム達に向かって懇願するが、その悲鳴は、かなり大きく、ドラゴンの耳にも聞こえたらしい。

一匹のドラゴンがこちらのじっと睨み付けてくる。

「・・・。」

再び沈黙してしまうアイム達。その姿を見て、興味を無くしたのか、なんとかドラゴンはこちらから視線を外してくれた。

「ほ、ほら、凄く怖いじゃないか・・・。」

そのドロクモが発した言葉は、まだ観察内容が残っているという理由よりも、アイム達を引き留める理由としては、よっぽど説得力がある物だった。

いざ山頂でドラゴンの調査をするとなった時、初めに考えたのはどの場所で調査をするかであった。

これだけ物々しい雰囲気の中、開けた場所でドラゴンを観察するのは抵抗感がある。かと言ってドラゴンから離れすぎでは元も子も無いので、ドラゴンが集まっている周辺の木陰に隠れながらの調査となった。

傍から見れば、随分と間抜けな様子だろうが、アイム達にとっては生死に関わり兼ねない事柄なのだ。

そんな中、ドロクモは怯えた小さな声でアイム達に話掛けてくる。「先程はあの様に言ったが、こうやって観察を続ける事にはしっかりとした意味があるのだよ。」

そうは言われても、ドラゴンに興味を持たれない様なヒソヒソとした声で話すドロクモを見ると、先程の件はどうしようもない本音である事は誰にでもわかる。

「まあ、ちゃんとした意味も無く、こんなところでドラゴンを見てるなんて、認めたくも無いですけど。」

体を引きずりながら山頂を動き回る蛇のごときドラゴンは、それ以外に変わった動きをみせず居る。

「だろう？　だが、実際にこのまま観察を続ければ、かなりの可能性で、疑問が一つ解決する事になるのだ。」

なんだろうか。ただ見ているだけでドラゴンの生態が分かれば、苦労は無いと思うのだが。

「要はどうしてこの山に降りてきたかって事だろう？」  
意外にも、アイムの考えを聞いて答えるかの様に話を続けるのは、リユンであった。

「その通りだ。この山に集団になって降りてきた以上、それには意味があるはずだが、まだ我々はそれを知らない。しかし、ここで見張りを続け、ドラゴンの行動を具に観察をすれば、自ずと答えは出てくるはず。」

それはまあ、そうだろう。これからドラゴンが何をするかを見れば、それが答えになるのだから。

「ある意味、第一発見者の特権とも言えますわね。他の生態に関しては色々と念入りな調査や研究が必要ですけど、今回はただ見ているだけで宜しい様ですし。」

それならば、今回の仕事を請け負った甲斐がある。少なくとも、自分達の存在が役に立ったと言う結果は残せそうであるし。

「ぶっちゃけ、なんであのドラゴン達は山に降りてきたんだと思います？」

これから分かる事だと言っても、やはり気になる。暇つぶし程度の話題にもなるだろうと考え、アイムは他の3人に聞く。

「さあなあ、あのドラゴンを見てみるよ、普通の動物とは全然違う

風体だろ？ 予想も出来ない事をしでかしても、意外でもなんでも無いね。」

リユンの答えは、要するに見て見なければ分からないと言うものである。まあ、確かにそうなのであるが、それで終わっては面白くない。

「食事のためでは？ 先程の話では、ドラゴンの生態には食事が大きく関わっているかもと言う事でしたし、こうやって空を飛ぶのを辞めて、山頂に降りてくるのもそのためだと思いますわ。」

そうであれば、彼らの生態の内、食事についての謎が解けるかもしれない訳か。

「面白い意見だが、この山に、ドラゴンが餌にする特殊な物があると言う話は聞かないね。観察対象の餌が見つければ、それは助かる事だが、今回は恐らく別の目的で山へと降りたのだろう。」

こういった発言を聞くと、ドロクモが学者である事をなんとなく受け入れてしまう。出会った時や、山を登る時は、可笑しなオジサンにしか見えなかったのだが。

「でしたらドロクモさんは、いったいどのような目的でドラゴンが山に降りたのだと考えていますの？」

自分の意見を否定する以上、ドロクモが別の考えを持っているのだろうと聞き返すセイリス。

セイリスの言葉を聞くと、ドロクモは、比較的近くに居るドラゴンを指さしながら答える。

「例えば、あのドラゴン。かなりの巨体だが、どう思う。」

「どう思うと言われても、非常に凶悪そうな体と顔だとか。」

それと、図体に似合わず集団行動をしていると言ったところか。

「つまりは体が皆大きいと言う点が重要なのだ。」

ドラゴンが巨体で何が悪いのだろうか。小さいドラゴンを見たか。たとえでも言うのか。

「個体差は多少あれでも、極端に大きさの違う個体はいない。と言う事は、あれらは大人か子供、どちらかの集団である訳だな。」

確かに、木陰から見えるドラゴン達の影は、それほど大きさにバラつきが無い。

「大人の集団って事なら、ここへ来た理由はだいたいわかるんじゃないか？」

リユンはそれほど生物に詳しい訳でも無いだろうに、何がわかったと言うのだろうか。

「集団が大人か子供だとして、いったい何がわかるんですか？」

「獣の大人が集まれば、やる事と言えば一つだろ。子作りだ。」

「まあ！」

セイリスが頬を赤くする。まあ、子作りと聞いて想像してしまうのは、だいたい恥ずかしい事ばかりなのだから仕方無い。

「うむ。あれが大人の集団であればそうだろうな。それは、私の予想の一つでもある。」

うつん、そう言われれば、確かにそうかもしれない。空を飛ぶ生き物が、産卵のため、定期的に山へと降りてくる。

「らしいと言えば、らしい姿ですね。」

ドラゴンと言えども、生き物と言う事が良く分かる話である。

「そうだろう。恐らく私も、こちらの予想が正しいと考えている。もう一つの仮説、つまりは、あれらが子供の集団である場合だが、そちらの方は恐らく違うだろう。」

その様に言われると、むしろもう一つの仮説とやらが気になってくる。いったいなんなのか。

「一応、予想している展開の一つではあるんですけど、話してくださいよ。」

つまりは、山に降りたドラゴン達が子供である場合だ。

「子供が集団で、特定の場所に集まるという行動は、自然界ではあまり無いのだ。普通、産まれた子供は散り散りになって、生存権を広げて行く訳だからね。」

親元を離れた子供同士が、共同で生活して行くと言うのは、人同士でもあまり無いから、そうなのだろう。



「それでも子供が集まっていると言つのなら、彼らはまだ親離れ出来ていない程度に子供なのだ。つまり彼らの行動は、集団で家に帰ってきた程度の行動であると考えられる。」

あの敵つい顔でまだまだ子供だとしたら、なかなか面白い話である。確かにそちらの可能性は否定したくもなる。

「あの巨体を見ても、どう考えても子供の体では無い。」

顔も体も子供らしく無い姿である。あれで子供だとしたら、親の顔を見てみたいと言つ物だ。

「・・・そういえば、海のドラゴンは、子供でも小鳥程度の大きさをしていましたわね。」

突然、セイリスがその様な事を言う。山に居るドラゴンが、子供でも可笑しくは無いと言いたいのだろうか。

「不吉な事を言うなよ・・・。」

何故、セイリスの言葉が不吉なのか。その真意がわからず、その台詞を発したリユンを見る。

「わからないか？ あれらが子供だとして、親元に帰ってきたとしたら、ここにその親が居る事になる。」

それはそうだろう。親が居ないのに、親元に帰る訳が無い。

「そして、あの巨体で子供だとするなら、親はもつとデカいと予想できる。」

ああ、そうであるなら不吉な事だ。なにせこの山には降りてきたドラゴンよりも危険な存在が居るかもしれないのだから。

「でも、まさか、そんな事はありませぬよね。」

ドロクモの言う通り、それは有り得ない事だとアイムは思ったかった。

実際、そんな大きさのドラゴンが、この山に存在する場所があるとは思えないし、なにより山に降りたドラゴンの外見が、とてもでは無いが子供に見えないのだ。

「ああ、そうだな。そうだと良いな。」

だが、リユンもアイムも、勿論他の2人でさえ、不吉な予感を拭

えずに居た。いや、不吉な予感と言つよりも、直感と言つた方が正しいだろう。

そして、その直感がどこから来る物かと言えば、それは、先程より揺れ始めた地面からの物に他ならない。

## 六つ目は星空の下で(4)

山頂で起こった地面の揺れはそれ程激しい物では無く、それで居て体の芯にまで響く様な深さを持つ物である。

その揺れは、どことなく不安と気持ち悪さをアイムに感じさせる。「なんでしようこれ、いつから揺れだしたのかもわからないけど・・・。なんか、普通の揺れじゃ無い感じが。」

うまく言い表す事が出来ずもどかしいが、その感覚は他の3人も共有しており、彼らの顔を流れる冷や汗を見れば、どの様に考えているかは直ぐに分かった。

「地震じゃあ無いな、地震はこんな揺れ方はしない。」  
「リユンも言い表せ無い不気味さを感じているのか、視線をドラゴンから自分の足元に移している。」

「あの、わたくし思うのですが・・・。普通の揺れは地面が揺れているのですから、無機的な物に感じますわよね。でも、これはどうしてだか有機的な印象を受けると言うか・・・。」

ああ、セイリスの話でようやく分かった。この揺れは生命力を感じるのだ。地霊が見えるランドファーマーの自分が言うのはなんだが、普通、地面は生き物では無いので、その様な感じ方はおかしいはずである。

「ううむ。昔、火山に棲むと言うドラゴンを調査した時、噴火口近くで似た様な揺れを経験した事はあるが、この山が火山であるなどと聞いた事が無い。」

火山の揺れに似ているとは奇妙な事だ。アイムは火山について見たことは無いし知識も無いのだが、いま自分が立つこの山は火山で無い事は知っている。もちろん山頂に火口や煙も見えない。

「この揺れが生物的と言う話を聞いて、思い付いてしまった事がある。」

リユンがこれから言う事がなんとなく分かってしまう。それは、

誰もが考える事だが、言葉にしたく無い事であるからだ。

「それって、良い思い付きですか？ 悪い方だったら言わないで欲しいんですけど。」

「。。。。。」

アイムの言葉に黙るリユン。つまり悪い思い付きだったらしい。

「でも認めない訳にも行けませんわ。だって、多分、これか起こるかもしれない事ですもの。」

確かにそつだ。こういう場に置いて、悪い予感の方が当たる確率は高いのだ。例え、口に出すのが嫌でも、相談しない訳にも行かない。

「しかし、相談したとしても、どうすると言うのだね？ この山自体がドラゴンなどと言う状況に対して。」

そう、山自体が揺れている。その揺れがまるで生物の様。そして山に降りてきたドラゴンがまだ子供だと言う前提。これらの状況から思い付いてしまうのは、この山自体が空に棲むドラゴンの親なのでは無いかという考えだ。

「とりあえず、山がドラゴンだとして、その上に子供のドラゴンが降りてきたのなら、次はどうなるんでしょうね。」

揺れが少し大きくなっていく気がする。まるで今まで血の通っていないかった物が動き出す様に。

問題はそれが自分の足元で起こって居る事だ。

「子供が旅から帰ってきた時、親がする事と言ったら一つ。出迎えるだな。」

ドサリと言う音がした。土の塊が地面へと落ちる音だ。良く聞くとと言う程の物でも無いが、それでも聞き慣れない音でも無い。

しかし、音から感じる土の重さは、十分にアイムの体へと響く。どうやら、相当な重さの土が落ちた様だ。

音が発せられた場所はどこだろうか。キョロキョロとアイムは辺りを見回して、ちよつとした異変を見つけた。

「あれ、あそこ、あんな感じの地面だったかなあ。」

アイムが見るのは、皆で星を眺めた時に登った高台であった。そこにはまず土が無かった。

どうにも地面に落ちた土は、あそこの物らしく、本来、土の下に隠れていた物が姿を見せていた。

「どう見ても、違う雰囲気になっていきますわね。なんでしょう、凄くツルツルしている様な。」

それを見た印象は、大きく丸い宝石と言ったところだろう。異常なのはその大きさが高台とほぼ同じ大きさな点である。

宝石の模様も奇妙だ。全体としては黄色の石であるが、中心部らしき場所から端までに掛けて黒と茶色を混ぜた色の線が、一本走っている。

線は中心部に近づく程、太くなっており中心部での太さは、宝石全体の太さの三分の一くらいはあるだろう。

黄色い部分に広がるヒダの様な模様も気になる。どうにもそれを見ていると、吸い込まれる様な感覚に襲われてしまう。

「あれは、もしかや・・・。」

ドロクモは、山頂に現れた宝石を見て震えている。あれが何であるか気付いたのだろうか。

「なんだ、学者先生。気付いた事があるなら何か言ってくれ。」

リユンに同感だ。ここまで来て思わせぶりな態度は、不安を増す効果しか無い。

「いや、あれはな・・・。」

ドロクモが口を開こうとした時、宝石に走る線がギョロリと動いた。

いや、線だけで無く、合わせて宝石自体も動いている。恐らくは地面の下も丸いであろうその巨大な宝石が、付近の土を巻き上げながら半回転する。

宝石に走る線がまるでこちらを見るように、正面を向いている・・・見るように？

「もしかして、あれって、目？」

寒気がした、震えもだ。なんだあれば、目なのか？ 小山程もある目だとしても言うつもりなのだろうか。

ありえない。あれが目だとすれば、その体はどれ程の大きさだと言うのだ。

「もし、山自体がドラゴンだとすれば、むしろあの目は小さい方だと言えるかもしれない。」

驚きの表情を隠そうともせず、それでもドロクモは、今の状況を説明しようとする。

「お出迎えは目線のみと言う事なのかしら。そうでなければ大変でしたわ。」

もし体全体で子供を出迎えて居たら、自分達どころか、山に棲む生物すべてが大変な事になっていたところだ。

「体を動かさないのは、自分の子供を守るためなのかもな。だとすれば温厚な性格を期待できる。」

この山が、昔から山のままなのだとすれば、確かに親ドラゴンは大人しいのかもしれない。何故なら、ずっと昔から、この場所を動いていないと言う事なのだから。

「それでも、ドラゴンの上に乗っているって言うのは気分が悪いですよ。」

いつ何時、足を立てているこの地面が、どこかへと消えてしまいかもしれないのだ。

「うむ、今までが休眠期で、これからが活動期になると言った事もあるかもしれないな。」

アィムに同意するドロクモであるが、何故かどことなく嬉しそうである。まあ、ドラゴンを調べる学者としては、この上ない発見なのだから仕方ないか。

「うん？ ドラゴン達があの子の目の周りに集まりだしたぞ。」

リュンの言う通り、子供のドラゴン達が、巨大な目の周りに集まって行く。目の大きさのせいで、あの大きく見えたドラゴンが小さく見える。

「いったい、何をするつもりなのでしょう。」

不安気にドラゴンの行動を見つめるセイリス。これまで起きた事だけでも、十分に驚きを感じたと言つのに、これから何が起こると言つのだろうか。

「ふうむ。親元に帰った子供達が求める物。いや、まさかな。それでは都合が良すぎる展開だ。」

また、自分の中だけで考え事を始めたドロクモ。いちいち聞き出すのも面倒になって来たので、ドラゴン観察を続ける。どうせ、見て居ればわかる事なのだ。

「とは言つても、何も変わらんが。」

目の周りに集まったドラゴン達は、そこで口を開けたかと思うと動かなくなる。

「山の空気でも吸い込んでいるのかもしれないわ。」

わざわざ空を飛んできてここまで来たのだ。そんな訳でも無いだろう。

「もしかして、餌でも貰おうとしているのか？」

「そう、まさにその通りだ。あれは親鳥に餌をねだる小鳥と同じ行動なのだろう。」

リュンの言葉に反応して、考え事をしてたドロクモが顔を上げて答える。しかし、餌とは……。それが何であるかを知る事が出来れば大発見であり、ドロクモの言う通り、随分と都合の良い展開でもある。

「ふうふ、それがどういう事かわかるかね？ あのドラゴン的一端を知る事が出来ると言つ事なのだよ。謎に包まれたドラゴンの正体が！」

テンションが上がってきたようで、今にも飛び出しそうなドロクモを見ると、逆にこちらは冷静になってくる。これから何が起こるにせよ、そんな冷静な気持ちで見た方が、得る物も多いとは思つのだが。

「学者先生はこの山にドラゴンの餌があることに否定的だったが、

その辺はどうなんだ？」

「それはこの山がただの山だと考えていたからこそその思考だな。今は、山自体がドラゴンであると分かった訳だから、当然、話も変わる。」

「それじゃあ先生は、山のドラゴンが何か特別な事をして、子供に餌を与えていると？」

「うむ。それについてはだな・・・。」

ドラゴンにそれほど興味の無かったはずのリユンとドロクモが、話を発展させている。まあ、それはそれで良い事だろうと思いい、アイムは放って置く事にした。

今は、ドラゴン達の観察に集中したい。

「それにしても、本当に何も置きませんわね。子ドラゴンさん達は、みんなお口を開けていると言っのに。」

そんな事を言うセイリスは、ドラゴン達と同じく今にも口を開けそうさ。もちろん、餌を貰うためでは無く、飽きから来るあくびのせいだ。

「うーん。もしかしたら、このまま何も起きないかもしれないね。そうだとしたら、ドロクモの期待も外れてしまう事になるのだろうか。」

「あら、でも、子ドラゴンさんが何かする様ですわ。」

巨大な目の近くに集まっていたドラゴン達が、開けた口を閉じる。その後、すべてのドラゴンが、伸びばしていた長い体で蜷局を巻いて行く。

「いったい、何をするつもりなんだろう。」

ドラゴンの目線は、親であろう巨大な目から、空へと向かう。まるでまた、空の旅へと戻ろうとしているみたいに。

「みたいにじゃなくて、その通りなんじゃないか？」

いきなり、心の声に返事をされて驚くアイム。

「え、そういう事はやめてくださいよりユンさん。考え事を読むなんてエスパーなんですか？」



いくら感がするどい人だとは言え、超能力者だとは思いたくも無い。

「お前の独り言が聞こえたただけだ。どうにも癖になっているみたいだな。」

それは仕方ない。だいたいのランドフーマーが独り言の癖があるのだから。

「それよりも、ドラゴンが空に戻るかもって話ですけど、やっぱりそうなんですかね。」

「ああ、見ろよ、今にも空を飛びそうな雰囲気じゃないか。」

ドラゴン達は、空を見て、蜷局を巻いたまま、体を縮ませていく。そう、これから、空へと跳ぼうとしている様に。

「む、みな伏せろ！ 突風がくるぞ！」

ドロクモが叫ぶ。思いの外、迫力のあるその声に釣られて地面に伏せると、その直後、アイルムの体を風が襲う。

突然起こったその激しい風に、体が吹き飛ばされそうになるが、体を伏せていたおかげで難を逃れる。

風が吹き抜けたのは一瞬だったおかげもあり、アイルムは無事立ち上がる事が出来た。

「あれ、ドラゴン達がいらない。あの大きな目も。」

そこには、今まで起こった事が幻であったかの様に、すべての物が、ドラゴンが山へと降りてくる前の状態に戻っていた。

「良く見る、目は消えていない。多分、目蓋を閉じただけだろう。」  
目のあった場所は、元の高台に戻っているかの様だが、よく見ると、周辺の土とは少し違う色をしている。保護色と言う奴だろうか。あれだけ強大なのだから、隠れる必要も無いと思うのだが。

「子供の方は、体をバネにして空へと跳んだのだろうか。激しい風はその反動だ。」

ドロクモの目線は空に向かっていて。いつのまにか夜の黒に朝の白が混じり始めた、紺色の空だ。そこには空を飛ぶドラゴンを見る事は出来ないが、ドロクモの目には映っているのかもしれない。

「体をバネにしてって言いますけど、それだけで空高くまで跳べるんですかね。」

まあ、あの体を見ると、随分と反発力がありそうではある。

「彼らが空を飛ぶ原理がなんとなくわかったよ。なにがしかの力で自身の体重を軽くしているのだ。だから、少しの力だけで、それでも人の力とは比べ物にならないだろうが、空高くまで跳ね上がる事が出来る。後は、軽くなった体を風に乗せれば、空くらい飛べるだろう。」

そのなにかの力が分からない以上、結局は原因不明のままだが、ドロクモの説明を聞くと、それでも謎が解けた様な気分になつてしまう。

「ですけど、いったい何を食べているのかは、分からないままになつてしまいましたわね。」

セイリスはどこか残念そうだ。彼女の興味は、そちらに向いていたからかもしれない。

「一度の調査で何もかもが分かれば学者はいらんだろうね。まあ、だからこの仕事は面白いのだから辞められない。」

今度は、どのドラゴンをどこで調査しようか。そう話すドロクモは、本当に楽しそうである。

彼の中では、今回の調査は既に終わっているのだろう。心はまた別の場所へ旅立っている。

「それは良いが、報酬の件は忘れるなよ。駄賃程度であれ、仕事は仕事だ。」

感慨も台無しに、リユンは金銭関係に厳しく対応する。旅の商人としてのけじめなのだから仕方ない。

「おお、そうだったな。今回の調査に対する収穫は十分にあった。スポンサーも満足してくれる物だろうから、報酬に関しても、少しばかり色をつけさせて貰うよ。」

それは嬉しい誤算だ。色と言っても、元が少ないので期待度は少ないが、仕事を評価された様で結構嬉しい。

「それより、そろそろ山を降りませんか？ 実はまだ落ち着かなくて……。」

山頂で一休みすると言う選択肢もあるが、一度ドラゴンの体に乗っている事を理解してしまつと、そつちを選ぶ気分では無くなっている。

「おまえなあ、俺とセイリスは今まで徹夜だぞ、徹夜。ちよつとくらは休ませろつて、なあ？」

顔を下に向け、セイリスに同意を求めりユン。

「あの、わたくしも、そろそろ山を降りたいかなあつて……。」  
結局、まだ体力が残る内に下山する事になつたアイム一行であつた。

「あいたたた。山つて登る時よりも、降る時の方がきついんですね。」

ベッドの上で、足を揉み解すアイム。

ウエストモルタルへと戻つたアイム達は、ドロクモとの契約を果たすと、そのまま宿を

取り一休みする事となつた。

「足への負担つて意味ではそうだろうな。その割には、登る時よりも疲れてないじゃないか。」

足の筋肉痛には苦しんでいるが、確かにそうだ。

「慣れかもしれませんか。まあ良かったですよ、リユンさんにならともかく、女の子の足まで引つ張つてちゃあ、情けないですもん。」

別の部屋を取つて、休んでいるであろうセイリスを思い浮かべる。体の小ささからは想像も出来ないくらいに頑丈な彼女であるが、だからこそ、負けてられないと言う男の意地がある。

「慣れねえ。船旅でもそうだったが、お前は経験の無い事には弱いのが、すぐに慣れるのが強みだな。」

もしかして褒められているのだろうか。褒め言葉だとすれば、リユンに言われると、それ程嬉しく無いのはどうしてだろう。

「それよりも、あの学者先生に言わなくても良かったのか？」

リユンは例のニヤついた笑みを浮かべて、こちらを見る。

「言わなくても？ いったい何のことやら。」

自分で言つて、自身は嘘が下手である事に気付くアイム。この返し方では、何か隠し事をしている事がバレバレでは無いか。

「ドラゴンの餌の事、気付いていたんだろ？」

ああ、やはりバレているのか。そこそこの付き合いなのだから、それも仕様が無いと言えば、仕様が無い。

「隠すつもりは無かつたと言えば無かつたんですが……。いや、あつたのかな？ なにせ地霊に關係する事だから。」

ランドファーマーにだけ見える地霊。土地に潜むその霊達が見えると言う能力は、他の種族には明かさなない能力であり、リユンは他種族でそれを知る、数少ないはずの一人だ。

「へえ、地霊に關係が……。ちよつと待て、もしかしてドラゴンが食つていたのは……。」

リユンの顔が青くなって行く。もしかしくなくても、地霊が食べられる姿を想像しているのだろうか。

「ええ、まあ、地霊ですけど。あ、ちよつと、気持ち悪がらないでくださいよ。地霊つて、人や動物みたいな感じじゃなくて、空気みたいな感じなんですから、口に入れたつて、気味の悪い物じゃあ無いです。」

特に巨大な目から、涙の様に出て来た地霊、その集合体と言えば良いのかわからないが、そう言う物を、子供のドラゴン達が食べる様子は、確かに親が子に餌をやっている風に見えた。

「しかし、餌が地霊とは……。地霊つて、たくさん食べば、空も飛べるのかよ。」

それに関しては知らない。ただ食べただけで飛べる様になる訳でも無いだろうが。

「普通の地霊とはまたちよつと違う感じもしましたけど。山みたいな姿の親が、何かしているんでしょうね。それを食べたから、空も

飛べる。」

山ドラゴンの特性品と言う奴だ。

「なるほどねえ。親の愛と呼ぶか、生命の神秘と言うか。まあ何にせよ、面白い仕事だったのかもな。」

「あはは、最初はやる気が無かったのに、良く言いますよ。」

だが確かに面白かった。報酬と労力が釣り合わないと言う点に目を瞑ればだけど。

「いつも、こういう仕事ばかりって訳にも行きませんが、時々は気晴らしに良いんじゃないですか？」

旅にはメリハリが必要だ。まあ、メリハリだらけの旅をしている様な気もするのだが。

「ああ、そうだな。だが、金儲けも目的の一つである事を忘れるなよ。」

そうだったっけ。これまでの旅で、それほど金銭を大量に得た事が無かったので、そんな目的がある事をすっかり忘れていた。

「金儲けと言えば、リユンさんの種族であるツリストって、みんな行商人みたいな事をして、金銭を稼いでいますけど、どうしてなんですか？」

地霊が見えるせいか、土地と言う物に執着しがちなランドフアーマーにとって、旅を好むツリストの性質とは、理解から遠い所に居る。

「あー、そうだな、そろそろ話しても良い頃か・・・。」

一瞬の逡巡の後、そんな事を言うリユン。いったい何のことだろうか。

「そうだな、次の国に着けば話ささ。」

「次の国、ですか？ そんなに悩んでいる風でも無いんですから、ちやっちゃんと話せば良いじゃないですか。」

勿体ぶられるのは、今回の仕事で嫌になった。

「まあそう言うなって、次の国で話せば都合が良いんだ。なにせ次の国は、俺の故郷なんだからな。」

ニヤついた笑いから、普通の笑い顔に変わるリユン。その表情の  
変化は、故郷を思うが故なのだろうか。

## 七つ目には故郷へ(1)

大陸東部の中程、南部の森林地帯を抜けたその先にある広大な平野に、その国は存在する。

ヒューガ国と呼ばれるその国は、商人の国である事でも有名であった。だがその国自体に商業が盛んである訳では無い。何故ならその国の商人達は、国内での商業よりも、他国へ赴き、旅を続ける中で商売を続ける事に価値を見出す者達だからだ。

その者達の名前をツリストと言う。その名は商人としての名前であると共に、種族としての名でもある。

ツリストはこの大陸の生命線だ。大陸の国同士の繋がりには、ツリストが旅を続ける事によって維持されている。その様に過大な表現を使ったとしても違和感の無い程である。

国内に定住する者にとって、外来人と言えば、だいたいがツリストをイメージしてしまう。それ程に旅を続ける者としてのツリストが建国した国、ヒューガ。そしてそれは、アイムの相棒であるリュンの故郷だ。

「ヒューガ国の印象として、行商人のツリスト達が建てた国なのだから、そりゃあ商人達が所狭しと商売をしているなんて思われているが、どうだ？ 実際は大きく違うだろ。」

行商人の国だけあって、入国審査も手軽な物で、荷物検査などは殆どせず、アイム達はヒューガ国へすぐに入国できた。

今はヒューガ国内で、リュンにガイドをされながら、観光をしていると言ったところだ。

「どちらかと言えば、資産家達が礼儀正しく住んでいるって印象です。ね、実際は。」

ヒューガ国内の建築物は、どれも豪邸と呼んで良い程の大きさがある家々が立ち並ぶ。

「いや、立ち並んでるって言うのも可笑しいですね。家以上にそれ

を囲む庭が広いんですもん。」

その広さたるや、一つの家の範囲に、町の区画一つが入りそうな勢いである。それも、平均的な広さの家がそれであり、範囲が広い物になれば、周囲を歩くだけで1日は掛かりそうな物まであった。

「これでも国内の中心都市だから、控えめな方なんだぞ？ 郊外に行けば、町一つがすっぽりと入りそうなくらいに大きな土地と、それに引けを取らないくらいにデカイ屋敷が建つてたりする。」

もうそこまで行くと、その執念はどこから来るのか疑問に思ってしまう。

「広い平野に出来た国ですもの。そう言った文化なのかもしれないわね。」

セイリスはキョロキョロと町中を見渡しながら話す。小さなセイリスが、この国の中に居ると、より小さく見えてしまう。家の方はより大きくだ。

「文化かあ。まあそう言えるかもな。とにかくこの国では、大きな家に住む事が理想なんだ。だれもかれもが、デカイ土地と屋敷を買って、そこで余生を暮りたいと考えている。」

ブルジョアな話もあった物だ。これぞ商人魂とも言えるかもしれない。

「でも家で暮らしたいと思っていながら、行商人している人が多いんですよね。ちょっと変じゃないです？」

旅に出れば危険は付き物で、安穩とした余生を暮すためとは言え、少々、リスクの多い職業だ。

「ただの家じゃなく、“デカイ”家に住みたいんだよ。そのためには、土地を買う金があるし、どいつもこいつもその土地を欲しがっているから、生半可な金儲けじゃあ足りない。一代で一攫千金となれば、それこそ国を出て、金を稼いでくるしかないのさ。まさに故郷に錦を飾るためって事だな。」

そこまでして大きな家に住みたい物だろうか。アイムなどは、ちよつとした畑と小屋があれば、そこで老後を暮したいと思う物だが。



「何はともあれ、変わった種族って事ですね。」

「人の事を言える筋合いは無いと思えますわよ……。」

ジト目でこちらを見てくるセイリス。ランドファーマーのどこが変だと言うのか。ただひたすらに土地と農業を愛しているだけだと言うのに。

「余所から見れば、誰だって奇人で変人だ。一応、こんな文化になつたのにも、事情があるしな……。」

リユンは羨まし気に、立ち並ぶ豪邸を見ている。

「事情って、なんですか？」

「狭い場所が嫌いなのだ。ツリストって人種はな。」

複雑な表情で、視線を下に向けるリユン。もしかしたら、自分自身を見ようとしているのかもしれない。

「ああ、ですから宿に泊まるとなった時は、落ち着かない様子でしたのね。」

そう言えば、リユンが宿の部屋で寝ているのを見た事が無い。いつも、部屋の椅子に座っているか、部屋を出ているかのどちらかだった。

「まあな、だからツリストは、外に出かける体力も無かつた頃には、広い土地と大きな家で余生を暮したい。」

それはリユンと同様の考えなのだろう。彼が少々、金銭関係に厳しいのはそれが理由か。

「でも、それにはもつとお金を稼げる様にならないと。何はともあれ仕事探しですよ。リユンさんはこの国出身なんだから、コネくらいあるんでしょう？」

リユンの事情を知つたせいとか、仕事に対して、なんだかやる気が出てきた。これから、じゃんじゃんお金を稼ごう。

「コネがあ、あると言えばあるが……。まあ、顔を出すくらいはしとくべきかな。」

何やら深く考え込むリユン。コネとやらに関して、思う物でもあるのだろうか。

「とりあえず、心当たりがあるのであれば、向かうべきでは？ わたくし達は、リユンさん以外、この国に関してあまりしりませんもの。」

結局、セイリスの発言が決め手となり、リユンの知るコネの場所まで向かう事となった。

町を北側に少し出ると、そこは自然と人工物との境目となっていた。町を出るのだから当たりまえの風景なのだが、リユンに言わせると少し違っらしい。

「実際に見る町の範囲より、町として定義されている範囲は少し広い。何故そうなっているかと言えば、そこは広い土地を買える場所だからだ。今は町の外側だが、将来は家が建てられる。ツリストが家を建てるとなれば、当然、範囲も広がるからな。自然が広がる場所であるうとも、町の近くなら、それは町の範囲として含めちゃうのさ。」

つまり、将来には間違いなく、町と呼べる場所となっているのだから、今から町に含めてしまっても問題無いと言う事か。

「でも、なんでそんな場所に向かっているんですか。結局は、町の外に変わり無いんですから、仕事が無いと思うんですけど。」

人が多い場所にこそ、仕事があるはずだろうに。郊外に向かえば、それに比例して、仕事の需要も無くなってしまう。

「町の外に何も無いって訳でも無いんだ。新興住宅地みたいなもんだからな、一攫千金を成功させて、新しく家を建てた連中がそこに住んでいるのさ。そうして、そんな人種は、だいたい金遣いが荒いこちらとしては、払いつ振りが良いって言った方が適切か？」

ようするに報酬の多い仕事にありつける可能性が高いのか。

「ですけど、人気の無い場所に向かえば仕事自体が少なくなるのは、変わりませんわ。そちらの方はどうしますの？」

「だからこそコネだ。一攫千金で家を建てる様な連中に知り合いが居る。まあ、一応、信頼度に関しちゃあしっかりしている人でな

本人に仕事を依頼される事は無いだろうが、なんらかの伝手くらいは紹介してくれると思うぞ。」

何かにつけて物事を捻くれて考えるリユンにしては、信頼などと言いつつかわしくない言葉が出てきた。

そのコネに関しては、結構信用しても良さそうである。

「それで、やっぱりその人も一山当てて、郊外に新築の家を建ててるんですか？」

「新築つてほども無いけどな。家を建てて15年くらいか、それくらいは経つてはるはずだ。それでも、一代で一財産を稼いだ事には変わらないか……。」

また物思いに耽るリユンであるが、足を止めず、ただ一つの方向を目指して歩いている様だった。

郊外に家を建てるのは不便では無いかと思うのだが、大きな家を建てるとなれば、むしろ向いている場所だとアイムは知った。

その家と言うより土地は、疎らな塀に囲まれた場所である。塀がすべての場所を囲めないのは、その土地の広さからだろう。あくまで、土地と土地を区別するために置かれたその塀を、土地の端から端まで観察しようとすれば、反対側が霞んで見えそうな距離である。

一方で、その土地の丁度真ん中に建っているのが、土地の持ち主が住む家だろう。

さぞや豪華な作りなのかと思いきや、外見はシンプルかつ単純な物で、二階建ての白無地の外壁に、バランスを崩さない程度に窓や扉が配置され、屋根なども凝った作りでは無い三角屋根であった。

ただそれは、あくまで一般の家屋としての大きさであればだ。土地の広さと競い合う様に家は大きかった。

普通の家がそのまま引き伸ばされた様な印象を受けるその屋敷は、すべての物が大きく見える。屋根も外壁も、玄関であろう扉も、サイズが狂っていると感じてしまう。もし、外見通り二階建てなのだとしたら、いったい一階分の高さはどれ程に高いのだろうか。唯一、

大きさが普通である窓であるが、その数は、家に合わせて多数配置されており、より一層、外見の不可思議さを際立たせている。

「なんでしようねこれ。悪趣味と言えば良いのか……。」

感想に困る家だ。一つ一つのデザインは普通なのだ。それを無理矢理大きくしたから可笑しな事になっている。

「とりあえず家を大きくしようとしたらこうなっただけ。別にそれ程豪華な外装も内装もいらないと注文したのが拙かったそうなの。それはまたご愁傷様である。外見はともかく、金も資材も掛かっているだろうに。」

「だが、それでも当人は満足している。単純な作りのおかげで、当初の予定より屋敷を大きく建築できたからな。」

「いったいツリストのどこから、その様な大きい家に対する執念が湧いてくると言うのか。」

相棒も、同じ価値観を持っているかもしれないのなら、少し距離を置くことを考えなければならぬ。

「それにしても、随分とあちらのお屋敷について詳しいですね。ご友人なのでしょうか。」

小首を傾げ、セイリスはリユンを見る。確かに、リユンはこの屋敷について、何故か詳しい。理由でもあるのだろうか。

「そりゃあ詳しくもなる。」

そう返して、リユンは屋敷へと早足で向かう。喋りながらも歩き続けて来たので、屋敷の玄関からは、もうすぐそこだ。

本来、門や塀によって遮られているはずの屋敷の庭へは、すべてを覆えず、疎らに存在する塀の間から入る事が出来ている。

リユンの後を追う形での侵入であるが、随分と失礼かつ迂闊な事をしているのでは無いだろうか。

「あの、それってどういう……。」

聞き返すアィムを無視してか、歩みを続けるリユンは、ついに屋敷の扉に手を掛ける。

扉に力を込め、軋みの音を立てながら開いていくそれを見ながら、

リユンはようやく答えを返してくれた。

「自分の家に詳しくない奴なんて、そうは居ないだろ。」

扉が開くと共に、備え付けられたベルが鳴る。これでリユン本人の家で無ければ、完全に不法侵入であるが、リユンは気にもしていない様子だ。

扉から入った先には広間があり、一階から二階までの吹き抜けが存在する。両端に二階への階段が設置され、正面に扉が3つ、左側に1つ、右側に2つある。これほど扉のある家を見た事は無いが、恐らくそれらの扉の先には、さらに多くの部屋が連なっているのだろう。

「おい、誰か居ないのかー。」

リユンは辺りを見回しながら大声を出す。来客があつたのは先ほどのベルで気付いているはずだ。誰も居ないのに、扉の鍵を開けたままにする程不用心と言う訳でもあるまい。

「あらあら、その声はリユン坊ちゃんかしら。」

階段の上から声が聞こえて来た。ドデドデと音を立てながら、太った老婆が階段を降りて来る。

「やあ、シイル。相変わらず元気そうだなによりだ。」

「いやですよ、リユン坊ちゃんの方がもうつと元気じゃありませんか。行商人として一旗揚げると家出てからは、それはもうさらに生き生きとして。」

最初はリユンの母親かとも思ったが、リユンを坊ちゃんと言う以上、もしかして……。

「あの、その人はいつたい。」

「ああ、この家で雇ってるお手伝いさんだよ。この広い屋敷の掃除から料理まで、一通りやつてくれている。」

やはりお手伝い。あの大きな屋敷にかならず存在すると言う幻の。「何を考えてるのは知らないが、それ程凄い事じゃないぞ。この国じゃあ、家を持てば家政婦を一人以上雇うのが義務なんだ。」

「そうですね。家の事だって、本当に何から何までやってる訳でもありませんもの。」

腰が曲がっているからか、それとも太っているからか、その丸い体でシイルと言う家政婦は笑う。不思議と愛嬌のある姿だ。

「それは変わった義務ですね。国内で雇用を作るためでしょうか。」

「まあ、それもあるよ。この国では重要な法律の一つでな。」

そのまま話を続けようとするリユンであるが、それを遮って、家政婦のシイルがこちらに話をする。

「リユン坊ちゃん。この方々の紹介がまだですよ。いくら家政婦と言っても、坊ちゃんの知り合いを紹介してくれたって良さそうなものじゃないですか。」

そう言えば自己紹介がまだだった。

「あ、すみません。リユンさんの仕事仲間、で良いのかな、ランドファーマーのリユンです。」

「わたくしはエルフのセイリス。アイムさんと同じく、リユンさんの仕事仲間ですわ。」

自己紹介が終わると、シイルは丸い体をさらに丸くして、ペコリの頭を下げる。

「これはこれはご丁寧に、この家で家政婦をしているシイルです。坊ちゃんの仕事仲間だなんて、外では立派にやってらっしゃるんですね坊ちゃん。」

実際はそれ程立派と言う訳でも無いが、ここはリユンの名誉のために黙って置く。

「まあ、それなりだ。それよりその仕事に関して、兄貴か親父に会いたいんだが。居るか？」

「レエン坊ちゃんなら、仕事に出ていますよ。本格的に旦那様の商業を継ぐそうで、大忙しみたいです。旦那様ならお部屋に。」

話の内容からして、そのレエン坊ちゃんと言うのが、リユンの兄で、旦那様が父親なのだろう。しかし、坊ちゃんだの旦那様だの、

リユンは随分と金持ちの家に生まれた様子だ。

「それじゃあ一度親父に会ってみる。仕事以外にも、色々と積もる話もあるし。」

彼は旅を続けているのだから、久しぶりに親子の対面だ。そりゃあ話す事はいくらでもあるだろう。

「はいはい、仕事仲間さん達も一緒に一緒かしら。」

「一応、連れて行くつもりだが、お前らはどうする？」

リユンはこちらに振り向き、聞いてくる。

「当然、会いますよ。仕事にも関係して来るんでしょう？」

セイリスもうなずく。それにリユンの父親と言つのがどういふ人物かも見てみたい。この底意地の悪そうなツリストをどの様に育てたのかも聞ければ聞きたい。

広い屋敷を二階に登り、奥にある少し大きな扉をリユンは開ける。そこは寝室の様で、大きく複雑な彫り物が刻まれ、柔らかく寝心地の良さそうなベッドが窓際に配置されている。

部屋の絨毯には、リユンの服にも刺繍されている、ネコ科らしき動物の模様が描かれていた。

「おお、リユンか。久しぶりだな。なんだ、仕事が大変で出戻って来たか。」

ベッドから声が聞こえて来る。壮年で、寝ながらもわかる高身長、どこかリユンと似通った雰囲気を持つ男性が、ベッドから上半身を起こし、こちらを見ていた。

「仕事は大変だが、それが理由で戻った訳じゃないさ。どちらかと言えば、漸く軌道に乗り始めたから、その報告とツテを頼りに、かな。」

随分と親しそうな間柄だ。親子なのだから当たり前であるが、なんとなく、頑固な親と生意気な子供と言つ関係を想像していただけに拍子抜けだった。

「一端に親を頼る様になつたか。もう子供としては見れんな。うん

？」

笑いながら、リュンの父親がリュンを見る。そこから視線を横へと向けて行く。こちらの存在に気付いてくれたみたいだ。このまま親子の語らいが続いて居ては、この場に居辛くなってしまう所だったので、安心するアトム。

「ああ、紹介がまた遅れた、こいつらは仕事を手伝ってくれている、アトムとセイリス。まあ、仲間だよ。」

頬を掻き、どこか恥ずかしそうにしているリュン。仲間という言葉を使うのに慣れていないからだろうか。

「ほう、今度は仕事仲間と来たか。軌道に乗り始めたと言うのも嘘では無いみたいだ。ツテを頼りたいと言ったな、どうだ、話してみろ。お前が一人前にやっていると言うなら、こちらにも損は無いだろう。」

親子の仲が良いと言ったが、どこかビジネスライクな付き合い方でもある。こういうのがツリストの一般的な関係と言えるのか。

「その前に、今どんな仕事をしているか説明しないと。アトム、話してくれ。」

「ええ！？ 僕がですか？ いきなりこっちに話を振らないでくださいよ。」

どう考えても、リュンとその父親が話す場面だろうに。

「おお、君がアトム君か。と言う事は、隣の小さな淑女が、セイリス君だね。私はこの生意気な男の父でウォルドと言う。君は恐らくこの男がやっている仕事の中心人物なのだろう？ だったら君が直接話してくれた方が理解しやすい。そう考える男だよ、私の息子はな。」

快活な笑い顔をして話すウォルド。親子では笑い方も違うらしい。少なくともこちらは、好感が持てる類の笑い方だ。

「はあ、まあ、良いですけど。上手く説明できるかわかりませんよ？」

そうして、自分達がしている仕事内容を話す。要するに、国や地



域毎で断絶しがちな、農業知識を売り歩くと言う内容だ。その強みとして、自分のランドフアーマーとしての能力があるのだが、他種族には秘密にしているの、単に自分が農業の専門家であるからと誤魔化して置いた。

「ふむ。面白い点に気付いた物だ。確かに農業関係の仕事は、旅を頻繁にする我々には縁無い物と、ツリストは見過ぎしがちだから私もそんな普通では考えない商業圏を開拓して、一財産を築いたつもりだよ。」

お世辞では無く、純粹に感心している様子だ。商人の目でも呼べば良いのか。

「あの、失礼でなければ、ウォルドさんが開拓した商業圏と言う物を、教えていただきたいのですが……。わたくし、そういった事に少々興味がありますの。」

セイリスはウォルドの話の詳細を詳しく聞きたい様子だ。彼女の興味と言えば、彼女が信者をしている純血教関係だろう。ウォルドの開拓精神は、純血教の教えにも繋がるとも考えているのだろうか。

「私の商売かね？ まあそんなに面白い話では無いよ。この国から他国へ伸びる道に目を付けてね。使われていない流通路を見つけては、そこを開拓して行っただよ。」

「さりと仰っています、流通路の開拓と言うのは、大事業じゃございません？」

まあそれはそうだ、どんな小さな道であろうとも、目的地までの距離があれば、それを開拓する際に、資源も資金も必要になる。

「ああ、だから直接は関与していないよ。ただ、自分で積極的にその道を使い、その流通路で少しでも儲けを出すんだ。そして、その儲けを殊更アピールする。あの道のおかげだね。そうすれば真似をするやからが増えてくる。」

なるほど、そうして流通路を利用する人が増えれば、どこかの誰かが、流通路をより利用し易い状況に変えて行く事になる。つまり、自分はそれほどの労力を掛けずに、新しい交易方法を見つけられる

と言つ訳だ。

「でも、それで一財産つて言うのは言い過ぎじゃありませんか？  
だってそれじゃあ、流通路を新しく見つけただけだ。」

商売はし易くなるだろうが、それだけで多くの金銭が生まれる訳  
では無い。結局は、物を売らなければ儲けは出ないのだから。

「だがそれでも小金は手に入るだろう？　なら次は同じ様に使われ  
ていない道を見つけて、噂を広げ、さあ開拓しようとなった時、自  
分もその開拓を支援するスポンサーになるのさ。そうすれば、道が  
完成した時、その道が出来た事に対する利益が、私にも少しばかり  
入ってくる。道の宿に荷馬車、流通が盛んになった所には、道を整  
備と保安のためと言って、使用料を取る場所もあったなあ。まあ格  
安でだがね。そうやって、道毎に少しずつ利益を出せば、寝ていて  
も、利益を得る様になるのさ。」

なんともまあ、計画的な儲け話だ。なにより凄いのが、この計画  
に、損をする者が殆どいないと言う事だ。唯一損をしそうなのは、  
道の使用料を取られる旅人なのだろうが、それも、既存の道で取ら  
れるのでは無く、新たに開拓された道で取られるのだから、仕方な  
いと考えるだろう。

「さて、私の商売については話したが、君たちはどうなのかね？  
私をコネに、何かしら仕事をしたいのだろう？」

そう言いだしたのはリユンなのだから、彼自身に話して貰いたい。  
アムにはいつたい、ウォルドが持つツテの、何を利用したいのか  
詳しくは知らない。

「ああ、その件だが。実は親父の商売に直接関わる事じゃないんだ。  
そっちは兄貴の領分だしな……。」

何故か複雑な表情をするリユン。親子間の仲は良いが、兄弟間は  
微妙なのだろうか。

「そう言われては、尚更聞いてみたくなる。いつたい何が目当てな  
んだ？」

ウォルドの目は、完全に商売人のそれとなっている。雰囲気的に、

もう隠居しているのかとも思えたのだが、案外、現役なのかもしれない。

「親父みたいな成金を紹介して欲しい。特に新しく家を建てて、土地を持って余してる奴。こう言っちゃあなんだが、そんな知り合い、結構多いだろ？」

「実の親に向かって成金とは良く言えた物だが、その親も別に気にしていないのでお互い様か。」

「ふうむ。そりゃあ何人か心当たりは居るが、何をするつもりだ？」

「息子とは言え、知人に紹介する以上は信用が必要なのだろう。」

「さつきも説明した通り、農業に関する知識を提供するのさ。必要なら道具を提供しても良い。」

「思ったより特別な仕事では無さそうだ。しかし特別で無い以上、儲けが出るのかは怪しい。」

「いくら金を持っていくからと言って、それで食いついてくるか？」

「そこは売り込み次第だろ。親父みたいに半ば引退した後も収入がある奴ならともかく、大半が若い頃に稼いで、老後にそれを食い潰すつもりの方が多いんじゃないか？　じゃあ余ってる土地で農業でも始めてみないかって紹介してくれるだけで良いんだよ。」

「ああ、確かに現在は裕福でも将来が分からない以上、少しでも安定した収入欲しいと思う物だろう。」

「農家のアイムにとっては、農業が安定した収入を生み出すと言うのは些か疑問だが、まあ、そこは商売なので黙って置く。」

「ああ、なるほど、新興の金持ちってのは次に安定を求める物だからな。商売相手が金を持っている以上、上手くやればそれなりに実入りがある。しかし、そういう考えが思い浮かぶって言うのは血なのかねえ。」

「感慨深そうに顎に手を上げ、何かを思うウオールド。疑問に思ったのか、セイリスが何を考えているのかを聞き出す。」

「どつという事ですか？」

「ああ、こいつの兄貴の事だよ。」

ウォルドは顎をしゃくり、リユンを指す。一方で、兄と言つ言葉が瞬間、リユンはあからさまに動揺した表情をした。

「兄貴が、何かしてるのか？」

「ああ、お前と一緒にさ。新興の家を狙つて、一商売する気らしいんだよ。」

思わぬ所でライバル登場であつた。

## 七つ目には故郷へ(2)

「兄貴が似た様な商売をしているとなれば、厄介な事になる」

ウォルドとの話が終わり、その後、恐らくリユンの部屋であろう一室に案内されたアイム達は、部屋に入るや否やそんな言葉をリユンに聞かされた。

「やっぱりリユンさんの兄って程ですから、もっと嫌らしい人なんでしょうね」

確かに厄介な人物だと予想できる。笑い方だって、人の神経を逆なでする様な見た目のだろうさ。

「……。まあ、本人の能力は置いておくとして、同業者が少ない仕事だと思っていた分、その見通しも変えて行かないとな」

「でも、まったく同じ内容とも限りませんわ。少なくとも、農業を中心に商売をしてく様な仕事は、わたくし達くらいですもの」

それにもし、まったく同じ仕事内容だったとしても、向こうにランドファーマーがいなければ、農業に関する知識について負けない自信がアイムにはある。

「詳しい仕事の内容もあまり関係無い。考えてみてくれ、俺達が新興の家に農業知識を売って言うのは、言ってみれば道楽を売り歩く様な物だ」

まあ、金持ちの庭にある畑や水田なんて、道楽で作ったみたいなものだろうけど。

「道楽つてのは他に代替えが出来るから道楽なんだ。兄貴が新興の金持ち相手に商売をしているとなれば、同じ様に金持ち相手の道楽を売るつもりなんだろう。となれば、その内容が違うのは問題じゃあ無い。むしろ、違う趣味を提供された時、片方しか選ばない人種が多いってのが問題なんだ」

つまりリユンの兄が先を越して金持ちに何かを売った場合、こちらの仕事を売り込む事が難しくなると言う事か。

「それって大問題じゃ無いですか！ お兄さんってこの町に住んでるんでしょう？ 昨日今日国に着いたばかりの僕達じゃ圧倒的に不利だ」

よーいどんのスタートどころか、既に何百メートルも引き離された状態の可能性がある。

「アトムさんと言う通りですわ。もしかしたら、目ぼしい相手は、すべて先を越されている可能性もありますの」

そうなれば、この国でまた別の仕事を探す必要がある。それはそれだけ、商売人にとって損な事だろう。

「お前らの言いたい事も分かるが、それでも仕事相手を探さない訳にも行かない。目ぼしい相手は兄貴が先に何かを紹介している可能性は確かにあるが、そうでない可能性もあるからな」

「というかそもそも、お兄さんがどんな商売をしているかまったく知らないのが問題な気がしますけど。いくら似た様な仕事をしているかもしれないとは言え、それが分からなければ、対処も予想もできません」

あまり楽観視はしたくないが、自分達の仕事の邪魔にならない可能性もあるにはあるのだ。

「それも課題の一つだな。親父に聞ければ良いんだが、あの親父、へんな所でフェアな精神を持っているから、そう簡単には教えてくれんだろうし……」

まあ、一筋縄で行かない雰囲気はある。何よりリユンの父親なのだから、そう言った性格なのだろう。

「でしたら仕事を探す役とお兄さんがどの様な商売をしているかを調査する役。二手に分かれて行えば宜しいのでは？」

こちらは一人では無いのだ。やりたい事が複数あるのなら、役割をそれぞれ決めて行動すれば良い。

「それが一番か。どっちも俺が関わりたい所だが、体は一つしか無い……。ああ、なら俺は仕事探したな。そもそも交渉役だ」

確かに、アトムが商売の交渉をしろと言われても、やれる自信が

無い。セイリスならば

上手くできる可能性もあるが、そうなれば商売の方向性を、彼女が教徒をしている純潔教の手に委ねる形となるので、リユンにとっては好ましく無いのだろう。

「なら、僕とセイリスがお兄さんの仕事を調査する役ですか。調査って言われても、何から手を付ければ良いか分からないんですけど……」

しまった。こっちの役も上手くやれる自信が無い。

「それに関しては心当たりがある。一応、この国には商人同士の互助組織があつてな。ちょっと待つてろ」

そう話すと、リユンは手近な紙を取りだし、自分の名前と何か文章を書き始めた。

「この者達の身分を保証する？」

文章はそう書かれている。これが一体何になるのだろうか。

「これを互助組織に見せれば、兄貴の情報を幾らか聞き出せるはずだ」

「この紙をですか？」

怪しい話だ。こんな紙切れ一枚で身分を証明できる組織とやらも「きつとリユンさんも、そのお兄さんも、その互助組織に登録しているのでは？ ですからそのサインだけでこちらの立場を証明できる。そう言った組織では、サインの控えが向こうに置いてあるはずですよ」

心情を表情に出していたからか、セイリスがアイムの疑念を晴らす様に答えてくれた。

「その通りだ。この国で生まれて、商人として生きるとなれば、そう言った組織に入るのは必須なんだよ。入会時にそれ程高くない入会金を払えば、それだけで組織の恩恵に与れるからな。まあその分、互助の範囲はそれ程広くも無いのが問題でもある」

「となれば、お兄さんの情報も、それほど期待できないって事ですね」

組織に力が無い以上、その組織が持つ情報も、それほど多くは無  
いだろう。

「それもその通りだが、まあ何も当てが無いよりはマシだろう。い  
くら情報が無さそうだからって、兄貴が今、どんな商売をしている  
かの触りくらいなら知っているはずだろう」

そうでなければ、商人の互助組織など名乗れまい。とりあえず行  
って見る価値は有りそうだと言う事だ。

「まだその組織のお名前を聞いていませんわ。場所と名前を教えて  
くださいませんか？」

「ああ、場所については地図を書くから、ちょっと待ってる。名前  
については、商人ギルド『道の始まり』とか言うふざけた物が付い  
てる」

随分と詩的な組織なのかもしれない。

商人に限らず、互いを助け合う事を旨とする組織と言うのは、そ  
の性質上町の中心地に本部を置きたがる。

人と人との関係によって成り立つ以上、人が行き会う場所にそれ  
を置くのは当然の事だろうが、どうにも成金趣味の香りがして、ア  
イムは好きでは無かった。

商人ギルド『道の始まり』も、その例に漏れず町の中心地に拠点  
を置いている。アイムが好ましく思わない理由の一つに、そのギル  
ドの事務所が思いの外立派な建築物であると言うのもある。

町の中心と言えば、その土地を選ぶだけでも金銭と権力が必要な  
はずである。リユンの話ではそれ程規模の大きな組織では無いと聞  
くが、それでもそれなりの稼ぎがある様子だ。互助を目的とする組  
織だと言うのに。

そんな事をセイリスに話すと、彼女にはそれが穿った見方だと注  
意された。

「規模が大きくなれば、その組織が外観を良くしようとするのは当  
然ですけど、その逆に、外観を良くすれば、規模が大きくなって



いくと言つ事もありませんわ。助け合いを目的とする組織であれば、規模を大きくする事で、構成員に多くの利益をもたらす事ができます。構成員は参加する商人の方々なのですから、悪い話では無いでしょう?」

そんな話を聞きながら、ギルドの事務所の扉を開く。組織に入つた際の利益が平等であるのならば、文句は無いかもしれない。

「いらつしやいませ、お客様。この度はどの様な目的でお越しになられたのでしょうか?」

係員のにこやかな微笑みに出迎えられたアイムはそんな風にも考えた。別に係員が綺麗な女性であつたからでは決してない。

「このギルドに参加している人の情報が欲しいんですけど」

こつ言つ聞き方で良いのだろうか。少々不安に思うアイム。リュンは交渉事で、事あるごとに遠回しな発言をしていた分、直接的な対応が正しいと思えなくなつてしまつている。

かと言つて頭を使った話と言つのは苦手なので、こつ聞くしか無い。

「申し訳ありませんが、ギルドに加入していらつしやる方以外に、参加者の情報を漏らす事はできません。お客様がギルド参加者であるか、その参加者の関係者であると証明できるのであれば別なのですけれど」

なるほど、ここでリュンの書いたサインが役に立つのか。荷物の中から、多少皺が出来ているが、文字はまだ綺麗に判別できる紙を取り出す。

「えーと、一応参加者の関係者です。この紙に証明が……。こんなので大丈夫ですかね」

本人の名前と一文だけで証明できる物だろうかと一瞬考えたが、考えても仕方の無い事であつた。

「ギルド参加者のサインですね。照合の際、お時間が掛かりますので、そちらにお座りになつてお待ち下さい」

ギルドの係員に、部屋の片隅に並んでいる席へと案内される。ど

うにもサインだけで、個人証明が出来る形になっているらしい。

案内されるまま、席へと座ったアームは、同じく席に座るセイリスに話し掛ける。

「リユンさんの言う通り、名前だけでなんとかなるもんなんだね。こういったシステムって良くある物なの？」

係員は特に戸惑う様子も無く作業を行っている。つまりこのギルドでは軽いサインだけで、参加者だと証明する事が出来るし、本人が居なくても、多少の作業を代行人が行う事が出来る。

「参加者一人一人の顔を覚えるよりは、労力の節約になりますわね。ですけど、いい加減な対応では参加者その物を失う事にも繋がりますから、それはそれで管理を必要とする事ですわ」

つまり、それなりに組織として完成された構造をしていなければ、難しい事であるらしい。

「建物は立派ですけど、そこかしこに年期を感じますの。もしかしたら、随分と歴史有るギルドなのかもしれませんわね」

となれば、そこが保持する情報と言うのも馬鹿には出来ないかもしれぬ。

「お客様、お待たせしました。お客様方は行商人、リユン様の代理人と言う事で宜しいでしょうか」

「あ、はい、そうです」

思いの外早く、係員はサインの照合を終えた様だ。これは仕事が早いのか雑なのか。

「それではお客様、これから一時的にですがギルドの参加者として扱わせていただきます。参加者としての権利はこの事務所を出るまで有効ですので、退出の際にはご注意ください」

なんだか説明が多くなりそうだ。覚えきれんだろうか。

「参加者として、他の参加者の情報を聞きたい場合は、どれくらい開示させていただけるのでしょうか」

一方でセイリスは冷静に話をしている。交渉事などの場では、アームは相変わらず素人同然であった。

「そうですね、お客様はあくまで参加者ご本人の代理と言う形になりますので、ある程度の検閲はご容赦を。参加者の多くは現役の商人が殆どですので、情報の開示には、厳しい審査が必要となります」

そこに関しては、あまり期待していないので、それほど痛手では無い。重要なのは、参加者がどのような仕事を生業としているかを知る事が出来るかだ。

「例えば、現在、参加者がどんな仕事をしているかとか、商売をしているかとかは、やっぱり開示できなかつたりする？」

得に隠す必要も無いので、直接聞いてみる。相手も仕事なのだから、正直に答えてくれるだろう。

「参加者の仕事、内容の開示によって不利益を被らない限りに置いては可能です。多くの場合、商売の内容が認知される毎に商売における利益は増す傾向にあります。ですので、当ギルドからの宣伝と言う形で、それらの情報を伝える事はできます」

何も情報が得られないよりマシである。内容によっては上々の結果になるかもしれない。

「レエンと言う方がこのギルドに登録していると伺っていますわ。その方がどんな商売をなさっているか。こちらで知る事は出来るのでしょうか」

「レエン様……。リユン様の紹介で来られたと言う事は、そのお兄上のレエン様について？」

「ああ、多分そうですね。その、弟の方が今自分の兄がどんな仕事をしているのか知りたいらしくて」

家族相手になら情報を多く漏らしてくれるかもしれないと、リユンとレエンの血縁関係について強調して話す。

それを聞いた係員は、資料を棚から取り出すと、それを丹念に調べ始めた。

「ええっと、レエン様、レエン様。ああ、ありました。この方に関する情報でしたら、ある程度お知らせする事はできますよ。なにせ、

「ご本人様が望んでの事ですので」

「本人が？」

出来るだけ自分がどの様な仕事をしているかを多くの人に知らせたいと言つのは、商売人であるならば有り得る話であるが、こつもあつさりわかるとは驚いた。

「ええ、ギルドにも、自分の情報を知りたい者が居るのであれば、参加者に限らず、知らせても良いと言つ話に通つていますね」

「ならそもそも、わざわざ紙に紹介用の名前を書く必要も無かつたわけだ。参加者で無くても、本人の名前を出せば聞き出せたのだから。」

「ずいぶんと広報熱心と言えば宜しいのかしら。いったいどの様なお仕事を？」

「さつそく、その宣伝内容を聞こうとするセイリス。」

「いわゆる新興の商売と言つ物ですね。個人向けの賭け事に近い話かと」

「賭け？ 商人と言つのは賭け事にまで手を出すのか。いや、まあ確かに賭場を仕切るのも商人かもしれないが。」

「賭け事となれば、それは法に反して居たり、国からの介入があるのが常であると聞いていますわ。それをその方が？ 昨日今日に始められる商売では無いでしょうし、そもそも新興と呼ばれる程歴史は浅くもありませんわ」

「コインの向きが表か裏かだけでも賭け事が出来るのだから、人が知恵を持った瞬間から賭けと言つ物はあるのだろう。それだけに現在は複雑な権利関係や内容に縛られた物であるはずで、新興の商売と言つのは結びつかない話だ。」

「ちなみに、その賭け事を国が法や力で縛ろうとするのは、何も正義感から来る物では無く、原価も無しに莫大な利益を生みかねない商売だからですわと、セイリスに耳打ちされる。」

「ええ、ですから単なる賭け事の類では無く、金銭を担保に、命の保険を賭ける商売であるらしいとの事です」

命に保険とは、レエンと言う商人は神様か何か。普通、金でも命は買えないと言うのが一般常識のはずだ。

「ちよつと想像できないんだけど、そこらへんも説明できたりする？」

でなければ、新手の宗教でも始めたのかと勘繰りたくなる。それはそれで、自分の横に立つ小さな少女には聞き逃せない話だろう。違う宗教同士は喧嘩し合う物だし。

「ええつと、一応、ギルド向けの説明文章もいただいています。なんでも、定期的に金銭を頂き、それを担保にいつ命が失われるかを賭けの対象とするらしいのです」

なんだそれは、随分と物騒な賭けだ。町に闘技場でも建てるつもりなのだろうか。

「ああ、つまり、金銭面での保障を始めたと言う事ですね」

セイリスの方では合点がいったらしい。だがこつちはさっぱりだ。こちらの困惑が上手く伝わってくれたのか、今度はセイリスが説明をはじめめる。

「例えば、アイムさんに養ってらっしゃるご家族か、親しい友人が居たとして、突然アイムさんが亡くなってしまった時はどうなると思います？」

そんな家族も友人も居ないが、あえて想像するのであれば……。

「まあ、路頭に迷うよね。稼ぎ頭が居なくなるんだもん」

「そう、そうなった場合、代わりにこちらが養いますよと言うのが、恐らくリユンさんのお兄様が始めた商売ですわ」

なるほど、賭け金を払う側は自分が命を落とす方に賭けて、商人側は存命する方に賭ける訳だ。もちろん商人側は払い手側を無下には扱えず、むしろその健康に注意する訳だから、そこにはある種の健全さがある。

「でもそれって商売になるのかなあ。結局はお金を貯金する事と何の違いがあるのさ。他人にお金を払う分だけ損な気もするんだけど」

「払った額がそのまま帰ってくる訳では無いから賭け事なのでは？」

例え払った額が少額でも、その保障は多く払った場合と変わらないとなれば興味を持つ方も居ますでしょう？ 特に歴史の浅い財産家の方々であれば、その様な保障に興味を持つはずですよ」

一代で財を築いたのだから、一代の儂さも知っている。そこにそれを保障する商売の売り込みがあれば、確かに喰いつくかもしれない。

「長く生きてさえいれば、商人側はそれだけ自動に金銭を得られるって事か。なんて言うか物ぐさな商売な気もするよね」

「そうでもありませんわ。こう言った事をする場合、ある程度の信頼関係が必要です。わたくしがすぐにどの様な商売であるか予想できたのも、こういった商売が個人間においては良く行われた事からですけど……」

それを商売とする場合、個人間の信頼とは別口の信用が必要になってくる訳か。それを築くのは生半可な努力では勤まるまい。商人としては、その労力を十分に使っているのだろう。

「元手が必要な気もするけど、リユンさんの兄なんだから、あの家の長男って事で財産や利益を継ぐ人なんだよね。そりゃあ、元手になる金銭には困らないか」

むしろ、自身の家が既に独自の商売を行っているからこそその発展的考えかもしれない。

「あ、あのー。お客様？ お客様の話に乱入する様で申し訳無いのですが、当ギルドでお話できる情報は、今、お客様が話した物がすべてになるのですが……」

突如、話に入ってきた係員によって話は中断される。だが、それに対する文句は無い。

知りたかった情報、まだ見ぬリユンの兄、レエンが始めた商売は、つまりそついう物だと判明したからだ。

これ以上の情報を集めるのは困難である。と言うより、アテが無い。なので、一度リユンの家に戻る事にしたアイルムとセイリス。リ

ユンに知り得た情報を伝えなければならぬと言つ義務もあつた。

屋敷に戻り、使用人のシルから熱烈な出迎えを受ける。見た目の通りの年齢ならば、随分と年齢をめているだろうに。どこからその元気があるのやら。そう言えば、リユンも押され気味であつた。

「リユン坊ちゃんの仕事を手伝つて町で出ていたんでしよう？ まつたくリユン坊ちゃんは。お友達にそんな仕事をさせて置いて、自分はノコノコと先に屋敷へ戻ってくるんですから。お恥ずかしい話でねえ」

どうにもリユンは既に屋敷へと帰つてきているらしい。この国での仕事探しに出かけた以上、良い返事があればと考えるが。

「親父の紹介であつた資産家、全員が既に兄貴に先回りされてやがる。わからないのが、どんな口車に乗せられて俺達の仕事を断らせてるかだ。農業を始めないかと話を勧めると、誰も彼もが間に合つてると返してくる」

アイムの部屋に入るなり、そんな愚痴を聞かされる。こんな態度のリユンは珍しく、それほど絶望的なまでに空振りだったのだろう。今回のライバルは強敵だ。

「こつちはお兄さんと仕事について、ある程度知る事ができましたよ。隠してるつもりも無いんでしょうけどね」

リユンの兄が始めた仕事について話す。こちらの話を聞いている内に、リユンの苛立ちは消えて行った様で、話が終わった後は、あのニヤついた表情を見せ始めた。

「なるほどねえ。あの兄貴が考えそうな話だ。元手があるなら、それを利用しない手は無いつてのは良く聞かされた話だ」

つまり、リユンの兄は別にこつちの仕事を邪魔する訳でも無ければ、突発的に仕事をし始めた訳でも無く、堅実に生命の保険と言つ仕事を始めたと言つ事か。

「でしたら、お兄様はかなり強敵な気がしますわ。形としては、むしろ、こちら側が茶々を入れる事になりますし」

商売における新参者はこちらなのだろつ。

「でも農業とその保険商売って競合し合う物なんですかね。まるつきり違う話な気がしますけど」

「金持ちに金をどう使わせるかって話なら同じさ。前にも言ったが、道楽を二つも三つも選ぶのは、金持ちの中でも少数で……。ふむ。そういった点を狙うのも手が……」

なにやら思いついたらしい。リユンは手で口を塞ぎ、尚口をもごもごとさせている。頭で考え事をするなら、口で話す必要とはなんだろうか。

「結局、この国で僕らはどんな仕事を見つけて、どんな商売を展開すれば良いのやら」

これまでは、直ぐに見つかるか、巻き込まれるかの二択だっただけに、仕事探しの段階で躓くのは初めてだ。

「新興の資産家や財産家を狙うのは諦めた方が良さげだな。親父の知り合いは、だいたい兄貴の手が回っているだろうし、それ以外はそもそもコネが無い。となれば、昔からこの国で金持ちしてる連中に狙いを絞るしか無い」

「でも、その様な方々は、金銭面での払いが悪いと仰っていませんでしたか？」

金銭の使い方を知っている人々なのだから、その視線も厳しいだろう。

「この際、安易な金儲けの道は諦める。それよりこの国での商業圏をこじ開ける事に専念する。向かうはずの道が閉ざされたのなら、それをこじ開けるより、別の道を見つucker事が懸命な場合だってあるだろう」

なんととっても商売敵は強敵なのだ。その選択も有りと言えは有りか。

「じゃあ、ウォルドさんにまた仕事相手を紹介して貰うと」

「それも駄目だ。いくら古参の商人を相手にすると言っても、親父の知り合いなら兄貴が売り込みをしていないとも限らない」

商売なのだから、誰彼問わず相手を探すのはそれはそれで有り得



る話だ。

「じゃあ、どうするんですか。まさか、まだ他にこの国でアテがあるって言うんですか？」

「そのまさかだ。俺が商人として独り立ちする前、後見人と言うか、責任者と言うか、商売のイロハを教えて貰った人がいる。元々はギルドに初登録する時、紹介された人なんだがな。あのギルドってのは新人の商人に経験を積ませるためにそんな事をしている」

なるほど、ギルド『道の始まり』と言う名前も看板だけでは無いらしい。新人教育に力を入れているからその名前なのか。

「その方にはお兄様の手も回って居ない？」

「そのはずだ。そうであって欲しい。直接な繋がりはないはずだが、同じ国の中じゃあ、どこで知り合うか分かったもんじゃ無いからな」

こちらも要するに早い者勝ちのかけっこ勝負だ。だが、今回ばかりは何としてもこちらが勝ちたい話であった。

### 七つ目には故郷へ(3)

古くからこの国で商人をしている家は、当然屋敷も町の中心近くにある。と言うよりも、そう言った人種が集まったから、そこに町が出来たと言った方が正しい。

町に商人が居るのでは無く、商人が町を作ったのである。ではどの様な商人が作った町なのかと言えば、建築関係の商人が多いそうだ。

「資材調達に屋敷の設計、建築。大工の派遣。屋敷のデザインだけで稼いでる奴も居たか。まあとにかく、この国で真つ先に商売を始めたのはそう言った奴等だよ」

この国では大きな屋敷を建築する者は多いと聞いている。それはさぞ儲かる事だろう。

「でも、それって順番が逆じゃ無いですか？ 大きな屋敷を建てたかと思ってる人が居るから、それを商売にできるんですから、まず最初に商人として成功する人は、それ以外の商人のはずですよ」

需要の無い土地にいきなり建築関係の商人が入ったところで、誰に売り込むと言うのか。

「それはそうなんだが……。まあ、この国ではそんな商売を始めたら、どこからか、すぐに頼んでくる奴が多かったそうだ。これはもう国民の趣味嗜好の問題だな」

不思議な話だ。商売の成功云々よりも屋敷建築の方が重要と言っているみたいで、頭が混乱してくる。

「これから伺う知り合いの商人さんも、その様なお仕事をしたらっしやいますの？」

「まあな、具体的に何かと言われれば、全部だつて言えるくらいに幅広くやつてる。この国の商人の中では古参の内に入るくらいの家柄だつたはずだ」

それはまた随分と偉い人の様だ。いや、商人に順列を付けるのも

どうかと思うが。

「それで、町の中心地のどの辺がその人の屋敷なんですか？ やっぱりそれだけ昔から商売をしているんですから、結構な大きさなんでしょうけど」

町を中心に向かつて暫く歩いているので、あとどれくらいか気になる。リユンの自宅の様に、見ただけで驚ける物かもしれないから、心の準備も必要だ。

「屋敷自体はまだ先だが、その人の領域と言う意味では、もう玄関口は通っているな」

言っている意味がわからない。自分達は町の中を歩いているだけであり、どこかの扉を通った訳では無いのだから。

「わからないか？ この町の中心部。その北西方面になるが、その部分の町すべてはその人の所有物なんだ」

「はい？ どういう事ですかそれ」

それはつまり町の一部を個人が所有していると言う事だ。王様の類がする事であり、商人がする事では無い。

「どういう事も、ありあまる資材と資金を使って、その人は町を作ったんだよ。自分だけの町をな。その後、住民がその一部を借り受けて住んだり働いたりしている。この町は古参の商人が作った者だつて言つたらる？」

商人が商売を始めたから、その周りに人が住み始めたを受け取っていたのであり、まさか町を作つてから人が集まり始めたなどと、考えては居なかった。

「それって、これから会う人は凄く偉いつて事になりませんか？」

「そうだな、凄く偉い。住民からは尊敬されてすら居る。そういう家だよ。だが気軽に会えない訳でも無い。俺はギルドからその人を紹介されたが、他にも同じような立場の奴がたくさん居た。そんな奴等全員の面倒を見てくれていたんだから、良い人でもある」

懐かしむように話すリユン。その様子を見れば、昔お世話になったと言う話は、紛れも無く本当の事であると分かる

「それでしたらわたくし達の仕事も、ある程度の便宜を図ってくれ  
そうですわね」

一安心と言った表情を見せるセイリス。ただそんな彼女の心に、  
この町の重要人物とのコネを、純潔教との間に作れるのでは無いか  
と言う打算が無いとも限らない。

「ある程度はな、でもあんまり大きな支援は期待できないだろうな  
あ。世話になっっている人が多い分、その対応も公平だ。……お、着  
いたぞ」

リユンが足を止める。そこには確かに大きな屋敷があった。しか  
し、その大きさは、リユンの自宅や、他の屋敷よりも大きいと言う  
程では無い。むしろまだ小さい方だ。

いや、この国に来てから感覚が可笑しくなったのか。この町に来  
る前の感覚であれば、これでも十分驚きに値する屋敷であるはずだ。  
「それでも町を作った商人の家としたら、まだ小ぢんまりとしてる  
方なんですかね」

それこそ、王様が住むお城を想像していただけに、肩透かしを食  
らった様な気分になる。

「そうだな、この部屋はまだ小さい方だ」

部屋？ どう見ても屋敷だろうに。何を言っているのだ。

「もしかしてですけどね、このお屋敷は、その商人の方にとって応  
接室の様な物と言う事はございませんわよね」

恐る恐るセイリスがリユンに尋ねる。

「その通りだ。この部屋は普段、客を持って成す場所として使われて  
いる。その商人に対する応対も、ここで予約し、本人が別の屋敷か  
ら来るのを待つと言うシステムだな。他のも寝室用、事務用、食事  
用など、それぞれの部屋が町中に建築されている」

まさしく、町が屋敷その物と言う事か。スケールの違いに眩暈が  
してくるアイムであった。

屋敷のベルを鳴らすと、玄関から現れたのは黒い紳士服を着た老

人だった。

「これはこれは、リユン殿ではないですか。お久しぶりです。当屋敷に何か御用ですかな」

丁寧にお辞儀をしながら老人はリユンを見て話す。リユンの顔が広いのか、それとも老人の記憶が良いのか。

老人を最初は屋敷の主かと思つたが、雰囲気がどちらかと言えば使用人であつた。恐らく、リユンの自宅に居たシイルさんの様な立場であろう。

「ああ、久しぶりシャイアルさん。カズウエルの旦那に会いたいんだが、今日は難しいか？ 無理だとしても、代理人には会いたい」  
リユンが使用人、シャイアルに向かつて話す。カズウエルと言うと言うのが、これから会おうとしている商人の名前であつた。

カズウエル氏はこの町を作つた古参の商人から数えて三代目の商人で、自身の商業圏を広げるより、傘下に近い商人を多く輩出する事に力を入れている人らしい。昔、世話になつたと言うリユンも、その参加の一人なのかもしれない。

「旦那様ですか。随分とお急ぎの様ですな。屋敷にお入りになつてお待ちください。旦那様に連絡してみましよう」

「ありがとうございます。シャイアルさん。こいつらも一緒に構わないかな。仕事仲間なんだ」

リユンはこちらに視線を向ける。ああそうか、リユンはカズウエルと言う商人と知り合いだ、こちらはまったくの無関係なのだ、気軽に会つのは難しいかもしれない。

「構いませんよ。リユン殿は旦那様のお気に入りですからな」

思つたよりも簡単に許可が下りた。カズウエルと言う商人は、もしかしたら心の広い人物なのだろうか。

そしてそれよりも気になる事が一つあつた。

「お気に入り？」

カズウエル氏のお気に入りと言う事は、リユンは案外凄い人物なのかもしれない。

「そのお気に入りって、確か百人以上居るって話だったよな」  
またかと言った顔をして、リユンはシャイアルを見る。

「旦那様がお会いになる方は、旦那様自身が気に入った方に限られますからな、結果的にそうなってしまいます」

「なんだ、リユンが特別凄い訳では無いか。期待して損をした。  
結局、わたくし達はカズウェルさんにお会いする事ができるのでしょうか」

玄関口で長話をしているも、本人に会えなければ意味が無い。セイリスの心配ももつともである。

「それは調べて見なければわかりませんな。旦那様にお会いしたいと仰る方は日々多い。それでも、なんとか善処してみましよう」

シャイアルはそう言って優しく微笑み、アイム達を屋敷の中へと案内するのであった。

屋敷に来てから随分立つ。待合室には本や様々なテーブルゲーム用の道具が置かれているので、目当ての人物に会うまで時間が掛かるであろう事は予想していたが、暇な物は暇である。

「本当に今日中に会えるんですかね。このままじゃあこの部屋にあるゲーム、一通りやつちやいますよ」

自分の手に持つカードを見ながら、アイムは嘆く。ちなみに今やっているゲームは大富豪である。

大富豪の屋敷で大富豪をすると言うのも、皮肉が効いて面白いと言っリユンに乗せられて始めたゲームである。

「あら、トランプゲームの種類はたくさんありますのよ。一日ですべてをするなんて不可能ですわ」

そういう事では無い。そういう意味でも無い。こんなところで一日カードゲームをし続ける事が苦痛になりそうだから話したのだ。

「これに関しては運だからなあ。それこそ、相手に気に入られているからどうかで、どれだけ早く会えるから決まる。この部屋には俺達だけが、多分、他の部屋にも待っている奴が居るだろうさ」

この屋敷自体が待合室として機能していると言う事か。今、アイム達が居る部屋自体も非常に大きく、一部屋一部屋に人を待たせていると言うのは、非常に贅沢な事では無いかと感じるアイムであった。

他の二人は苛立ったり、落ち着かない気分にならないのだろうか。と気にするが、セイリスはマイペースだし、リユンは待たされ続けていると言うのに、どこか居心地が良さそうだ。

「しかし、こういうゲームも罪だねえ。現実はこつもあつさり大富豪になれたりはしないのに」

突然、見知らぬ人物の声が聞こえて来ると同時に、アイムは後ろから自分の手札を奪われた。

せつかく良い手札が揃って居たと言うのに。

「そりゃそうだが、貧民になるのはゲームよりも簡単なんだから、バランスが取れて居て良いだろ」

リユンは特に驚いた様子も無く、アイムの後ろにいつの間にか立っていたその人物と話しを続ける。

いちいち虚を突いたりそれに平然と返すのは商人の基本的姿勢なのだろうか。

自分と同じく驚いた表情をしているセイリスを見て、自分の感覚が可笑しい訳では無い事を確認してホツとするアイム。

「まったくだ。だからゲームと言うのは、本来は罪の無い物なんだよ」

後ろを振り向くと、高身長かつ整ったガラス細工の様な顔立ちをした青年が微笑んでいる。キザっぽいと表現しても良い。その言葉を意味が分からないし。

とりあえず、第一印象でアイムは彼の事が嫌いであると判断した。「お前が来たって事は、カズウェルさんは来れないのか……」

残念そうにリユンは嘆く。世話になったと言う以上、恩人でもあったのだから。それが簡単に顔を合わす事が出来ない相手だと、なんだか少し寂しい気もする。

「その通り。だから代理人として、彼の息子である僕が来た訳さ」  
いちいち身振り手振りを大袈裟にして話を続けている。ちなみに今は胸に左手を置き、もう片腕は大きく広げている。疲れないのだろうか。

「あの、この町の住人であればその言葉だけで判断できるのでしようけど、わたくし達は外来人ですので、失礼ながら貴方の事を良く知りませんの。説明していただけると嬉しいのですが……」

おずおずとセイリスが謎の人物に声を掛ける。彼女を見ると、明らかに怯えている様だ。

「おおっと、こちらこそ失礼、お嬢さん。僕の名前はラッツ。この屋敷の主人、カズウエルの息子件代理人だ」

そう自己紹介をしつつ、セイリスの手の甲を優しく掴み、そこにキスしようとする。本当にいちいち恰好を付けないと生きて行けない人種なのだろう。

しかしその背の高さから、低身長であるセイリスの手にキスしようとするには腰を大きく曲げねばならず、苦勞をして居る様だ。

セイリスもセイリスで心なしか手の位置を低く置こうとしているいや、どう考えても、ラッツと言う人物に対する嫌がらせをするつもりだ。彼女も大概良い性格をしている。

「痛快ですね」

思わず、心の中に仕舞って置くはずの言葉が口に出てしまった。

まあ、前後の言葉が出ておらず、周りはその意味を理解していないから構わない。

「おや、君もリユンの知り合いかい？ 彼は随分と難しい性格をしているから、そう何人も仕事仲間が居るとは思えないんだが」

まったくもって同意だ。彼の性格の悪さは随一で、それに付き合う自分やセイリスは、それはもう変わった性格をしているとの自覚がある。

「仕事仲間が二人って言うのは、そう多い方じゃ無いですから別に可笑しくは無いんじゃないですかね」



これ以上、増えると言う事も想像できない。世の中に、物好きな人と言うのは少ないはずだ。

「ふむ。もつともな意見だね。君は良い指摘をするな」

なにやら感心している様だが、褒められても褒める相手が相手だけに嬉しくもなんと無い。

「人の性格をあだこうだ言う前に話を進めてくれ、頼むから。ラツツ、お前が代理人だって言うんなら、それでも良い。まあ、本人が来てくれれば一番良かったが仕方ない」

「本人で無くても、血の繋がった親族が来ると言うのはなかなか破格だよ、リユン。シャイアルに感謝すべきだ。君を一番気に入っているのは彼なんだからさ」

リユンの過去はどうだったのかを気にした事が無いが、こうまで人を置いてけ堀にして話をするのは頂けない。

「結局、仕事の話を聞いてくれるんですか？ 聞いてくれないんですか？」

「そうだね、こういう場では目上の者が直接あっただけでそっちの勝ちなのさ。目上の者が何故そうなのかって言えば、下の者の願いを聞いているからだ。そうしなければ、偉くはなれないと言った方が良いかな」

金持ちは気苦労が多いと言いたいのだろうが、話が遠回し過ぎて理解は困難だ。こっちはさっさと話を進めて欲しいのに。

「でしたら、わたくし達のお願いも聞いて下さると言う事ですわね」手を合わせて喜ぶセイリス。

「その通りだ、可愛いお嬢さん」

「でしたら、さっそく雇って頂きたいので、報酬をくださいませんか？」

セイリスの願いは直球過ぎるが、願いを聞くと言った以上、どう断るのだろうか、この青年は。

「い、いや、そう言った言葉は、まず話を進めてから出てくる言葉だろうか？ まずは会話をすべきだと僕は思うね」

自分が話を止めていた癖に良く言う。だが反論としては常識的な範疇だ。案外、言動の奇抜さは平凡な自分を覆い隠すためかもしれない。

「なら仕事の話始めるぞ。ラッツ、お前でもカズウエルさんでも良いが、老後の娯楽に飢えていたりしないか？」

リユンはようやく機会が来たと言った風に、今まで座っていた椅子から立ち上がると、商談に入っていく。

「老後の娯楽って、君と同年代の僕に向かってそんな物売り込む気かい？ もちろん父上だって年齢的にはまだまだ現役だ、そう言った物を欲しがるには時期が早いと思うんだがね」

自分の足で娯楽を探せる人に、娯楽を売り込むのは難しいと言う事か。しかも売り込まれた娯楽が老後の楽しみであればなおさらだ。ところで農業で老後を楽しむと言うのは、些か無理があるのでは無いだろうか。体力仕事だぞ。

「なら、そんな物を欲しがっている人物を紹介して欲しい。とにかく早くだ。兄貴の先を越したい」

じつとラッツを見て話すリユン。兄貴と言う言葉は力の籠り様が違っている。それほどリユンにとって重要な事なのだろうか。

「兄貴、レエン氏の事か。聞いてるよりリユン、彼はなかなか面白い仕事を始めているってね。今までは歴史の浅い家にそれを売っているが、これからはそれ以外にも売り込みを始めそうだって言う噂もね」

なんと、もう既にライバルは真後ろまで来ていると言うのか。だが後ろである以上、まだ自分達が先行している。

「だから早く商売相手の情報が欲しいんだ。なんとしても。頼めるか？」

「ふむ。焦っているじゃないか、君らしくない。まあ、そこまで言うなら仕方ないと、言いたいところなんだけどね」

またもや勿体ぶった話し方をする。願いを聞いてくれるのか聞いてくれないのか、はつきりとして欲しいと頼むのも、やはり願い事

か？

「僕らは商人だ。例え知人でも、無償で物事を肯定していると自身の評判が落ちる。不思議な事にね」

普通、そういった人物は尊敬されると思うのだが、商人であれば、その前に商いが出来るかどうかが価値の基準なのだろう。

「つまり情報を教える前に対価をよこせて事か。なんだ、こつちに払える物でなければ、その提案は無意味と同じだぞ」

リユンの口が歪んでくる。あのニヤつきを抑えているのだろう。つくづくこういった交渉が好きな人物である。

「もちろん、無意味な言葉は口に出さないつもりさ」

どの口がそれを言うのか。先ほどまでの会話に意味があったとは思えない。

「僕が望むのは信用だね。君が始めた仕事は、壮大な詐欺行為では無いと言う保証もこちらには無い。もちろん、君はそんな事はしないと僕自身は知っているよ。でも商売である以上、僕らは知人同士では無く商人同士であるべきだ」

今この場では、商人として自らを売り込む事から始めると言っているのか。

「それで？ その保証とやらを商人としての俺が得るためには、いったい何を差し出せば良い？」

もうニヤつきを隠す素振りすら見せなくなったりユン。その姿を平然と見つめるラッツと言う人物も相当な物だ。

この二人、実は凄く仲が良いのではないだろうか。

「今、君が僕の家を通して売り込もうとしている仕事で、僕を満足させてくれ。それが対価だ」

「ほう。ついさっき、自分達はそんな物必要無いと言ったばかりじゃなかったか？」

たしか、老人に対する娯楽は自分には必要無いと言ったばかりである。

まあアイム達が売り込む農業知識に関して言えば、一概にそう言

った物とは言えないが、それでも必要ないと答えた物で、自身を満足させると言うのは無茶である。

「悪い話じゃあ無いだろう？ 君たちはこの町の資産家に自分達を売り込みたい。そして僕はこの町で一、二を争う資産家の代理人だ。渡りに船だと言って貰いたいね」

非常に挑発的な発言だが、あくまで自身を代理人として扱うラツツ。心中では冷静そのものに違い無い。

「で、その船は無償で乗れる代物なのか？」

つまり本当にそれは、こちらにとって得な事であるのかどうかと言う事だ。選択や判断を誤れば、どの様な損を被る事になるやら。

「そうだねえ。例えば君たちの仕事が、僕を満足させるに値しない物だった場合、それまでに掛かった経費はすべてそちら持ち。なんてのはどうだろう」

この場合、アイム達がする仕事とは、彼の土地に農業が可能となる場所と道具、そして知識を与える事である。そうする事で、漸くこちらの仕事は完了するのだ。

当然、知識以外は有料である。金銭が掛かる場合もあれば、労力も必要とする。そして、それらがすべてこちら持ちになってしまうば、明日の食事すら困難に成りかねない。

特に問題なのが、道具を用意する事だ。すべての費用がこちら持ちと言っても、場所自体は向こうが用意するだろう。しかし道具に關しては、こちらが調達しなければならぬ。

そもそもが知識を売る事のみを商売としているのだ。道具は商売相手に用意して貰う事が前提である。

「それって、こちらに商売をさせるだけさせて置いて、後からどんな出来だろうと、満足できないと突っ撥ねるつもりじゃ無いでしょうね」

後はこの様な裏が無いのかどうかも問題だ。どれだけ仕事を上手く出来たとしても、商売相手が最初から商売を失敗させるつもりであれば、すべての損害をこちらが被る事になる。

「そんな事をすればこちらの評判はガタ落ちだろうね。さつきも言ったが、こっちは評判によって今の立場に立っているから、それについては信用してくれても良いよ。それと、こちらがその商売によって出る利益を、持ち逃げする心配も無いから安心してくれ、何故かと言えば、わかるだろう?」

要するに、その利益を持ち逃げしたくなる程、こちらの仕事に満足したと言っただけだから、経費はこちら持ちで無く、あちら持ちになるのだ。

「どちらかと言えば、対等取引するための対価って所って訳か。それだけ町を牛耳る大富豪と、単なる旅商人の俺達には差があると言っても言いたいのか?」

少しの怒りが感じられる言葉だが、リユンはとても嬉しそうな顔をしている。

「それを言うなら、むしろ破格の待遇なんじゃ無いかな。本来なら取引にすらならない二者だろう?」

返すラッツも楽しそうだ。絵だけを見れば、なんとも和やかな風景である。

「あー、で、お前等はどうしたい? 俺の意見については聞く必要も無いだろう?」

アイルムとセイリスを見て、そんな事を言うリユン。彼の意見については、当然この仕事を受けるつもりであろう。売られた喧嘩を買わない彼では無い。

ならばセイリスはどうか。

「これまで、それ程のリスクも無く商売をしていた気がしますの。でしたら、こういった場所でリスクを背負うのも悪くはありませんわ」

セイリスも賛成である。それにしても、今までリスク無しの商売だったと言っただけで、本当にそうだろうか。命の危険があった事もあった様な……。

「それでアイルム、お前はどうかんだ」

後はこつちの意見を聞くだけか。三人の内二人が賛成しているのだが、もう賛成で決定で良いのに。

「もちろん僕も賛成ですよ。結局、売るのは農業知識でしょう？つまりその人を満足させるには僕の知識が必要って事になります。面白いじゃ無いですか。一農家として、やる気が出てきましたよ」

「一から十まで農家と言う物を教え込んでやる。そして農業抜きには生きて行けぬ体にしてくれるわ。」

「契約成立って事で良いみたいだね。さっそく始めようと言いたい所だが、君たちは肝心な事を忘れてる」

「肝心な事？ なんだろうか。荷物にはちゃんと鍬が入っている。忘れてなど居るものか。」

「……？」

結局分からず、ラッツの顔を見るだけで終わる。そんな姿のアイムを見て、溜息を吐きながらラッツは答えた。

「君たちの仕事内容だよ。なんで真っ先にそれを言わないかなあ。農業だのなんだのと、知りもしない仕事を、はいそうですかと受ける身にもなって欲しいんだが」

「ああ、そう言えばラッツには、こちらがどんな商売をしているか、まだ話していなかったっけ。」

## 七つ目には故郷へ(4)

大きなキャンバスに好きな絵を描いても良い。子供であればその言葉に大喜びするだろう。言われた者が芸術家であればそれもまた喜びの感情を現すかもしれない。

しかし残念な事にアイムは子供でも無ければ芸術家でも無い。ただのしがない旅をする農家である訳で、白い紙と色とりどりの絵の具を見れば、そこには戸惑いを感じるしかなかった。

しかも絵を描いた後は、その絵を評価し、評価が低ければ紙と絵の具代を請求すると言われれば、戸惑いどころか抵抗すら感じてしまう。

「丁度今、そんな感じだよ」

周りには誰も居ない。見えるのはどこにでも居る地霊と、何も無い大きな土地であった。とある屋敷の庭として存在しているこの土地は、手入れがされていないと言えはそうでは無く、その広さに反して雑草などは数える程しか生えておらず、土もすっかりと整地されている。

だがそれだけだ。この土を耕したり、花で飾るなどの工夫はされておらず、ただそこに地面があるだけなのだ。

それもそのはず、この庭がある屋敷自体、今は人が住んでおらず、景觀を汚さない様に清掃整備された場所である。必要以上の飾りつけはされていない。立派なのは木造作りの屋敷のみである。

平野が広がるこの土地で、木造建築とはそれだけ贅沢な代物であるが、庭が殺風景なせいも、あまり立派に見えない。

「元々は我が家の貸家だね。富豪ほどの財産は無いが、貧乏と言うには小金を持ち過ぎている人物を対象に貸していた。ところがこの屋敷を長く借りていた下宿人が、この度天寿を全うされたんで、一軒家として売り出そうと言う事になったのさ。君にはその付加価値として、庭にでも面白い手の気が引ける物を作ってくれないかな」

自分の依頼主となったラッツは確かそう言っていた。町の中心部に程よく近いこの屋敷を、貸家として扱うのは少々非難があったらしく、その都合が付いたのを切欠に売家として扱う様になった。

実際、今もこの屋敷を買いたいと言う者は多いらしく、アイムが庭弄りなどしなくても、買い手は必要以上にあるだろうと思うが、そこは商売人、屋敷の価値を上げる事で、さらに高値で買いたいと言う者を探すつもりらしい。

「と言っても、どうすれば良いのやら」

地面の土を指で摘み、少し捏ねてみる。別にこれで土壤の質がわかる訳では無いのだが、悪く無い土地であると言うのだけは理解できた。

地霊の数だって少なくは無い。何か植物を育てようとするれば、まあだいたいの物は育つだろうと言った土地である。だからこそ、どうすれば良いのか悩む。

「迂闊な事をして、台無しにしちゃうのも嫌だしなあ。かと言って、買い手も決まっていけない段階で、自分色に染めるのも駄目だろうし」

そんな事をすれば、商売人失格と、依頼は不成功で終わり、報酬が無いどころか、それまでに掛かった経費まで請求され兼ねない。

相談する相手でも居れば多少はマシなのだろうが、リユンとセイリスは別行動をしている。いつも通りの情報収集である。この屋敷を買いたいと言う人物が、どのような傾向で存在しているのか。一般的な資産家の趣向。そう言った物があれば参考になるかもと言ったアイムの言葉に、素早く対応して町の中へと二人は消えて行った。

二人の事だから何がしかの情報は持つて帰ってくるだろうが、それでも寂しいアイムであった。

「まあ、考えたって仕方無いか。何はともあれ土弄りからだろうね。畑にするのも花畑にするのも、良い土壌が必要だ」

そのためには土を耕す事から始めなければ。久々に荷物から鍬を取り出すと、なんだかやる気が出てきた。

期間は三週間程与えられている。植物がそれで十分に育つ訳は無



いが、そこは商売の町、既に育った植物を植えて飾り付ければ、それだけで展示と庭をどう扱うかの説明を兼ねているのだと理解してくれるそうだ。

つまり庭を耕しさえすれば、後は労力があまり必要無い仕事が残るだけとなる。そして幾ら大きいとは言え屋敷の庭、ランドフアーマーであれば一日でそれを終えるのは容易い。

一方でリユンとセイリスは町中をアテも無く歩いていた。いや、リユンは何か目的があって歩いているのだろうが、セイリスはそれを知らない。だからセイリスにとっては本当にアテの無い散歩と言える。

なんだから遣る瀬無い気分になり、つい前を歩くリユンに疑問をぶつけてしまう。

「薄々感じていた事ですけど、わたくしだけ得に目立った役割が無いと思いますの」

仕事探しと交渉がリユンの役割で、直接仕事をするのがアイムだ。その中でセイリスがする役目と言うのは中々少ない。

セイリスの考えを知ってか知らずか、リユンはこちらを振り向くと、軽い口調で答えてくる。

「そりゃあまあ、途中参加だし仕事に自分の宗教の利益を持ち込んでくるし？ 仕方ないんじゃないか？」

少々気分が落ちた状態での会話だったが、リユンの答えは落ちた気分を持ち上げてくれた。主に怒りの方へ。

「そういう言い方は無いと思いますわ。わたくしだって、リユンさん達と旅をしてから暫くになりますもの、少しくらい仲間意識を感じて下さっても宜しいじゃないですか」

そんな言葉を口に出してから気付く。リユンがこの様な話し方をするのはいつもの事である。だと言うのに、これでは慰めの言葉を期待していた様では無いか。

「冗談だよ、冗談」

リユンは笑いながら、セイリスの感情が落ち着くのを待った。別に彼女に対して仲間意識が無い訳でも無いのだ。

彼女との付き合いで言えば、もう一人の仕事仲間であるアイムと実はそれ程変わらない。彼女の背景がどうであれ、仲間と思わないでいられる期間はとくに過ぎていた。

「それにな、そう考えているのはキミだけでも無いだろう？」

「どう言う事ですか？」

セイリスは首を傾げる。リユンは軽い口調のままだが、そんな口調で重要な話を話す時があるのが彼だ。

「俺なんかがいなくても、キミやアイムは生活出来てたんだ。でも俺が自分で利益を得るには誰かに手伝って貰うしか無い。ほら見ろ、俺だけ仲間外れだ」

時々、詐欺まがいの行動で他人を巻き込んでしまったんじゃないかと思う時もあるし、それもある部分は事実であろう。だからと言って、後悔しているつもりは無い。ただ、なんだか嫌な気分になるのは事実である。

「だが、俺達がそんな事を考えているんだ。アイムだって似た様を考えているだろうさ。自分は仕事を持つてくる側じゃないから、俺達がいなくてもあ役立たずなんじゃあ無いかなんて悩んでたりな」

「けどそんな思考は長く続かない。なんだかんだでこの旅が楽しいからだ。セイリスだってそうだろう。ただちょっと憂鬱な気持ちだが、偶然言葉に出ただけに過ぎない。旅を続けて居れば、そういう事も多々あるものだ。」

「結局は、深く考えたって仕方の無い事ですか？ でも可笑しい気持ちになっちゃってしまふのは確かですわ」

「そうか？ その気分だって、今から向かう場所を知らなければなんとなく晴れるんじゃないか？ 仕事先を見つければ、うだうだ考えて居ても仕方ないと思えてしまふのが俺達だ」

そう言ってリユンは前に向き直り、再び歩き出した。

「ちなみに向かう場所は、俺が仕事を持ちかけて断られた連中だ。」

雇っては貰えなかったが、ちょっとした情報くらいなら漏らしてくれるだろ。けどまあ、兄貴に先を越されている事をもう一度痛感しなきゃあならないってのは、そっちの方が憂鬱になりそうだし」  
ため息の一つでも吐こうとも思うが、やはり仕事だからとリユンはそれを飲み込んだ。

日が暮れる頃に三人は合流した。場所はアイムが耕していた庭を敷地に持つ屋敷である。持ち手もまだ居ないので、当面の拠点に使っても良いとお達しがあったのである。

その屋敷の一室にて、今後を決める相談を続けるアイム達であるが、仕事について進展があったかと言えば、あつたとも言えるし、無かつたとも言える。

アイムは任せられた庭を植物が育て易い土壌へ出来る限り変えてみたが、やった事と言えば、自慢の鍬と手と足で、地面を柔くするくらいであつた。空気を多く含ませる事で、植物が根を伸ばし易い土壌を作ると言うのは、土作りを行う上で真つ先にしなければならぬ事である。ただ、まあそれだけの事であるとも言える。誰だつてする事をしたとしても、それでは商売にならないのだ。

植えて育てる何かを決めない限り、仕事とは言えない。

「そんな事だろうとは思つたがな。自由に何かをして良いと言われ、自由に出来る奴じゃないもんなお前」

憎まれ口を減らすことの無いリユンであるが、その言葉に落胆は混じっていない。言う通り、アイムが出来る事を予想していたからだ。

では情報収集組はと言えば、情報を集めるには集めたが、玉石混交として何が役に立つかが分からない。それでは、方向性を決めたアイムにとってみれば、状況が殆ど変わらないのである。

「なんですかこの、最近お金持ちの間ではサボテンを育てるのが流行ってるって言う情報は。多肉植物なんて育てて何が楽しいんですか」

アイムはあの不気味に分厚い葉を持つ植物を思い浮かべる。ああいった物をアイムは嫌っている。見た目がまず受け付けられないし、そもそも育てるのにあまり手が掛からないと言うのも、アイムの琴線に触れてしまうのだ。

「へえ、良く知ってるな。俺はアレがサボテンなんて名前だと言うのも知らなかったよ。初めて見た時は、植物がとうとう自分達を酷使用する奴等に反逆を始めたのかと思ったが」

結局、リユンもその情報は役に立たないと判断しているでは無いか。じゃあなんで今後を決める情報の中に、そんな物が混じっているのか。

「あら、可愛らしいじゃありませんか。あのふっくらとしていて、かと思えば刺々しい一面も持っている。庭一面に育てば、それは素晴らしい景観になると思えますの」

どうやらセイリスが持ち込んだ情報であるらしい。完全に彼女の趣向が混じっている。

「ダメダメ、そんな一般受けしないのは文字通り受けない。そりゃあマニアは居るだろうけど、そう言う物を求められてる訳でも無い。屋敷を買うのは資産家でしょ？ だったら、らしい物じゃ無いと」

奇をてらうのも商売の一つだが、それにはまず普遍的な物を導入してからの事だ。最初から明後日の方向を目指せば、行きつく先は山か奈落なのだ。

「らしい物ねえ。そう言った物は、だいたい既に存在する物って事だろ？ それこそ商売になるのか？」

「うーん。それもそうですけど、サボテンを育てるより、こっちのブドウ栽培なんかは好みかな。らしい物でもあるし」

庭で甘い果物を育てる資産家と言えば、らしい姿に見えなくも無い。ブドウと言えば、蔦を伸ばす植物でもあるので、庭の飾りつけとしても使えたりする。

「ちよつとした手間で育てられるとも聞きますわ。わたくし達、純血教徒の本部でも育てようと言う話が上がった事がありますの」

しかしそれは恐らく失敗したのだらう。確か純血教本部は、作物を育てるより先に、土壌の改善が必要な土地であったはずだ。

「宗教には酒が付き物だからなあ。あれはなんでだ？ 宗教家って言うのは酒好きが多いのか？」

相談のために困っていた机から体を離し、椅子に座った体勢のまま仰向けになるリユン。話の進展が見えなくなり、とうとうそんな姿勢にまでなってしまった。話も脱線気味である。

「別にその様な事はありませんわ。ただ、お酒による酩酊と言うのは、心を豊かにしてくれる物と、教祖大フィルゴの自伝にも書かれていますから」

それは要するにその人物が酒好きだったと言う事では無いだらうか。ああ、駄目だ。どんどん話が脱線して行く。

そもそも、酒の話など持ち出すから……。酒？

「お酒か。それも良いかもしれませぬ」

「なんだ？ 農家を止めて、酒造りにでも専念するのか」

椅子に仰向けになったまま、こちらを見て話すリユン。そんな器用な事をするなら、姿勢を正せば良いのに。

「一応言っておきますけど、農家と酒造りだつて無関係じゃ無いんですからね。酒の原料は作物や果物なんですから。要するに、取れた作物がその後、加工できる物なら良いなと考えたんです」

作物は消費物だから、それだけで売り物になるのだが、そこに一手間を掛けると、さらに高値で売れたりする。

では全世界の農家が何故それをしないのかと言えば、その一手間を掛けるために、そのための道具や時間など、余計な物が押し掛かってくるからだ。

しかし余生を過ごす資産家であれば、その両方を手に入れやすい。「この屋敷の庭を見れば分かるでしょうけど、とても大量生産に向いている場所とは言えません。けど土壌自体は良いですから、作物を植えれば育つには育ちますよね。けど大量には無理ですから、育った物に付加価値を付ける訳です。お金持ちらしいし、上手く行け

ば、良い売り物になります。それって、商人が多いこの町では受けるかもしれませんがね」

突発的な思い付きであるが、案外、良い線を付いて居ると思う。それに、これ以外が思い付かない現状がある。

「ほう。作物とそれを使った加工物か。確かに面白いが、それは方向が決まったと言えるのか？ 結局、何を育てるか決まって居なければ進展とは言えんだろう」

リユンの発言はネガティブである。しかし仰向けの体勢から、机に体重を掛け、乗り出す姿勢になった彼を見れば、興味を持っている事は誰だってわかる。

「お酒の話で始まったのですから、お酒になる物が宜しいのでは？ 保存が効く物と言うのも、優れた点だと思えますわ」

セイリスの視点は、作物よりも加工物に向かっている。そうした方が状況を決め得ると判断したのでだろう。

「加工も簡単だしね。甘い物だったら何からだって作れるし。でも、だからこそ先駆者が居がちなんだよなあ」

他人の空真似であるならば、それこそ商売にならない。

「待て、加工物は売れる物じゃなければならぬと言う前提があるなら、方針を決める事が出来るかもしれんぞ」

リユンの頬が歪んでいる。今にも笑い出しそうな表情だ。こう言う時のリユンは、とにかく可笑しな発想に行き着いている場合が多い。

「この国で生まれて、この国で育っているからな。この国で何が必要とされているのかは良く知っている。もし、それを作る一歩目が庭にあるのなら、十分屋敷の付加価値になる」

それはつまりラッツの要求に答える物でもあると言う事だ。

「いったい何なんですか？ それって」

アイムの問いにリユンが口を開く。完全に笑いの表情となったりユンのそれは、大きく弧を描く形であった。

方針が決まれば、あとは用意だけだ。翌日には、植物の苗を探す仕事を開始し、次の日は庭にどう植えて行くかを考え、その後、漸く庭作りを始める。育てる植物は特に注意が必要である。土地の環境に合う物を選ばなければならぬし、何より素人でもある程度の手間を掛ければ育てられる物じゃないと商売にならない。

「言うは易し、行動するは難しって奴ですかね。商品集め自体も、一通り自分の目を通したいし」

いざ仕事となれば、最終的な決定を行うのはアイムであった。他二人が農業に関して、経験が殆ど無いのだから仕方無いと言えば仕方無いのだが。

「おいアイム。この苗って、土を被せるくらいで本当に良いのか？　ぐらぐらして安定しないんだが」

一応、仕事自体は手伝って貰っている。農業はその行程における単純作業の頻度が多い仕事でもあるから、経験が無くとも手伝いが有るに越したことは無いのだ。

だが、こちらから指示を出さなければならぬと言つのは苦手である。

「それは生命力が強い種だから良いんですよ。放っておけば、自分に適した形に根を張ってくれますから。それよりも、植物事に区分けをしつかりしてくださいね。上手くやらないと枯れちゃいますよ」

経験が無い者はだいたいそこに不安を感じるから、他者に意見を求める物である。それに対して、的確に指示をして行くのは知識が必要であるし、それ以上に、指示する事に対する慣れが必要であった。

前者には自信があるアイムであるが、後者はどうかと言われれば、正直な所、あまり自信が無い。

「アイムさん？　この花はどちらに植えれば宜しかったですでしょうか？」

「それ？　あーえっと、あんまり背が伸びないらしいから日が当たり安い外側に……、いや、でもそうすると外観がなあ」

恐らく自分一人で作業をしていれば、悩む事も無いのだろうが、誰かに手伝って貰っている状況では、何故か混乱してしまうアイム。腕が何本も増えた気分であった。

「とりあえず時間はまだあるんだ。日を空けてもう一度仕切りなおすつてのは無理なのか？」

アイムの混乱を見て、リユンが心配そうに話し掛ける。ここでアイムが仕事を行えなくなったら、それこそお終いなのだ。

「土にはもう肥料も撒いちゃってるんですよ。今日中に植えないと雑草が生えてきます。そうなったら、それこそ最初からやり直しですつて」

だからいくら混乱していても、庭作り自体は早めに終わらせないと。

「それじゃあ、これが終われば直ぐにラッツに庭を見せるのか？」

「仕事が早く終わるのは良い事かもしれないが」

「早くは終わりませんよ。期限が終わるまでは苗を育てないと行けません」

農業の結果は、どれだけ手を掛けたかに決まるのだ。期限があるなら、その期間に出来る限りの作業を行う事が重要である。

「期間があると言っても、二週間程ですわ。それでどこまで育ちますの？」

「花はその季節にならないと咲かない物だから、直ぐには出来ないけど、それでも育てば見栄えは苗の状態より良くなるよ。植物は動かないからそうは見えないけど、成長速度は人よりよっぽど早いんだ」

だからこそ、その育て方には注意しなければならぬ。放って置けば不良になるのはどこの世界でも同じだから。

「とにかくアレコレ考えても時間が進んじゃうんだよなあ。頭を動かすより、手を動かした方が建設的だし向いてる」

愚痴を言いながらも仕事を続けて行く。指示に慣れない頭でも、動かす手が多ければ仕事は早く終わるのだ。



予定よりも庭作りは遅れたが、それでも日が暮れるまでは終える事が出来た。

事が起こったのは、期限までの期間が一週間を切った頃である。大きな屋敷で過ごす日々と言うのはなかなか贅沢な物で、必要以上に過ごしてしまえば、再び旅に出る事が困難になりそうなくらいに心地よかった。

アイムの気分を良くしているのはそれだけで無く、毎日行う庭の手入れが、農家としての落ち着きを与えてくれる。

今日もまた、鼻歌や独り言を繰り返しながら余計な雑草を抜く、水をやる、土いじりに肥料として何を使うかの選別など、細目な仕事を続ける。

育てる植物は、その殆どが綺麗な花を咲かす予定の植物であったが、季節の違いから、アイムがそれを直接目にする事は無い。しかし日々成長していく姿は、アイムを十分に楽しませてくれた。

「良いねえ。みんな元気に花を咲かせるんだぞー」

笑いながら、そんな独り言を発するアイムは、余所から見れば完全に頭が可笑しい方向に吹っ飛んだ奴として見られるが、ここは大きな屋敷の大きな庭で、他人に見られる心配は無い。

他二人はまだ眠っている。それくらい早朝なのだ。こんなテンションだとしても、恥ずかしい事にはならない筈だ。

「ああ、幸せだなあ。こんな日々も悪く無いかもなあ」

そんな言葉が口から出るが、そう言った日々を捨てたのが今のアイムだ。悪く無いと思うものの、それ以上に旅への魅力を感じてしまったからこそここに居る。

放って置いたままの畑はどうなっているだろうか。誰かが手入れをしてくれているのか。それとも荒れ果てたままか。そんな心配をする権利など、アイムはとっくに無くなっているが、それでも考えってしまう日々であった。

「これも仕事なんだ。なら仕事を楽しむ権利くらいあっても良いよ

ね」

「なんだか独り言が良く進む。目に見える地霊に話し掛けているのか、それとも本当に独り言が癖になってしまったのか。」

「本当にこんな姿を見られたのなら、頭の調子を本気で心配される事だろう。そんな事を考えていた時だ。突然、アイルムとは違う人影が、庭に入り込んできた。」

「えっ、あ、あれ、なんですかいったい」

「今までの姿を見られていないか、いったい誰が、何の目的で。思考が頭の中で乱舞する。突然の来訪者に戸惑ったアイルムは、なんとかそんな言葉を発する。」

「ああ、いや、済まない。人が居るとは思っていなかったんだが。それでも見えてしまったんでね。その挨拶をと思って」

「現れた人物は、アイルムの知らない人物であった。若いツリストは皆そうなのか、高身長な青年で、穏やかそうな表情を浮かべている。しかし雰囲気は何故か初めて会った気がしない物であり、どうしてだろうと考えるアイルム。」

「あの、どちら様でしょうか」

「結局、本人に聞くしか無いと考えたアイルム。その言葉を待っていた様に、青年は答える。」

「自己紹介をまずするべきだったね。僕はレオン。多分、君の仕事仲間の兄だと思っただけど、君の仕事仲間であるツリストは、リユンと言う名前です合っているよね」

「レオン。本人には会った事が無かったが、この数日で覚えてしまった名前だ。何かにつけて、この国で先を行っている商人。リユンの兄でもある。彼が着る服には、リユンが着る服と同じ動物の刺繍が織り込まれていた。」

「え、あなたが？　なんでここに、と言うか、どうして僕の事を……」

「情報の周りが早い。アイルムがリユンの仕事仲間などと、誰が話したのだろう。この国にそんな知り合いは居ないはずだ。」

「組合に僕の事を聞いたんだろ？ 組合側は、そういった事があった場合、本人に伝えてくれるシステムがあつてね。その時に聞いたんだよ。リユンの名義で、僕の情報を聞きに来たランドフアーマーとエルフが居るってね」

爽やかな微笑みを浮かべて話すレエン。よくもまあ、自分の情報を聞き出そうとした相手にその表情で話し掛けられる物だ。リユンと兄弟であると言うのも頷ける。

「それでリユンさんが次に向かう場所を予想して、さらにそこで聞き込みをしたつてところですかね」

ラッツあたりが、ここで仕事をしていると漏らしたのかもしい。弟の居場所を聞きたいと言えば、兄相手ならばその事を誰だつて話す。

「その通り。やっぱり兄弟だからね、弟がどんな仕事をしているか気になつて」

頭を掻いて恥ずかしそうに話す。リユンが自分の兄に対して複雑な感情を抱いている事はなんとなく理解して居た分、レエンのこの返し方には戸惑った。

レエンの反応は間違い無く、弟を心配する兄のそれであつたから。「本人に会えば良いじゃないですか。今、屋敷で寝てますよ。呼んでみましょうか？」

「ああ、いや、良いんだよ。どんな状況か見るだけのつもりだったから。こんな早朝に来たのも、本人に会うのはちょっと遠慮したかったからだね」

やはり、感情の奥には複雑な物がある様子であつた。いったいこの兄弟の間にあるしこりの様な物はなんであろう。

「なんですか？ そんなに仲が悪そうには見えませんけど」  
少なくとも、このレエンと言う者は弟に対して悪い感情は抱いてはいない。

「そうだね、仲は悪く無いよ。でも、やっぱり会うのは止そう。しつかりと正面切つて話すのは、あいつが一人前になつてからって決

めたばかりなんだよ」

別に相手が一人前だろうと半人前だろうと、家族が会う事に理由なんていらなと思うのだが。

「うーん。本人がそう言うんなら仕方ない事でもあるのかなあ。ああ、一応聞いておきたいんですけど、本当にリユンさんのお兄さんなんですよね」

これで実は違う人物でしたなんて事になれば、恥ずかしい状況である。

「間違い無いよ。リユンの兄、レエン。父のワールドは知っているかい？」

「ええ、この国に来た時に会いました。確かに家族ですね」

彼がリユンの兄である事に間違い有るまい。

「良ければ、君の名前も教えて貰えれば嬉しいんだけど。ランドフアーマーである事は知っているんだけど、名前は聞いて無かったんだよ」

そうだったのか。そうであるならば、こちらも自身を紹介するべきだった。

「アームです。ランドフアーマーのアーム。リユンさんにスカウトで良いのかな、まあ雇われてこんな仕事をしています」

アームは目を今まで手入れをしていた庭に向ける。これで理解してくれれば一番手っ取り早いのだが。

「変わった仕事だと言うのは理解できたよ。あいつもまあ、面白そうな商売を始めた物だ」

レエンは口を隠すが、きつとニコニコ笑っているのだろう。

「一応言っておきますが、レエンさんは僕らのライバルなんですからね。今回の仕事は、絶対に成功させるつもりですから、覚悟しておいて下さい」

「あはは、まあ商人なんてのはみんなライバルだよ。こつちだつて受けて立つつもりさ。それより、アイツが元氣そうにやってるみたいで良かった。直接は見れなかったけど、陽気な君が相棒なんだ、

きつとそうなんだろう」

本当に安心したと言った風に胸を撫で下ろすレエン。そこまで心配されるほど、リユンが子どもだろうか。

「そろそろ帰るよ。ライバルに仕事場を見られると言うのは、ちょっと嫌だろう？」

まあ確かにその通りだ。レエン自身、リユン本人には会うつもりが無かった以上、長居する事は想定していなのだと思う。

「はあ、なんて言えば良いのか、そうだ、負けませんからね」

突然来て、突然去って人物に対して、思い付いた言葉がそれだった。

「ああ、こつちも簡単に勝たせるつもりなんてさらさら無いよ。それじゃあ」

そう言葉を残し、庭を去って行くレエン。なんだか去り際まで爽やかな人物であった。

「うーん。あれ、陽気な相棒？　もしかして、独り言を聞かれました？」

後になって、急に恥ずかしくなって来た。リユンの兄、レエン。

一筋縄には行かない人物なのは確かである。

## 七つ目には故郷へ(5)

楽しい日々とは早く過ぎる物で、依頼の期限は全力疾走がごとく  
アイムへと迫ってきた。

依頼主のラッツは期限が来ると同時に、アイム達へ使いを寄越し  
た。さつそく、出来上がった庭を見物したいとの事である。

そこで依頼の合否を選別するつもりであるのだろう。待ち合わせ  
の場所も、アイム達が作った庭であり、庭のある屋敷に拠点を置く  
アイム達は、ラッツよりも早く庭に着き、今後の相談をしていた。

現状、庭の出来は満足とは程遠い。しかし期限を考えれば、出来  
る事はすべてやったと言える。そう言った出来栄えだ。

「本当は花がちゃんと咲くまで面倒を見たかつたんですけどね……」  
その風景を見せれば、仕事は確実に成功するはずだ。それくらい  
の自信はある。しかし現実はその行かず、苗は成長したものの、  
つぼみがちらほらと見れるのみであり、当然仕事に対する自信も減  
少傾向であった。

「そうでしょうか。なんとか形になったと思うのですが」  
何もない殺風景な庭から、らしい物へと変わって行く姿を見たセ  
イリスにとっては、仕事の成果はあったと感じるだろう。しかし依  
頼主のラッツは出来上がった庭だけを見るのだから、やはり見栄え  
が欲しかったところである。

「この庭の鍵は見た目だけじゃあ無いだろう。そこを上手くラッツ  
に伝えられれば、恐らく大丈夫だと思うが」

この庭が完成すれば彩り豊かな花々が咲き誇ると言うのは、売り  
の一つではあるのだが、リユンの言う通り、それはあくまで副産物  
でしか無く、この庭の真意は別にあった。

「そっち方面はちょっと疎いんですけどね。そりゃあ注文通りの花  
は選びましたけど、本当にそれが資産家にウケるかどうかはちょっ  
とわかりません」

リユンがアイルムにどういった方向性で植物を庭に植えるかを示した時、アイルムはそれがどれだけ価値のある物かを判断出来なかった。植物に関する知識がある以上、リユンの望む物を揃える事は苦では無かった、それでもこの庭を作るにあたり、真つ先に優先した内容については未だに半信半疑である。

半信半疑だからこそ、アイルムは独自に他の売りを作るうともした。実は用意した花で庭を飾ると言うのは、アイルムの意向が強く反映している。当初はあくまでこれらの花も、とある目的で集めた物でしかなかったのである。

「わたくしはアイルムさんリユンさん、どちらの意見も有用な物だったと思いますの。それぞれがそう言う知恵を持ちあつたのですから、きっと成功しますわ」

セイリスはこの庭がどのような評価をされ判断を下されるのかについて、薄々感づいていた。リユンとアイルム、彼ら二人は良いコンビなのだ。互いに互いの長所を消しあう事は無い。だから二人が同じ仕事をすれば、個人でするよりもきつと良い成果を残せるのだ。

その姿が少し羨ましいセイリス。願わくば、自身もそこに混ざる事が出来て居ます様に。

「ほう、なるほどなるほど、この花が咲く時期になればこちらの花が散るのか。一種の花時計という奴だね。一方で全体の風景が貧しくなら無い様に、それ以外の花ですべての部分飾り付けている。

良いね、なかなか好印象だよ」

ラッツが庭へとやって来たのは日が頂点から傾きかけた頃だった。彼は庭に着くやいなや、それに対する採点を始めた。

「季節ごとに花が咲くのは花で飾った庭では定番ですから、さすがに冬に咲く花は見つけられませんでしたけど」

庭がどのような構造になっているのかを説明するのはアイルムである。そもそもリユンとセイリスは、庭がどのように飾り付けられているか未だに理解していない。

「まあそこは仕方ないでしょうか。その分、他の季節で美しい姿を見せてくれるのだろうか?」

意外とラッツの評価は厳しく無い様だ。仕方ないとは言え、欠点をきつちりと批判してくると思っただけに拍子抜けである。

「当然、ちゃんと見ていて飽きない庭に仕上げたつもりですよ。あとさらに三週間もすれば、その姿が見られるはずですよ」

アームの説明を聞くラッツは腕を組みながら庭を見て笑う。機嫌が良く見えるのは、それだけ高評価だからだろうか。

「時間についてはこちらの指定だったから、それも仕方ないさ。期限までにはやるべき事をやっているみたいだし、君はもしかしたら、良い庭師になれるだろうね」

このまま順調に評価されるのならば、この仕事は成功かもしれない。そうアームが思いかけた時である。ラッツがその表情を、笑いながらも厳しい視線へと変えたのは。

「だが、庭師は庭師だ。商売人にはなれない。この庭は確かに素晴らしい。だけど僕が求めているのは商売が出来る人物でね、これじゃあ合格点には届かないな」

ラッツの言葉が批判へと変わる。あくまでこれまでの評価は、一般的な目線で見ただけの場合であるとばかりに。

「先ほどまでは良い評価をしてくれていたではありませんか。どうして急にその様な事を仰いますの?」

ラッツの批判に戸惑いながらも、その真意を問うセイリス。だがなんとなく、アームはラッツがどの様な言葉を返してくるか予想出来ていた。

「単純に売り物にならないからだよ。確かに僕は屋敷の付加価値として庭を作る様に頼んだが、君たちが望んでいるのは、それを作る技術を売る事だろうか? それなら聞くが、この庭だけを買いたいと言う者がどれだけ居る? 技術を売ると言うのはそう言う事さ。屋敷も無く、土地もそれほど無い人物が居たとして、それでも購入したいと思わせる物でなければ、どれだけ美しくたって、商人の売り



物には成り得ない」

商売、そうつまりアイム達はラッツに、商人としてどれだけの事が出来るかを試させていたのだ。

それに対するアイムの答えは、出来る事を出るだけする事であった。だが残念ながらアイムは商人で無く農家であった。農家として評価されても、商人として合格点が貰えない以上、この仕事は失敗であろう。

だからこれからは商人の仕事、口を開くのはアイムでは無く、リユンの番であった。

「売り物にはならないなんて、とんだ節穴じゃあ無いか。まあ、大商人の御曹司にとつて花の種類なんてそれ程詳しく知っても意味の無い物かもしれないが、そんな事じゃあ儲ける機会を無くすぞ、ラッツ」

リユンが笑う。いつも通り、嫌らしくも頼もしいその顔で。思えば父も兄も、彼の一族は皆、特徴的な笑顔を浮かべて居た様な気がする。血だろうか。血なのだろう。

「ほう、この綺麗だけの庭には何か別の種があるとでも？」

ラッツはリユンの挑発には乗らない。と言うより、リユンがこの後何を話すのかに興味があるのかもしれない。

「俺が元々求めていたのはもつと別の価値だ。綺麗な庭つてのは、こいつが俺の提案だけじゃあ見栄えが良く無いと言つて作った物だね、商人として褒められなくても、何も問題は無い」

リユンがアイムに視線を向けながら話を続ける。まあこの庭の作りは、すべてアイム自身の趣味から来る物と言つても良い。当然、価値観の違いから、受け入れて貰えない事があると言つのは理解していた。

商人の価値観を知るのと同じ商人であろうから、ラッツを認めさせるにはリユンの言葉が必要だ。

「重要なのは、この庭が売り物になるかどうかと言つたな？ ならこの庭は、その条件を十分に満たしている。見栄えの良さはその価

値に付随する物だ」

アイムにしてみれば、別にその価値とやらに付け足すため、この庭作った訳では無いのだが、リユンの話を邪魔するのもどうかと思うので黙って置く。

「勿体付けるのは別に良いから、その価値とやらを話したらどうなんだい？ 商売には迅速さが求められる物だ」

ラッツの言葉にアイムも同意する。リユンの説明をさっさと聞きたいと言うのは、リユンが用意したはずの価値について、まだ余り理解していないアイムの意見でもあるのだ。

「ならさっさと種明かしてもするか。例えばここにあるつぼみ。花が咲けば、どんな色で咲くと思う？」

リユンはその場でしゃがみ、花が咲く前の植物に手を触れる。

「きつと美しい花なんだろうさ。そこは認めているつもりだけどね。ただ何度も言うが、綺麗なだけじゃあ価値が無い」

「そんな事も無いと思いますが……」

セイリスの言う通り、見た目の良さも物に対する価値の一つだろう。それを認めて居ないと言うのは、ラッツの価値観でもあるし、ツリストと言う種族全体の特徴でもあるのだろう。

彼女としては、そこに納得できないのかもしれない。

「それはそれだ。ラッツに仕事を認めさせようとするなら、この男の思想で勝負しないとな」

それはリユンの考え方が、ラッツに近い物があるからこそ言える台詞である。彼の立場のままで勝負する事が、そのまま相手の立場で勝負する事に繋がるのだから。

「良く分かっているじゃ無いか。なら、どうして花の色なんて話題に出したんだい？」

むしろ花の色は重要であろうとアイムは考える。リユンの真意はわからないが、彼の提案にはそれが大きく関わってくるのだ。

「まあ聞けよ、このつぼみからは深く青い色の花が咲くらしい。その花は赤だな」

リユンは庭で別の苗を植えた場所に指を向ける。

「この庭に植えられている花のだいたいが一色の色で咲く花で、どれもこれも濃い色の花だ。直接見せれば良くわかると思うが、実際に咲けば、綺麗だが少々ケバケバしい庭になる事だろうな。そこが気に入らないからそのアームは花時計やら庭の区画分けやらで色を分散しようとしたんだろうな。多分」

多分と来た。リユンもリユンで、アームがどの様な庭を作ったのかをすべては知らないのだろう。まあ当たらずとも遠からずと言って置く。

「ふむ。つまり植えた花は純粹に美しい庭を作るには不適當な物と言う事か。あえてその花を植えた理由……。もしや植えた花はすべて売り物になるくらい貴重な物とか？」

惜しい、だが外れ。しかしラッツの意見はリユンと近い物だと言う事が良くわかる。

「俺もその考えがあつたにはあつたんだが、こいつらに無理だと言われてね」

リユンは横目でアームとセイリスを見る。

「商人の方々が築き上げた町で、花の美しさが売り物になる様には思えせんもの。文化が違つと言う事は、ラッツさんを見ればわかりますわ」

確かにラッツは美しさだけでは価値が無いと言つた。この町の商人達がすべて同じ意見ならば、確かにこの町では価値を見出してくれないのだろう。

「そもそも、売り物になる貴重な花なんて、だいたいは育て方が大変なんですよ。農家の経験なんて無い人たちに売り込む庭で育てる物じゃありません」

結局、花自体を売る案は無しになった。しかしそこから繋がる意見が出る事には成る。花自体が駄目ならば、花を使って作る加工品はどうか？

「庭を飾れる花が、さらに売り物になると言うのは良い案だね。し

かしそれが可能か不可能か。そこで躓いた訳か」

ラッツが話し掛けるのはアイルム達であるが、興味の対象は庭に植えられた花に移っている。この庭の秘密が、花にあると考えたからだろう。

良い傾向だ。芽生えた興味はラッツの意識をそちらへと集中させる、それは彼の心の中にある庭の価値を引き上げてくれるだろう。

「躓いたがちゃんと立ち上がりもした。花が無理なら花で作れる物ならどうだろうってな。ところでラッツ。お前の服に刺繍されている動物は、確か鳥だったか」

ツリストの服装には、どれも何らかの動物が刺繍されている。リユンの服にはネコ科のラッツの服には鳥の様な動物が編み込まれていた。

「手足が四本ある鳥だよ。僕たちツリストは、自分達の家系を証明するために、共通の動物を家や服のどこかに、絵として編み込む。家に分かれる度に動物の絵柄を少し変えるから、古い家ほど突拍子も無い形をした動物を証にするから面白いよね」

なるほど、だから古い家柄のラッツが空想に存在する様な鳥なのに対して、リユンの動物は、どこにでも居そうな猫なのか。

「これはツリストの文化だ。損や得と言った事柄とは別の場所にある物だ。単なる家の証なら、単純な旗でも、子供に付ける名前だった良い訳だからな」

つまり、ツリストと言う種族に深く根付いた物だと言う事だ。だからそうそう変わる物では無いし、それを対象に商売をするのであれば、安定した収入を見込める。

なんとなくだが、薄々、リユンが狙っている事柄を理解し始めたアイルム。なるほど、それならば売り物になるかもしれない。

「いったいそれが何なんだい？ 花と刺繍。そこに何の関係が……」  
「どうやらラッツも気づいたらしい。話しかけた言葉を止める。その姿を見て、リユンは大きく笑った。ようやく気付いたか。そんな気持ちで籠った笑顔であった。」

「花と刺繡。大きく関係する物だな。なんてったって、刺繡に使う糸を染めるための、染料の多くは花から手に入れるのだから。ちなみにこの国では染料の生産はそれほどされていない。皆、国外に商売を見つける文化だからな。勿体の無い話じゃないか。目の前に需要があるのに、そこに飛び付こうとしないなんて」

誰だって、自身を飾る物は美しくしたいだろう。物の綺麗さにあまり価値を見出さないツリスト達だって、自分を証明する物に対しては気を使わずだ。

気にしない場合も問題無い。家を現す刺繡を編むと言う文化が有る限り、染料は必要とされるのだ。色は個性を現す道具になるのだから。

「なるほどね、確かに染料を自身の庭で生産できるのは、それだけで売り物になる。考えたね。面白い、実に面白い話だ」

その言葉とは裏腹に、ラッツは少々悔しげな表情をする。商売人として、自分が気付かなかった価値に気付かされるのは、悔しさを感じる物なのかもしれない。

「面白いと言ったな、ラッツ。それは認めてくれるって事か？俺達が受けた依頼は、あんたを満足させる物だったと言う事を」

リユンは笑うのを止めて、じっとラッツを見る。当のラッツは何故か目を閉じて何やら考え事をしていた。

「……一つ聞きたい事がある。この庭を作ったのは、君自身の力かい？」

暫く後、目を開けて言葉を発するラッツ。

「発案は俺、文化面の蘊蓄はセイリス。植物や庭作りに関しては、全部こいつ頼みだ」

そう言われて、リユンに背中を叩かれるアイム。突然そんな事をされては、痛いし驚くので止めてほしい。

「変わり者の周りには、似た者が集まると言う事かな。そこで新たな商売を見つけられるのであれば、それも悪く無いか」

なんだろう。褒められているのに、そんな気がしない。

「宜しい。合格、合格だよ、君たち。この屋敷の付加価値として、この庭は十分に答えてくれる事だろう。当然報酬も払わせて貰う。君たちがする仕事の宣伝もだ」

複雑な表情だったラッツは、今では喜びの顔へと変わっている。正式に、アイム達の仕事を認めてくれたのだらう。

こちらは彼の依頼を成功させたのだ、複雑な表情のままでは困るところである。

場面はリユンの家へと移る。一仕事を終えたアイム達は、そのまま仕事をしていた屋敷に留まる訳にも行かず、とりあえず彼の家で今後について話し合う事にしたのだ。

今回の仕事で得た報酬はかなり大きかった。庭作りによる物も、相手が金持ちだけあって大した物であるが、それよりもこの国で財産を持つ者達への繋がりがより得難い物であるとリユンは語る。

「なんてったって、資産家達の中でも古参からお墨付きを貰ったんだからな。もうこの国に居るだけで、どんどん仕事が舞い込んでくる可能性もある」

自室の机に体重を掛けながら、そんな事を話すリユン。どうやら相当舞い上がっている様だ。

「でしたら、ここで旅は終わりと言う事ですか？ リユンさんは商人として成功する事が目的なのでしょうか？」

不安そうにセイリスが意見する。アイムの気持ちは同様で、彼の成功は旅の終わりを意味している事を気にしていた。

「残念だが旅は続行だ。暫くはこの国に滞在する事にはなるがな」  
リユンの言葉はアイム達を安心させる物であったが、何故、国で仕事を得られると言うのに、この国で商売をして行かないのかと言う疑問が生まれる。

「この国に居るだけで商売が出来るんでしょう？ なんでまだ旅を続ける必要があるんです？」

ただっ広いリユンの部屋で、身の置き場に困りながらも、椅子を

見つけそこへ座って話すアイム。

「今回の仕事だが、確かに仕事は多く舞い込んでくるだろう。けどそれに対する報酬ってのはどれくらいの物だと思う？」

リユンは片腕のみを机へとさらに体重を掛け、もう一方の腕をアイム達に向ける。

「今回のラッツさんから頂いた報酬は、十分に過ぎる物だったと思いますが……」

これでもセイリスは遠慮がちに発言している。さすがはこの国を使った商人の一族だけあって、その報酬はここで商売を止めたとして、何年かは遊んで暮らせる物である。

「なら聞くが、この仕事を何度繰り返せば今俺達が入る屋敷を個人で買える様になると思う？」

そんな事を聞くリユン。家の相場は分からないが、土地を買う事も考慮に入れるならば、何十回でもまだ足りない回数をおこなさなければならぬだろう。なんと言っても、ただの家では無く豪邸なのだ。維持費だけでも相当な物だろうし。

「今回成功させた仕事でも、まだ足りないと思いませんか？ それは随分と大きな夢だと思いますわ」

結局、どれくらいの商売を成功させれば、リユンは満足するのだろうか。

「僕はまだまだ旅を続けたいって思ってますけど、リユンさんにとっては旅に出て、今以上の報酬を手に入れる保障も無い訳でしょう？ ちょっと生き急ぎ過ぎて感じじゃ無いですか」

彼を突き動かす原動力は何なのであるのか。そればかりが気になった。

「この国の資産家は、だいたいは若い頃にあちこちの国で商売をしていた連中だ。彼らとの繋がりが出来るのは、彼らが作った繋がりを得られると言う事でもある。保障にしては頼り無いが、それでもさらに大きな商売を手に入れるチャンスにはなる」

要するに今回の仕事も、リユンにとっては道を進むために必要な

切欠に過ぎない訳だ。

「業が深いと言うのかなんと言うか……。じゃあこの国で暫く滞在するって言うのも、仕事に専念するんじゃない無くて、コネ作りって事ですか？」

「その通り。商売をして信用を作り、さらなる一步を踏み出す訳だ。なかなか楽しいぞ」

そんな事を言うリユンは、本当に楽しそうだった。

リユンの自宅にて夜を迎える。部屋はセイリスとアイムにも一部屋ずつ用意されていた。どこも十分な広さであり、むしろアイムにとってはなんと落ち着かない気分である。

「なんだか部屋の隅に、何か居る様な気分にも成って来る。」

「ああー、もう、よくもまあこんな部屋で落ち着けるもんだ」  
愚痴の対象はリユンであった。彼は自分自身の部屋でくつろいでいる。慣れ親しんだ部屋なのだから当たり前なのだが、この広い家に慣れる事が出来ると言うのが、まず理解できないアイム。

「落ち着かないって言う事は、寝れないって事なんだよね……。どうしよう」

別に寝過ぎたところで、これといった予定も無いのだから別に構わないのだが、やはり気分は悪い。

「おい、まだ起きているか」

突然、部屋の扉を叩く音がする。声を聞けば誰か分かる。リユンだ。

「どうしたんですか？　もしかして金縛りにでもあったんじゃないか」

「そんな訳無いだろ。起きてるんだなら入るぞ、ちよつと話して置きたい事がある」

部屋には鍵が付いているが、別にアイムはそれを掛けていた訳では無いので、リユンはアイムの返事を待たずに入ってきた。

「なんですか、いきなり。あれ、随分と不機嫌そうですね」

昼間までは結構なご機嫌だったのだが、部屋に入って来たリユン



は、どうにも気分が悪そうだ。

「兄貴と話してきた。あっちの方が生きている時間が長い分、話も上手だ」

まあ、彼の兄もこの屋敷に住んでいるのであろうから、会う事に不自然さは無いだろう。

「でも、案外普通に話せるんですね。もっと険悪な仲だと思っていました」

彼の兄には会ったが、兄の方は弟に対して、それほど悪い印象を持っていないのが分かっている。問題はリユンの方が兄をどう思っているのかであるが。

「家の中じゃあ商人よりも家族だからな。血の繋がった兄弟を嫌うのは難しいさ」

つまり、商人としては険悪なままだと言う事だ。そこが理解できない。家族としては仲が良いのに、何故そうなるのか。

「なんでリユンさんは、と言うよりツリスト全体は、そこまで商売に執着するんですか……、なんだか変ですよ」

素朴で牧羊的なランドファーマーにとって、金儲けに種族として情熱を掛けられると言うのは違和感があった。

別に個人がそうであるのなら理解できるのだ。そう言った考え方を持っているとな納得できる。

しかし種族全体がそうであるなら、それは少々可笑しな話だ。

「だからその理由を話に来たんだ。前に言っただろう？ この国着いたら、商人をしている理由を話すってさ」

そう言えばそうであった。

「だけどそれって、大きな屋敷を買いだいたいって事なんでしょう？」

話しながら、部屋備え付けられた机へと向かい、そのそばにある椅子へと座る。長話になりそうだったからだ。

「それは理由じゃなくて解決方法だな。俺が言いたいのは、もっと、出発点みたいな話だ」

リユンもアームに続いて椅子へと座る。

「俺が狭い部屋が嫌いなのは知っているか？」

「知っている。彼がそういった部屋では寝ない事もだ。」

「嫌っていると云うより……、そう、苦手な感じですよな。」

「それな、他のツリストもそうなんだ。」

リユンは笑わない。むしろ何かに悩んでいるかの様な顔色だ。

「他のつてお兄さんや、ラッツさんとかも？」

「そうだ、みんなそうだ。俺はお前達ランドファーマーの能力の秘密について知っている。だから俺達種族の秘密を話す。セイリスにはどうしようか迷っているが、とりあえずお前に話す事にする。」

「ちよ、ちよっと待って下さいよ！ いきなり何言っているんですか」

急に重要な話になって来たので混乱するアイム。種族の秘密と来たもんだ。

「話さないとフェアじゃ無いだろう？ そう言うのは気分が悪いんだよ。話す機会が無い物かとずっと気にしていた」

確かにこちらの秘密が相手に知られている以上、相手の秘密も知りたいと思うが。

「えーと、それで、なんですか？ その種族の秘密って」

結局、話を続ける事を選んだアイム。

「そうだな、アイム、手を後ろに回して、グーかチヨキかパーを作ってみる」

なんだろうと思いつつも、言われた通りにする。リユンは目に力を込める様な仕草をすると、すぐ後にその力を解く。

「右手がチヨキで……。左手がパーだな」

驚いた、当たっている。何故だ、エスパーか？

「だいたいこの形でしか分からないがな、三種類だけならなんとか分かる」

疑問が表情に出ているのだろう、アイムの考えに答えるリユン。

「それが、ツリストの能力ですか？」

「その通り。二つの目以外に、あやふやだが自分を俯瞰している様

な視線を持っている。角度が上から視線だから、お前の背中に隠した手の形も見えてしまう訳だ」

普段も大概上から視線であるが、そう言う事では無いのだろう。「もしかして遠くの物も良く見えたりするんですか？」

どうにもこれまでの付き合いから、彼が常人以上の視力を持っているとは感じていた。

「見える、他の種族より目が一つ多い訳だからな。倍以上の距離は見えるんじゃないか？」

なるほど、随分と便利な能力である。

「秘密にする理由も分かりましたよ。他人に見えない物が見えるって気持ち悪がられますもんね」

「ざっくりと物を言うな。まあ、そんな性格だから気軽に話せるんだが……」

目頭を押さえるリオン。何か不自然な事を言っただろうか？

「それより能力の話だったな。草原が広がるこの土地に棲むから知らないが、ツリスト全体には生まれた時からそんな能力を持っている。そりゃあ便利なんだろう。遠くを見渡せて、他とは違う視線を持てる。俺だって、普段から結構活用している」

ならば、もつと楽しく話せば良さそうな物を、彼の顔には悩みがあるとしても言いたげなままだ。

「何か副作用でもあるんですか？」

つまりはそう言う事だろう。アムだって地霊を見る能力を持った結果、少々視界が面倒くさい事になる時があるのだ。

「部屋だな。狭い部屋だ。他人より視界が広い分。部屋の狭さに落ち着けなくなる」

なるほど、そりゃあ視界だけは巨人と同じ視線なのだから、狭い部屋は嫌だろう。

「あれ、もしかして、ツリストが金儲けをしようとするのは……」

「デカイ部屋が欲しいからだ。若い時は、野宿するなんて選択肢もあるだろうが、齢を取ればそれも出来なくなる。なんとか体力のあ

る内に大きな屋敷を建てて、そこで余生を暮らしたい。それがツリスト全体の夢なんだよ」

だから種族全体で商人をしているのか。金儲けが目的では無く、それによって得られる家こそを必要としているから。

「その、狭い部屋って言うのは、どれくらい不快に感じる物なんですか？」

「俺は狭い部屋で寝た事が無い。贅沢って訳じゃあ無いぞ？ 本当に厄介な話だよ」

その不快さこそ、リユンを動かしている力なのだから興味深い。

しかし、狭い部屋では睡眠を取れないとは、想像以上にツリスト達は家への執着が激しいのかもしれない。

「お兄さんと揉めているのって、もしかしてそれが原因ですか？」

「それもその通り。兄弟としては、別に仲が悪くなる原因は無いさ。だけど商人としてなら、兄貴はこの家を継ぐ立場でありながら、俺の金儲けを邪魔する可能性がある人物だ。そりゃあ険悪になるだろう？」

リユンにとっては死活問題であった訳だ。そして、彼がもっと大きな商売をしたいと言うのも分かる。彼には、どうしても若い内から金銭を稼いで置きたいのだろう。

「ツリストって多分、みんなそんな気持ちで商売をしているんじゃないかね。脱落者だって居るでしょうに」

「そう言った奴をなんとかするのが、家政婦を雇わなきゃいけないなんて言う法律だったりする訳だ。家を買えない奴は、せめて空いた部屋に住ましてやろうって考えだな。それだって全員を保護出来ては居ない」

もしかしたら、年老いても家の外で暮らさなければならぬ可能性もあると言う事が。

「なんとなく、全部じゃ無いですけど、リユンさんが商売を続ける理由、分かりましたよ。種族としての秘密なんでしょう？ 話してくれてありがとうございます」

なんとなく、嬉しい気分と複雑な気分が混在する。嬉しさは、相手がこちらを信頼して話したであろう事が理解できたからだが、複雑なのは、それを知ったところで、どうしようも無い事がわかったからだ。

「リユンさんは、これからも旅を続けるつもりなんですよ。家を買える目処が付くまで」

「まあな、それが本懐なんだよ」

悩んでいた彼の表情は、今、疲れた表情をしている。自身の能力に振り回される疲れの表情だ。きつと、ツリスト全体が持っている表情でもあるのだろう。

「だったら、全力で頑張りましょう。屋敷が買える保障はできませんけど、全力でやるに越した事は無い」

そうすれば、リユンの夢に届く可能性は高くなる。それは、アイムにとつても目標に出来る物だろう。ただ旅をしたいと言う理由で始めたアイムの旅が、人助けになるかもしれないのだから。

「まったく、自信があるのか無いのか、どっちなんだ？ まあ良い、今日は話せて良かった。心のつつかえが一つ取れた気分だよ」

ようやく笑うリユン。その顔にはまだ疲れが残って居る風だったが、それでもマシになったと言うのなら嬉しい限りであった。

アイムは部屋を出るリユンを送り出すと。自分の部屋に戻り一息吐く。

「しかし種族の秘密かあ。自分達だけだと思っていたけど、他の種族もそうなんだ……」

ランドファーマーは地霊が見えると言う事を隠す。ツリストは、他種族より多い視線を持つ。もしかしたらセイリスだって何かを隠しているのかもしれない。

「考えても仕方ない事だけど。やっぱりいろんな事情があるんだろうなあ」

どうにもリユンの疲れが移ったのか、アイムも疲労を感じ始めた。まあ、この適度な疲労は、眠りに就こうとするアイムとしては、歓迎

迎する物かもしれないが。

「それにしても、相手の秘密を知っているから、自分の秘密を教えるって言われると、なんだか罪悪感が湧いちゃうなあ」

アイムはベッドで眠ろうとする前に、そんな独り言を口に出した。確かにリユンは秘密にしてあったランドファーマーの能力について知っていた。しかしだ、それが秘密のすべてだと思っているのなら、それは間違いなのだ。

「リユンさんが、能力を明かすって決めてくれたんなら。僕も、いつかは決意しなきゃ行けないんだろなあ」

だが、とりあえずその決意は明日以降へと置いておく事にする。ようやくアイムは眠気を感じ始めたからだ。

リユンもセイリスも、アイム自身の秘密も、今は眠りの向こうに置いておこう。どうにも、今日は色々あって疲れているのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1807w/>

---

ランドファーマー旅行記

2012年1月14日03時46分発行